
こうこうせい

MCおもむろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こつこつせい

【Nコード】

N4969A

【作者名】

MCおもむろ

【あらすじ】

何気ない高校生活……？を描いた小説です。こつくりさんとかクールなイケメンとか走り屋の少女とか冴えないメガネとか悟空とか出ます。ああ、あと悟空とか。あともちろん悟空も。後書きには大概テンション高い僕が出ます。あとやっぱ悟空出ねえかな。出ねえな！

第1話 明日の天気は雨だそうですよ……。

チュン、チュン

小鳥のさえずりが聞こえてくる……。

眠たい目をこすりながら、ベットからゆっくり起きて、窓を開ける。
窓からは、春のさわやかな風が吹き付け、俺の頭が序久に冴えていた。

「んーっ……」

伸びをすると、背骨がボキベキッと愉快的な音を出した。

「フツ、俺の背骨はクレイジー。」

名言がまた一つ生まれた。俺は壁の時計を見た。

時計の短針は、12を指していた。

「……あ。遅刻。」

「斎藤。おまえ毎日毎日遅刻しておもしろいか？」

「いえ、全く。」

「しかも昼に登校とは……どうすれば遅刻しないか、考えた事は無

いのか？」

「いえ、全く。」

「おまえ、先生の話聞いてるか？」

「いえ、全く。」

「……もういい。次は遅刻するな。」

ため息をつきながら、教師は去っていった。

昼休みの始まりに教室に着くようにしたのだから、遅刻届を速攻で書いてしまったため、教室に早く着いてしまい、4限の教師に小言を言われる羽目になった。

フツ、書くのが速いのも考えものだな……。

そんな事を教室の席で考えていると、後ろから聞き慣れた声が聞こえてきた。

「政人。今日も遅刻だな。」

こいつは柏木克也。

「おお！俺の唯一無二の親友、柏木克也ではないか！俺のダチの中では一番の秀才で、顔もなかなかだ！歳は十六才。俺と同じ年！小学校からの幼なじみなんだよ！」

「なんだその人に説明するような言い方は。」

「まあ、そう言うな。人に説明したんだから。」

「…身も蓋もないな。」

「まあ、そう言うな。人に説明したんだから。」

「…身も蓋もないな。」

「まあ、そう

もついい!」

「フツ、俺のとろけるようなボイスに勝てるものは皆無だな。」

克也は、どーしようもねえなこいつ、と言いたそうな顔をしていた。

「どーしようもねえなおまえ。」

「おまえが言うな!」

克也は、なんでやねん!と、芸人がやりそうなたつっこみを俺にやろうとした。

フツ、そうはいかない。

俺は華麗にジャンプをして克也のつつこみを避けようとした。…つもりだった。

克也のつつこみが意外に速く、ジャンプした俺にベストタイミングで、なおかつクリティカルヒットした。

俺の股間に。

「もぎゃーっ!」

ジャンプ中だった事が災いした。混乱した俺は着地を失敗して足が曲がってはいけない方向に曲がってしまった。

「おきゃー！！！！」

「おっおい！大丈夫か！？」

「ううん……答えは否だよ……わかるでしょ……？」

「ごめん！よし、保健室に行こう！いや、救急車だ！」

救急車……？だめだ。そんな大事になったら、学校にもう行けない。それに、病院になんて説明する？ボクの大事なおまたにつっこみがいっただんでちゅーとでも言うのか？絶対に嫌だ。

ここは、平然を装わなければ……。

「も、もう大丈夫だ。痛くなくなった。」

「え？本当か？」

「ああ、逆にすがすがしい気分さ。はっはっはっ。」

「でも、顔が真っ青だぞ？」

「うん、すがすがしいからさ！はっはっはっ……。」

「は？」

「……あっ！急に用事を思い出した！じゃ、俺はこれで。」

俺は教室のドアを開け、出ていった。

「お、おい!……」

……ふう。なんとか場はしのげたな。よし、保健室に行こう。すぐ行こう。

保健室に向かう途中、みんなが俺を見ていた。そりゃそうだろう。顔が真っ青で、股間をおさえながら、足を引きずって歩く奴なんて、もし俺が見たなら爆笑しながら、優しく腰をさするだろう。俺はそう言っやつさ。

しかし、すれ違う奴等は、俺を見たたん、笑いを堪えるか、可哀相な奴を見るような目をするだけだ。

ちっ。この中に腰を優しくさすりながら、大丈夫?と心配そうに声をかける可愛い娘はいないのか?

ん? そうだ。女限定だ。野郎にそんな事されて嬉しいか?

「大丈夫?」

そうそう、こんな感じで……。

え?

「大丈夫?」

げげげ現実になっておる……。しかも想像通りに優しく腰をさすって。

そして想像通りに可愛い。顔の一つ一つのパーツはとても綺麗で、その上整っていて、美人系だ。黒い髪は長く、腰の辺りまである。

そして肌は透き通るように白く……って、モロだ！ドンピシャですよ奥さん！

「お、お嬢さん。前の方もさすってはくれんかね？」

「え？」

「いや、何でもない……」

あ、危ない……。心の叫びが口に出てしまった。

「親切なお嬢さん。もう大丈夫。ありがとう。いー薬DES。」

「え？」

「いや、何でもない……」

「大丈夫ならよかった！じゃあ、私、いきますね。」

……行ってしまった。

あ。名前聞くの忘れた。

……可愛かったな。

腰にまださすられる感覚が……。

……くう……うはっ……あひやっ……あひや？

……そうだ。俺は保健室に行くんだ。余韻に浸ってる場合じゃない。

階段を降り、やっと保健室が見えてきた。

ふう、やっとついた……

ドアの前に立つと、見慣れた奴が保健室にいた。

「ガラガラ……」

「あ、政人。……何ガラガラ言いながらドア開けてんの？」

「いや、別に……」

「……どつたの？そんな青い顔しながら、股間をおさえ、足を引きずって。」

「的確な説明ありがとう。」

「どうも。」

「こいつは、渡辺里奈。中学からの友達だ。頭は悪くない。顔は……まあまあだな。もっとも、俺のタイプじゃないが。」

「誰が政人のタイプになんかなるか。で、何その人に説明するようない方は。」

「まあ、そう言うな。人に説明したんだから。」

「ふーん。」

「……ふーんて。可愛くねえな。」

まあ、こんな奴は放っておいて、先生に見てもらおう。

「……先生は？」

「どっかいった。」

「えー！そんなのヤダヤダー！」

「……………」

「ヤダヤダー！」

「……………」

「ねえ、無視しないで？」

「そんな事言うからだよ。」

「そんな事って……………。ひどい……………よよよ……………」

「……………」

「よよよ……………」

「……………」

「よよごめんなさい。」

里奈が椅子を持って、俺に振ろうとしていた。

「もうやめてね？」

「……………よよはい。」

今度は花瓶を投げようとしていた。全く。恐ろしい女だ。

里奈は花瓶を置いて、椅子に座ったので、俺は近くのクルクル回る回転式の椅子に座った。

「……で？なんで超健康児の政人が保健室に来たの？」

「いやなに、保健の先生とイケない遊びをしようと思ってね。はい、ごめんなさい。」

「もう冗談はやめてよね？」

花瓶を持ちながら笑う里奈。うん。もう冗談はやめよう。

「で、なんで来たの？」

「ボクの大事なおまたに柏木のつつこみがはいったんでちゅー…っ
ておい！花瓶を投げようとするな！本当だって！」

「言い方が悪い。」

「わかった！もうふざけないから！」

「よし。で？それだけ？」

「いや、足首もひねっちゃってさ。」

「ふーん。あ、じゃあ先生の代わりに私が診てあげるよ！どこ？」

そう言つて、里奈が俺の足首を触る。

里奈はワイシャツのボタンを2個ほど開けていたので…………。

うっ………… ナイスアングル！

「ピンクですな…。」

「え？」

「…………。」

バキッ

キンコンカンコーン……

「おお、政人。さっきは悪かったな………… あれ？殴られたのか？」

俺の頬は痛々しく腫れていた。

「ああ。ちょっと野獣のブラを見たらな…………」

「…………」

キンコンカンコーン……

「よしっHRこれにておしまい！」

担任の声と共に教室が一斉に騒がしくなった。

ふう、やっと終わった…。

「おい、政人。さっきのお詫びも兼ねて、帰りにハンバーガーでも食わないか？」

「おっ！克也ちゃん太っ腹！……と、太っ腹ついでにもう一人いい？」

「…？」

俺は隣の教室に入り、辺りを見回した。
おっ、いた。

「おい、そこの綺麗なお嬢さん。」

「ふん。」

機嫌悪いな。

「僕の奢りで、すてきなディナーでも行きませんか？」

「おっけい！」

機嫌良いな。

「なんだ。もう一人って渡辺の事か」

「あれ？克也もいつしょ？」

「ああ。さて、メンツも揃った所で行きますか！」

俺達は駅前のハンバーガー店の二階で食べていた。

「……ちよつと。」

「どーした、里奈。食べないのか？」

「これのどこがすてきなディナーなのよ!？」

「フツ、おまえはハンバーガーの良さがわかっていないみたいだな。ハンバーガーっていうのは肉も摂れ、野菜も摂れ、ピクルス(?)だって摂れちゃうすてきな」

「もういいもういい!……ハア、政人に期待したのが馬鹿だった……」

「まあ、そう言うな。ハンバーガーだってうまいんだから。」

「…そうだね。もうヤケだ。食べて食べて食べまくってやる!」

そう言うと、里奈は鬼神の如く食べはじめた。克也が不安そうな顔をしている。

「お、おい。俺今日そんなに持ち合わせてないんだが……」

「知らん。俺の股間につっこみを入れたおまえが悪い。さて、俺も食うか。」

「ちよつ…そんな……」

鬼神がもう一人加わった。最初に頼んだハンバーガーは、すぐにな

くなつた。

「ふう、食い足りないな。もっと注文するか。克也、金。」

「はい…。」

結局、俺と里奈で15個ほどたべた所で、克也の金が出き、俺達は店を後にした。

「克也さん、ゴチつす。」

「ゴチつすー!」

「くそつ、おまえ等にはもう絶対奢らないぞ……。」

もう夕方か…。

しかし、克也はちょっと可哀相だったな。

俺等が10個を超えたあたりで、少し涙目になっていたぞ。

「さて、腹もいっぱいになったし、帰りますか。」

「そうだな。」

俺達は、ハンバーガー店の前で解散した。

ふう、なんとか里奈の機嫌は直ったな。

あいつの機嫌が悪いと、ずっと無視されるからな。

俺のボキヤブラリーを持ってしてもあいつは笑いもしない。

あれは屋上で一人でたそがれたい気分になるぞ。

あ、そういや、シャンプー切らしてたな。
晩飯買うついでだ。スーパーに行くか…。

スーパーに着き、今日の晩飯を考えながら、食品コーナーを回っていると、

「あ。」

「あ。」

俺の腰を優しくさすってくれた、あのドンピシャの娘がいた。

「さっきの！あん時はどーも。」

「ああ！見たことあるとおもったら！いいんですよ！困っている人を助けるのは当たり前ですから。」

ああ、その微笑む顔も可愛い…。

「次は前もさすってもらおうかのう……」

「え？」

やばい…また心の叫びが…。

「いや、何でもない…あ、そういや、まだ名前聞いてなかったな」

「あ、そうですね。私の名前は、村上綾です。」

「綾ちゃんか。俺の名前は斎藤政人。よろしく。」

そういつて、俺は手を差し出した。

「はい、斎藤さん」

「いや、政人でいいよ。」

「ふふ、わかりました。じゃあ政人さん。よろしくね。」

彼女は俺の手をキュツと握り返した。そう、キュツと…。

……………あひゃっ！

もう、一生、手、洗わない！もう、一生、手、洗わない！もう

「どうしたんですか？ハアハア言つて。」

「…ハアハア……………はっ。い、いや、別に…。そういや、綾ちゃん
は面白い物？」

「あ、はい。今日の晩ご飯の当番、私なんです。だからおかずの材料を買いに。政人さんは？」

「俺も似たようなもんさ。」

「そうなんですか。」

「そうなんです。」

「うふふ。」

「あはは。」

「あ、政人さんの晩ご飯のメニューは？」

「うーん、今日はアジのソテーでも作ろうかな。」

「アジのソテーですか!」

「そうですね。」

「うふふ。」

「あはは。」

「私は何にしようかな。」

「そうですねです。」

「え?」

「あはは。」

「ん?少しタイミングが早かったか?」

「そんな会話をしながら、買い物ですませ、綾ちゃんとの別れを惜しみながら、スーパーを後にした。」

...

ガチャ...

「ただいまー...って誰もいないか。」

「すっかり遅くなったな...」

そういや、母さんから仕送りがきてたな……。

まあ、どうせ諭吉が十五枚入ってるだけだろう。

わかってると思うが、俺は一人暮らしをしている。まあ、仕送りが来るぐらいだからな。

理由は、まあ、簡単だ。

父さんが急に転勤になり、県外に引っ越す事になった。俺はその時、丁度高校を合格した所だった。まあ、県外から通うなんて真っ平ごめんなので、俺が一人暮らしを提案したら、俺には関心が無いような親なので、あっさり了承された。

だから俺は学校の近くのアパートを借りて、親の仕送りと、俺のバイト代で生活している。

「しかし、仕送りは金だけなんて。愛が無いよ、心の魂(?)がよな？ 亀吉さん。」

俺はじいさんを飼っている。

と、思ったか？

なわけないだろう。

もとい、俺はカメを飼っている。

名前は亀吉さん。

さん付けしたら、亀吉さんさん。太陽サンサンみたい。

……。

まあ、この名前付けた理由は……無い。なんとなくだ。しんぷるいずべすと。男に理由はいらなくて奴だ。

「うし、晩飯完成。」

とまあ、こんな亀吉とかゆーくだらねーカメのくだらねー話をして
いる間に、晩飯は完成した。

フツ、我ながら上出来だ。

「ガツガツモグモグパクパク……くはぁー！うまかったー！……
さっいただきまーす。」

口で言うだけじゃ食べ物へらないみたいだな。
て言うか、一人でこんなボケてもむなしいだだけだ。

そして、一人でもくもくと食べていると、ピリリリッとして舌に強烈
な刺激を感じた。なっなんだ！？この舌の、舌の……やめよう。
むなしい……。

俺の携帯のメール受信音だ。

むふふ…。

そう、俺は綾ちゃんとスーパーでメルアドを交換したのだ！
ハアハア、待ちに待ったぜ……！もう、じらすのがうまいね！
さっ！早く内容を！

ボタン連打だああああああっ……！！

「俺は一人じゃない！」

『メールマガジンお天気ニュース！明日の天気は雨。皆さん傘を持
って出かけましょう。』

「……………はい……。」

その日、綾ちゃんからメールが来ることはなかった。俺が枕を涙で濡らした事は言うまでもない。

第2話 俺のぐたぐたな土曜日（前書き）

すみません……本当にぐたぐたです…。

第2話 俺のぐたぐたな土曜日

「雨か……。」

昨日のメルマガの天気予報は見事的中した。

今日は土曜日。

予定もなく、外は雨なので、何をするでもなく、まったりと家で過ごしていた。

「暇だな…なあ、亀吉さん？」

水槽のじいさんを魚肉ソーセージで操りながら…ってやめよう。これじゃ俺が物凄い人物に見えそうだ。

じいさんではなく、カメだ。

俺は、カ・メ・の、亀吉さんを魚肉ソーセージで操りながら遊んでいた。

「はっはっはっ、亀吉さん我の手中にあり！ふははは！君は私の手の中で踊らされているのだよ！ふはははははは飽きた。」

水槽に魚肉ソーセージを落とすと、亀吉さんはスカイフィッシュ並の速さで魚肉ソーセージを飲み込んだ。

それを見た俺は……。

1 政人は魚肉ソーセージを食べたい！

2 政人は亀吉さんを食べたい！

3 政人はスカイフィッシュなんです！

4 あなたは神を信じますか？

回答者

「うーん、まず消去法で1は無いな……。うーん……。コールで！」

司会

「コール！」

政人

「もしもし。」

回答者

「もしもし。」

政人

「もしもし。」

回答者

「もしもし。」

「ツーツー……」

司会

「はい！コール終了！」

回答者

「わ……わかったぞ！これで1000万円は、ボクの物……！」

司会

「じゃあ、4番でいいですね。」

回答者

「え？はい！え？」

司会

「ファイナルアンサー？」

回答者

「いや、ちがいますよ！」

司会

「ファイナルアンサー？」

回答者

「だから違いますって！なにいつてんで」

司会

「ファイナル！！……アンサー？」

回答者

「……ファイナルアンサー……」

「ドウルドウルドウー」

「どっくん、どっくん、どっくん、っっ！」

司会

「正解です！」

回答者

「や……やったー！司会者さん……」

司会

「パチッ（ウィンク）」

周りの人々

「
ワ
ア
ー
ー
!」

回答者

「やった……やったぞ！これで……家のローン払ったり家のローン払
たり家のローン払ったり家のローンの払ったり家のローンの払ったり
……ああ！いろんな事が出来るぞ！」

司会

「おめでとうございます。さあ、好きなだけ家のローンを払ってくださいこの住宅ローンマニアが」

回答者

「え……？」

周りの人々

「ファー！」

「パチパチパチーとな」

「ふう、ファイナルアンサーと私とあなたと住宅ローンと」も飽きたな。」

俺は床に寝そべって、ぐうたらぐうたらした。

……っこんなんじゃだめだ！現役イケメン高校生が、土曜日に雨だからってぐうたらするなんて！青い春を感じなければ！

そうだ！外に出よう！

ガチャ

ザー……

ボタン

そうだ！人を呼ぼう！

俺は携帯を取り出した。
誰を呼ぼうか？

克也だな。

ピッポッパッ

プルルル…プルルル…

『はい。』

「あ、もしもし？おれおれ！」

『…おれおれさ』

「おれおれ詐欺とかゆーくだらねーつつこみはいらんぞ？」

『…おれおれサンシャイン…』

「苦しいな。」

『…おれおれさんま食べたいな…』

「つまらん。」

『…おれおれサンタクロース…』

「……プツ！あはははは！！なんでおれおれってきてサンタクロースなんだよ！チョーうける！チョーうける！！あはははははははーっ、これで十分？」

『……ああ…』

「で。用件なだけどき。今から俺んちこない？」

『あ、悪いが用事があるんだ。』

「えっ。ふっ、ふーん、こないんだ。いいんだ。えっ？ほんとにこないの？いいの？」

『ああ。悪いな。』

「ふーん、こ、こないんだ。ふーん、まっ俺も用事があるからいいんだけどさ？」

『…？そうか。じゃあ、お互い暇な時にまた会おう。じゃあ
プチツーツーツー…』

「あっ…ちよっ…まっ…！俺暇だよ！？遊んでくれよ！たのむよ…」

……うわああーっ！……さっ次はだれにしよう？」

泣き真似だ。フツ、俺は泣き真似がうまいなあ。

……ぶっちゃけ泣いた。

俺よ。泣けばいい。

そしてその涙と共につらい思い出も流してしまえばいい。

俺は泣いた。泣いて泣いて泣いて……いつまでも泣き続けたら、部屋は涙でいっぱいになった。

嘘だ。

目が腫れただけだ。

さて、どうしよう？

誰を呼ぼう？

「……里奈でも呼ぶか。」

てか、ぶっちゃけ家に呼べるような奴は、もうこいつしかいない。綾ちゃんとはぶんよんでもこないだろう。

里奈が最後の頼みの綱だった。

ピッポッパッ

プッ…プッ…プッ…プッ

「あ、もしもし？」

『お客様のお掛けになった電話番号は、電波の届かない場所にあるか………』

プチッ

.....。
.....あう.....。

俺は部屋の隅で体育座りをした。
涙がちよぴつと出た。

ちぎしょーっ!!

なんで繋がらないんだよ!?

ふ...ふん!もういい!遊ぶのはやめだ!

その時、俺の着信音がなった。

「わーい!さっきの嘘だよ!遊ぶ!遊ぶよっ!」

俺は携帯を開いた。

『メールマガジン天気予報!今日は雨。出かけると』
「わかってるよちぎしょオオオツ!!!!」

.....あれ?メールがもう一件来てる.....。

...あ...ああ...綾ちゃんやー!!

あんた最高!!

内容は!?内容は!?

て...手が震えるぜ...

ポチッ

『村上綾です！（＾・＾）TEL番登録よろしくおねがいします！
（＜＿＞）』

ポチポチ

……登録完了…。

その日、再び電話が鳴る事はなかった。

第3話 むかーしむかし、ボクは不良でした。(前書き)

笑える所はあまりありません。

第3話 むかしむかし、ボクは不良でした。

「このセット下さい」

俺はメニューを指差しながら言った

「はい！かしこまりました。コレノセット入りまーす！」

「…あの、コレノセットじゃなくて」

「2500円になりまーす！」

「高っっ！だからコレノセットじゃなくて……」

「2800円になりまーす！」

「えっ！？なんでちよつと高くなつたの！？」

「じゃあ3100円になりまーす！」

「じゃあつてなんだよー！」

俺は駅前のハンバーガー屋、“ハン・バーガー”にいる。

コレノセットは、結局かった。後ろの並んでる人の視線が痛かったからだ。

うふふ。いつか訴えてやる……。法律の恐ろしさを知るがいい。

そんなことを考えながら、俺は二階に上がり、窓際の席に座った。

壁掛時計に目をやると、約束の時間の三十分前だった。
早く来過ぎたな…。

今日は日曜日。昨日の天気とは、打って変わっていい天気だ。

外を見ながら、約束した人物がいなかキヨロキヨロしていた。

早くこないかなあ……。

俺が待っている人物とは、ふっふっふっ……そう、綾ちゃんだ！

今日の朝電話があつて、遊ばないか、と言うことを言われ、俺は即答した。

「さいっ！」

と。

突然の誘いに焦りすぎて、“はい”と言おうとしたのに、“さい”と元気よく叫んでしまったのだ。

……。忘れよう。

まあ、と言うわけで今日は綾ちゃんとデートなのです。

俺が外を見ながらそわそわしていると、聞き慣れた声がした。

「政人じゃん！偶然だね。」

里奈の声が。

ああ、空耳だな…。きっとそうだ。いや、そうであってください…。

「何ぶつぶつ言ってるの？」

そういつて、里奈は俺の正面の席に座った。

はああ…現実か…。

今、綾ちゃんが来たら、確実にこいつは大騒ぎするだろう。そして、綾ちゃんに俺のある事無い事吹き込むだろう。

こいつをどこかにやらなければ……。

「ワタシ政人アリマセーン！ワタシボブデース！ドッカイッテクダサーイ！ドッカイッテクダサーイ！ドッカイッテクダサーイ！ドッカイッテヘぶっ」

「うるさい。」

「はい。」

「で？政人は一人で何やってんの？」

「いいいいいや、ななにになにもやってへん！なにもやってんへんよー！」

「凄い動揺してるね。気になるじゃない。もしかデート？」

「そっそんなわけっ無いにきまつてるじじゃん？」

「本当にー？」

「そっだよっ！ホントだよっ？ボブウソツカナイ！」

「ふーん、まあどーでもいいや！政人が死のうが何しようが私には全く関係ないしね。」

ひでえな、おい。

「あのー…。」

うーん、正に時間ぴったりだね！綾ちゃん。
おぢさん泣きたくなっちゃう……

里奈は綾ちゃんと、しばらく見つめ会ったあと、ゆっくりと俺の方に振り向いた。

「…ボブ、ウソツイタネ…？」

「…こっ…殺される…！？…ひゃっ……………！」

バキッ

。

「いやあ、綾と政人が知り合いだったなんてねえ。」

「私もびっくりしたよ。里奈と政人さんが知り合いだなんて。」

俺達は今、駅前の商店街をプラプラ歩いてる。

二人は、同じクラスで一年生からの友達らしい。

あつ、今俺達は二年生ね。

結局、里奈はついてきた。くそつ、綾ちゃんとの二人きりのデートだったのに。

「…暴力女。」

「なんか言った？」

「いや、拘束された女が目の前にいたらなあーってさ。」

「変態。」

ううつ…。くそつ。

いつか殺ってやる…。

綾ちゃんは、楽しそうに里奈と会話をしている。

ふう、まあいいか。綾ちゃんが楽しそうなら。

俺は二人を眺めながら、ボーッとしていた。

「……って言う事で、どう？」

「いいね！行こう行こう！」

「えっ？何が？」

「もう。何も聞いてなかったの？映画でも行かないって話してたの！」

「ふーん、いいんじゃない？」

「やったー！綾。映画代は政人持ちだって！」

「いや、俺何も……」

「ホントですか！？ありがとうございます！」

「えっ？うっうん！女の子に金を出させるわけにはいかないからね！」

「よし！じゃあ映画館へしゅっぱーっ！」

「おーう！」

「おっ……おーう……」

「かつ金が……しどい……」

。

映画館に着くと、結構混んでいた。日曜日だからな。

「さて、何見ようか？」

「あつこれなんかどう？ “メソポタニア文明”。」

おいおい。渋いな。

「これは？ “稲の刈り方”。」

渋すぎるぞ！ そんなの見る奴いんのか？

「それ私見たよ！」

いたよ！ 見た奴！

「凄い感動するよ！」

しかも感動系！？

稲の刈り方見て感動すんのかよ……。

「じゃあこれは？ ホラーだって。 “おばあさんの夜の営み”。」

「きゃー！ 恐そー！」

確かに。違う意味で。

「じゃ、これにする？」

やめとけよ！ そんなの見た日にゃあ、人格障害をおこしかねええ！

「違うのにしようぜ？ほら、これは？“ファイナルアンサー”私とあなたと住宅ローン」……………て、映画化されてるよ！！」

「いいですね！それ！」

「よし！それにしよう！」

「いや…俺はやめとくよ…………」

俺は二人にチケットを買い、外で待っていると告げ、映画館を後にした。

「ったく、なんなんだ？あの映画館は…。」

俺は、近くのベンチに座り、煙草に愛用のオイルライターで火を付け、煙を深く吸い込んだ。

ん？そうだ。俺は愛煙家だ。不良ではないがな。

不良はとうの昔に卒業した。

あの頃は、やりたい放題やってたな…………。

。

中学三年の頃、俺はギャングチームに入っていた。まあ、大人の言うことなんかクソ食らえだぜー！みたいな、典型的な不良だった。

中学二年の時、克也はどこかに引越していった。

里奈は、一度、ギャンクチームから抜けると言われ、大喧嘩した。結局、決着はつかないで、俺と里奈は、その日から他人になった。だから当時は、仲間と呼べるような奴はいなかった。

ただ、テキトーに集まって、テキトーに騒いで、テキトーに荒らしていた。

何にも楽しくなくて、何だか無性にムカついてて、ムカついた時は、そこらへんにいる奴等をボッコボコにした。

ハッパだつてやっていた。今思うと、本当どうしようもないクソガキだな。

ある日、克也が帰って来た。あいつは驚いていた。

そりゃそうだろう。

俺は髪は金髪だったし、ピアスだつて三個していた。服装もガラが悪かった。

でも、俺も相当驚いた。

まさか、克也が帰って来るなんて思わなかった。

克也は優等生だから絶交だーなんて言われたらどうしよう？ってな。

でも克也は、笑つて、
「おまえ、服装のセンスが無いな。」
と、言ってくれた。

その日から、あまりギャンクチームと絡まなくなった。ハッパもやめた。まあ、なんとなくやってたから、やめるのに苦労はしなかったな。

里奈にも謝った。

そしたら、あいつは笑つて

「じゃあそのセンスの無い服装直しなよね。」
と、言った。

俺の服装そんなにセンス無いのか……？と、ちょっと落ち込んだ。
だから、B系の服装はやめる事にした。

いつもの日常が戻った。

俺が馬鹿やって、克也がつっこんで、里奈が笑ってる。

毎日が楽しく、無性にムカつくと言う事がなくなった。いつしか、俺はギャンクチームと一切関わらなくなった。

そんな時、事件は起きた。
。

俺は学校の帰り、いつもと同じように克也と帰っていた。

「そう言えば、里奈の奴どうした？」

「ああ、なんか、友達と寄り道するって言ってたぞ。」

「ふーん。あ、そういえばさ！昨日のドラマ見た？」

「あの、おばあさんとイケメンホストが恋に落ちるってやつか？」

「そうそう！あのおばあさんがときめく表情がたまらないよなー！」

そんな他愛ない会話をしながら、俺は帰路に着いた。

「ただいまーっと……」

ピリリリッピリリリッ

携帯を取り出すと、登録されていない番号からの着信だ。

「知らない番号だな。だれだ？」

俺は携帯の通話ボタンを押した。

「はい。もしもし。」

『政人ー？久しぶりじゃん。』

「！ー！」

電話の声はギャンクチームの頭、西村と言う男だ。

『最近遊びに来ないじゃん。なんでよー？』

「自分はもうチームを抜けるって言いましたけど。」

『うーん、言うだけじゃダメなんだよねー。わかるでしょー？示し
がつかないってやつー。』

こいつの口調、ムカつくな。

「じゃあ、自分はどうすりゃいいんすか？」

『今からー、いつもの港の倉庫に来てよー。』

「いやです。」

『あはは、そう言うと思ってさー。政人といつも遊んでる女の子さ
らっちゃった。』

「はっ、うそつく……」

『政人ーっ！』

「！ー！」

今の声は、明らかに里奈の声だった。

『政人ーっ！早く助けにこーい！早くしないとケーキ1000個奢っ
てもらうからなー！』

緊張感ねえな。こいつ…。

『早く来ないとー、この子がどうなるかー、わかるでしょー？』

「ちっ、あんた、最低だな。」

『じゃあ、またねー。』

プチッ

「……クソが！」

俺は、外に飛び出て、原付バイクに乗って、キーを差し込み、アク
セルを最大まで回した。

ブオオオオツツ

そして、そのままセンタースタンドを上げた。

ブオオツツガシャーンツ！

「……………いたい…」

気を取り直して、原付に乗り、フルスロットルで道路を走った。

港の倉庫に着くと、外にバイクが10台停めてある。

10人か…。これは勝てないか？

俺は倉庫の横に転がっていた鉄パイプに目をやった。

こいつを使うか……………。

俺は倉庫の入り口に立ち、早鐘の様に鳴る心臓を押さえ、右手の鉄パイプを握り締め、意を決してドアを開けた。

「おらあつ！宅配便だそ！てめえら！」

「政人ちゃん。いらっしやーい。」

「政人！」

里奈は元気そうだな……………。よかった……………。

俺は里奈を見た。

里奈の顔は、痛々しく腫れあがり、紫色に変色していた。

「てめえら……里奈に何をした…？」

「いやー、この子が生意気いうからさー、ちょっと数発殴っちゃった。」

その時、俺の中の何かが切れる音がした。

「政人ちゃん。さー、今度はキミの番だよー。」

「ああ、やってみろ。やれんだったらな！」

そう言うが早いか、俺は持っていた鉄パイプを西村の腹に当てた。

「つつ！…ふ、まだまだだねー。」

！…こいつ、腹になんか入れてやがんな……

「タイムンなんて甘い事は言わないよー。みんなー、やっちゃって！。」

その瞬間、周りの奴等が俺めがけて、押し寄せてきた。

「ちつ、モテるのもつらいぜ……」

。

「ハア…ハア…」

俺は地面に突っ伏していた。

「やっぱり政人はつよいねー。」

西村が俺の頭を踏んでくる。

クソッ、さすがに俺一人じゃ、5人が限界か…。

地面に倒れているのは、5人だけで、あとの西村を含む5人は、怪我さえしてるものの、まだピンピンしている。

「…てめえ…俺の頭を踏んでいいのはハイヒールのお姉さんだけだ…」。

「あは、まだ余裕があるねー。その内笑えなくなってくるからねー。」

西村はそう言うと、俺の持っていた鉄パイプを取った。

「じゃあーまずは3回かなー。」

「くっ！」

西村は鉄パイプを構えると、俺の腹めがけて、振り下ろした。

「ぐあああっつー！」

「うーん、いい手応えだー。」

ドッ

「がああっ！」

俺は口に生暖かい物を感じて吐き出した。

「あれー？あばらが内蔵に刺さったかなー？すごいねー。」

「ぐっ！」

ドゴッ

「ツツツー！」

「はい。3かーい。もう十分かなー？」

俺はもう、腹に力が入らなかった。意識が朦朧とし始めた。

「もういいでしょ！？それ以上やったら死んじゃうよっ！」

里奈の大声が倉庫にこだました。嗚咽が聞こえる。泣いてんのか？

「……じゃ、次は女の子だー。せつかくさらったんだしねー。」

「……どうぞ？このドS！」

西村がゆっくりと里奈に近づいていく。

ちっ、里奈の奴、黙ってればいいのによ……。

俺は西村のズボンを掴んだ。

「……おい……まだ足りないぜ……？……俺はドMだからな……。」

「……………」

西村は俺に近づくと、ゆっくり鉄パイプを振り上げた。

「うざいねー。政人ー。もういいよー、これでおしまい。」

俺は痛みを覚悟し、目をギュツと閉じた。

……が、なかなか鉄パイプが振り下ろされない。

目を開けて、西村の顔を見上げると、違う方向を向いていた。
視線の先は倉庫の出入口だ。

「ヒーロー参上！……てか？」

そこには、克也が立っていた。

「フツ……おせえよ、ヒーロー。」

克也の後ろには10人はくだらない数がいる。

「さあ、悪者退治だ。」

そう言った瞬間、克也を先頭にみんなが一斉にこちらに向かってきた。

その光景を見ながら、俺の意識は遠退いていった。

気が付くと、俺は病院のベットだった。

「おっ！政人。気が付いたか。」

「政人、大丈夫ー？」

「克也…里奈…。大丈夫なわけないだろ…」

克也から説明を聞くと、どうやら俺はあばらが肺に刺さっていて、相当危なかったらしい。

奴等はボッコボコにしたあと、警察に突き出したらしい。奴等は少年院行きになった。ずいぶん前から色々やっていて、今回の事件で少年院行きが決まった。まあ、いい気味だな。

「あ、それから。……はい、これ。」

「なんだ？これ？」

それはくしゃくしゃの紙だった。

内容は、“すいませんでした。もう絶対かわりません。西村”と、震えた字で書いてあった。

「里奈…おまえ…」

「いやー、私が鉄パイプ持って、これで殴られたら痛いのかなあー？って言ったら土下座して謝ってきてさー。謝るなら政人に謝れて事で、これ書かせたんだ。」

……………女って怖いな…。

あの時、なぜ克也が来たかというと、俺が倉庫に行く前に克也に連絡して、なるべく多く人を呼んでから港の倉庫に来てくれと言った。克也は頭がいいので、それだけで分かってくれた。

こうして、俺は完全にチームを抜けた。

と言うか、西村を始め、チームの殆どが捕まったので、チームは壊滅状態だった。

その後、俺は晴れて退院し、いつもの日常に完全に戻った。

それから。代わり映えない日常を送り、今に至るってわけだ。

「おーい。政人ー？」

「おおっ！なんだ！もう終わったのか？」

「うん！おもしろかったよ！ね？綾ちゃん？」

「うん！あの住宅ローンに苦悩する人の表情が涙を誘ったよ。」

「ああー、あれは涙無しには観れないよね！」

感動するのかよ！

ふう、昔の事思い出してたら、なんだか疲れたな…。

「どーしたの？疲れた顔して？」

「いや、おまえの顔を見たらなんだか気が滅入ってな。」

「やったー！綾、政人が焼肉奢ってやるだつて！」

「は？俺なんにも……」

「いいんですか！？ありがとうございます！」

「あつああ！焼肉なんかでよかったらいくらでも奢ってやるよ！でも綾ちゃんお腹すいてないんじゃない？」

「私お腹ぺこぺこなんです！政人さんって本当に優しいな！」

「…じゃあ…行こうか…。」

その日、俺は5日分の生活費を使うことになった。

て言つか、綾ちゃん……………確信犯……………？

第4話 俺の原付の名前は……あ、文字数足りねえ。

ガタン…ゴトン…

この季節の電車は気持ちいいな……。

俺は電車に揺られながら、そんなことを考えていた。

いつもなら学校まで原付で行くのだから、今日の朝、それはただの鉄
クズになってしまった。

…ああ、俺の原付……。

説明しよう。俺の原付の悲しい末路を…。

。

チュン…チュン…

小鳥のさえずりが聞こえてくる……。

眠たい目を擦りながら、ベットからゆっくり起きて、窓を開けた。
……ん？なんかデジャヴ……。

まさか……。

俺は壁掛時計を恐る恐るみた。
時計の短針は12を指していた。

「はい。遅刻だね……………あああつ！！ちくしょー！！」

俺は急いで制服に着替え、牛乳を１リットル飲んで、お腹が痛くなり、速攻で用を足し、ヨーグルトをバカ食いして、お腹が痛くなり、速攻で用を足した。

「よし！準備OK！」

何がOKなんだかわからなかったが、取り敢えず、OKだ。

「行ってくるぜ！亀吉さん！」

亀吉さんはエサをくれるのかと思ったのか、興奮している。

俺は取り敢えず牛乳を１リットル入れてやった。

外にでて、階段を駆け降り、アパートの駐輪場まで走る。そして俺の愛車、“スーパーディオにライブディオのエンブレ付けて、しつたかぶり野郎に恥をかかせてやる…………号”に飛び乗り、キーを差し込んだ。

「フツ、男節なブルース奏でるぜ！！」

キュルルルル…………

キュルルルル…………

あれ…？

キュルルルル…………

キュルルボン！

ボン？

いや、ルボン？

そんなことはいい。

壊れたんかい？

「フツ、何がしたい？いや、何がしてえ？…うつ…ウオオオ！！」

俺は原付に喝を入れるため飛び蹴りをかました。

するとどうでしょう？

原付はバランスを崩し、まるでドミノ倒しの様に自転車やらバイクやらを巻き込んでいくじゃあ、あーりませんか。

「……よし！準備OK！」

見なかったことにしよう。うん、そうだ。それがいい。でも俺の原付は起こしておこう。

俺は原付を起こすため、原付の横に立ち、ハンドルを掴んで起こそうとした。

うお、中々重たいな…。

ここは一気に……

グイッ

その時、俺はバランスを崩し、後ろにつんのめった。

ドンッ

…ん？今ケツで何かを押したような…。

ガシャンガシャンガシャンガシャンッ！

……ああ、今日は天気がいいな……。そうだ、学校に行かなくちゃ……。電車で行こう。それがいい。

。

と言うわけだ。

ちなみに、俺のアパートの駐輪場には、自転車とバイク合わせて50台近くある。まあ、そんな事俺には関係ないけどね。うふふ…。

『次はー、体駅ー。体駅でーす。』

ふう、まだまだだな。

しかし、電車ってのは暇なもんだ。やる事が無いな。

俺は面白い事はないか、まわりの様子を見ることにした。

今は昼過ぎなので、電車の中は空いている。

乗っている人は、ヨボヨボのお婆ちゃん。チョコレートを食べてる子供とその母親。ふんぞり返っているおっさん。あと不良が一人。まあ、特に変わった奴はいなかった。つまんねえな…。

「もう！お菓子食べちゃだめでしょっ！！」

うおっ！びっくりした…。

どうやら母親が、子供に怒鳴ったらしい。

「だって…だって！」

子供が涙目になってきた。泣くのか？泣くのか！？

「ウオオオオオッ！！」

すげえ泣き声だ！！

「ウオオオオオッ！！………はあ、くだらねえ。」

泣き真似かよ！！

「ちっ！うるせえぞ！！今電話してんだよ！！」

お、不良がキレたぞ。

て言うかおまえの方がマナー悪いぞ。

「若造が……」

お婆ちゃんご立腹だ！

おっ、指を鳴らし始めたぞ。首も鳴らして…立った！腰を鳴らして、準備万端だ！行くのか！？

「どっ！いっしょ」

座ったーっ！っ！

すると、お婆ちゃんは目にもとまらぬ速さで、隣の子供のチョコを奪った。

「このおまんじゅうおいしいねえ」

勘違い！

「饅頭じゃねえ！」

子供がキレた！

「なんだと？このシャバ増があっ！」

お婆ちゃんマジ切れた！

辺りに険悪なムードが流れる。

「うるせえつつつてんだろ！！」

不良がまたキレた！

「それにガキ。これは饅頭だぜ？」

勘違い野郎が増えた！

「違うもん！違うもん！」

子供がまた泣き始めたぞ。

「やめて！私の息子をいじめないで！」

母親が子供をかばったぞ。

「でもそれは饅頭よ？」

母親まで勘違いしてる！

「うつ…うつ…うつ」

子供！堪えろ！おまえが正しいぞ！

「やっぱりね！ボクもそうだと思ってたんだ！」

しっただかぶりだ！

全員の意見が一致して、電車の中は元の和やかな雰囲気になった。すると、いきなりふんぞり返っているおっさんが立ち上がった。

「じゃあ、みんなで仲良くお饅頭食べましょうか！」

最後はおっさんが締めた——うつ！！

「次はー、政人が降りる駅ー。政人が降りる駅でーす。」

あ、俺が降りる駅だ。

俺は電車を降りた。

電車を振り返るとさっきの奴等が微笑みながら饅頭チョコを食べていた。
しかし、饅頭チョコを食べた瞬間、みんなが顔色を変えた。

「……これチョコじゃんっ!!」「……」

気付くの遅っ！

「はあ、なんかつつこみ過ぎて疲れた……」

俺は学校の階段を上りながらため息を吐いた。
電車で学校に行くのはもうやめよう……

ガラガラ……

「はあ……やっとつい」

「HR 終わリー！気を付けて帰れー!」

さっ、気を付けてかえろ

第5話　がり勉君の眼鏡パーティー

暖かい春…。

今日はいいい天気だし、学校も遅刻しないで来れたし。言うことナシだな！あ、梨食いてえ。

今は3限が終わって休み時間中だ。俺は机に突っ伏しながら、梨の事を考えていた。

「おい、政人。4限は移動教室だぞ。」

「ああ。…克也、おまえ梨とリンゴどっちが好き？」

「蜜柑だ。」

「うん、話をちゃんと聞きなさいこのシャバ増が」

そんな会話をしながら、俺と克也は教室を出ようとした。

しかし、教室のドアに仁王立ちしている奴がいて、それは阻まれた。

克也は、そいつの姿を見ると、

「またか…」

と、ため息混じりにつぶやいた。

そいつは克也を睨み付け、甲高い声を出した。

「柏木克也！僕の挑戦を受けろ！！」

。

そいつの名前は、赤木一太郎。がり勉野郎だ。

体系はガリガリ。背も低く、牛乳ビンの蓋のような眼鏡をいつもかけている。まさに絵に書いたような奴だ。

一太郎は高校一年のテストで、克也より点数が低かったことに激怒して、それから克也をライバル視するようになった。

そして、克也に何度も挑戦しては、ことごとく敗れていた。

ある日は、勉強で勝てないと悟ったのか、雑学で勝負を挑んできた。俺は何故か、出題者に抜擢された。

「かえるは何で両生類なんでしょう。」

「はい。それはなんたらかんたらぴーちくぱーちく」

「柏木君、正解（なのかな？）。次。かえるの卵にはどんな秘密が隠されているのかな？」

「はい！それはなんたらかんたらぴーちくぱーちく」

「一太郎不正解。（なのかな？）」

「政人、それは正解だぞ…。」

「…あひゃ！」

結局勝負は克也が勝った。まあ、克也の趣味は読書なので、雑学で負けることは無いけどな。

。

「…それで、今度は何の勝負だ？」

てかこいつもクソ真面目に勝負受けるよな。ま、A型だからね。今度は何の頭脳勝負だ？

「50メートル競争だ!!」

運動だ!!

「50メートルを……競歩だ!」

地味!

「…いいだろう!」

引き受けちゃったよ…。

。

昼休み。

俺は校庭の端で、梨の入っているパンを頬張りながら二人の姿を見ていた。

「政人、スタートたのむ。」

「斎藤君。よろしく。」

「…わかったよ。」

俺はスタート前の線の横に立った。

「はい。いくよー。よーい……」

もぎゅもぎゅ…

「…斎藤君、ふざけてないで早く」
「ドン」

そう言った瞬間、克也は物凄い速さで…歩いていった。

一太郎は一瞬キョトンとしたが、何が起きたのかすぐに理解し、物凄い速さで…歩いていった。

……だめだな、競歩は。スピード感が出ねえ。

20メートル付近。一太郎は克也に追い付きそうだった。ま、克也は運動神経0だからな。

「くっ！」

「はっはっはー！柏木克也！苦しそうだねえ！」

一太郎歩くのはえーな。

たぶん、あいつは血のにじむような練習をしたんだろう。足に50キロの重りを付けたりとか。

お、一太郎が克也を追い抜いたぞ。

「僕はねえ、この日のために、足に毎日50キロの重りを付けていたんだよ！」

本当にやってやがった！

40メートル付近。克也と一太郎の差は完全に開いていた。

一太郎は自分の勝利を完全に確信していた。

「H A H A H Aー！僕は勝った！僕は勝った！僕はアビヤッ」

あ、こけた。

一太郎はこけた時、眼鏡が頭の方にずれていた。

「眼鏡…眼鏡…」

お決まりだな…。

…スチャ

あいつスピア持ってやがった！

しかし、あいつはこけた時に足を痛めたらしく、またこけた。

ズシャーッ！

すると、あいつのポケットから、何かが大量に出てきた。

「ああっ！僕の眼鏡が！」

全部眼鏡かよ！！

一太郎はこけた時に付けていた眼鏡を2個とも落としたらしく、手をまさぐりながら必死に眼鏡を掻き集めていた。

その時、どこからか微笑みながら里奈が表れ、パーティ用鼻眼鏡を一太郎の眼鏡の中に紛れさせた。

「よし！これで全部だ！」

一太郎は眼鏡を全部集めたらしく、最後に落ちていた眼鏡を身につけた。

スチャ

はい。ドンピシャ！

「おかしいな。見えない。」

当然だ！

よろよろしながら一太郎はゴールした。

とつくにゴールしていた克也は、一太郎を可哀相な目で見ながら、

「おまえが勝ったよ…（いろんな意味で）。」

と言った。

「やった…僕が勝ったんだ…わーい！わーい！」

一太郎が喜ぶ姿は、まさにパーティでテンションMAXな人そのものだった…。

第6話 ボクのライバル氷室海・前編

今日は雨か……。

今は朝のH R。俺は外の景色をみながら、ボーツとしていた。

「えー、昨日帰りのH Rに話した転校生だが、急遽今日来ることになった!」

転校生? そんな話してたっけ?

「おい、氷室。入ってこい。」

氷室? 聞いたことあるような……

ガラガラ……

入ってきた奴は銀髪でツイストパーマをかけていた。

「氷室海です。よろしく。」

銀髪……? ツイスト……? ヒムロ……カイ?

「あーっっっ!」

俺は席を立ち、大声を上げた。

「……!……おまえは……!」

「ん? 斎藤。知り合いか?」

知り合いも知り合い。

こいつは俺がギャングチームに入っていた頃の、敵チームの奴だ。集会場所がとても近かったので、しょっちゅうこいつのチームと喧嘩した。

言わば、犬猿の仲だ。

「知り合いか。お、ちょうど隣の席が空いてるな。氷室。おまえの席は斎藤の隣だ。わからない事は斎藤からいろいろ聞け。」

担任は善意でやったと思うが、俺等にとっちゃ、いい迷惑だ。

海は無言で隣の席に座ると、俺を見た。

「よろしくな？斎藤政人君。」

ちくしょう……。俺の平和な学園生活が……。

。

きーんこーんかーんこーん

4限の終わりを告げるチャイムが鳴った。

結局、海とは一言も喋らなかった。教科書は右隣の奴に借りていたし（俺は左隣の窓際の席）、移動教室などの場所も右隣の奴に教えてもらっていた。

海を見ると……女数人に質問攻めにあっていた。

「氷室君ってどこに住んでるの？」

だの、

「氷室君のメルアド教えて！」

だの。

海は迷惑そうな顔をしながら、適当に答えていた。

ちくしょう、なんでこんな根暗野郎がモテるんだ！
あれか！クールなちよい不良はモテるってやつか！

俺は、そりゃあ物凄いい、マジとんでもねー憤りを感じながら、弁当箱を持って教室をでた。

階段を上って、屋上へのドアを開ける。

ザアアアア……

そうだ。今日は雨だった。

教室には海がいるだろうし、ほかに場所も無いので、屋上の前の階段で食べる事にした。

……はあ。

一人で昼食か……

今頃、海は女に囲まれ怪しくニヤニヤしながら、女子達に

「海君これ食べて！アーン」

とか言われながらあいつは

「え？ボクまいっちゃうな。ほひよひよ！」

とかいつているんだろう。

はっ！くだらねえ！俺には綾ちゃんがいるぜ！メニーメニーよりオ
ンリーワンさ！

綾ちゃんが彼女になったら……うはっ！

……うひゃ！

……くう。

「…なにやってんの？怪しくニヤニヤして…。」

「うおっ！里奈！」

「また変な想像してたんだろう。」

「克也。どうした？二人揃って。」

「どうせ屋上の辺りにいると思ってね。」

「三人仲良く食べるかって事になったんだ。」

「……おみゃーら…最高だぜ！」

「はい、抱きつくのはダメだからね。」

スカッ

「……さ、ご飯食べようかな。」

。

「そういえば、政人のクラスに転校してきた人、凄いイケメンだね。教室覗いたらびっくりだよ。女の子に囲まれてご飯食べてんの。」

「あの野郎…想像通りの事しやがって……うう。」

「あの氷室って奴、前に言ってたギャングの奴だろう?」

「ああ。あいつは変わってねえよ。中三の頃から食えねえ野郎だよ。」

そう。海はあいつは前からあんな奴だった。

あいつとは何かとぶつかった。

一種の腐れ縁みたいなもんだろう。街中でも、電車の中でも、家の行き帰りでも、あいつとはよく会って、よく喧嘩した。

あいつは喧嘩強かったな。認めたくないけど。

「でも、何で転校してきたんだろうね?」

…たしかに。あいつは地元がこころへんの近くだから、親の転勤って訳じゃないし。なにより、ギャングに入ってたから、敵チームの地元の高校に来るわけない。まさかギャングをやめたとか? いや、それこそまさかだ。あいつはギャングを辞めない理由がある。

あれはまだ、俺と海二人共ギャングチームに入る前の話。

その日、夜中、俺がコンビニにタバコを買いに行った時、お馴染みの様にあいつに会って、お馴染みの様に因縁付けあって、お馴染みの公園に行って、お馴染みの様に喧嘩した。

俺はあいつをボッコボコにしてやった。
そして俺もボッコボコになっていた。

「ハアッ……ハアッ、いい加減倒れるよ……」

「ハアハア……生憎と、俺は重力には逆らいたい人なんでね……。」

「ハアハアッ……わりいが、俺もだ！」

海はそう言い放つと同時に、俺に得意の右フックを仕掛けてきた。
今、こいつの右フックをまともに食らったら、確実に意識がトぶだろつ。

俺はそれをガードするために、左の顔全体を腕でカバーした。

しかし、海はフックを直前で止めた。

！…フェイント！？

そう思った時には、遅かった。

バキッ

あいつの左フックが正確に俺の顔面を捕らえた。

「カハッ！」

俺は意識が遠退くのを堪えて、足を踏張った。

「ハアハアッ、フェイントとかくだらねえ小技使いやがって……」

「ハアハアッ……使ったもん勝ちだ……。それよりおまえ、俺は今13戦7勝だぞ？これでやっと差が開くな。」

そうだ……。今回負けたら差が二つ開く……。

今回だけは負けらんねえ……！

海はフラつきながらも、戦意は無くなっていないみたいだ。
ホント、こいつと喧嘩するとめんどくせえ……

「クッ、さすがにヤバいぜ……！」

「俺のフックまともにもらって立ってんなんで、おまえだけだぞ……めんどくせえ……」

「でも、もうこれで最後だな……。まあ、最後をたのしもうぜ……。」

俺はタバコを取出し、愛用のジッポで火を付けた。

「なんだ？てめえ。タバコが吸えない体になる前に吸ってこつつか？」

「わかってねえな……勝利の……タバコだよ！」

俺はタバコを海に向け、飛ばした。

海はそれを予想していた様に笑いながら避けた。

「フン、くだらねえ！それが最後の手かよ！」

そう言つと海は俺に向かつてきた。

そうだ…そのまま来い……たのむ、パンチ…パンチで来てくれ……！

海は俺の期待通りに、全体重を乗せたパンチを繰り出した。

俺は海の上半身が限界まで前に来たときに、あらかじめ手に持っておいたジツポを奴のめがけて放った。

ジツポは丁度、海の左目に当たり、海は一瞬怯んだ。

「オラアアアツ！！」

俺はストレートやらフックやらの名称もつかない、拳に全体重を乗せた、渾身の一撃を海の顔面に、ジツポごと殴った。

ゴツツ！！

ジツポが死角になり、加えて、丁度カウンターになった事で、海は俺の一撃を思いつきり食らった。

「14戦7勝…だぜ。」

海は一瞬、全身の力が抜けた様な顔をして、そのまま地面に突っ伏した。

これはさすがに立てないだろう。やった本人の俺でも、こんなの食らったら川の向こうのお婆ちゃんに手招きされちまう。

海は地面に突っ伏したまま、動かなかった。

俺が仰向けに起こすと、海は喧嘩の時とは打って変わって、安らかな顔をしていた。

「ハア…めんどくせえ……。」

。

「……………」

「おつ、おはよう。」

「…俺は…負けたのか…」

俺は海をベンチに寝かせ、奴が起きるまで、待つてやった。なんて優しいんでしょう！こんな根暗でオタクで喧嘩するしか脳のないバ
「余計なお世話だ。」

「あれ？聞こえてた？」

「全部な。」

「…ま、いいや。てかおまえ3時間も起きるまで待つてやったこのボクに、なんか言うことアルんでねーの？」

「チツ、タバコ全部折れてやがる。おい、タバコくれ。」

「…はい。でさでさ！はやく言って！」

「…ライター落とした。おい、火。」

「…はい。」

カキイツ、シュッ…

「サッ、言つてごらん！はやくはやく！」

海は煙を深く吸い、ゆっくり吐いた。

「これ、軽いな。」

「おまえ、撲殺って言葉しってんか？」

海は俺の言葉を無視して、空を見上げた。

空はすでに少し青くなり始めていた。

「…俺、兄貴のチームに入る事にした。」

「ああ、おまえの兄貴が頭のでっかいギャングチームだっけ？」

「そうだ。すげえよ。兄貴は、俺と二つしか違わねえのに。50は居るチームの頭だぜ？」

「で？チーム入ってどうすんの？兄貴が引退する時にヘッドの座を頂こうって訳か？」

「そんなくだらねえ事しねえよ。俺はいつか兄貴にタイマンで勝つて、兄貴を越えんだ。だから、体を鍛えるために入るんだよ。兄貴のチームは敵が多いからな。」

「でも兄貴ってモロ強いんじゃないかった？」

海の兄貴はそこらへんの不良の憧れ。タイマンで負け無し、地元最強だった。

地へ元じゃ、負・け・知・ら・ず・っ・てなもんだ。

「ああ。だから挑むんだよ。ガキの頃から負けっぱなしだからな。」

そう言った海の眼は、いつもの興味なさそうな眼ではなかった。

「ふう、もうこんな時間か。コンビニにタバコ買いに行ったただけなのに……。」

「フン、俺はもう行くぜ？次会ったら、決着着けようぜ。」

「はっ、次も俺の勝ちさ。……じゃあな。」

「ああ……。」

。

「……………まあ、人が転校する理由なんてどーでもいいよね。」

「どーでもいいって言うのもアレだが……、まあ、あまり詮索することではないだろう。」

そうだよな……。あいつの転校の理由なんてどーでもいいし、詮索することでも無い。

「そういえば、綾ちゃんは？」

「ん？綾は委員会で一緒に食べれないとか言ってたよ？」

「なんだよ…俺と綾ちゃんの愛を深めようと思ったのに……」

「あんだ、自分の顔をみて言いなさい。」

……え？聞き捨てならねえ。俺ってそんなヒドイの？

「ねえ、ぶつちやけ俺の顔どう？」

「何よ……？急に真剣になって……そうだね、顔は正直悪くない。いや、かつこいいよ。でも……」

「でも……！？」

「…中身が……ねえ……？克也」

「…中身だな……なあ……？政人」

「たしかに中身がな……な……？俺……？俺……？俺？オレエエエツッ！！」

なんだか誉められたのか、けなされたのかわからん…。

回想シーンが流れてる間に、俺の弁当箱は空っぽになった。

なんか食い足りねえな…

「……あつ！スカイフィッシュ！」

「えっ？どこどこ！？」

「どこにいるんだ！！」

ヒヨイパクヒヨイパクヒヨイパクヒヨイパクヒヨイパクヒヨイパク
ヒヨイパクパクパクパクパク！！

「ほひ！ほへはひっへふふん！とまと！（よし！俺が一人で追ってくる！あばよ！）」

「そんな！危険すぎる！」

「政人一人じゃ捕まえられないよ！」

「ほへへほ……ほへへほ、ほへはとまと……！（それでも……それでも、俺は行くぜ……！）」

「……なんて事にならないかなあ……と、俺は克也と里奈の弁当を見ながら考えていた。

ああつ、里奈！うまそうな唐揚げ食ってんじゃねえか……

「……どしたの？犬みたいに口が涎でべとべとだよ？あ、これ？」

俺はブンブンと首を縦に振った。

「もう、しょうがないなあ……。はい、あーん」

おおー！このお店はそんなサービスまであるでござるな！でわっ

！遠慮なく……

「柏木克也！！」

「「「うわっ！」「」

ビクッ

ボトッ

……。

「こんな所にいたのか！逃げていないで早く勝負しろ！」

「……一太郎……死にたいようだね……」

俺は一太郎を体育館裏に連れ込み、全身白タイツを着させ、鼻眼鏡を着用させたあと、モジモジ君を強制的に始めて、“大日本帝国”と書けるまで、ずっとその格好でいると言い、教室に戻った。

。

「HRおわるだよ！みんな気を付けて帰るだよ！」

うしー！今日も学業が終わったぜ！

「おい、帰るぞー！」

聞き慣れた声の方を見ると、里奈と綾ちゃんが俺の席に歩いてきている。

ああ、綾ちゃん……！微笑む顔が可愛いぜ……！

綾ちゃんは海に視線を落とすと、驚きの表情をみせた。

「海……君……？」

「！……」

海が綾ちゃんの方を見ると、海もまた、驚きの表情をした。

「フ……今日は懐かしい奴によく会っな……」

海はそう吐き捨てると、無言で教室を出ていった。

「海君！待って！」

綾ちゃんは海の後を追っていった。

「えっ？ちよっ……どゆこと……！」

「はーん。これはただの知り合いって訳じゃないさそうだね。」

里奈は、綾ちゃんが出ていく姿を見ながら、手を顎に当てて、含みのある笑いを見せた。

海と綾ちゃんが知り合い……？いや、ただの知り合いじゃ、ない？

俺は明後日の方を見ながら、呆然としていた。

第7話 鳩の話でしょ？（中編）

「海と綾ちゃんがただの知り合いじゃない…？タダじゃない？有料？延滞料金？別途料金？テメー30分ポツキリ5000円じゃねーのかよオオツー！」

俺は自分のアパートで誰に言うでもなく叫んだ。

なんでだよ綾ちゃん……。30分ポツキリ……。じゃなくて、なんで海を追っかけるんだよ…？

俺はあの後、無気力状態になりながら帰路に着いた。途中、ばあさんが道路の真ん中でレゲエダンスを踊っていて、そこへじいさんが100人くらい集まっていたが、そんな事につっこみを入れるほど俺は元気じゃなかった。

ふう……このままじゃ腐っちまうぜ…。

俺は気分を変えるため、コンビニに酒を買いに行こうと、アパートのドアを開けた。

外はもう暗く、雨は止むどころか、強くなってきた。

ため息を吐きながら、ビニール傘を持ってコンビニへと向かった。

俺のアパートからコンビニまでは歩いて10分程度。しかし、この10分は俺の足元を濡らすには十分な時間だった。

あーあ、この靴買ったばっかなのに……

俺は悪態を吐きながら、雨で濡れ、泥の飛沫で汚れた靴を見ながら歩いていた。

ブーツと足元を見ていたため、前から歩いてきた人にぶつかってしまった。

あれ？このシチュエーション……。嫌な予感……。

顔を上げると……予感的中。そう、海が立っていた。
海はなぜか傘を持っていないく、全身びしょ濡れだった。

「ハア……おまえとは運命の繋がりを感じるよ……」

海も俺と同じ事を考えていたらしく、しかめっ面をしながらため息を吐いた。

「……………」。

海は無言のまま俺を通り過ぎ、立ち去ろうとした。

ん？いつもなら憎まれ口の一つでも言うのに。

「待てよ。」

海は俺に背を向けたまま立ち止まった。

「……………」。

海の様子がいつもと違うのも気になったが、それよりも俺は聞いた
いことがあった。

「おまえ、何で転校してきた？」

俺には関係無いことだが、やはり気になる。

「何で敵チームの地元に来た？ギャングは抜けたのか？」

「ああ、抜けたよ。もう居る理由が無くなった。」

理由が無くなった…？

嫌な予感がした。

背筋に冷たいモノを感じる。

「……理由が無くなった？でもおまえの理由は…」

「兄貴は」

海が俺の言葉をさえぎった。海は少しうつむき、喋りだした。
俺の鼓動が早くなっていく。

「…兄貴は…死んだ。」

ドクンッ

心臓の音が頭で響いた気がした。

海が振り返る。海は悲しい目をしていた。

「いや、死んだんじゃない。俺が殺したんだ……」

。

夕方の公園。そこに二人の影があった。

「がっはっは！弱いな！海！」

この豪快な声は氷室海の兄、氷室耕一^{いむろ けいいち}。

「クッ……」

この弱々しい声、氷室海は今にも倒れそうだ。

「なんだ？海。もう終わりか？」

耕一が挑発をすると、海は耕一を睨み付け、悲鳴とも取れる叫び声を上げながら闇雲に突っ込んでいった。

「ウオオオッ！」

耕一は、それを当たり前の様に軽くかわし、海の手を逆手に取った。

「そんなんじゃない、俺様にゃあ、勝てねえよー」

耕一はそう言い放つと、海の首筋に手刀を入れた。

ドッ！

「…………クソ…………」

海は薄れゆく意識の中、悪態を吐きながら落ちていった。

「…ふー。こいつの負けん気、強すぎんぞ…」

耕一はため息混じりにそう呟き、海を持ち上げ、背中に背負った。

「…………でも…ちょっと強くなったな…」

そう言いながら、耕一は少し微笑んで、公園を後にした。

翌日。

ジリジリと迫る夏の熱さ。こんな日に海が真面目に授業に出るはずはなく、屋上の日陰で煙草をふかしていた。

今は授業中。つまり、サボりだ。

（はあ…こんなじゃ、いつまでたっても勝てねえよ……）

昨日の事を思い出し、少し落ち込んでいると、昇降口の方からパタパタと階段をかけ上る足音が聞こえる。

（またあいつか…）

海には屋上に来る人物が分かっていた。

「海君！また授業サボって！あつ！煙草まで吸ってるっ！」

海は毎度のパターンに少しため息を吐いた。

「あんたも毎回毎回懲りないな。」

あんたと呼ばれた女の子が少し膨れっ面になる。

「毎回毎回懲りてないのは海君でしょ！？それに私の名前はあんたじゃなくて、村上綾！ちゃんと覚えてください！」

その華奢な女の子、村上綾が息を荒げて文句を言う。その様子は正に、プンプン、と言う擬音がお似合いだ。

（なんでこいつ、こんなに必死なんだ？）

その様子が可笑しくて、海は口元が緩んだ。

「あつ！なんで笑うの！？ヒドイよ！」

綾がさらに息を荒げ、怒っていた。

「フフツ……ハハハ！」

海はついに吹き出し、笑いだした。

海は中学3年生。海は、今年の春にギャングチームに入った。

もともと人と馴れ合う事が嫌いで、よく一人でいた海だが、チームに入ってからにはさらに一人になった。

向こうからは近寄ってこないし、海も近寄ろうとは思わなかった。しかし、綾は違う。

綾は中学3年の春に、海の中学に転校してきた。

外見と性格ですぐにクラスメイトの中心になった綾だが、同じクラスの海だけが一人なのに気付き、それから海にくっつき始めた。

最初は、海は綾の事を無視していたが、綾の粘り強さに負け、最近では友達と呼べるくらいに付き合うようになった。

きーんこーんかーんこーん

昼の時間を告げるチャイムが学校に鳴り響く。

「よし！授業はこれまで！」

教師がそう言うと、生徒達は一斉に騒がしくなった。そして、その中に海の姿がある。

（やっと飯だ。）

使わない頭を使ったせいか、海は頭痛を覚えながら、教室を後にした。

一度、購買でパンと、いつも飲んでるコーヒー牛乳を買い、屋上へと向かった。

（今日はメシ食って煙草吸って少し寝て帰ろう。）

そんな事を思いながら、階段を上り、屋上のドアを開ける。するとそこには、

「おさきー。」

綾が微笑みながら、手をヒラヒラと振っていた。

（…計画はペアか…）

海は諦め、綾と一緒に食べることにした。

海がため息を吐きながら綾の隣に座る。

しかし、綾の様子がいつもと違う。海を見ながら微笑み続けている。

「…なんだよ。」

「んふふー。これ、なんだと思う？」

綾が指差す方には、弁当箱が2個、ピンクの風呂敷に包まれた小さな弁当箱と、水色の風呂敷に包まれた普通の大きさの弁当箱があった。

「…あんたの弁当だろ？よく食うな。」

綾は見せ付けるように額に手を当て、ため息を吐き、首を横に振った。

「…海君って本当に鈍感だね…。」

「じゃあ、なんだよ。」

すると、綾は水色の風呂敷の方を海に差し出した。

「海君いつもパンでしょ？だからちゃんとした物食べなきゃって……」

そう言った綾の顔は紅潮していた。

(……?)

「食っていいのか？」

「……うん……。」

(なんだ、こいつ？毒でも盛ったのか?)

訝しげに思いながら、海は風呂敷を解き、弁当箱を開けた。

それは、漫画に出てきそうな、オードソックスな弁当だった。

箸を取出し、卵焼きを取る。

「あっ！……あの……不味いかも……。」

(じゃ、食わせんなよ……)

海はそう思いながら、卵焼きを口に入れた。

(…うまい…)

「……どう…?」

綾が不安げに見つめる。

「……普通。」

その海の言葉を聞いた瞬間、綾は満面の笑みをこぼした。

(やったー！おいしいうって言うてくれた！)

綾は3カ月程度の付き合いで、海の事を分かってくるようだ。
海の言う“普通”は“良い、うまい”なのだ。

(これからも毎日弁当だったらな…)

海が弁当を見つめながら思っていた。

綾は、海の思っている事を理解したようだ。

「これからも、毎日作ろうか?」

「……いいのか?」

「もちろんっ!」

その後、綾は笑みを絶やさないうまま、海と昼食を食べた。

見ての通り、海と綾は最近、友達以上になってきていた。
互いにそれは意識していたが、海は告白する事なんてできるわけが

ないし、綾もいざとなつては中々できないようだ。

二人は昼食の後、話し合っていた。

だが、二人ともいつもよりなんだか緊張している。

二人の考えていることは、一緒だった。

それは明日の日曜日、地元で一番大きい祭りがある。それに誘い、この曖昧な関係に終止符を打つつもりだ。

海は考えていた。

（どうやって、話を切り出せばいいんだ？）

海はいままで、デートに誘われたことは何度もあるが、誘った事なんて一度もない。

それは、緊張して誘えなかったと言うわけではなく、女性に対してあまり興味がなかったのだ。

だからこんなに緊張するのも初めて。上手い誘い方なんて分かる訳がない。

昼休みはあと僅か。それまでになんとか誘わなくては。

（ああ！めんどくせえ！単刀直入だ！）

綾は考えていた。

（どうやってデートに誘おう？）

綾はいままで、デートに誘われたことは何度もあるが、誘った事な

んで一度もない。

それは、緊張して誘えなかったと言うわけではなく、男性に対してあまり興味がなかったのと、さらに免疫も無い。

つまり、海は初めて興味が湧いた人。

だからこんなに緊張するのも初めて。上手い誘い方なんて分かる訳がない。

昼休みはあと僅か。それまでになんとか誘わなくては。

（ああ！もう時間がない！ここはもう不自然でも…！）

「あの！」「」

「……………」

「なんだ？」

「なに？」

「あんたから言えよ。」

「海君から言つて。」

「あんたから」

「海君から」

「あんたから」

「かい」

きーんこーんかーんこーん

「……………」

空に飛んでいた鳩は考えていた。

（あはやな。こいつら。）

放課後。

海と綾は二人ともうだなれていた。

綾はもう諦め、席を立ち、教室を出ようとしたとき、友達から声がかかった。

「あやゝ！」

「なんですかゝ……」

「……ずいぶん元気無いね。それよりさ！明日祭りやるの知ってる？一緒に行くこつよっ！」

綾はこの時、友達の背中に天使の羽が見えた。

「えっ！？うつんえっ！？うつんえっ！？」

「なにリズムにノってんの？」

急なチャンス到来に、綾は焦った。

（これを逃したら、もうチャンスは無い！）

綾は勢いに任せ、走るようにして、海の席の前に立った。綾の顔は真っ赤だった。

海が綾に気付くと、驚きの顔をした。

「っ！！」

「海君っ！」

「なっ…なんだ？」

「明日友達と一緒に祭りにいくから海君も一緒にいこっ！？」

「あっああ…分かった」

綾は海を誘う事に達成した事で、脱力感を覚えながら、教室を出た。

（い…言えた…。やった…）

綾は明日の事を考えると、思わず顔が綻んだ。

海は教室の自分の席で呆然としていた。

（い…言われてしまった…。）

海は自分から言おうとしていたのだが、この際、どうでもいい。そんなことよりも、明日の祭りの事を考えると、口元が少し緩んだ。

校舎の外を飛んでいた鳩は思った。

（めでたしめでたし、やな）

。

「……え？何の話？ノロケ話？鳩の話？」

「いや、まだ終わってねえよ……。」

海は雨に濡れながら、続きを話し始めた。

てかおまえ風邪引くぞ。

それに立ちっぱなしで疲れちったよ。あーあ、人のノロケ話聞いてなにがたのし

「…話していいか？」

「どうぞ？」

。

海は学校を後にして、高鳴る胸を押さえながら家に向かった。

海が、帰り道に必ず通る道。その道の横には公園がある。耕一と喧嘩したり、政人と喧嘩したりする公園だ。

海はふと、公園に目をやった。

公園には、ガラの悪い連中が3人ほどいた。

海はその連中と目があつた。すると、その連中は海の方へ向かつていった。

(……ちっ……)

連中の一人が海に話し掛けた。

「おおっ！これは耕一さんの弟、海君じゃないですかっ！」

「バカ！海君じゃなくて海様だろ！？殺されちまうよ！」

連中は笑顔で言つた。しかし、その笑顔は純粹に笑っているのではなく、悪意のそれだつた。

海がチームに入つたのに、だれもが快く了承するわけではない。

海の兄はチームの頭なので、ポツと出の海もそれなりに扱われてしまふ。

それを氣に入らない奴はチームの中に少なからずいた。

しかし、耕一がいる前でそんな事を言えるはずはなく、海が一人の時にこうしてからかうのだ。

そうしてからかう連中に必ず川越と言う奴がいる。川越は特に海を嫌っている。

「どうしたのー？だまっちゃって？もしかしてびびってんのー？」

「ぎゃはは！おまえそんなにいじめちゃ可哀相でしょ！」

「いいんだよ！こいつ調子のもつてん……だ……か……」

「……………」

連中が黙り込む。

視線は海に集中していた。

海が殺気を放っている。

まわりに張り詰めた空気が流れる。

「…早く…消えろよ…？」

海は殺気のこもった言葉を放つと、連中は皆黙りながら公園を出ていった。

しかし川越だけは他の連中と歩きながらも、海をずっと睨み付けていた。

海は胸クソが悪くなりながら、また帰り道を歩いていった。

「しゃーないだろ？そういう奴がいんのは。海も分かってたろ？」

海の自宅のリビングで、耕一は当たり前のように言った。

しかし、海は気に入らない様子だ。

「それは、そうだけどな…」

兄が頭のチームに入れば、こうゆう連中が突っ掛かってくるのは、まさに当たり前だ。

当たり前だが、実際に起これば、腹が立つ。

耕一は海の様子を察知したのか、

「じゃあ、奴らには、俺が言っとくよ。」

と言つて、海をなだめた。

しかし海は、それを断つた。

そんな事をすれば耕一に迷惑がかかるし、第一、海は喧嘩の時だけチームに行く臨時の様な物だった。

ハナから連中と仲良くやろうとは思っていない、と言つのが海が断つた理由だった。

「ふーん、それよりさ。今日綾ちゃんに会ったよ。すげー可愛いし、礼儀正しいし。あの娘、おまえの彼女？」

耕一はからかうように言った。

耕一は一度、海と綾と一緒にいる所を見てから、こうして海をいじっていた。

案の定、海は顔を赤くしていた。

「バツ…ちつ…ちげーよ！」

「ホントかなー？」

「怪しく微笑みながら近づくな！気持ち悪い！」

「ははっ…まっ、頑張れよ。」

耕一はそう言つと、海の頭に手を置いて、優しく微笑んだ。
海はその兄の姿を遠い目で見ていた。

（俺はいつから兄貴を越えたいって思ってたんだろう…。）

海の家庭は母子家庭だった。海の母親は子供二人を養うべく、朝早く、夜遅くまで働き詰めだった。

耕一は父親代わりに、海の面倒をよくみていた。

そして海は兄の背中を見て育ち、父の背中を越えたいと思う様に、いつか、兄を越えたいと思った。

耕一は、強く逞しく、そして何より優しくかった。

（……？）

「そういえば、なんで兄貴はギャングなんか作ってたんだ？」

耕一が川越みたいな連中というのには、はなはだ疑問だった。

「いや…、最初は仲の良い奴らで作ったんだけどな。なんかいつのまにかいっぱい集まってきてな。んで、やっぱりギャングかたってるわけだから、当然敵も増えていくわけよ。なんか、もう辞めるに辞めらんなくなっちゃった！えへっ」

「えへって…」

そんな会話をしながら、夜は更けていった。

海は自分のベットの中で、寝付けずにいた。

（クソッ…これじゃ、まるで修学旅行前のガキだぜ…）

そんな事を考えながらも、海の胸は踊っていた。

……毎日が充実している。学校で綾とくだらない話をして、兄貴とからかいあつて。川越とかはむかつくが。

いつか、兄貴より強くなって、兄貴を越える。

越えた後は何しよう。

まあ、それは越えた後に考えればいい…。

まだまだ先の話だしな……

海は明日を楽しみにしながら、眠りに落ちていった。

第7話 鳩の話でしょ？（中編）（後書き）

更新遅くなってすみませんでした。意外に話が膨らんでしまっ
て…

第8話　ちゅーしたん！？おみゃーちゅーしたん！？（中々編？）

「…なんているんだ…？」

祭りの喧騒が聞こえる。

海は今、駅前の商店街の入り口にいた。

海は昨日、緊張しすぎて寝不足気味だ。
そして不機嫌でもある。

「えへっ」

この男、耕一がいるからだ。

「えへっじゃねえ！」

10分前。

海は待ち合わせに少し遅れて到着した。

すると、集合場所に綾、綾の女友達、女友達の男友達、そして耕一が楽しそうに談笑していたのだ。（“ちよっとうんこしてくる”なんて言っただけに出たから、どうも怪しいと思ったらこれか……）

海は自分を含めて男女4人だったので、あわよくば、隙を見て綾と二人きりになろうと期待していたのだ。しかし耕一が来たことによつて、別行動を取ったら絶対に耕一は海に付いていくだろう。

「まあまあ、海君落ち着いて？」

「そうだよ。お兄さんがいてもいいじゃない。」

「そうそう。」

「そうに決まっている!」

「兄貴が言っな!」

「まあまあ、海。どーどー」

「どーどー、じゃねーよ!」

「じゃあ何?ドウドウ?これで満足かこの野郎。」

「……なあ……楽しいか?」

「うっん、全く!」

「じゃあやんなよ!」

耕一がこう言うノリになると、意見を変えるのは不可能に近い。

海は諦めて、渋々耕一と行動することにした。

海達が商店街に入っていく姿を睨み付ける連中がいた。

「…チッ、なんで耕一さんがいんだよ。」

「どうします？川越さん。人数も多いし、やめますか？」

川越と呼ばれた男は、暫く不機嫌そうな顔をしていたが、思いついた様な顔をして、ニヤリと笑った。

「いや、関係ねえ。やっちまおう。」

川越は他の連中に耳打ちをすると、不適な笑みをしながら、人混みの中に消えた。

海達は屋台で食物を買ったり、遊んだりして、祭りを楽しんでいた。海はずっと綾を見つめていた。

それは、二人きりになるチャンスを伺っているのもあるが、7割は別の理由だ。

海は、綾の浴衣姿に見惚れていた。

淡い桜色の浴衣に白い肌が映え、艶やかな黒く長い髪を上げていた。顔はナチュラルメイクをしているらしく、整った顔がさらに綺麗になっていた。

海が綾の事をずっと見つめていると、綾がその視線に気づき、顔を赤くさせてうつむいた。

「変…かな…？」

「いやっ…その…なんだ…」

海は頬をポリポリ掻き、不自然に横を向いた。

「…似合ってるよ。」

そう言った瞬間、綾の顔が笑顔で輝いた。

ドンッ！

大きな音と共に夜空に光が上がった。

人々は皆、足を止めて空を見上げた。

「わあ…きれーい…」

綾も夜空を見上げ、花火を眺めていた。

海はその横顔をみて、鼓動が早くなっていく。

「……………」

海が無言で綾と手を繋いだ。

綾は驚きながら、海の方に振り向いた。

綾の友達や耕一は、花火に見惚れ、二人の状況に気付いていない。

海がゆっくりと口を開く。

「……………もつといい場所で見ねえ？」

「……………うん。」

海と綾は手を繋いだまま、商店街を出た。

ドーンッ！

水面に花火の光が映る。

「うわぁ！良く見えるね！」

「だろ？」

海は綾を海岸に連れてきていた。

二人は砂浜に腰掛けている。

（ふう… やつと二人になれたぜ……）

海は煙草に火をつけ、達成感に浸っていた。

いつもなら、綾が煙草を注意するのだが、してこない。

海は綾の方を見た。

綾は海を見つめていた。

「……フフ。」

綾は微笑みながら、海の肩に寄り掛かる。

「…俺…言いたい事があるんだ…」

海はこれまでに無い程、緊張していた。

「……何？」

綾は海の“言いたい事”がわかるらしく、海と同様に緊張していた。

「…俺、あんたの事が……」

海が綾の耳元まで近づく。花火はフィナーレらしく、夜空は光で包まれていた。

「俺、綾の事が……」

好きだ……

ドーンッ！

綾は赤くなりながら頷いた。

海が綾の肩に手をまわし、二人は見つめあった。

海が綾の顔に近づく。

綾は静かに目を閉じた。

ブルッブルッ

「…携帯、鳴ってるよ？」

「……………」。

（…本当にベタなパターンだな……）

海は携帯を取出し、画面を睨み付ける。
着信は耕一からだった。

ため息を吐きながら、通話ボタンを押して、耳に当てた。

「なんだよ？」

『海か！？大変なんだ！』

電話の耕一の声は焦っていた。
海は只ならぬ雰囲気を感じた。

「…どうした？」

「とにかくすぐ商店街の入り口に来てくれ！！」

耕一は半ば叫ぶように言うと、通話が切れた。

「ッ！…なんだってんだ…？」

「お兄さんから？」

「ああ。すぐ来てくれたってよ。なんだかヤバそうだ。行こう」

海が立ち上がり、綾を促すと、綾は残念そうな顔をしながら立ち上がった。

「続きなら後でしてやるよ。」

「なっ……ちがーう！！」

綾は海を追い掛けながら、海岸を後にした。

「……………」

二人はこの状況に言葉を失った。

綾の友達、正確に言うと、綾の友達の男友達の顔面が異様に腫れていた。

顔の左側が大きく腫れ、所々出血やら内出血やらをしていた。

そして、腹も殴られたらしく、男は腹をおさえながらうずくまっていた。

「これは…」

「数人に拉致られて、やられたらしい。」

満身創痍の男にかわって、耕一が説明した。

「数人って、一体誰だよ？」

「そいつ等は…」

耕一は少しためらったが、海に促され、ため息を一つ吐いて、再び喋りだした。

「…そいつ等の中に川越って名乗る奴がいたそうだ。」

第9話 話終わり?ごめん聞いてなかった。もっかい言って? (後編)

「ハアッ…ハアッ…」

海は川越に呼ばれた場所へ走っていた。

(クソッ…!俺のせいで…)

20分前。

「……川越?なんで奴が…」

海には川越が綾の友達を殴る理由がわからなかった。接点が無い。

耕一は難しい顔をしながら口を開く。

「…狙いは、海。おまえだ。」

海の瞳孔が開いた。

綾が不安そうな顔を浮かべる。

「志穂ちゃん……志穂ちゃんは!?!」

志穂とは綾の友達の名前だ。

綾は耕一に掴み掛からんばかりに問う。

「……………海。」

耕一は海の方へ歩き、一枚の紙を差し出した。

海は黙って受け取り、紙に書かれている事を読んだ。

「おまえのダチは拉致った。港の第三倉庫に一人で来い。一人じゃない時は女を刺す……。チツ……。丁寧に地図まで書きやがって……」

綾はショックを隠しきれずに、手で口をおさえていた。

「行くしかねえか……」

「俺もついていく。」

「一人で来いって書いてあんだろ？あいつなら本当に刺しそうだ。それに、あいつなんて一人で十分だ。」

海はそう言いながら余裕の笑みを見せた。

「そうか……そうだな。……………気を付けろよ。」

「ああ。」

海が歩きだそうとした時、綾が海を引き止めた。

「海君……………」

「……………なんだ？続きなら後でって言っただろ？」

「ちがうよ……！……………気を付けてね……。」

「ああ……綾とキスするまでは死ねねえよ。」

「もうっ！」

海が再び歩きだす。

その顔に余裕の表情は無かった。

港の倉庫。

志穂を中心に川越達が円を作っていた。

志穂は口をガムテープで塞がれ、手に手錠をかけられて柱に繋がれている。

一人の男が川越に話し掛ける。

「あいつ、本当に一人で来ますかね？」

川越は表情を変えないまま答える。

「来るよ。あの野郎は自分が強いと思ってるからな。多分武器も持ってる。こないだろ。」

川越の口が釣り上がる。

「…それに、あいつを苦しめるのが目的だからな。一人じゃなかったらマジで刺すぜ？」

川越はそう言いながら、志穂を見る。

志穂は俯きながら、肩を震わせている。

「海君を信じようぜ？」

その時、倉庫のドアが開く重たい音がした。

倉庫にいた全員がドアに注目する。

「…ほら、想像通り…。」

ドアに立つ銀髪でツイストパーマの青年が口を開く。

「最初にやられてえのは、どいつだ？」

30分後　。

「ハアッハアッ…。」

海は手を膝について、肩で息をしている。

「マジかよ……。」

川越は絶句している。

倉庫で立っているのは、海と川越だけだ。

残りの連中は地面に突っ伏し、意識さえ無いようだ。

「ハアハア……てめえで最後だ……」

海がゆっくり川越に向かっていく。

「クツ……」

川越は後ずさりする。

ガラガラ…

ドアの開く音に、二人が振り向く。

「ヘッ…俺が最後じゃないみたいだな？」

ドアからは川越の仲間が10人ほど入ってきた。

「全く、ワラワラとたかって来やがって…」

海は苦笑しながら、ドアの前にいる連中に向き直った。

「……来いよ。」

海がそう言った瞬間、連中が一斉に海に向かってくる。

「……泣けるぜ…」

バキッ！

。

「ククク……ハハッ！」

川越の笑い声が倉庫に響く。

地面には海が倒れている。

「……………」

「おいおい、死んだんじゃねえの？」

川越の仲間が川越に話し掛ける。

「かもな。ハハッ」

川越が海に近付き、海の髪を掴む。

その髪の色は、海の血で赤く染まっていた。

「ヘッ、やっぱり頭に警棒はまらなかったか？」

川越は海の髪を離し、海は顔から地面に落ちた。

「…つまんねえな。オイ、行こうぜ。」

川越と川越の仲間が、地面に倒れている連中を担いで倉庫のドアに向かう。

「んだよ、つまんねえな。」

「海も意外と弱かったな。」

「それは俺等が道具使ったからじゃね？」

「ハハッ！まあな。」

「……オイ。」

背後に聞こえる声に川越の仲間達が振り返る。

みんな絶句して、声も出ないようだ。

川越はゆっくり振り返る。

（海の声……いや、ありえねえ……あいつは完全にトンドた……。頭にモロに入っただぞ……？）

川越はその光景に鳥肌が立つ。

「……ありえねえ……」

そこには海が立っていた。

「……まだだ……まだ死んじやいねえよ……。」

海は意識がおぼろなのか、足がふらついている。

「……なんだよ……フラフラじゃねえかよ……」

しかしその言葉とは裏腹に、川越の顔には恐怖が浮かんでいた。

「なんだよ……？ 恐えのか……？」

海は嘲笑う様に鼻で笑う。

「……やっちまえ！ 殺っちまえ！！」

川越は正気を失った様だ。海を指差しながら狂ったように叫ぶ。

川越の仲間がそれぞれの武器を強く握り締め、海に走っていく。

その瞬間、ドアが開く音が倉庫に響いた。

「待たせたね！ 海君っ！ ボクに任せなさい！」

その声に海に向かっていた連中の動きが止まる。

「グガッ」

誰かが奇声を発したかと思うと、川越の隣にいた奴が3メートルほど吹っ飛び、ピクリとも動かなくなった。

「オラア！ 耕一様をなめんなよ！」

（……兄貴……）

耕一の暴れ回る姿を見ながら、地面に崩れていった。

耕一が次々と川越の仲間を薙ぎ倒していく。
やがて、残りは川越だけとなった。

「さあ、おまえの番だぜ？」

耕一は全く疲労を感じていない。

「……………っ」

川越は肩を震わせながら黙っている。

「…ハア、急にチーム抜けるなんて言うからおかしいと思った…
やっぱりこんな事考えてたか……………」

「…うるせえ……………」

川越が耕一を睨み付ける。

「てめえらの仲良しこよしごっこにはもう飽き飽きなんだよ！俺は
そんな事するためにギャングになったんじゃない！俺は俺でチー
ム作る。最初の相手は、耕一さん。あんただ！」

川越が地面に落ちてる警棒を拾う。

「ごっこじゃねえよ。」

「！」

「俺達は本当に仲良しこよしなんだよ。おまえだってそうだ。仲間
だって思ってる。」

「…この期に及んでまだ綺麗事言ってるのか？てめえのそう言う所が」

川越が警棒を振り上げながら耕一に向かっていく。

「嫌いなんだよ！！」

ゴッ！

「！」

倉庫に鈍い音が響く。

耕一は避ける様子もなく警棒を頭で受けた。
頭から血が滲んできている。

「…なんでよけねえ？」

「仲間を傷付ける奴のなんて効かねえんだよ。」

耕一が拳を握る。

「おまえにとつちや綺麗事かもしんねえ、けどな。」

耕一が拳を思いっきり振り上げる。

「俺等にはその綺麗事がすげえ大事なんだよ。」

バキッ

「…ちくしょう…」

川越は人形のように脱力しながら、地面に崩れていった。

「……綺麗事か…」

耕一は釈然としない顔をしていた。

（取り敢えずこいつら起こさなきゃな。）

海はうつ伏せに倒れたまま動かない。

志保はいつの間にか気を失っていた。

耕一は志保の拘束を外し、口のテープを外した。

「おい、志保ちゃん。起きないとお兄さんが食べちゃうぞー」

「……ん…」

「……ハアハア…グヘッ」

耕一が志保に顔を近付ける。

「…ん…？きゃあっ！」

バチーン！

（あ…ダメ…意識が…）

「あ、氷室君のお兄さん！？」

志保は耕一を殴ったあとに、やっと状況を理解した。

耕一は志保にこの状況を説明した。すると志保は、

「氷室君もお兄さんも強いんですね！あ、私は一人で帰れますから！」

と言つて、さつさと倉庫を出ていった。

「あつ…いちゃいちゃしながら帰ろうと思ったのに…」

耕一は肩を落としながら、海の方に向かった。

「おい、海くーん。起きないとお兄さんが食べちゃうぞー…。…てか俺は変態か？」

その瞬間、耕一は腹に熱い物を感じた。途端にそれは激痛に変わる。耕一は腹を見ると、ナイフが突き刺さっていた。

背後から川越の声が聞こえる。

「俺は…綺麗事なんて信じねえ…」

川越はそれだけ言うと、再び地面に倒れた。

「クツ…ぐあつ」

耕一がナイフを抜く。

腹からは血があふれ出てくる。

（おいおい…マジ…かよ…）

耕一は地面に倒れながら、意識が遠くなっていっただ。

「……………」

海が頭を押さえながら、まだはつきりしない意識で立ち上がり、辺りを見回す。

（そうだ…兄貴は…）

耕一は倉庫の壁に寄り掛かっていた。

「兄貴！おい！」

「…やっと起きたか。」

耕一はため息をつきながら口を開く。

海は安堵の表情を浮かべる。

「…死んだのかと思ったぜ……………」

「んなわけねえだろ。あーでも疲れちったなー。もう一步も歩けねーなー。あつそういえば、倉庫の外に台車があつたなー。」

「…何が言いてえ？」

「運んで？」

海岸線。

そこに耕一が乗っている台車を、重たそうに引く海の姿があった。

「海君もつとはやくー」

「うるせえ！」

兄弟はいつもの様に茶化し合っている。

いや、いつも通りじゃない。

耕一は視界が歪み始めている。台車には血だまりができていた。

「そういえば、さっきおまえ綾ちゃんとキスしようとしてたの？」

「…ああ。」

「マア、おませさん！今日はお赤飯ね！（てめーこの野郎！俺だつてまだなのによー！）」

「茶化すなよ！兄貴だつてあんだろ？」

「ああ、まあな。（ねーよ！あるわけねえだろ！バカ！ちくしょう！）」

「…なあ、兄貴。」

「なんでちゅかー？」

「真面目に聞け！…俺…兄貴がいて本当に良かったって思ってる。」

「……。」

「さつき、ガキの頃の夢みたんだ。」

「ああ、おまえはいつつ俺にくつついてきてたな。ノミかつつうの！」

「うるせえ！でも、そんな頃から兄貴は俺の憧れだった。」

「……………」

「まだまだ兄貴には負けるけど、いつか勝ってやるからな。」

「かてんのかよ？この俺様に！」

「言つたな！？」

耕一は仰向けに寝て、空を見上げた。
血はあまり出なくなってきた。

「…もう勝ってるよ」

「え…？」

「おまえの年の頃にはそんなに強くなかったもん。力も心もな。」

「…本当か？」

「ああ。だから、もう俺は必要ないな。」

耕一は自嘲気味に笑う。
視界が光に包まれていく。

「は？何言つてんだよ？兄貴がいるから…」

「……………」

「兄貴がいるから…強くなれんだぜ？」

ああ…俺もそうだよ。

おまえがいるから…………守るもんがあるから強くなれたんだ。

「兄貴がいなかったらまだまだ甘ちゃんだよ。」

俺もそうさ。

おまえがいなかったらただの喧嘩好きの不良だよ。

でも…俺はもうダメみたいだ…。

まだ…おまえと茶化し合いたかった…。

まだ…おまえの強くなつてく姿を見たかった…。

海…おまえが弟で…ほんとうによかった…

…俺の人生も…中々悪くなかったな……………

「…おい、聞いてんのかよ？人がくせえ事言つてんのに……………」

海は振り向くと、思わずてすりを落としてしまった。台車には血だまりができていた。

「あに…き……？」

海が耕一へと歩み寄る。

耕一は幸せそうに笑っていた。

幸せそうに

目を閉じて……

「おい…冗談だろ…？」

空からは、夏のなまぬるい雨が降ってきていた。
その雨が血を洗い流していく。

「おい、兄貴。寝てないで早く帰ろうぜ？雨が降ってきちゃった。」

海が耕一に問い掛ける。

耕一は答える様子はなかった。

「風邪引くよ。台車なんかいいからさ。帰ろうよ。早く…かえ…
う…よ…」

耕一は笑ったまま表情を変えない。

「何笑ってんだよ…何が楽しいんだよ…！ちくしゅう…ちくしゅう
オオオ！！」

雨の音が泣き声をかき消していく。
雨は、止みそうになかった。

第10話 海に説教する俺マジはんばねえ（最後）

「……………」

俺は海にかける言葉が無かった。

海は俯いたままだ。

「その後、川越は捕まった。当分出てこないそうだ。」

「綾ちゃんとは？」

「葬式に来てたな。でも、兄貴が死んだ日から話してねえ。」

だからこっちに来たのか……

海が嘲るように笑いだした。

「クク…笑えんだろ？俺は兄貴に勝てないままだ…。一生な…」

「…そうだな。耕一さんがいても、今のおまえじゃ絶対勝てねえよ。」

「

海は驚きの表情のまま、俺を睨み付けた。

俺はかまわずに話し続ける。

「テメーは耕一さんが死んだ日からずっと足踏みしたままじゃねえか。そんな風になんないようにおまえに“俺に勝ってる”って言うたんじゃねえのか？」

「…わかってるよ…そんな事…。わかってても悲しいもんは悲しいんだよ！結局兄貴がいなかったら俺は一人なんだよ！」

「ちげえだろ？」

海が再び黙り込む。

「おまえが一人なのは、人がおまえを避けてんじゃなくて、おまえが人を避けてんじゃねえのか？綾ちゃんだってそばに居たじゃねえか。同情とかじゃなくて、本気で一緒に悲しんでくれたんじゃねえのかよ？」

「…うるせえ…うるせえ！」

海が俺に殴りかかる。

バキッ！

俺は避けずに顔に拳を受けた。

「！」

「なんもわかつちやいねえな。」

俺はそう言いながら海の横ッ面を思いっきり殴った。

「グハッ！」

海は衝撃で地面につまずいた。

「オラ、来いよ。体で分からしてやるよ。」

海は俺を睨み付けながら、立ち上がった。

「…なめんじゃねえ…」

。

俺は拳を振り上げる。

「オラア！」

バキッ！

「クッ！」

海はフラフラになりながら持ちこたえた。

今度は海が拳を振り上げる。

「ッラア！」

バキッ！

「グッ！」

俺は倒れそうになるのをなんとか持ちこたえ、海に笑いかける。

「フツ、そんなモンかよ?」

「…うるせえよ。」

「今のおまえじゃ勝てねえよ。仲間がいるくせに一人ぼっち気取りやがって。」

「仲間なんていねえ。」

「いるじゃねえか。綾ちゃんとか、クラスの奴等とか、それに、俺も…」

「……………!」

「俺が勝つたら足踏みしてねーでちゃんと歩きやがれ。」

俺は拳に力を込める。

「…ああ、勝つたらな…。」

海の顔に狙いを定める。

「じゃ、歩け。」

バキッ!

海は地面に崩れながら、何かが吹っ切れたような顔をしていた。

。

『おまえは本当俺がいないとダメな。』

ああ、兄貴。

でも、もう大丈夫だ。

『みたいだな。高校生で兄貴ばなれかよ。遅いねー。ん？高一で耕一ばなれ……うまい！あ、でも海は高二か。チッ』

……。

『あつ、やめて。その視線。』

なんか、兄貴と政人って似てんな。

『かもな。じゃあ、今度から政人君がおまえの兄貴だな！』

ハハッ、それは嫌だな！

『そうだ、綾ちゃんにもちゃんと謝れよ！』

…わかってる。

『ん？綾に謝れ……うまい！はっはっは！』

……。

『……いめん。』

……本当にこれでお別れだな。

『ああ……。でもいつでも見守ってやるよ。』

フツ、ノミかつつの。

『おっ！言うねー！』

……またな。そっちにいったらタイマンだからな。

『ハハッ、おまえがくる時は寿命だよ。勝負になんないね。』

フツ……じゃあな、兄貴。

『じゃーぬーん、わが弟よ。』

最後まで真面目に言えっ！

。

「……………う…っ」

あ、起きた。

今、俺と海は俺のアパートにいる。

さすがにほっぽつとくのは可哀相だったので、俺は海を担いできた。

「……っは」

「俺んち。取り敢えず風邪引きそうだったから、服は俺のと取り替えたぜ。あーあ、おまえが女だったら、素敵なシチュエーションだったのに……」

「余計なお世話だ。」

「まっいいや、取り敢えずなんか飲むか。」

俺はそう言つて冷蔵庫に向かい、扉をあける。

「……政人。」

「なーにー？」

「……俺……綾に謝るよ……」

「おっ！男だねー！じゃあ、気合い入れるために今日は飲みますか！」

「飲むつて、何を？」

「男の飲み物つて言ったらこれっしょ！」

俺は日本酒を持ちながら言った。
海は呆れた顔をしている。

「おまえな……」

「えっ？なに？まさか海君お酒飲めないの！？」

海の眉が一瞬釣り上がる。

「…上等…飲み比べだ。」

「なんだ？俺に勝てっと思ってんのか？」

その夜、俺達は鬼神の如く飲みまくった。

そして鬼神の如く吐きまくったのも、言うまでもない。

第10話 海に説教する俺マジはんぱねえ（最後）（後書き）

話が長引いてしまつて、申し訳ありません。
ちゃんとコメディーです！

次話からはち

第11話 普通気取ってるけど、実は頭痛いんですよ・問題発生編

ジュージュー…

…ん？なんだ？この音…あ…いい匂い…

「おい、起きろ。」

だれかの声がする……

ユサユサ…

だれかが俺を起こそうとしているらしい。

そうだ。俺は婚約1カ月の新婚夫婦。

どちらもまだ互いを気遣って、“おい、起きろ”なんてクールに気取ってしまう。わかった。起きるよ、マイ・ハニー。

あれ？でも“おい、起きろ”なんて女が言うか？
そうか、俺が女なんだ。

フフ。今起きるわ、マイ・ダーリン。

「早く…おきやがれ！」

ドゴッ

「フグッ」

…はっ！…は……。

俺のアパート。

そこにいるのは……。

「遅刻すんぞ。」

海。

。

パクパク…

「ったくよ、何寝呆けてんだか…」

パクパク…

「うるせえ。あ、これうまいな。」

俺と海はテーブルに向かいに座って朝食を食べている。

朝食はこいつが作ったらしい。

「ああー食った食った！」

「ほらよ。」

海はそう言いながら、俺のテーブルの前にコーヒーを置いた。

「おまえ……お嫁にいけんぞ。」

「うるせえ。」

しかし、久しぶりにまったりした朝だな。

俺はコーヒーを飲みながら食後の一服を始める。

ふと、壁掛け時計を見る。

「9時半……って遅刻じゃねえかー!!」

「あ……」

「あ……じゃねえよ!!遅刻ばっかで俺もう単位がやべんだよ!俺が中退したら“こうこうせい”じゃなくて“ぷーたろー”だぞ!!」
「ただけダメな主人公だよ!!」

「お、おう。じゃあ行くか。」

俺は制服に着替え（海はもう着替えていた）、アパートの階段を降りて、駐輪場まで走った。

「って、あー!!原チャリ壊れてんだった!!」

電車には乗りたくねえし、どうしようっ……

「……おい、俺の家に行くぞ。」

「は？なんで？」

「いいから。」

。

「これは……」

俺は目の前の“モノ”に絶句した。

「どうだ？」

海は自慢げな顔をしている。

俺の目の前にあるもの。

それはチャチな原チャリなんかじゃなかった。

「ゼファー……じゃん。……どうしたの！？これ！？」

「兄貴のだ。俺乗れねえからよ。おまえ乗れ。」

海はそう言って、キーを投げ付けた。

俺は震える手で、単車にキーを差し込み、右に回した。

恐る恐るセルを押す。

キュルッブォンブォン！

おおー！セル一発じゃねえか！

俺は一度、道路に出してシートにまたがった。

海はケツにまたがる。

「しゃー！行くぜ！」

俺は速を上げ、クラッチを放し、アクセルをふかす。

「なっ…はやっ…」

「オラア！政人様が通るぜー！赤無視上等だぜー！」

「おい。信号は守れ。」

「うん、わかった。」

。

昼休み。

俺はいつも通り、屋上で弁当をむさばっていた。

海の單車のおかげでなんとか2限に間に合った。
それにしてもあのゼファアはえーな。多分いろいろいじってんだろ
う。

あれに可愛い女の娘をケツに乗せて……

ブオーン！

「きゃあ！政人君速いよお！」

「大丈夫だ！しっかり掴まってな！」

「うん！わかったっ！」

むぎゅっ……

「……………」

「鼻血出てますよー？」

「うおーいっ！ー！」

里奈かよ……。こいついつつも俺の妄想を邪魔しやがって……

「ねえねえ！政人知ってる？綾と氷室君やっぱり付き合ってたよ！さっき一緒にご飯食べてたよ。」

「…ふーん。」

あいつ謝ったのか。

俺との約束は忘れてなかったみたいだな。

「ふーんって。まさか政人知ってたの！？」

「まあな。」

「んだよ。ケツ、つまんねえな。」

「あれ？君キャラが違うよ？んな事より、なんでいっつも俺ん所来るんだよ？おまえのダチと食べよ。」

「そっ…それは……」

…顔が真っ赤だ。

うつむいちゃったぞ。

ポケットに手を入れて…

醤油のボトルを取り出して……って、え？

バシヤア！

「うわア！おまえ俺の弁当に何してんだ！」

「うるさい！政人なんて日本の心を思い出せばいいんだ！」

「意味わかんねーよ！醤油に漬けていいのは刺身だけって板前さんに教えてもらわなかったの！？」

ズムッ

「グフッ」

ドサ…

「ふんっ」

里奈は俺にボディブローを放ったあと、息を荒くして屋上を出ていった。

り…理不尽だ…。

俺は起き上がって、自分の弁当を見た。

おいおい…弁当の容器なみなみにブツかかってるよ……
醤油のボトルなんてどうやって持ち歩いてんだよ…？あいつ4次元ポケットでも持ってるのか？

……4次元と異次元って何が違うんだろ？

放課後

。

キンカーンぬって…

終わりのチャイムだ。コマーシャルじゃない。

「帰ってよし…皆の者、用心せい。」

先生だ。武士じゃない。

うし、帰りますか。

俺はカバンを持って席を立った。

「おい、政人。」

隣の席の海が話し掛ける。

「単車。俺は乗れないんだからな。」

「おお、そうだった。今日は単車で来たんだった。」

この学校は許可さえ貰えばバイク通学できる。
俺はアパートから学校までの距離が遠いのを理由に許可を貰っている。

単車は学校の駐輪場に置いていた。

置いていた…はずなのに…

「…ない。」

海が啞然としながら、それだけ言った。

「ないな。」

「なんでだ…？」

「俺に聞くな。」

単車が置いてあったはずの所に紙がテープで貼ってあった。
海がそれを読む。

「ゼファ―は頂いた。返して欲しくば、今夜10時に橋河峠に来い。
by・橋河ライダーズ……ってふざけんなー!!」

橋河峠（はしかわとうげ。通称ハゲ。てか、通称は今俺が名付けた。
どうだ？ナウいだろう？……ごめんなさい…）は地元で有名なバイク
限定の峠だ。

なぜバイク限定かと言うと、道が狭くて車2台も横に並べないのだ。
さらに、バイクの走り屋の方が権力が上らしい。だから車の走り屋
は近寄らない。昼も夜もバイクの走り屋しかいないのだ。

橋河ライダーズというのは、橋河峠で不動のナンバー1チーム。
不動の理由は汚いテを使うからだ。と、クラスメイトの走り屋が言
っていた。

「てか、なんでパクられたんだ？ちゃんとキーだって掛け……あ…
…」

「てーめえー!!」

バキッ

「こ…こんなばっか……」

ドサ…

。

夜の橋河峠。

その近くのパーキングエリア。

そこには走り屋達、それを観戦するギャラリイなどがひしめく。

そこに一台の原付バイクが入ってきた。

原付バイクには二人乗っている。

一人、運転している人物は、暗い茶髪を適当に伸ばしている。パンツは太めのダメージデニムに白いミドルカットのスニーカー。上は3本の白いラインの入った黒のジャージにインナーは黒いサマー生地のロングTシャツ。

表情はともやる気がなさそうだ。

後ろの人物は、白髪のツイストパーマ。パンツは緑がかった太いデニムにティンバーランドのミドルカットを履いている。

上はジップの付いた黒のパーカーに、インナーは赤い無地のTシャツというシンプルな服装をしている。

顔は無表情だが、怒気のオーラを放っている。

周りのギャラリイ達が小声で話し合っている。

「あれが橋河ライダーズに目を付けられた奴等か…」

「なんか強制的にゼファーを賭けてるらしいよ。」

「うわー…かわいそう…」

「ねえねえ！二人ともかつこよくない!？」

「後ろの人なんてモデル並じゃん！」

「声かけてみようか!？」

。

ん?なんかギャラリーから熱い視線が…

「なあ、橋河ライダースって誰だ？」

「わからんよ。おい!!橋河ライダース出てこーい!!ゼファ―返せー!!」

……………あれ?出てこない。

「おい!出てこいよ!!おいって!!出てきてください。」

その時、ギャラリーの中から数人の男が出てきた。

一人のリーダーらしい奴が俺に話し掛ける。

「僕達が橋河ライダースだ。君達がゼファ―の持ち主だね。いやあ、ゼファ―が前から欲しくてね。」

海が原チャリから降りて、リーダーらしい男の前に立つ。

バキッ!

「あびやつ！」

あーあ、やつちゃった…

「オイ、単車はどこだ？」

「な、何をするんだ！君は！暴力はいけな…」

バキッ

「あそこにあります。」

リーダーらしい男の指差す先にゼファーが停めてあった。

あれ？でも…

「エンジン無いじゃん。」

「ふっふっふ……エンジンは抜かしてもらったよ。返して欲しくばはあっ」

バキヤッ！

「勝手にいじってんじゃねー！」

「ふっふっふ…暴力じゃ何も解決できないよ。返して欲しくばはあっ」

ドゴッ！

「早く返せ！」

「最後まで言わせてー！」

海の動きが止まる。

「ハアハア……返して欲しくば僕達にレースで勝つんだね！や……や
つと言えたぜ……」

バキッ

「何ガッツポーズして達成感に満ちた顔してんだ！？何も解決して
ねーんだよ！」

賭けレース？

パクられた単車取り戻しに來ただけなのに、変なことになってきた
な……

ん？ギャラリー達の中から女の娘が二人こっちにくるぞ？

……可愛いな……

女の子の中の一人が俺に話し掛けてきた。

「あのー」

「おお、どーした？」

女の子が近づいて小声でしゃべる。

「橋河ライダーズと賭けレースやるんですね？」

「いや、まだやるって決まったわけじゃ……」

「私達あの人たち嫌いなんです。応援するんで頑張ってくださいね！」

「うん！ボク賭けレースがんばる！」

「オイ……」

海が不機嫌な顔で俺を見る。

「まあまあ、いいじゃないの。」

「おっ、決まりだね。」

「おう！」

「……………」

海がため息をついている。諦めたみたいだな。

リーダーらしい男がしゃべりだす。

鼻血出てるけど大丈夫か？

「じゃあルールを説明するよ。2対2で勝負をする。まず、スタート地点は峠の一番下から。そこから上を目指し、頂上についたらパトナーに交代。そこからスタート地点まで行ってゴールだ。賭ける物は、君達はゼファー。あ、エンジンは僕達が所有している倉庫

にある。僕達はその倉庫の鍵。勝つたらなんでも好きな物を持って
いっていい。今回は君達が原付バイクだから僕達も原付バイクでい
くよ。」

え…？2対2…？

海の方を見る。

海は啞然としていた。

「おまえバイク乗れたっけ……？」

海は俺にゆっくり振り向き、首を横に振った。

「なあ、リーダーらしい男。1対1じゃ、だめ？」

「うーん、賭けレースの時はこのやりかたをするのが、この峠のル
ールだから……て言うかリーダーらしい男って何？僕の名前は……」

周りの音が遠退く。

あ。

無理だ。

負けた。

どうしよ。

「ねえ、リーダーらしい男。1対1にしてよ。」

「いやあ、もうこれは決まり事みたいなものだから。て言うかりー
ダーらしい男って何？僕の名前は……」

周りの音が遠退く。

「とにかく、僕達も原付バイクを用意してセッティングするから、
今から2時間後に集合だ。」

リーダーらしい男はそう言うと、さっさとどこかに行ってしまった。

海が不安気に俺に話し掛ける。

「…政人……どうする……？」

「ちくしょう！こうなったらヤケだ！2時間でおまえを乗れるように
する！原チャリも借りもんだから、俺のをクラスメイトの走り屋
に直してもらって、ついでに改造してもらおう！」

「お、おう……。」

「よし！決まり！おまえは峠で練習してろ！俺は改造してもらって
くる……」

「わ……わかった……でも、練習する原チャリがねえぞ………？」

「おーい……誰かこいつに原チャリ貸してやってー……！」

すると、

「はーい……！」

と、少なくとも10人くらいの女の子の声がした。

よし、これで何度こかしても大丈夫だな。

ハーレム状態の海を気にせず、俺は原チャリのアクセルを回し、このパーキングエリアを後にした。

でもやっぱりハーレム状態はむかつくから、綾ちゃんに言っところうと思う。

第12話 海！おまえの心の中は曇ドラ並にドロドロだな！・前半戦

橋河峠。時刻は12時。

スタート地点には海が原チャリにまたがっている。

ふう……なんとか間に合ったな。

俺の原チャリはフル改造して、100キロ近く出るようになった。

海も、原チャリを乗る姿はなんとか様になってる。

一応、奥の手も用意したし……。

色々不安要素はあるけど、もう後には戻れねえな。

俺は海の近くに行って、話し掛ける。

「おい、大丈夫か？」

「あ、ああ。大丈夫だ……。」

海は真つすぐ前を見たままだ。

……不安だ……。

リーダーらしい男が近づいてきた。

「僕達は上で待機だ。行こう。」

「ああ、わかった。……海。頼んだぞ？」

「……ああ……。」

不安だ…。

。

政人が俺を不安気に見つめている。

「海……頼んだぞ？」

「……ああ……。」

自分でも驚くほど情けない声だ。

俺がそう言つと、政人は峠の上の交代地点に向かっていった。

隣の奴を見る。

そいつはフルフェイスをかぶっていて、表情は見えないが、余裕気に鼻歌を歌っていた。

クソ、むかつく野郎だな…一発ブン殴ってやろうか…

「はい、じゃあ12時10分にスタートです。」

このレースのレフェリーらしい奴が、俺と隣の奴、ギャラリー達に知らせた。

ハア…なんでこんな事になってんだ……？

俺は原チャリの上で脱力感と迫りくる緊張感を感じた。
それを紛らわせるために、煙草に火をつける。
ふと、ギャラリー達の方を見ると見知った人影が見えた。

…あれは…綾……？
いや…いるわけねえか…。

「はい、はじめます。」

「早っ！まだそんなにたってねえだろ！」

「ストーリーの進行上、短縮されました。はい、位置について。」

「……………」

……やってらんねえ。

俺は煙草を捨て、スタート位置についた。

鼓動が少しづつ高まっていく。

「5秒前！」

レフェリーが手を上げる。

ギャラリー達の大声が聞こえる。

「4!」

「海くんっ!」

「!」

「3!」

なんでいんだよ…。

「2!」

「がんばれー!」

「2!」

俺は声を出さずに、左手を上げた。

「1!」

「…いくぜ。」

「スタート!」

ブォーン!

アクセルを回し、原チャリのマフラーから白煙を撒き散らす。

スタート地点から、しばらくは直線だ。

周りの景色がどんどん速くなっていく。

メーターを見ると、針は軽く60を振り切っていた。

…こわいんだけど…。

「なあっこれ速くない！？速すぎじゃない！？どーやって止めんの！？」

「いや、そのブレーキを握るんだよ……」

俺はブレーキを握った。

すると、速度はみるみる下がっていき、メーターの針は30を下回った。

「ふう……」

「いや、ふうじゃねえよ！！何やってんの！？」

「ば…バカヤロー、俺は道路交通法を守ってるだけだ。」

「え！？何こいつ！レースなのに道路交通法持ち出したよ！」

「おっと、こっちは反対車線だな。」

ブォー……

「……って何だよこれ！もうレースじゃねえよ！！ツーリングだよ！」

「あつ、俺無免だしノーヘルだよ。」

ブオー……

「気付くのおせえよ！！」

…うん。大体コツは掴めてきたな。

いや、俺コツ掴もうとただけだから。びびってないから。

「俺はアクセルを最大まで回す。すると、それに応じるかのように速度はみるみる上がってゆく。周りは風の音しかない。一人の世界。いや、一人じゃない。俺と言う存在さえも風に」

「説明なげーしうぜーし速度上がってねえよ！！」

お、でもマジで慣れてきた。

「るせえ。これから上げんだよ。」

俺はアクセルを最大まで回す。原チャリは急速に速度が上がる。

「なっ、だましたな！」

フルフェの奴も速度を上げる。

やっと一つ目の右カーブが見えてきた。

「ついてこれんのか？この俺によ。」

俺は速度を下げずにカーブを進む。

「なっ……！」

ぎりぎりまで体重を内側に倒す。

「ウオオ！」

俺は更にアクセルを回す。メーターはとつくに振り切れていた。

カーブを抜けると、また長い直線が見える。

後ろからフルフェの奴が追い掛けてくる。

「んだ、よく追い掛けてこれたな。」

俺はバカにするようにフルフェに話し掛ける。

「君、速いね。本気で勝負してみたくなつた。」

フルフェはそう言うと、両手を離し、フルフェを取ろうとする。

「おっ、おい！そんな事したらあぶねえぞ！てかフルフェ取ったらフルフェって呼べねえじゃんかよ……！」

……なんて呼ぼう……。

「何言ってるの？僕はフルフェって名前じゃないし。それにフルフェイス取ったらすごいんだから。何ていうの？こっ、脱いだらすごいんですみたいな……」

「何が言いた……い……」

俺はそいつの顔に驚いた。

お……おんな……？

しかも中々可愛い。

……いや！違う！違うぜ？俺は客観的に物を言っているわけであって、誰に言い訳してんだ？綾はここにはいねえんだし。

その時、どこからともなく、紙切れが俺の前を横切り、原チャリのポケットに不自然に入った。

……？

俺は紙切れを取出す。

紙切れには文字が書いてあり、俺はそれを読む。

浮気……シタラ……カイクンノ……スネヲ中心ニ

……こわっ！

てか中心になんだよ！すげえ気になるんだけど！

すると、俺の心を読むように、また紙切れが飛んできた。
俺はそれを恐る恐る読む。

毛を5／＼14本抜いておきます。

地味だよ！！しかも曖昧だよ！

と言うか“晩ご飯は冷蔵庫に入れておきます”みたいなノリで書く
んじゃないえ！

…あとで謝つとこつ。

「おい、大丈夫かー？」

…！そうだ、今、俺はこいつと勝負してんだ。

「女だからって手加減はしねえぞ。」

「おー、大体僕の顔見ると男は手加減するのに君は差別しないんだ
ね。」

「…んな奴と俺を一緒にすんな。」

ちげえよ。こえーんだよ。背後からすげえ殺気を感じんだよ。

そうこうしている間に、長い直線を抜け、カーブ続きの所が見えて
きた。ここは、ヘアピンカーブが3回続く一番難しい所だ。

「これを越えたら最後の直線で交代か。」

「ここで前を行った奴が勝利だね。僕はヘアピンの女王と言われる
んだよ？」

「フン、言ってる。フルフェを取ったフルフェ。」

「ネーミングセンスわりーよ！なんかもう顔自体がフルフェみたいじゃん！」

そいつはショートカットの髪をなびかせ、俺を指差す。

「僕の名前は水島ハル。今から君に勝つ乙女だ！」

「…フツ…つまんねーキメゼリフだな。」

俺もこいつに習い、指を差す。

「俺は氷室海。今からテメーに勝つ男、氷室海だ。」

「今自分の名前二回いったよね！？何！？演説気分！？」

90度の左カーブが近づく。

「しゃべんな。舌嚙むぜ。」

俺はいつきに車体を左に傾ける。

カーブを軽く抜けると、すぐに二つ目のヘアピンカーブが見えてくる。

「ねえ！演説気分！？演説気分なの！？答えるよ！」

「もうしつけーよ！そんなに俺悪い事言った！？」

俺はブレーキを握り、ゆっくり曲がっていく。

一つ目を抜けると、二つ目までは少し距離がある。
カーブを抜けた瞬間にアクセルを回し速度を上げる。

「演説気分なんだね！！本当ありえない！僕って君のなんなの！？」

「テメーがなんなんだよ！！なんでテメーにそこまで言われなきゃいけないの！？演説気分をどう解釈すればそんな反応がでkindだよ
！」

ヘアピンが近付き、俺はブレーキを握る。

しかし、あいつは速度を下げなかった。

ぎりぎりまで近付き、ヘアピンの入り口付近でブレーキをにぎり、
アクセルを回す。

すると、昨日の雨で地面が濡れているせいか、後輪が面白いように
回る。

「……！……」

「しってる？これ、ドリフトって言うんだよ？」

水島は自慢気にニヤけると速度を上げた。

二つ目のカーブを俺が抜けると、あいつは余裕気に俺を待っていた。
ニヤつきながら俺の反応をまっている。

「ちくしょう…また一つ知識が増えちまった。」

「君って知識が増えると死ぬ病気でも持ってたの？」

三つ目、最後の右ヘアピンが見える。

「俺だって、できるさ。」

「え…？」

俺は速度を下げずにヘアピンに入る。

「たしかこうだよな。」体重を内側に寄せ、いつきに後輪のブレーキを握る。すぐにブレーキを離し、アクセルをフルスロットル。後輪のタイヤは、地面に食い付けずに回転する。

その後ハンドルを左に向ける。すると、車体は弧を描くように鋭く曲がっていく。

「これが“どりふと”だから。」

水島は啞然としている。

「き…君、何者…？」

俺はニヤつきながらアクセルを回す。

。

交代地点。

ギャラリー達がざわめく中、俺はスタート位置につきながら、原チャリのハンドルに顎を寄せ、脱力していた。

……おそくね？なんかやる気無くなってくるんだけど。

「なあ、リーダーらしい男。こんなに遅いもんなの？」

「そろそろくるところと思うけど……て言うかリーダーらしい男って何？僕の名前は……」

あー、周りの音が遠退く。

「ねえ、さっきから耳ふさぐのやめてくんない？」

「おお、体が勝手に。」

「ちゃんと聞いてくれよ？僕のなまえは」
「ワァー！！」

「…帰っていいですか？」

お！来たみたいだな。

先頭は……海だ！あいつ運転うまくなったな。

レフェリーが話し掛ける。

「パートナーが交代地点の白線を通った瞬間、スタートですよ。」

よし！こいや！

自然とハンドルに力が入る。

「政人——！！」

海が白線を抜ける。

「一発かましてやれ。」

「オウ！！」

俺はアクセルを最大まで回す。

「ブオー！！すごい、この風を切るように走るこの姿！」

「……………」

「私の中に、俺が帰ってくる……………」

「…何やってんの？」

「うん。あのね、キー回してなかったみたい。キヤツ恥ずかしっ」

「てーめえー！！」

バキッ

「デ…デシャヴ…」

第13話 は…鼻血が止まらん…ハアハア・後半戦

「おい！早くキーを回せ！」

「おっおっ！」

俺はキーを回し、セルを押す。

キュルツブオンブオン！

よし！改めて……

「行くぜ！」

ブオー！

ん？向こうに見えるのは…敵チームの奴か…。フルフェイスを取ってるぞ。

……女！？

しかもスゲー可愛い…。

……。

「おい！何原チャリ止めてんだよ！！」

海が交代地点から叫んでいる。

「いやあ、心のアイドリングが高まっちゃって。でもしってる？心のアイドリングは地球にも優しいんだぜ？」

「うまくなーよ！？なんか自慢気だけどうまくなーよ！？」

ブオー！

「君達はバカだね。はっはっは！」

やべ、リーダーらしい男が発しちゃった。
真面目にいけないとな。

ブオー！

オイオイ、これ相当速いぞ。
もう追いついたよ。

「なっ！なんて速さだ！すごすぎる！」

「だろ？まだまだ速度伸びるぜ？」

俺はそう言つとアクセルを回す。

原チャリの速度は更に上がっていく。

「へっ、どう…だ…」

リーダーらしい男は俺の真横にぴたりくっついてた。

「……………うわっ！キモいよ！」

「言うことそれ！？てか軽く傷つくからやめて！」

「…おまえの原チャリもはえーな…。」

「フン、まあね。原付バイクのセッティングなんて目を瞑ってでもできるよ。」

「なんだと！俺だって原チャリのセッティングなんて目を瞑ってベツトに寝そべり羊を数えながらでもできるぜ！？」

「それ寝てるよね！？セッティングもクソもねーよ！」

ヘアピンカーブの入り口が見えてくる。

速度を落とし、アウトコースにそれないように慎重に曲がっていく。

ヘアピンを抜け、速度を上げる。

すぐに次のヘアピンが見えてくる。

「フツ、君も中々やるようだね。だが、」

リーダーらしい男は速度を上げる。

「おっ…おまつ！」

リーダーらしい男はそのままヘアピンに入ってしまった。

入った瞬間に体重を内側に倒し、すぐに後輪ブレーキを以下省略。

リーダーらしい男はニヤニヤしている。

省略された事にも気付かずに。

「これがドリフトって言うんだよ?」

「へえー!後輪ブレーキを以下省略すればドリフトができるのか!」

「え?なんの話?」

「いや、知らない方がいい……」

俺は普通に曲がって、リーダーらしい男の後を追いつける。

最後のヘアピンが見えてくる。

俺は更に速度を上げる。

メーターは振り切れ、スピードメーターは激しく点滅する。
リーダーらしい男の横に並ぶ。

「フッ、君がドリフトできなきゃ、この勝負は僕の勝ちだね。」

「ドリフトはできねーけど」

ハンドルをアウトコースに向け、アウトコースぎりぎりまで近づく。

「なっ……!」

「こんな事はできるんだぜ。」

俺はガードレールの側面に足を付ける。

予想通り、昨日の雨でガードレールが濡れて足を付けてもツルツルと滑る。

ヘアピンに入る。

更に原チャリをガードレールに寄せ、ハンドルをいっきにインに向け、後輪ブレーキを一瞬握り、アクセルを回す。

「オオオ！」

ガガガガッ！

原チャリの車体がガードレールに擦れる。

遠心力で足の負担が、どんどん重くなる。

クッ！

俺は足を曲げないように、必死に堪える。

速度は60をオーバーしたままだ。

ヘアピンの中間地点を過ぎる。

今だっ！

俺は足に全力を注ぎ、ガードレールを思いっきり蹴った。

バランスを崩しそうになるが、なんとか堪える。

「これが、ドリフットンって奴だ。」

俺はそう言いながら振り返る。

「見た目は派手だけど、」

リーダーらしい男は俺のすぐ後ろにいた。

「ドリフトと速度は変わらないね。」

リーダーらしい男はそう言うと、速度を上げ、俺を追い抜く。

「はっはっは！速度は僕のバイクの方が上のようなね！」

チツ、まずいな…。

コースは90度カーブの後、緩いカーブがあるだけで速度はあっちの方が上となつては、勝ち目がない。

奥の手を使うか……。

俺は携帯を取出し、奥の手の人物に電話した。

「俺だ。作戦通り行くぞ。」

『おっけい！まっかしときなさい！』

「頼むぜ。里奈、綾ちゃん。」

フツ、これで俺の勝利も確実だな……。

。

最後のカーブの中間地点。

「あの一、里奈？」

「ん？何？」

里奈は何やら楽しそうだ。

「ホントにやるの……？」

「あつたり前じゃない！せっかく着たんだし。綾も似合ってるよ。」

里奈は茶化すように、綾に言う。

「なっ……！」

「シッ！……来たみたい。行くよっ！」

里奈が物陰から出る。

「私…応援しに来ただけなのに……」

綾は里奈につづく。

原付バイクで向かってくる男は驚嘆する。

「うっ…これは……！」

。

ブオー！

クソッ、すっかり見えなくなったな…。引っ掛かってくれているとい
いんだけど…

その時、一台の止まっているテールランプが見えた。

よし！作戦成功だ！

テールランプの所までいくと、リーダーらしい男は原チャリを放り
投げ、里奈と綾ちゃんを凝視している。

二人は、ナースの服装をしていた。

更にこのナース服は普通のナース服じゃない。

スカートの丈はぎりぎりまで短い。胸の部分はこれまたぎりぎり。
ほとんど放り投げているに近い。

こんな服装をした可愛い女が目の前に現れたら、男だったら確実に
凝視するだろう。

案の定、リーダーらしい男は俺に全く気付かずに、正座をしながら
二人を凝視している。

ハハハ！俺の作戦勝ちだな！

里奈は俺に向け、親指を立てた。

俺はそれを親指を立てて返す。

そしてゆっくり止まる。

さてさて……

俺はリーダーらしい男の隣に正座する。

ハアハア…見えそで見えない……。

この綾ちゃんの恥ずかしそうにしている姿……
たまらんですな！

「さっきの言葉言つて！さっきの言葉言つて！」

リーダーらしい男が叫ぶ。

綾ちゃんは恥ずかしそうにしながら口を開いた。

「と…止まらないと…お注射しちゃうぞ…」

ウオオオオオオ！！！！

俺はリーダーらしい男と、泣きながら固く握手をした。

「男冥利に尽きますね！」

「はい！まさにその通り！」

「てか、あんた達レースの途中じゃないの？」

「「……………あ。」」

。

ブオーー！

「くそ、レースなんてすっかり忘れてしまった。」

もつと見たかったな…

「フツ、これから最後の直線。ストレートで勝つのは僕さ。」

カッコつけてるけど鼻血出てるぞ。

「いや、勝つのは俺さ。」

「カッコつけてるけど鼻血出てるよ。」

……………はっ！

俺は鼻にティッシュを詰めながら言う。

「最後に笑うのは俺さ！」

俺はアクセルを最大まで回す。

次第にゴールが見えてきた。

「はっ！直線じゃ勝てないということを忘れたのか！」

「いや、忘れてねえよ。」

俺が一台分前に出る。

俺とリーダーらしい男の差が離れていく。

「だから勝つんだよ。」

「なっなぜ……！」

俺が先頭のまま、ゴールの白線を踏んだ。

ワァー！！

ギャラリー達が湧く。

リーダーらしい男はレースがおわった後も、ショックを隠しきれないようだ。

リーダーらしい男は地面に膝を付く。

「なっ…なぜなんだ……」

俺はリーダーらしい男に近付き、話し掛ける。

「フツ、原チャリを良くみてみな。」

リーダーらしい男は顔を上げ、自分の乗っていた原チャリを見る。

「これは…僕の原付じゃない……？」

「そう。それは俺の原チャリだ。さっき乗り間違えたのさ。それに
おまえは気付かないで乗ってたんだよ。」

「ひ…卑怯…」

「先に間違えたのはおまえだぜ？それに、卑怯なんて言ったらおまえ等の方が卑怯だろ？」

「くっ……負けた…。」

。

橋川ライダーズの倉庫。

俺は目の前の光景に歓喜した。
バイク類のパーツが腐る程あるのだ。

「これ、なんでも貰っていいのか…！」

「うん、いいけど……」

リーダーらしい男が俺たちを見て喋る。

「人数多くないか…？」

俺たちと言つのは、俺、海、里奈、綾だった。

そつ、俺はこれを理由に里奈と契約したのだ。

ちなみに二人は着替えた。ちょっともつたいないが…。

「まま、いいじゃないの。さっ、みんな。気張って行こうぜー!」

「「「「「おーー!!」「」「」「」

「ん? かつこ一つ多くない? あっ! 水島! なんで君まで!」

「まま、いいじゃないの。」

ん?

「おまえ橋川ライダーじゃないの?」

「ああ、違う違う。僕は助っ人なんだ。」

「助っ人?」

「そつ。このレースだけの助っ人。いつもはただの一人の乙女。橋川ライダーとは何の関係もないのさ。」

「ふーん。じゃあ、一緒に気張って探そうぜ!」

「おう!」

「もう好きにして…。」

。

「お、エンジンあった。」

「よかったね！」

海と綾ちゃんはゼファアのエンジンを見付け、ホッとしているようだ。

「おおっ！これは最新のマフラー！いただきまーす！」

水島は興奮しっ放しだ。

「ん、このパソコンもらうね。」

里奈は見境無く貰っているみたいだ…。

おっ！ゲーム機あんじゃない！ソフトもけっこうあるな。もーらい！

「あ…ああ……」

リーダーらしい男はずっとうなだれている。

「よし、こんなもんかな。じゃ、皆さん帰りますか。」

「待ってくれ……」

「ん？」

リーダーらしい男が立ち上がる。

「せめて、最後に言わせてくれ…リーダーらしい男じゃない。僕の名前は……」

はい、周りの音が遠退く。

「みんなして耳ふさぐんじゃないー!」

。

ガチャ…

「ただいまーっと。」

俺は靴を脱ぎ、部屋着に着替えながら壁掛時計を見た。

うわっ、もう3時じゃん……メシ食って寝よ…。

俺はご飯かわりにパンを食べていると、ふと、亀吉さんが視界に入った。

そっぴや、この頃、亀吉さんとの交流が無いな。

俺は水槽に近付き、亀吉さんを眺める。

……なんにも楽しくねえ……。

「亀吉さん。」

⌈
⋮
⌋

「今日はいろんな事があつたよ。」

⌈
⋮
⌋

「今日も楽しかったね。明日はもっと楽しいといいね。ねっ？ 亀吉さん。」

へけっ

! ! ! ! ! ! ! ! ! !

第14話 こっくりさんを“さん”付けしたら、こっくりさんさん。亀吉さん

それは、一つの出来事から始まった……。

昼休み。

俺は教室で自分の席につき、やる事もなく、まったりとしていた。

ふと、前の席にいる三人組の会話が耳に入る。

「なあなあ、久しぶりにさ、こっくりさんやんねえ？」

こっくりさん。

他の地域ではエンジェル様など、呼び方は違うらしい。

やり方は、みんな知っていると思うが、ひらがな50音、はい、いいえなどを書いた紙に10円玉を乗せ、その10円玉の上に指を乗せ、こっくりさんに質問をする。すると、10円玉は勝手に動きだし、質問に答える。まあ、大体そんな感じだ。

「なつかしー！小学校で、はやったなあ。」

「暇だし、やってみようぜ！」

お、なんか楽しそうだな。

「ヘイ、メーン！俺にもやらしてくれよ。」

「おお、政人。いいぜ。人数が多い方が楽しいしな！」

。

机の上に紙、その中心に10円玉を置き、机の周りを4人で取り囲む。

クラスメイトA（名前忘れた）が、重苦しい感じで喋りだす。

「じゃあ、はじめるぜ……」

クラスメイトB、C、そして俺が、ゆっくりと頷く。

10円玉の上に指を置く。

「こつくりさん、こつくりさん。おいでください」

すると、10円は“はい”と書いてある所に止まった。

「き……来たようだな……」

クラスメイトBがごくりと生唾を飲む。

「おい、だから質問する?」

「じゃあ、順番に行こうぜ。」

順番はクラスメイトA、B、C、俺の順になった。

「えーと、こつくりさんの好きな食べ物は何ですか?」

質問が地味だぞA！

10円玉が動きだす。

『あたりめ』

おやじくせーよー！

てかAはこっくりさんの好きな食べ物を知って得はあったのか！？

「次は俺だな。こほん、こっくりさんは巨乳と貧乳、どっちが好きですか？」

だから知ってどーすんだよ！？

『おおきさよりもかたがちがだいじだとおもっ』

胸について真剣に語りだしだぞ！

「だよな！俺もそうだよ！」

『かたちだよな（わら）』

すごいフレンドリーだよ！てか（わら）ってメール気分かよ！

「つ…次は僕か…」

こは緊張している様だ。

「こっくくりさんはははは」

緊張しすぎた！

『だいじょうぶ？』

心配されてるよ！…こっくりに心配されてる奴、始めて見たよ！

『ゆっくりしんこきゅうして？』

やさしい…！

「ぼ、僕ダメだ。政人君先にやって…。僕トイレ行ってくる…。」

あれ？これ途中で抜けちゃダメなんじゃないの？

『きをつけてね』

こいつホントにこっくりさんかよ…！

「次は政人だぜ？」

「お、おう。えーと、じゃあこっくりさん。俺はいつ彼女ができま
すか？」

うん。我ながら悲しい質問だ。でもこっくりさんって普通こつゆう
質問をするんだよね？

10円玉が動く。

『あ？しらねーよ』

えーっ！？なにそれ！？

「こっくりさんひどくない！？俺にだけひどくない！？」

『んだテメー。けんかうってんのか？』

すげーグレてる！

「おい政人。その質問はダメだよ。」

「こっくりさんに失礼だよ。こっくりさんがそんな事してるわけ
ないじゃん。」

おまえもちよつと失礼だぞ。

「わかったよ。こつくりさんごめんなさい。」

『ゆるすかよ。あたりめもってこいや』

こいつすげー態度でけえ！

「ああもう！こんなのやってられっか！」

俺はそういつて立ち上がり、机をぶちまけた。

『いたい！』

痛がった！こつくりさん痛がったよ！

「まっ、政人！ヤバいつて！」

「しるか！」

紙と１０円玉は机から落ちた……………かに見えた。
机は倒れている。

しかし、紙と１０円玉は不自然に机に張りついている。

「…なっ…なんで……………」

Aは机を立てる。

10円玉はひとりでに動きだす。

『まさとテメーやりやがったな？ やっちゃいけねえことやりやがったな？』

マジ切れしてる！

ちょっとまずいかも…。

AとBは後退りする。

『のろってやるかな。おれがほんきだしたらすごいんだかな！』

なんかあんまり恐くねーな……

「オイ、おまえホントに俺を呪えんのか？」

その時、教室のありとあらゆる物が浮かびだした。

「キヤーー！」

「うおーー！」

教室はパニック状態だ。

次々と生徒が教室から逃げていく。

「逃げるー!」

「ギャアアア!」

「恐いよー!」

「ワン!ワン!」

オイ!教室に犬が混じってるぞ!

『ハアハア...ど...どう...?わかってくれた?』

疲れてるよ!

すると、教室に浮いていたペンが動きだし、浮いていたノートに何かを書き出した。

『今日の夜、橋河病院の廃墟の1122号室にあたりめを持って来い。』

それは、地元で有名な幽霊スポットだった。

そう、橋河峠の近くだ。

「ハア...そこに持ってきやいいの?」

『うん!ホントたのむね!きょうだよ!?きょうだからね!』

10円玉がひとしきり動いた後、教室に浮いていた物は一斉に落ちて、動かなくなった。

「ハア…めんどくさ…」

「ま…政人…大丈夫かよ…？」

Aが心配そうに話し掛ける。

「ああ、大丈夫でしょ。」

でも、一人はちょっとやだな……。
みんなを誘ってみるか。

。

「「「やだ。」」」

海、克也、里奈が口をそろえて言う。

学校帰り。

俺達は駅前のハン・バーガーにいた。

「なんでだよー！」

「面倒だ。」

克也が小説を読みながら、本当にめんどくさそうに答える。

クツ、久しぶりに出てきたと思ったら、憎たらしい……。

「何？いつたらなんかくれんの？」

里奈はポテトを貪りながらだるそうに答える。

「おう！特別に俺の使用済みめんぼづくはあ！」

里奈が俺の顔にトレーを投げ付けた。

い……いたい……。

ふと、俺は海と目が合う。

「……………フツ。」

ほ……本当にこいつらは……。後は頼みの綱、綾ちゃんだけだな……。

後ろから、タイミングよく声が聞こえる。

「ごめんなさい！委員会が遅れちゃって！」

。

「ええー！そんな事があったんですか！？」

「ああ。それで、一人じゃ恐いからさ。一緒に来てくんないかな？」

綾ちゃんが興奮して立ち上がる。

「はい！そんな所に政人さん一人じゃ危ないです！」

「お…おい綾、あんたが行かなくても…」

「何言ってるの！海君も行くのよ！」

「……え？マジで？」

「みんな行くなら私も行こうかな！」

「お、じゃあ俺も。」

おお！綾ちゃんのおかげでみんな乗り気になったぞ！

「よっしゃー！じゃあこっくりさん退治に、行くぜー！」

「「「おー！」」」

里奈、克也、綾ちゃんが元気に答える。

「……え？マジで？」

。

「……で？…なんで俺しかいないのかな？」

「うん、海君。それはね、俺が聞きたいよ？」

橋河病院に来たのは海だけだった。

綾ちゃんはお親が承諾しないため。ま、そりゃそうだな。

克也と里奈は、今日中にやらなければいけない事があるからいいならしい。

残ったのは海だけ。

…なんスか？この状況。

綾ちゃんはおもかく里奈と克也はぜってー嘘だろ！
クソ…覚えてろよ…。

「まあいいや。海、行こうぜ。」

「…俺、帰るわ。」

「ちよつ、何言ってるんだよ！ここまで来て！」

「お…俺、用事思い出したわ！じゃ！」

こいつ、まさか…。

「おまえ、びびってるの？」

俺の言葉に、海の動きがとまる。

「は…はあ？何言ってるんだよ？俺は……」

「あ！海の後ろに！」

あれっ？海が消えた。

「草が生えてる。」

「びびらすんじゃねー!」

うおっ!俺の背後にいた!

「やっぱりびびってんじゃん。」

「ちっちゃがう!びびったんじゃねえ!……恐がつたんだ!」

「変わんねーよ!?何一つ変わってねーよ!?」

「……何やってんのー?」

「うおっ!……って、水島。なんでここにんだ?」

「いやー、バイクで峠に来たの忘れて、歩いて家まで帰っちゃってさー。」

ああ、この子頭が痛いんだ。

「あれ?また海がない……」

「君の後ろにいるよ。」

「……………オイ。」

「……はっ!……恐がつたんだからな!」

「だから変わんね……」

オオオオオ……

俺達はその声のする方向を向く。

今、たしかに病院の方からしたような……。

「君達、ここに行くの？やめといたほうがいいよ？この病院に肝試しでいった人が帰ってこない事とかもあるんだって。」

「そうか、じゃあやめよう。」

「待て待て待てーい。俺等にはやることがあんだろ？」

俺だつて、こんなとこいきたかねえよ。

「理由があるんだ？」

「ああ、実は……」

。

「ひえー、そんな事が！」

「で、だな。海と二人じゃ心許ないし、一緒についてきてくんないかな？」

なんか、さっきからRPGみたいだな。

水島は腕を組んだまま、しばらく考えた後、顔を上げ、手をたたいた。

「……わかった！君にはパーツをくれた恩もあるし、ついていくよ！」

水島が仲間になった！

「でも、何か起きたら、別料金頂きます。」

水島は悪徳業者だった！

「まあ、よろしくな。っと、名前言ってなかったな。俺は斎藤政人。政人でいいよ。」

「僕は水島ハル。ハルでいいよ。よろしくね。」

自己紹介もすんだし、そろそろ行きますか…。

「おい、海。行くぞ。」

「…月が綺麗だな……」

海は煙草を吸いながら、空を見上げたままだ。

「ここにもいいけどな。こういうのは、一人になった奴から狙われるんだぜ？」

「フン、しょうがねえな。ついて行ってやるか。」

ったく、こいつは……

。

ギイイイ……

病院に入る鉄の扉を開けると、錆びた蝶づかいのおとがする。

俺、ハル、海の順で入っていく。

病院、1階、入り口。

「真っ暗だな……」

「政人、ライトは？」

「ああ、ここにある。」

カチッ

ライトを点けると、廃墟らしく色々な物が散乱していた。あれ？でも……

「廃墟つて、普通扉は閉まってんのにここは開いてんだな。」

「いや？ここは扉に鍵がかかってるから通れないよ。……あれ？」

その瞬間、扉が勢い良く閉まった。

ボタン！

「…マジかよ…。」

行くしかねえみたいだな。

「よし。みんな、気を付けろよ。…あれ？海は？」

ライトを後ろに向けると、海は地面に突っ伏していた。

「……おい。」

「さっきので気を失ったみたいだね……。」

「…こいつは本当に…」

俺とハルは、取り敢えず海を壁にもたれかけさせて、ライトを一つ置いた。

「これでたぶん大丈夫だろ。」

俺は海を置き去りにして、2階へ進んだ。

2階、階段。

「うーん、1122号室ってどこなんだろ？1122って事は、1階って事だろ？ここのって、外から見た感じじゃ、5階立てくらいにしか見えなかったけど…」

「あ、それ聞いた事あるよ。なんでも、ここには、僕達がいる本棟から続く、離れの隔離病棟があるって。たぶんそこじゃないかな。」

「その隔離病棟の入り口はどこにあんだ？」

「さあ？」

「だよな…。」

こつくりの野郎……。人をこさせんならもつと詳しく書けつての…。

「うおっ！」

俺はバランスを崩し、横の壁に手をついた。

今、何かに掴まれたような……
ん？この壁……。

「どうしたの？」

「なんか、ここだけ壁が薄いような…。」

そこを叩いてみると、音がエコーする。

俺は近くに落ちていた松葉杖を手に取り、そこを叩く。すると、

「やっぱり……」

壁は薄いボードのみで、何度も叩くと、簡単に壁はこわれた。そして、そこには木造の通路が広がっていた。通路には窓は無く、ライトで照らしても、先は暗闇だ。

「ここだな。」

「うん…。」

ハルは俺の上着をぎゅーつと握っている。

…おお、なんか可愛いぞ…

ぎゅーつ

「……なんで、君は僕を抱き締めてるの?」

「え?まーまー。」

バキッ

「ごめんなさい。」

「早く行くよ!」

ハルはそう言うと、ずかずかと一人で歩いていく。

……さっきまで恐がってたくせに……。

。

隔離病棟。

「ここか。」

俺とハルはようやく1122号室に辿り着いた。

ボロボロの木造のドアに立つ。

「きてやったぜ！こつくりさんよ！」

ガラッ！

病室は個室らしい。

「むにゃ」

誰かの奇声が聞こえた。

ベットから！？

俺はライトをベットに向けた。

そこには、俺と同年くらいの青年が寝ていた。

こいつがこつくりさん…？

「うーん…もう食べられないよ……………」

おいおい、ベタな寝言だな。

「だから石は無理だつて……」

拷問されてんの!?

「え……? スイカ……? スイカなら食べれるよ……。え? ちよつ……違つ……」

うなされだしたぞ。

「そっちはケツだつてえええ!!」

拷問されてんの!?

「はっ……!!」

俺は青年と目が合う。

「あ、どーも。俺ごっくりさんです。」

俺とハルは、ほぼ同時にため息をついた。

。

「ハア……俺はこんな奴のために……」

「まあまあ政人。いいじゃねーの。」

「馴々しいんだよ！あんたホントにこっくりさん！？」

「そうだ。俺が全国こっくりさん連合会所属、あたりめ太郎だ。」

「明らかに今考えたら！？」

「てゆうか、こっくりさんって一人じゃないんだ……」

ハルはパイプ椅子に腰掛けて、くつろいでいる。
なんかもう座談会みたいだ。

「うん。全国にいっぱいいるよ。そりゃもう厳しい考査の後、よりすぐりのエリート達を選ばれるんだ。それが俺達、K O K K U R I S A N ！」

あたりめ太郎はベットに立ち、自分でかっこいいと思っているんだろ
う決めポーズをした。

「「……………」」

「K！O！K！けばあ！」

ゴンッ

「もういいから。」

あたりめ太郎は頭をさすりながら、ベットに座り、おとなしくなった。

「しかし、君達が来てくれてよかったよ。もう、暇で暇で……。」

こいつ、暇つぶしに俺をこんな所まで呼んだのか……。

「まあまあ、そんな恐い顔しないで。今日は飲みましょう!」

あたりめ太郎はそう言つと、ベットの下に手を潜り込ませ、ビンとコップを取り出した。

「おお、こ、これは幻の日本酒……。」

「ふふん、どうだ!」

「中々やるな!あたりめ太郎!」

「なんだその名前!バカにしてんのか!?」

「テメーが言つたんだろ!」

「まーまー、二人とも。」

ハルは俺達をなだめて、コップに酒を注いだ。

「まあ、いいか。」

「だな。」

「それじゃあ……」

「「「かんぱーい!」」」

。

チュンチュン…

んはっ!?

………ここは…病院の前?

うーん、うる覚えだが、ハルはほろ酔いでとっとと帰って、あたりめ太郎と朝まで飲み明かしたんだっけ?

俺は立ち上がり、病院を見上げる。

…こっくりさんって奴も悪くねえな。

「あっ!海のこと忘れてた!……まあ、いいか…」

俺はこの後、海に物凄く怒られた。相当怖い思いをしたらしい。

ちよつとむかつくので、綾ちゃんに、海が橋河峠でハーレム状態になった事を言った。海は相当怖い思いをしたらしい。

第15話 みんなー！海君の幽霊退治のお話が始まるよ！（外伝）（前書き）

外伝なので、読み飛ばしてもストーリーに支障はありません。笑い
もほとんどありません。

第15話 みんなー！海君の幽霊退治のお話が始まるよ！（外伝）

意識が覚醒していく。

ここは……。

意識ははつきりしてるのに視界は一向に見えない。

何やら息苦しく、冷たい空気に疑問を持ちながら、立ち上がろうとした時、何かを蹴ってしまった。

俺はそれを拾う。

これは…ライト……？

何も見えないので、確信は持てないが、形はライトのそれだった。

俺は手探りでスイッチらしき物を押す。

カチッ

すると、ライトに明かりが灯る。

ここは……まさか…。

記憶がよみがえる。

俺は、政人とハルの三人で病院に入った。
いつもは開かない筈のドアが開いていて、それに気付いた瞬間にドアが閉まった。

それで気を……。

そういえば二人は……。

「おーい！政人！ハルー！」

俺の声は暗闇に吸い込まれていく。

二人からの返事はない。

恐怖感が全身を侵していく。

そうだ！ドアは…

俺はドアの場所へ走り、鉄のドアノブを回す。

ガチャガチャッ

ガチャガチャッ……

ドアは無情にも開かなかった。

「クソッ！」

木が打ち付けてある窓を思いっきり蹴り飛ばす。

しかし、思ったよりも頑丈な木は、微動だにしなかった。

「…嘘だろ…」

俺は、消え入るような声しか出なかった。

なんとか気持ちを落ち着かせよう…。

俺は煙草を吸おうと、ポケットに手をつ込んだ。すると、ポケットに覚えの無い紙が入っていた。

これは……？

「501号室に来てください。五階からは決して後ろは振り向かないでください。」

これは…政人の書き置きか…？後ろは振り向くなっていうのが気になる……。

しかし、これで希望は持てた。501号室に行けば、政人達が待っているんだろう。

五階か…。エレベーターは使えるはずは無い。階段で行くしかないだろう…。

俺は辺りをライトで照らす。

「階段は…ここか…」

2階。

2階の踊り場には、不自然な通路があった。

少し覗き込むが、ライトを照らしても、先は暗く、何やらここより空気が重い。

行かないほうが良いな…。それに5階に行けば政人達がいるんだし。

俺は階段を上り、5階を目指した。

4階。

「ハア…ハア…」

さすがにここまで来ると息が上がるな……。

自分の息遣いしか聞こえないと、ますます孤独感が込み上げる。今、ここには俺一人しかない。そんな事を考えてしまう。

しかし、階段を上がる毎に、空気が重くなっていく。これはただの思い込みか？それとも……。書き置きの言葉を思い出す。

“5階からは決して後ろを振り向かないでください”

5階には、“なにか”が居るってのか……？

考えを巡らしているうちに、5階が見えてきた。

4階と5階の踊り場から上を見上げる。

5階には、髪の高い人が後向きで立っていた。

一気に鼓動が早くなる。

人である事はたしかだ。

しかしこんな所に、人がいる筈が無い。政人達でもないだろう。あ

いつらは髪が短い。

つまり、あれは人じゃない“ なにか ”だ。

ゆっくり階段を上がる。

本当なら今すぐ逃げ出したい。

が、5 階への道はここしかない。

第一、戻っても意味が無い。外には出れないのだから。

階段を上がる毎に、そいつの輪郭がはつきりしてくる。

そいつは前、俺のいる方向を向いていた。後向きだと勘違いしたのは、長い髪が見えたから。

しかし、それは違った。

そいつは髪を振り下ろし、だらんと首がすわっていた。服装はワンピース。

色は、元は白なのだろう。しかし、汚れで所々黒ずんでいる。

俺は、よく喧嘩をするから解った。

これは血が乾いた後だ。

そして、全身に力なく立ったまま、こちらに向いている。

これは夢か？まるであの映画だ。

しかし、この生々しい空気と、自分のリアルな息遣いが、現実である事を痛いほどに証明する。

そいつは動く気配がない。

俺はそのまま動かない事を祈りつつ、階段を進む。

そいつとの距離は、もう目と鼻の先だ。

そいつは全く微動だにせず、俺は無事にそいつを通り過ぎ、5階に辿り着いた。

俺は安堵の息を吐く。

さて、501号室はどこだ？

「待て」

背後からの、人間とは思えない声に、反射的に歩みが止まる。

背筋に冷たい物が走る。

ヒタ…

こっちに歩いてくる…！

ヒタ…ヒタ…

じょじょに音が近くなる。

“後ろを振り向くな”

その言葉で、俺はかろうじて前を向いている。

…走れ！

自分の体とは思えない程、足が思っように回らない。

俺は無我夢中で走る。

走っているうちに、行き止まりになってしまった。

どこは隠れられる場所は……！？

俺は隣の部屋を見る。

番号を見ると、そこは運良く、501号室だった。

俺は滑り込むようにそこに入ると、急いでドアを閉め、鍵を掛けた。

「ハア……」

再度、安堵の息を吐く。

俺は辺りを見回すためにライトを向ける。

あれ……？

ライトは、さっき無我夢中で走っている最中に落としてしまった様だ。

俺は月明かりを頼りに辺りを見回す。

ここは相部屋の様だ。

「来てくれたんだね。」

「……」

俺はその声に身構える。

今の声は、政人でもハルでもなかった。

しかし、不思議とさっきの奴とは違う雰囲気の声だ。

悪意が無いのか…？

「…………誰だ。どこにいる？」

「ここだよ。」

声と、窓から差す月明かりを頼りに探す。
声の主は、ベットに座っていた。

肩にかかるくらいの髪の長さに華奢な体。そいつは柔らかな笑みを俺に向けていた。

。

「この紙を書いたのは、おまえ…？」

「うん。」

俺の心情を知ってか知らずか、そいつは無邪気に微笑む。

政人が書いたんじゃないのかよ……。

とんだ無駄骨を食らった俺は、パイプ椅子に脱力して座りこむ。

…？

「そついや、なんでこんなもん書いたんだよ？てか、なんでこんな所にいるんだ？…えーと……」

「瑞穂^{みずほ}。あなたは？」

「海だ。で、なんでだ？」

「いやー、気付いたらここにいてね。なんでここに来たのかよく分かんないんだよね……。」

瑞穂が頭を掻きながら、照れ笑いをする。

「は？記憶喪失……って事か？」

「軽いね。ここはどこ？私はだれ？みたいな重傷な物じゃないよ。自分の名前とか覚えてるし。でも、気付いたらここにいて、なんでここにいるのか、いつからいるのかとかが全く思い出せないんだ。」

瑞穂は真剣な口振りで喋る。

…嘘はついてないみたいだが……

「名前は？」

「森丘瑞穂。」

「歳は？」

「17歳。」

「何でここにいる？」

瑞穂は腕を組み、うつむいた。

「…うーん。もしかしたら私は有名な霊能師で、おばけ退治で来たのかも！」

「はあ？」

何を言いだすかと思っただけ。

「だって女の子が一人でこんな所に来るわけないでしょ？」

…たしかに。

「それに、その書き置きだって、私が念じたらできたんだよ。」

「…頭が痛いのか？」

「ちがうよ！もし床に落ちてたって、あなたのポケットに入るわけないでしょ？」

「それはそうだけど…」

瑞穂は、見てて、と言うと、目を瞑って手を組んだ。

……。

「……オイ。」

「……ふう。煙草の箱を見てみて？」

…なんで煙草を持ってるって分かるんだ？

俺はポケットから煙草を取り出した。

「なっ……!!」

煙草の箱には、焼いたような黒い文字で“みずほ最高”と書いてあった。

瑞穂は自慢気に鼻で笑う。

「ふふん、どう？信じた？」

「…おまえ、ナルシストだな。」

「え？殴っていい？」

「……まあ、アンタが霊能師だって事は信じよう。で、もう一つ質問だ。なんで俺をここに呼んだ？」

「あなたなら、除霊の協力してくれるかなって。」

「除霊って、まさから階にいたあれか…？」

瑞穂は黙ってうなずいた。

「…冗談じゃねえ。」

「なんでよー！いいじゃない！」

「ふざけんな！てか、何でアンタはそんなに除霊したがんだよ？そんなに無理してまでやることないだろ。とっとと帰りゃいいじゃないね

「か。」

「……うん、それがね。この病院自体が呪われててね、外に出れないんだよね……」

「……マジか？」

「で、私が思うに、あの人がこの病院の幽霊の中で、一番呪いの力が強いんだよ。だからあの人を除霊すれば、呪いが消えると思うの。」

あいつを成仏させなきゃ、ダメって事かよ……。

「あれは……あの女は幽霊なのか……？」

瑞穂はとたんに真剣な顔になる。

「……うん。あれは幽霊だよ。たぶん、私はあの人を除霊しに来たんだと思う。」

「って事は、あいつの事を少しは調べてんだろ？覚えてるか？」

「うん。全部知ってる。なんでここに留まってるのか、なんで成仏できないのか。」

「なんでだ。」

瑞穂はゆっくり、口を開く。

「むかしむかし、あるところに、仲の良い親子がいました。」

。

その親子は母子家庭だったんだ。それでもその親子は幸せだった。
親の名前は恵子^{けいこ}。うーん、名前は思い出せるのに、名字が思い出せないな……。

娘の名前は……思い出せない……。まあいいや！話を続けるね。

娘はある日、病気にかかって、大きな病院に入院したの。
それが、ここの病院ね。

でも、ここはあまり良い病院じゃなかった。
医療ミスを繰り返して、それをひた隠しにしてたの。
そしてそれは、娘にも降り掛かった。

娘は医療ミスで重傷を負ったわ。

親、恵子^{けいこ}さんは娘の状態を疑って、病院に訴えたわ。

そして、病院は恵子さんの訴えを無視したの。

娘の病状はどんどん悪くなっていく。

恵子さんはそんな娘の姿を見て、ストレスで目が見えなくなってしまったの。

そして、娘は医療ミスで死んでしまった。

恵子さんはついに心まで病んでしまったの。

そして、娘が死んでしまった事も忘れてしまった。

恵子さんは娘のいた部屋に、毎日お見舞いしにきたわ。それが迷惑になった病院は、恵子さんに娘は死んだだって言ったの。

恵子さんは信じられなかった。そしてだんだんおかしくなって、最後にはノイローゼになって自殺したの。病院をひどく恨みながらね。その後、病院は多くの医療ミスが発覚して、潰れたわ。

恵子さんは、死んでからも娘が死んだ事を信じられなかったのね。

恵子さんはこの病院の自縛霊になった。
今でも娘のお見舞いに来てるわ。

。

そんな事が……。

「にしても、おまえ詳しいな……」

「うーん、自分でもなんでこんなに詳しいのやら……相当調べたんだろね。」

瑞穂は、えへへ、と照れ笑いをする。

自分の事だろ……。

瑞穂がベットから立ち上がり、人差し指をたてる。

「つまり、恵子さんに娘さんが死んだ事を気付かせれば良いんじゃないかな。」

「どうやって?」

「娘さんの死んだ部屋は402。隣の部屋の真下ね。多分、そこに行かせれば、記憶が戻って、娘さんが死んだ事に気付くんじゃないかな?」

俺は一つの疑問が浮かぶ。

「なんでその恵子さんとやらは、お見舞いに来てんのに娘の部屋に行かないんだ?」

「娘さんは死ぬ直前に部屋を移ったの。移る前の部屋は502。恵子さんは娘さんが死んだ事を忘れてるから、娘さんは移る前の部屋にいてると思ってるのね。」

その時、隣で扉の開く音がした。

「……ね?」

俺は、瑞穂に近付き、小声で話す。

「そこまで分かってんだったら、アンタ一人でできるんじゃないの?」

「うーん、うまく誘導できないんだ。恵子さんは5階から動こうとしないんだよ。」

どうやって部屋に行かせるか。それが問題か……。

ふと、俺は一つの名案が浮かぶ。

「オイ、ここの建物はどんぐらい古いんだ？」

「え……？ たしか、相当古いよ。思いっきりジャンプしたら床が抜けちゃうんじゃないかな……。」

「上等だな。瑞穂、こんなのはどうだ？」

俺は瑞穂の耳元で説明する。

「ええー！！ 無茶だよ！」

「ばっ！ 声がでかい……！」

「も……」

俺はとっさに瑞穂の口を手で塞ぐ。

「あいつはここから動く気がないんだから、強制的に行かせるしかないだろう。」

瑞穂は俺の手をはぎ取り、不安げな顔を浮かべる。

「なんかうまく行きそうに無いけど……。それに恵子さんは怨念が相当強いから、下手したら殺されちゃうよ……？」

「そしたらアンタの枕元に立ってやるよ。」

「それはやめて。うざいから。」

「……うん、わかった……」

…誰の枕元に立とう…？

瑞穂は短くため息を吐く。

「たしかに強制的に行かせるしかないよね。やるしかないか！」

「でも、そしたら、どのタイミングで行くかな。いつあの女が来るかわかんねえし。」

「あ、それは大丈夫。恵子さんは決まって5分置きに娘さんの部屋に行くから。」

「じゃあ、その5分でできるかが勝負の鍵だな。あの女が部屋を出た瞬間に入るか。」

「だね。そうと決まったら早く行こう！」

。

502号室前。

俺は501号室側の壁に張り付き、様子をつかがう。瑞穂は、俺の後ろにくっついていてる。

あの女はまだ中にいるらしく、歩き回っている音が聞こえる。

瑞穂が俺の耳元で話す。

「恵子さんは目が見えないから、音さえ出さなければ気付かれないからね。それだけは気を付けてよ。」

「ああ、わかってるよ。」

ヒタ…ヒタ…

……ヒタ

こちらに近づいてくる。

ヒタ…ヒタ…ヒタ…

ドアの前まで来たようだ…。

ガラ……

大丈夫…目が見えないんだ…音さえ出さなきゃ大丈夫だ……。

女は全身を脱力したようなポーズで部屋を出ていく。

ヒタ…ヒタ…

女は俺達のいる反対方向へと歩きだした。

フウ…これで安心だな……早いところ入るか。

俺は慎重に歩く。

ドアは開いたままなので、そのまま入ろうとする。

メキッ

「「!!」」

病院の老朽化で床が軋んでしまった。

女の動きが止まる。

そして、ゆっくりとこちらに振り向いた。

俺は声にならない叫びをあげながら、動きを止める。

しかし、女は反対方向を振り返り、ゆっくりとした歩調で行ってしまった。

た…助かった……

「ほら、早く入ろう。」

「あ、ああ…。」

部屋に入ると、そこは隣の部屋と同じ相部屋だ。

「よし、時間がねえ。始めようぜ。」

「うん。」

。

「ハアハア…なんとかできたな…」

「ハアハア…そ…そうだね………」

俺達は、部屋中のベットを真ん中に積み上げた。

「いけない！もうすぐ5分経つよ！」

「マジかよ！早く登るぞ！」

俺と瑞穂は、なんとか積み上げたベットの一番上に立つと、ドアの
スライドする音が聞こえた。

「きやがったか…」

ベットの足からは、メキメキと床の軋む音が聞こえる。女は早くも
それに気付いたようだ。

ゆっくりと、しかし確実にこちらに向かってくる。

ヒタ…ヒタ…

女が、ギリギリまで近づく。

今だ！

「「セーのっ！」」

俺と瑞穂は、同時に思いきりジャンプした。

着地する際に、足に力を込める。

ドンッ

すると、床は大きな音を立てて崩れていった。

ガラガラガラッ！！

「いてっ！」

俺は着地に失敗して、背中を床に打ち付けた。

…よかった…。402号室の床は抜けなかった…。

この部屋の床が抜けちゃ、意味が無いからな…。

しだいに砂煙が無くなっていく。

俺は辺りを見回した。

俺は目の前の光景に驚愕した。

女が、へたりこんでいる瑞穂に、ゆっくりと近づいていくのだ。

…そんな…呪いは解けてないのか…？

「瑞穂！何やってんだ！早く逃げろ！」

瑞穂は瞳孔が開いたまま、こちらを振り向く。

「……………ひ…あ…こ、腰が……………」

腰が抜けたのか！？

どこまでベタなんだ！

「チツ！」

俺は瑞穂の方へ走る。

しかし、どう見ても女の方が瑞穂に早く着く。

「クソツ！瑞穂オオオ！……………なっ……………！」

俺は目の前の状況に、思わず歩みを止めてしまった。

女が瑞穂を抱き締めたのだ。

女からは先程のような、悪意は消えていた。

「どこに行ってたの！ずっと探してたのよ！」

女が涙を流しながら叫ぶ。

どうやら、瑞穂を自分の娘だと勘違いしているみたいだ。

「…………え…………？あ。」

瑞穂はしばらく惚けていたが、やっと状況を理解したみたいだ。

瑞穂は恵子さんを引き離す。

「お母さん、聞いて？お母さんも私も、もう死んでるんだよ。」

恵子さんは驚愕している。

「…そうだったのね…ああ…思い出したわ…」

恵子さんが光に包まれていく。

その姿は、とても綺麗だった。これが生前の姿なんだろう。

「ごめんなさい…あなたをこんなに早く死なせてしまって…」

恵子さんは、再び瑞穂を抱き締める。

瑞穂はやさしく微笑んだ。瑞穂も泣いているようだ。

「ううん。私、後悔してないよ。だって、お母さんの子供に生まれてこれたんだもん。」

恵子さんはやさしく笑う。体は無数の小さな光になって、天に上がっていく。

「ふふ、私も生まれて来て後悔してないわ。あなたを生めたんですもの。」

二人は笑い合う。

ああ…恵子さんとその娘も、こんな感じで笑い合っていたんだろうか……。

「ありがとう………」

恵子さんはそう言うと、完全に無数の光の粒となった。

それはゆっくりと消え、病室は、また元の暗いものとなった。

「終わったな……。」

「ひつく…ひつく……うん……。」

瑞穂は座り込みながら、嗚咽混じりに喋る。

「ああ！泣くなよ！恵子さんは成仏したんだ。多分、1階の扉も開いてるから行こうぜ？ほら。」

俺は、瑞穂の前に手を差し出した。

瑞穂は俺の手を取り、起き上がる。

………ん？手握ったままなんだけど……。

「ひつく…ひつく………」

………ま、いいか。

1階。

フウ… やつとここから出れる…。

瑞穂の嗚咽も、いつしか治っていた。
手は握ったままだ。

「海君、ありがとね。」

「……ああ…。」

なんか素直に感謝されると照れるな。

俺は扉の前まで行き、ノブを回す。

「お、開いてる。やつと出れんな。」

俺は扉を開ける。外は日がのぼろうとしていた。

俺は、外へ足を踏み出そうとするが、瑞穂が手を引っ張った。

「私…忘れてた…。」

「は！？忘れ物！？ふざけ…。」

俺は振り返る。

瑞穂は光に包まれていた。

「えへへ、私もしんでたんだつたよ。」

瑞穂はいつも通りに、無邪気に微笑んだ。

「は…？嘘だろ…？なんで…？」

「私は森丘瑞穂。森丘恵子の娘です。あは、ばかだね。私も忘れてたんだ。」

繋いでいた手が離れる。

正確には離れたのではなく、瑞穂の手はすでに光の粒となっていた。

「まったく…アンタ等親子には騙されたぜ……」

「あはは、そうだね。」

瑞穂が笑う。笑っているが、目からは涙がこぼれる。

「まったく、泣くなつて。」

そう言う俺も、目からは涙が流れていた。

瑞穂が俺に抱きつく。

体は、次第に小さな光になっていく。

「お別れだね…。あーあ、せっかく素敵な人を見つけたのにな。」

「フツ…残念だな。俺は彼女持ちだ。」

「あつ、うわきー！いつてやるー！」

俺は抱き締める力を強くする。

「…向こうでお袋さんと仲良くな。」

「何言ってるの。仲良いのはわかってるでしょ?」

「ハハッ、そうだな。」

「海君…。」

瑞穂の体は、完全に光の粒となった。

ありがとう……

光は天にのぼり、やがて消えてなくなった。

「フッ…幽霊も悪くねえな……」

翌日。

「海くん！昨日はおいてけぼりにして悪かったね!」

遅刻してやってきた政人が俺に笑顔で言う。

「テメーは……」

バキヤッ

「グハア！」

「フン！」

1発でも殴らねーと俺の気がすまねーからな。

ん？政人が綾に耳打ちしてる……。

ヒタ…ヒタ…ヒタ……

「海君……？走り屋の女達に囲まれてハーレム状態って、どうゆうことかしら……？」

あ、瑞穂。俺すぐにそっちにいけそうだよ。

どろどろ午後ッ！！

「い」午後ってなんだよ……」

ドサ…

薄れゆく意識の中、瑞穂が笑顔で手招きしていた……。気がする……。

第16話 来襲！おまんじゅおばあちゃん！

白い部屋。

白いベット。

白い包帯。

俺は病院のベットの上にいた。

なぜだろう。なんで俺がこんなめに……

いや、理由は明確だ。

俺は昨日のこっくりさん、その名もあたりめ太郎の会話を思い出す。

。

すでにハルは帰って、俺はあたりめ太郎と二人で飲んでいた。

「あ、そうだ。あたりめ持ってきたんだから呪わないでくれるんだろ？」

顔が赤いあたりめ太郎が気まずそうに喋る。

「いやあ……それが、もう政人を呪っちゃったんだよな……。」

しばし、二人に沈黙が生まれる。

「……なっ……！じゃあ、呪い解けよ！」

あたりめ太郎は全く気負いなく喋る。

「え？無理。早くても呪いが解けるのは明日中だよ。明日は気を付けるんだな。」

「てめえ！ふざけんな！！テメーの名前から“り”を取って、ただのコックさんにしてやろうか！」

「なんだと！洋か！？和か！？まさか中じゃねーだろうな！？」

「テメーすでにコックさんになる気まんまんかよ！」

。

と言うわけで、俺は今日是不幸の真っ只中です。

今もなぜかお婆ちゃんが“現代のおまんじゅうの傾向と対策”というテーマを熱く語ってきます。

「お饅頭ていうのはね。遙か彼方、饅頭星からやってきた侵略者なんだよ。」

話が壮大すぎてついていけません。

俺は空虚を見つめ、今日あった不幸の連続を思い出す。

。

昼過ぎ。学校も終わり、俺は原チャリで自分のアパートへ向かっていた。

学校では何事も無かったけど、今日は呪われてるらしいし、家に帰ってのんびりするか……。

そんな事を思っていた矢先、不幸がはじまった。

ププププスン……

屁じゃない。原チャリだ。原チャリは屁の様な音を出すと、エンジンが止まった。

スピードは落ちていき、ついに止まってしまった。

……交差点のど真ん中で。

横からは、そばを配達中のカブが迫ってくる。
運転手は…居眠りをしていた。

「ちよっ…どんだけ器用なんだよオオオ！」

ドゴーン！

読んで字のごとく、まさにドゴーンとぶつかった。

俺は2メートル程吹っ飛び、全身をしたたかに打ち付けた。

カブの運転手も、ぶつかって目が覚めたみたいだ。
そして、今の惨状を目の当たりにする。

「…あーあ、だからアジは開きにしとけて言っただのに……。」

「変わらないよ！？アジを開きにしても状況は変わらないよ！？」

運転手はまだ寝呆けているらしい。

この際だから、全部相手のせいにしちゃおう……。

「どーしてくれんの！俺の原チャリ壊れちゃったじゃん！」

「あ、すみません。自分、直すの得意なんでやりますよ。」

そう言うと、運転手は原チャリのエンジンをバンバンたたきまくった。

「うつりの悪いテレビじゃねーぞ！？たたいても直んねーよ！」

「いや、大丈夫です。って、アッチイー！！」

「あんたが大丈夫！？」

運転手は手に息を吹き掛けながら、原チャリを睨み付けた。

「このヤロー…やってくれんじゃねえか……！」

「原チャリは悪くないよ！？全面的におまえが悪いよ！？」

運転手はどこからか、大ハンマーを持ち出した。

「ちよっ、それどうすんの!？」

「口を出さないください、これは俺とこいつの正々堂々のタイマンですから。」

「何こいつ!？原チャリとタイマン張って大ハンマー持って正々堂々とか言ってる奴初めてみたよ!！」

「うし、じゃあ俺から行くぜ。」

「俺からっていつかあんたからしか行けないからね!？」

「いや、こいつは“おまえから来いや”って言ってましたよ。」

「原チャリと会話できんの!？どんだけいらねー能力だよ!？てか俺の原チャリも意地張りすぎだろ!負けるの確定だろ!」

「それでも…俺は戦うことしかできないんだ……」って言ってます。」

「戦うことはできないんだよ!！」

「じゃあおまえがカブの運転手さんに謝って”って言ってほしいです。」

「言ってほしいだけじゃねーかアアア!！」

俺は視界が歪む。

どうやら、軽い怪我じゃないみたいだ。

「クッ……」

俺は思わずしゃがみこむ。

「だっ、大丈夫ですか！？救急車呼ばなきゃ……！」

運転手は慌てて携帯を取り出し、電話をする。

しかし、何も喋らずに電話を切った。

「どうした……？」

「4時44分をお知らせしますだって！ふきつゝ！」

「ベタベタな事してんじゃねー！」

すると、救急車のサイレンの音が聞こえた。

どうやら通行人が見かねて、連絡してくれたみたいだ。

サイレンの音が近づいてくる。

「ふう……なんとか助かったな……」

救急車は俺の近くに止まる………はずだった。

ドゴーン！

救急車は勢いあまって、近くの電柱に正面衝突した。

救急車の運転手が出てくる。

「救急車を…呼んでください…」

「やりやがったアアア!!」

救急隊員は皆、重傷を負っていた。

「アタシがみんなを運ぶわ!!」

背後からの声に振り返ると、そこにはヨボヨボのおばあちゃんが仁王立ちしていた。

「ほら!みんな乗りなさい!」

おばあちゃんは救急車の運転席に座り、みんなを促した。

「みんな乗ったね!行くわよ!」

救急車の後部座席には、俺、救急隊員3人、カブの運転手、俺の原チャリが乗っていた。

俺の原チャリを乗せたのは、カブの運転手だ。

原チャリと楽しく会話している。

「へつ。さっきはむかついたけどよ。おまえの言った言葉には、まいったぜ。」

ん?なんて言っただんだ?

「まさかあの場面で“おまんじゅうあげるから許して”なんてよ！」
降伏してんじゃねーか！

「おまんじゅう!？」

おばあちゃんは饅頭という言葉に過剰に反応した。

「お…お…おまんじゅうはおやつの内に入りません!！」

わけわかんねえ!!

すると、おばあちゃんはアクセルを思いっきり踏み込んだ。
救急車の速度は100キロを越えた。

「おばあちゃんスピード出しすぎ!!踏んで!ブレーキ踏んで!」

「バカヤロー!饅頭と大福と一緒にすんじゃねえ!!」

「バカヤローはテメーだ!!」

そうこう言ってる内に病院が見えてきた。

おばあちゃんはドリフトテクを駆使して、速度を落とさず病院の敷地へと入った。

「おばあちゃん病院だよ!速度落として!」

「おばあちゃんじゃねえ!いや、見た目はおばあちゃんかもしれないね

え。でもな、心はいつまでも少女なんだよ!」

「わかった!お嬢ちゃん!速度を落として!」

「貴様ワシが93歳と知つての事かアアア!」

「知らねーよ!!あああ!ぶつかるウウ!」

「見た目はババア。頭脳は少女。って最悪じゃねーか!」

「……もういや……」

ドゴン!

。

で、今にいたる。

まあ、よくもこんなに不幸が重なったもんだ。
変人に振り回されただけの様な気もするが。

「おまんじゅうおいしいねえ。」

おばあちゃんは饅頭討論をやめ、饅頭を貪っていた。

「さてさて、さっき拾った取っておきのおまんじゅうでも食べるかねえ。」

ん？なんだそりゃ。

おばあちゃんは紙袋を取り出し、中に入っている物をだした。

それは、ボ○バーマンが使うような、爆弾だった。

その時、黒服の屈強そうな男が病室に入ってきて、爆弾の導火線に火をつけた。

「ちょっ、あんた何やってんの？」

「こっくりさん様からのご命令です。」

あのシェフ何調子乗ってんだ！？

「おばあちゃん……？それ爆弾じゃないの？捨てたほうがいいって……」

おばあちゃんは爆弾にかぶりついた。

「堅ッ！なんじゃこりゃあ！」

「それ絶対爆弾だつて……。」

「こんな老人にやさしくない饅頭は……饅頭じゃねー！！」

「だから爆弾だつて！」

おばあちゃんは窓の外に爆弾を放り投げた。

俺は焦って窓の外を見る。

よかった…人はいないみたいだ……。

「…って、あれ？あそこにあるの俺の原チャリじゃねーか！」

あの運転手遊ぶだけ遊んで飽きたらポイか！

爆弾は一直線に原チャリに向かっていく。

「……………あつ……………」

ドゴーン！

……………さて、何回ドゴーンって言ったでしょう……………？

第17話 シェフ、おまえからあたりめを取ったら何が残るんだ？

今は昼過ぎ。

「…暇だポ…」

俺は病室のベッドの上で、誰に言うでもなくつぶやいたポ。

入院3日目に入り、いい加減、この緩い空気に飽き飽きしていたポ。後は検査だけで、もうすぐ退院できるらしいが……。

「よっ」

突然聞こえた声と共に、カーテンが開く。

「シェフ…てめえのこのこと……」

シェフこと、あたりめ太郎は、頭を掻きながら喋る。

「いやあ、わりーわりー。その様子だと、相当呪いに振り回されたね。」

「当たり前だポ！てかおまえ何しにきたんだポ！」

「お見舞いだよ、お見舞い。ほら。」

シェフは（もうシェフに決定）、もっていた段ボール箱を俺のベッドに置いた。

「んだ？これ。」

「開けりゃわかるよ。」

シェフは自慢気に喋る。

お、なんかすごいもんなのかな…。

俺は少し期待しながら、段ボール箱を開ける。

「って中身全部あたりめじゃねーか！」

中型テレビ程の段ボール箱には、ぎっしりとあたりめが入っていた。
しかもそのままで。

「おまえなんで袋詰めされてないポ！？まさかシェフの手作りとか
！？」

「ちがう、さつき拾った」

「あんた一体何しにきたの！？嫌がらせとしか思えねーよ！」

「まあまあ、一個食ってみ？で、大丈夫だったら俺にちょうだい。」

「毒味させにきたの！？しかも大丈夫だったらもう気がよー！」

「まあ、いいじゃないの。」

シェフはそういうと、パイプ椅子に腰掛けた。

…ま、お見舞いに来ただけ、よしとするか……。

「珍味ばかり持ってきてどうするんだボ。略して」

「略しちゃダメー！あんたそれ言いたいがために語尾にボって付けてたのか！」

。

「……ハア……」

今の状況にため息がでる。

あたりめは結局、シェフがもりもり食ってる。

「ああ、幸せてってこういう事をいうんだな。」

なんか語っちゃってるけどおまえイカくせえ。

「珍味ばかり食いやがってボ。イカくせえんだよ。略して」

「ダメ！それだけはダメだよ！？」

「てか、おまえ本当に何しにきたの？イカの香りを運びにきただけ？」

「いや、実はお見舞いに来たんじゃないんだ。」

シェフはやつと真剣な顔になった。しかし、相変わらずイカくせえ。

「実は、この病院に、こつくりさんが逃げ込んだらしいんだ。」

「は？どゆこと？」

「前に言つたろ？こつくりさんは全国にいっぱいいるって。それで、こつくりさんには、受け持つ地域つてのがあるんだ。この病院は俺が受け持つてる。」

「ふーん。で？逃げ込んだって？」

「違う管轄のこつくりさんが、俺の管轄に来て荒らしてたよ。それを本部に報告したら、どうやらこつくりさんが一人、ここに逃げ込んだらしい。で、それを捕まえるのがここに来た理由。」

「アンタ等本当にこつくりさん？なんか話でかくね？」

「じゃあさつさと捕まえてこい。がんばれよ。」

「ああ！がんばろうな！」

シェフはそういうと、俺の肩を笑顔で叩いた。

「……何、この手？」

「手伝つて……。」

「ハア！？何言つてんだよ！？」

「そいつ、かなり凶悪らしいんだよ……。たのむ！お礼はするから！」

「ふざけんな！どうせ、そのお礼つてのもあたりめなんだろうが！」

「なんでわかんのか！？…わかった。段ボール2箱だ。これでいいだろ？」

「数じゃねーよ！今の時代乾き物じゃ何も解決しねーんだよ！？」

「やれやれ、困った坊やだ。3。これで手を打とう。」

「何おまえ！？なんでおまえの方が偉そうなの！？」

「ハア…あたりめより乾いた時代だな……………」

「なんか遠い目してカッコつけてるけどカッコよくないからね！？イカくせえとしか思わないから！」

「そついや、そのこつくりさん、女らしいよ」

「さて、行くか。」

。

「「こつくりさんこつくりさん、おいでください」「」

紙に“はい”と浮かんでくる。

俺とシェフは、まず相手の居場所を突き止めようと、そのこつくり

さんと呼んだ。

今回は、シェフが用意した特別製の紙らしく、紙にそのまま文字が浮かんでくるみたいだ。

「ばれないようにやるんだぞ？」

でも、こいつにばれないようにとか無理なんじゃねえの？

シェフが自信たつぷりに答える。

「ああ、わかってるよ。えー、こっくりさんは今どこにいますか？」

やっぱり無理だ！

『なんでそんな事を聞くのかしら？』

「あなたに会いたいからです。」

本当に正直者だよ！ピノキオも真つ青だよ！

『あなたの容姿は？物に例えなさい。』

食いついたよ！

お題まで出してきたやつだ！

「田舎の駅のエレベーターですかね。」

なんか可哀相な存在じゃん！

『そっちの彼は？』

「彼は湿気たマッチです」

遠回しの“使えない”じゃねーかよ！

『素敵ね』

こいつは俺等のどこに魅力を感じたわけ！？

『私は橋河病院の屋上にいるわ。』

こつくりさんはそう答えると、文字は消え、オーラも消えた。
橋河病院とはこの事だ。

よし、これで細かい居場所はわかったな。後は屋上に行って捕まえるだけだな。

。

俺等は屋上にむかったが、女の姿はなかった。

俺は辺りをくまなく見回す。

「あつれー…何でいないんだ…？」

「あなたが湿気たマツチ？本当にずいぶんシケてるわね。」

俺はその声に振り返る。

なんだか声が低かったけど……風邪でも引いてんのか？

俺はそいつの姿に、一瞬我を忘れる。

ボディコンみたいな服装。それだけなら全然かまわない。

毛深いスネ毛。

毛深い腕の毛。

青いヒゲ。

そして割れたアゴ。

「政人！こいつだ！本部から送られてきた写真とピッタリだ！こつくりさん！通称、お妙！おまえを管轄不法侵害の罪で逮捕する。」

「なっ！あなた本部の回し者ね！」

「シェフ…おまえ…女らしいよって……」

「え？だから女らしいだろ？口調が。」

「失礼ね！私は心だつて女らしいわよ！」

「あ、ですね。」

口調が……？女らしい……………。

「てめえら……俺を騙したのか……………」

シエフとお妙の動きが止まる。

「……ま……政人……？」

俺は態勢を低くして、拳を構え、力をためる。

「し、湿気たマッチ！待ちなさい！私は髪型も女らしいわ！」

「ウオオオオ……！」

「まっ、政人！待て！ほら！あたりめあげるから！」

「行くぜ……………！ウルトラギヤラクシーマキシマムインパクトマイネ

バーギブアップ！（超銀河の最大の衝撃を……私は決して諦めない）

」

バキヤッ！

「……た……タダのパンチじゃん……………」

その後、お妙が現われる事は、二度となかった。

第18話 この一箱のティッシュで、何ができるというのですか……？

俺のアパート。

時刻は深夜。

「ど……どうしよう……」

俺は今月の残金を睨みながら呟く。

何回も数えるが、決して俺の数え間違いじゃないみたいだ。
てか、数え間違える程多くない……。

やばい……これじゃ今月生活できない……。貯金も無いし……。
クソ、あの入院費がキいたな。シェフめ……。

明日、短期のバイト探すか……。

俺は亀吉さんにソーセージをあげて、もう寝ることにした。

水槽にソーセージを落とすと、亀吉さんは目にも止まらぬ速さで、
ソーセージにかぶりついた。

俺はそれを見ながら、思考に耽る。

「……うーん……喋る亀か……高く売れっかな……」

「ヤメテオケ」

「あ、はい。」

さ、寝よう。

あー明日は遅刻しないように頑張るぞ。

。

「次はー、政人が降りる駅ー。政人が降りる駅でーす。」

朝のホームは喧騒の真っ只中だ。

おまんじゅうおばあちゃんに原チャリを大破されてしまったため、俺はしかたなく電車通学を余儀なくされていた。

駅の改札を抜ける。

ここから、商店街を突っ切り、少し坂を登ると学校だ。

商店街を歩いている途中、何やらウチの生徒達が人だかりを作っていた。

俺は人だかりの中の一人に話し掛ける。

「なあ、どつたの？」

「お、政人。」

そいつはこっくりさんの時の“A”だった。
名前は全く思い出せない。悪いな。

Aは人だかりが注目している所を指差す。

そこには商店街の掲示板。そのなかに、一際巨大なポスターがある。どうやら、みんなはそれを見ているようだ。

「なにになに？……アームレスリング大会？」

アームレスリング。

カッコ付けて言っちゃってるが、要は腕相撲だ。

「んだよ。こんなもんみんな集まってたのか？」

俺は全く興味が湧かなく、その場を立ち去ろうとする。しかし、Aが俺の肩をつかみ、それを阻む。

「政人。その下、見てみ？」

俺は肩をつかまれたまま、再びポスターに目を向ける。

アームレスリング大会。

でかかと、ポスターの大半を占めるその文字。

俺はその下の、小さな文字に注目する。

その文字は、たしかにこう書いてあった。

「優勝賞金…金10万円贈呈……？じゅっ10万！？」

「すげーだろ！？しかも対象年齢が16〜18だから、俺等が優勝する可能性だってあるんだぜ！？」

Aはかなり興奮気味だ。

たぶんこいつもエントリーするんだろう。

…10万さえあれば、当分生活費に困らない。

「…開催時間は、4時か。フッフッフ…10万はワシのモノぢやっ！」

4時。

商店街の中心。

ベンチなどがある開けた場所だ。

いつもは大道芸人が色々な芸を駆使して、通行人の所持金をこっそり頂こうとしている場所だが、今日は一人もいないかわりに、大きなステージがあった。

俺はそのステージの脇で待機していた。

ここにはエントリーした奴が、全員集まっている。

数は…30人くらいか。思ったより少ないな。

まあ、年齢制限されている上に、腕っぷしに自信がある奴だけだからだろう。

だって、俺の周りの奴等みんなむっさいもん。

ストリートファクターのキャラクターですか？って奴等ばかりかだもん。

ボクの視界は筋肉しか見えません…。

「斎藤政人さん。ステージに上がってください。」

お、俺の番だな。

俺はステージに上がり、中心にある腕相撲の台の近くに立った。

ワアアアア！

うお！結構ギャラリー多いな。

「ゴウキさん。ステージに上がってくださいーい。」

うわっ…名前からして強そうだよ…。

俺はステージの脇を見た。一人の男がゆっくりとステージに上がる。

赤黒い柔道着。それは肩口から切れている。

赤い髪と赤い目は怒気を放っている。

そいつは片足で立つと、スーッとステージの中心まで来た。

……モロじゃん…！

この世界の人間じゃねーよ！

「斎藤さん！試合前のコメントを一つ！」

ハイテンションな司会が話し掛ける。

「ああ、えーと、頑張ります。」

「ゴウキさん！あなたは？」

「滅殺！」

俺を殺す気だ！

「はい。じゃあ構えてー。」

俺とゴウキは手を組み、お互いに挑発するように強く握りあった。

「レディー……ゴー！」

うおりゃあっ！

ポテ…

……っ てあれ？

「斎藤政人さんの勝利です！」

ゴウキ弱い！

「滅殺？」

疑問符になってる！なんかちょっと可愛いぞ！

その後も俺は勝ち進み、ついに準決勝まで駒をすすめた。

「さあ！ついに準決勝！ここまで勝ち上がってきたのは、斎藤政人さん！」

ワァァァ!

ここまでくると盛り上がるな。

てか、みんな見た目だけで力無さすぎるぞ……。

「対戦相手はー……柏木克也さーん!」

え!?! 克也!?!

「フッフッフ……」

怪しい声がステージ脇から聞こえると同時に、克也は現れた。

「……………て、おい! なんでおまえまで柔道着なんだよ!?!」

「政人? フツ、次の犠牲者は貴様か……。」

おまえキャラ変わってんぞ!

「おまえなんかムキムキになったな……。腕だけ……。ちよつとキモいぞ……。」

克也の腕は異常に発達していた。

しかし、それ以外は不自然にスマートだ。

「フッフッフ……俺はこの日のために、50キロの重りを腕に付けて筋トレしていたんだよ……。」

「おまえ思考が一太郎と同じだよ!?!」

「白熱してますねー！二人とも！では、試合前のコメントを一つ！まずは政人さん！」

「え？あ、頑張ります。」

「克也さん！」

「滅殺！」

こいつも俺を殺す気だ！

「はい、構えて〜…」

俺と克也は手を組んだ。

克也が怪しげにニヤリと微笑む。
こいつ、ホントに強そうだな……

「レディー……ゴー！」

ポテ……

弱い！

「滅殺？」

だからなんで疑問系！？

「政人さん！決勝進出です！！」

ワアアアア？

なんでギャラリーまで疑問系なんだよ！？

…てか楽勝じゃん。

あと一回勝てば10万だよ。よし！次も変人である事を期待しよう！

。

「さて、いよいよ決勝戦です！」

ワアアアア！

「ここまで勝ち上がってきたのは……さいとーつまーさーとーさーん！！」

ワアアアア！

ギャラリー達はかなり盛り上がっているな。

「対戦相手は……なんと！女性です！むーらーかーみーあやさーん！！」

え！？綾ちゃん！？

ステージ脇から綾ちゃんが現われる。しかし、その姿はなにやらおかしかった。大きなハンテンを着て、背中が異様に盛り上がっている。下は大きなズボンを履いていて、

「イチ、二、イチ、二…」

と、掛け声を呟きながらのっそのっそと歩いてきた。

その姿はまさに……

「二人羽織じゃん！」

「まっ政人さん！何言ってるんですか？そんなわけないじゃないですか！」

「明らかにそうだろ！拳にケンカタコができてるもん！後ろにின்றの海だろ！」

「これは、さっきコンクリートをタコ殴りにしてきたんです。」

「なんの意味があつて!？」

「コンクリートジャングルに嫌気がさしちゃって。」

「意味ねえよ！コンクリートに暴力振るってたって何も解決しないんだよ!？」

『…うるせえよ…』

「え…？今、綾ちゃんの背後から殺気に満ちた声がしたんだけど!？」

「あ、それは私の守護霊です。」

「どんだけ凶悪な守護霊!？」

「白熱してますねー!さー腕を組んでください!村上綾さんは両手で!」

「え?なんでだよ!？」

「女性選手は男性選手と公平にするために両手なんです!」

司会者は当たり前のように言う。

…いや、俺もそれは当たり前だと思っけどさ…。腕は男ですよ…? 両手じゃ勝てるわけねーよ…。

「では、選手のコメントを!まずは政人さん!」

「…ボクは今、世の中の理不尽さに嫌気がさしています。」

「はい。わけわかんねーしうざいですね!」

こいつ今なんて言った!?!敬語にすれば何言ってもいいと思っ
てんの!?

「綾さんは!」

「撲殺!」

俺を殴り殺す気か!?

俺は当然のごとく負けた。

準優勝の賞品はティッシュ一年分だった。

しかも一年分をどう計算したのか、箱ティッシュが一つだけ。

俺はこれを大事に一年間使っというと思う。

第19話 ゲームは当分やりませんよ。ええ。

夜。よい子はおねむの時間だ。

「……ひまひま〜」

俺は自分のアパートで、亀吉さんに向かって喋る。

亀吉さんは、興味が無さそうにそっぱを向いていた。

今日は土曜日。明日も休みなのに、まったく予定がない。どうしたもんか。

「あつ、そうだ!」

俺はリーダーらしい奴から、ゲームを奪った事を思い出した。

もらったはいいけど、一回もやってなかったんだよな。暇だしやってみるか。

俺はいそいそとゲームをセットした。本体は新しく、薄いアレだ。薄いアレ。

ソフトは何にしようかな……。

ソフトは軽く50を越えていた。あいつゲーマーだな。

どれも見たことのある有名なソフトなのだが、一つ、見慣れないソフトを目にした。それを手に取る。

それはRPGらしい。

見慣れないソフト程、好奇心をそそるものはない。
これにすっかな。

ディスクをセットして電源を入れる。

テレビ画面に、タイトルがあらわれる。

『パパ・ゴラスの大冒険?』

タイトルおかしい!

俺は説明書を見る。

『ストーリー。舞台は中世です。』

……それだけ!? ストーリーもクソもねーよ!
……まあいい。とりあえずゲームスタートだ。

俺はゲームスタートと書かれたアイコンを押す。

ピコーン!

小気味のいい音がすると、画面が変わり、青年が寝そべっている姿が映る。こいつが主人公らしい。結構リアルだな。

『あー、タバコうめー。』

ずいぶんと不健康な主人公だな！

そこに一人のじいさんが駆け寄ってきた。

『殿！大変ですぞ！』

殿！？中世なのに！？

『おお、じい。どうした？』

『殿の婚約者、姫がさらわれてしまいました！』

『テーマだからいつも気を付けろって言ってたろうが！姫はさらわれるためにいるような存在なんだって！どうせ俺がいくんだべ？クソだりー！』

この主人公言っちゃいけないことバンバン言ってる！

しかし物語が進むと、結局そいつが行くことになった。

姫は、どうやら、悪いドラゴンにさらわれた様だ。ま、ありきたりな話だな。

そして、ようやく俺が主人公を動かせるようになった。

フツ、俺はゲームは得意なんだぜ？まず、こういうのは、ダンスやらを調べまくるのが定石だな。

俺は見知らぬ家に、堂々と家宅侵入をして、ダンスを調べた。

『何もない。』

なんだ。ハズレか。

『俺の両手には、もう何もない……。』

こいつタンスに何もないだけでどんだけ落ち込んでんの！？

俺は隣にあるもう一つのタンスを調べた。

『切れ味のよさそうなナイフがあつたが、それはいらない。』

いるよ！？武器だよ！？それ！

『俺はナイフを武器だとは思わない。本当の武器、それは心ない人の言葉です。』

タンス調べただけでこいつは何を言いだすの！？

『俺はタンスにナイフをしまつと共に、心につらい過去をしまつた。』

つらい過去はしまつていいからナイフを出せ！

『あんた勝手に何やってんの！』

いきなり家にいたおばさんが怒鳴りだした。

そりゃ、他人が家にズカズカ上がり込んできたら怒るよな。

『違つよ！俺だよ！マイクだよ！』

こいつなりすましがった！

『マイクはアタシの名前だよ！』

失敗だ！

パパは家を追い出された。結局ナイフは取れなかった。

『……しょうがない。ドラゴンの所へ行こう。』

そうそう、早く行こうぜ。……っておい！なんで隣の家に行くんだよ！操作きかねえし！

ガチャ

『ドラゴン！姫をさらったな！覚悟しろ！』

『え！？何！？』

パパ違う！それ一般人！

『くらえ！おりゃ！』

バキッ！

殴っちゃったよ！勝手に家に上がり込んだ上に殴っちゃったよ！

しかし、殴られた一般人は態度が豹変した。

『フッフッフ、バレてはしかたがない……。』

一般人はそう言うと、光に包まれ、ドラゴンへと変貌した。

おお！すごいぞパパ！よくわかったな！

『え？マジで？ノリだったのに……』

こいつノリで一般人殴ったの！？

パパの気持ちを無視して、ドラゴンとの戦闘が始まった。

展開早いな……。てか、武器なんにも装備してないけど……。

『ドラゴンの攻撃！かぎづめ……を黒板につけて引っ掻く！』

普通にかぎづめで攻撃すればいいじゃん！なんで間接的！？

『パパはその音に苦しがつたが、それをバネにして、さらなる高みを目指そう！』

後半の文いらねーよ！ただの願いじゃねーか！

『パパの攻撃！“おまえの母ちゃんでーべーそー！”』

最低の悪口だよ！

『俺……母ちゃんはいないんだ……』

うわー……最悪の形で過去を知らされたよ……。

『ごめん……でも、そんなつらい過去をバネにして、さらなる高みを目指そう！』

なんのなくさめにもなつてねーよ！？さっき言つてた事そのまま言っただけじゃねーか！

『ドラゴンの攻撃！口から火を吹いて、焚き火をし、その煙りをパパの方にやつた！』

だから攻撃が間接的で陰湿なんだよ！！

『目が痛い！』

これは結構ダメージ食らつたんじゃないの？…いままでの中では。

『パパはかなりのダメージを受けた。そのダメージは数字では計り知れない』

計り知れよ！わかんねーだろ！！

『パパの攻撃！あつ！UFO！』と言ひ、相手が注意をそらしたスキに、殴る攻撃！』

もう作戦言っちゃってんじゃねーか！！

『え！？UFOどこ！？』

引つ掛かった！どんだけ純粹！？

『え！？UFOいるの！？どこだよ！？』

テメーが言っただろ！！

パパとドラゴンはいつまでもキョロキョロしている。

その時、どこから姫があらわれた。

って普通に歩き回ってんじゃん！さらわれたんじゃないの！？

『てめえらなめとんのかアアア！！』

バコーン！

初めてまともな攻撃したのは姫かよ！

『姫は戦闘に勝利した。しかし、パパも勝利していたのだ。つらい過去に。見えない明日に。さあ、君もつらい事をバネにして、さらなる高みを目指そう！END』

「……………てめえらがなめとんのかアアア！！」

このゲームは、もう二度とやらないだろう。

第20話 ロリフェイスに騙されて……（前編）

今日は日曜。昨日はクソゲームをやって、夜更かししたので、今日は昼ごろ起きてしまった。

ベットの上で上半身だけ起こしながら虚無を見つめる。

だが、空腹のおかげで冴えない思考もだんだんとハッキリとしてきた。

んあゝゝ……とりあえずメシ食いに行くか……。

大きな伸びをしてから、ベットに手をかけて立ち上がろうとした時。

むにゅっ

……ん？なんだこのなめらかな指通りは！

……じゃなくて、なんだ？この、軟体動物を無慈悲に圧殺したような効果音は。

俺はその態勢のまま、効果音がした手を見る。

その手の下には、人間の頭があった。

「オッヒヨオオオ！」

なんとも情けない叫び声だな。

……違う！何でここに人の頭が！？

俺はそいつの顔を見る。

シーツを口まで被っていて、全体は見えないが、かなり端正な顔立ちをしていた。

髪の毛は綺麗な金髪。たぶん、地の色だろう。それがさらに容姿を派手にしていた。

それにしても、こいつ俺があんな奇声をあげたのに、安らかな顔してやがる。

…ま…まさか…死んでるとか…？

俺はゆつくりと手をのばし、シーツをつかむと、それを一気にひっぺがした。

なーんだ、男か。

…じゃなくて、なんだ！このなめらかな指通りは！

…じゃなくて！なんでここに金髪少年が！

…じゃなくて！…ん？そうだよ！…ん？なにがそうなんだ？あれ？じゃなくてってなんだ？ジャクソンか？ジャクソンだ！ジャクソンクレイジー！！
ところでジャクソンって誰ですか？

「…ううん…」

やばい！起きちゃう！どうしよどうしよ！

そうだ！隠れよう！

金髪ボーイは重たそうに目を開け、寝呆け眼でこちらを見ていた。

大丈夫…ばれへんよ…おいらは…無…そう、無になるんだ。この部屋の一部…銅像みたいなもんだ…
銅像すごいぞ、どうだぞーう！

「政人さん？なんでダンスの上でニヤニヤしてるんですか？」

「……ハイ！ジャクソン！目覚めはどうだい！？」

「……僕はジャクソンじゃないです。」

。

ジャクソンはリビングテーブルの椅子に行儀よく座っている。俺はそれを挟んで向かいだ。

「なんだって！？かくかくじかじかって、マジか！」

「政人さん。それじゃ読者に伝わりません。」

「いいんだよ。俺の心の中でそつと伝えるから。」

「その言葉、なんだかカッコイイですね。」

「だろ？」

では、カッコよく説明しよう。…フツ……。

こいつの名前は斎藤^{みつる}充。親父の弟の息子、つまりは従兄弟だな。八

ッ。

こっちに引越してきたらしく、伯父が、俺がここに住んでる事を知っていたので、充、おまえ挨拶しに行ってこい。との事だ。ヒツで、朝10時頃に来たらしいが、誰もでないし、ドアも開いていたので、家に入ったら俺が寝てたと。フツ。

その姿を見たら眠気が襲い、今に至る。ヘッ。

……水が余ったな。

「てかなんだ？俺の姿を見たら眠気が襲ってきたって。俺の眠る姿は睡眠薬か？」

「いやあ、そこまでのいいものじゃありませんよ。そう！鈍器で頭を殴られたような強制的な眠気？みたいな？政人さん。あなたは鈍器です。」

「断言してんじゃねーよ！なんでおまえに鈍器呼ばわりされなきゃいけないの!？」

俺はタバコに火を付け、浅くふかした。

しかし、あのおっさんが金髪美女と結婚した事は知ってたけど、息子がいたとはな。

ん？そういえば……

ぐう

ジャクソンの腹からかわいい音がして、ジャクソンは腹を押さえる。

「お腹すきましたね。」

ズゴゴゴゴ……

俺の腹からかわいい音がして、俺は腹を押さえる。

「かわいくないから！」

「あ、そう？」

。

「えーと、これ、ください。」

俺はメニューを指差した。店員は愛想笑いをうかべながら、手際良く会計をすませる。

ここは“ハン・バーガー”。駅前のバーガー屋だ。

正直、俺は金が無い。貧乏学生はファーストフードが一番。

「ジャック。おまえもなんでも好きなモン頼めよ。金は俺が出すからさ。」

俺は後ろでおずおずしていたジャックに話し掛ける。ジャックはそれを聞くと、顔がいつきに明るくなる。

「いいんですか!？」

「おう。」

「じゃあ……」

ジャックはそう言いながら、メニューを眺める。

ま、ハンバーガー屋なんて、安いもんだしな。

「じゃあ、コレノセットください！」

……マジで？

「かしこまりましたー！5400円になりまーす！」

高くなってるし！どんだけ贅沢すればそんな値段になるの！？

しかし、“なんでも”と言った手前、それはダメなんて言えるはずもなく、ちよつと涙目になりながら会計を済ませた。

二階に上がり、窓際のプラスチックで出来た椅子に腰掛けた。

「ハア…なんでハンバーガー屋でこんなに金使つの…？」

「政人さん、いただきまーす！」

ジャックも俺に続いて、向かいの椅子に座ると、すぐさまハンバーガーにかぶりついた。

しっかし……。

俺はまわりを見渡す。

今は昼時なので、それなりに込んでいる。
その客達、主に女が、こちらを見て騒いでいる。

こいつ目立つな……。

金髪は今時珍しくもないが、原因は顔だな。

かなり端正な顔だ。

外国特有のパーツが、綺麗にそろえられている。

表情も、海みたいにくさってなく、人懐っこい印象を受ける。
年上にモテるタイプだな。

「…どうしたんですか？ 僕の顔に何かついてます？」

ジャックは口の周りにケチャップを付けながら、無垢な青い瞳で上目づかいで尋ねる。

…クツ…こいつが女だったら…。

俺は、ティッシュでジャックの口に付いてるケチャップ拭き取ってやると、ジャックは無邪気な笑顔でお礼をした。

…クツ…こいつのお股に男の勲章が付いていなければ……。

「金髪野郎！ やっと見つけたぞオラァ！！」

突然響いたその怒声に振り返ると、不良が三人、階段付近で赤い顔をしていた。

「マズッ…政人さん、逃げましょう！」

「へ？なんで……」

「いいから！」

ジャックはそう言つと、俺の手を引つ張つて、階段へと走りだす。

とつさの事に、不良達は怯んだ。

ジャックは俺の手を引つ張りながら階段をかけおりる。

自動ドアに体をねじ込むようにして外に出た時に、やっと手を離れた。

俺が後ろを振り返ると、不良達はすでに階段を下りて、俺達に向かってきている。

「オイ！どういう事だよ！？」

人混みを掻い潜りながら、隣にいるジャックに話し掛ける。

「いやあゝ、説明するほどでも無いんですけど……朝、政人さんの家に向かう途中、道端であの不良達が一般人にからんでいたんですよ。それを注意したら不良達が逆上して。むかつくんで一発殴つて逃げてきました」

ジャックは語尾にエヘッ、と付くようなノリで喋る。

「おまえ……そんな無茶な……てかなんでそこで逃げるんだよ！だから怒るんだろ！」

「いやあゝ、僕、喧嘩した事ないんですよね。」

「じゃあ殴んなよ！」

「つーか、なんで俺まで逃げてんだ！？そつだよ！俺は関係ないんじゃない！」

「でも、僕と一緒に逃げたから仲間と思われましたよつ。ほら、同じ穴のクジラ？」

「同じ穴のムジナだ！」

ジャックは心底嬉しそうにしている。

こいつ確信犯か……。

「しょうがねえ……。めんどくせーけど、あいつらをブツたおすか……。」

「やった！さすが同じ穴で死にます！」

「どんな死亡宣告！？同じ穴のムジナだつってんだろ！とりあえず駅前から離れて、裏路地に連れ込む！付かず離れずにいるんだぞ！」

「はい！りようかいです！四十路肩のおっさん！」

「それけなしてるとしか思えねーぞー！韻踏めばいいと思ってんの！？」

ああ、また変な奴と関わっちまった……。ロリフェイスに騙された……。

あ、これサブタイトルに使う。

第20話 ロリフェイスに騙されて……（前編）（後書き）

こっこうせいを読んで頂き、ありがとうございます！さらに後書きまで見て頂いて……。えーと、今回は予告です。次回の後書きに保存されたまま忘れ去られていた小説を公開します！こっこうせいと言う仮タイトルだったので、見てみた所、自分でも何がしたかったのか全くわかりません。会話文が2回続くだけです（笑）えー、では（笑）

第21話 ああ…金髪ボーイがトラウマになりそう……。 (後編)

俺とジャックは裏路地についた。後ろは壁で、逃げ道は無い。

そろそろ来る頃だな……。

「待てつつつてんだろ！」

俺の予想通り、不良達の声が聞こえてきた。

あれ？でも……

「やつと捕まえた」

「覚悟しろや！」

「ブツ殺してやんよ！」

「最初はどっちだよ？」

「最近の政治はダメだ」

増えてる！ていうか最後の奴は状況わかってんの！？

不良達は俺を囲んだ。不良達はそれぞれ警棒やら鉄パイプやらを持っている。

チツ…やっかいだな……。

「ジャック！おまえは安全な所にいろ！」

ジャックは頷くと、脇にあった階段をのぼりはじめた。

「オイ！待ちやがれ！」

「いや、最初にこいつをやっちまおうぜ！」

「……そうだな。」

不良達は意見がまとまると、各々の武器を握り締めた。

来るか……

「オラア！！！」

背後から怒声が聞こえた。俺は最小限の動きで右に避け、そのまま振り向いた。

振り下ろされたパイプは、勢いのまま地面にぶつかり、鈍い金属音が響く。

そいつを見ると、テープでパイプを手固定していた。

俺はパイプを掴む。

両手はパイプに固定されているので、そいつはその態勢のまま動けない。

みぞおちに狙いを定めて、パイプを引き寄せ、カウンター気味に膝を入れた。

「背後から攻撃すんのに、声だしちゃ意味ねーだろ。」

そいつは膝を付き、気を失った。

よし。あと4。

「1、この野郎！」

こいつ等わざわざ1人ずつ攻撃してくれて親切だな。

そいつはパイプを大きく振りかぶると、ステップを踏み、こちらにやってきた。俺はそいつに向かって走る。

振り下ろされたパイプの根元を左手で掴み、勢いのまま、みぞおちに右を打ち込む。

そいつは力無い表情になると、パイプを離して地面に突っ伏した。

あと3。パイプも手に入れたし、楽勝だな。

「あんだ達何やってんの！」

突然、裏路地の入り口から声が聞こえた。その人物がこちらに走ってやって来る。

「……って、里奈!？」

「え? いじめられっ子かと思ったら政人!？」

オイ、政人の前はよけいだ。

ふと、不良達を見ると、何やら耳打ちをしている。

そして、にやりと笑うと、里奈の方へ向かっていった。

まさか……。

「里奈危ない！」

俺は里奈の方へ走り出す。

ウオオオオ！！

ゴッ！

。

不良達が、私に向かってパイプを振りかぶってこっちに走ってくる。
私はとっさのことに身がすくんで、目をつむった。

ゴッ！

……あれ？痛くない……。

目を開くと、政人の背中が見えた。
政人は頭でパイプを受けていた。

「ま、政人！」

私は政人の表情をうかがう。顔には、一筋の血が流れていた。
そして、笑っていた。

……ま……まずいかも……。

「てええめええええらああアアア！！」

政人は右手を振りかぶる。

誰でも避けれる遅いパンチ。

だけど、相手は政人の声に怯んで、避けられなかった。

パンチは相手の左頬に当たる。

相手は人間じゃなくて人形じゃないのかと思うほど吹っ飛んだ。そして、地面に転がると、目を見開いたまま痙攣していた。

「そんなに殺されてえか！だったら殺つてやるよ！」

政人はそう言うと、不良二人に突っ込んでいった。

一人が怯えながらも、前に出る。

「お、オラア！」

不良が警棒を政人に向かって振り下ろす。

政人はそれを腕で受けた。

「ヒヤハハハ！！」

政人は笑いながら左手に持っていたパイプを横殴りに振った。

パイプは見事に相手の側頭部に当たった。相手は白目をむいてよろめく。だけど、政人は攻撃を止めない。

パイプを振った勢いを利用して一回転。もう一度、同じ所にパイプを打ち込む。そして足を踏張り、上半身だけその勢いのまま捻る。

「イッツツチまいなア！」

気付いたときには、拳は相手の鼻っ柱に当たっていた。
相手は吹っ飛び、後ろの壁に全身を打ち付けた。

「ヒヤッハアア!!」

あーあ、キレちゃった。

政人ってキレるとこうなっちゃうんだよね。もうキャラ違うよね。
恐すぎ。

でも、こんなに強いけど、残酷になるだけで力は変わらないみたい
だよ。

ただ、いつもは手加減してるから、強くなったみたいに見えるんだ
ね。

というかギャングチームに入ってた頃はさらにキレやすかったんだ
から。迷惑以外の何物でもねーよ!!

……こほん。まあ、とにかく止めなきゃだね。

政人は残り一人に向かってパイプを振り上げていた。相手は腰を抜
かしながら、

「ほんつとダメ!最近の政治はほんつとダメ!」

とか、なんか意味不明な事喋ってる。

私は政人の背後に立って、拳を握り締め、頭に狙いを定める。これ
痛いんだよねあゝ…。

「目を…さませー!」

ゴッ！

。

ぐあー！いつてえ！

後頭部の激痛に思わず涙が出てくる。

後ろから攻撃するなんて…

「卑怯だぞ！」

……あれ？里奈だ。

里奈は自分の拳を痛そうにしながらさすっている。

ん……………？俺なにやってんだっけ？

「そつだ！不良達は！？」

俺は周りを見る。

不良達はみんな地面に突っ伏し、動く気配さえない。唯一意識がある奴は、

「ダメなんだ…政治はダメなんだ…」
と、呪文の様につぶやいている。

「……………これ、里奈がやったのか？」

里奈を見ると、なぜかため息を吐いていた。そして口を開く。

「うん、そうだよ。」

「……マジか……」

……女って恐いな……

俺はしゃがんで、ぶつぶついつてる奴の肩の上に手を置く。

「オイ。仲間を起こして行きなさい。」

そいつはつぶやくのを止め、顔を上げた。

「い、いいんですか!？」

「ああ。俺はおまえ等がやってきたから反撃しただけだからな。俺の方からおまえ等をやる気は無い。」

「やった！ありがとうございます！これもきつと政治のおかげだ！」

いや、俺のやさしさのおかげだろ。

そいつは他の奴等を起こすと、逃げるように裏路地を去っていった。

起きた奴等は、こちらを見て怯えていた。
里奈………どんだけひどい事したんだ……？

「あつ！私バイトの時間だ！」

「オイオイ。しっかりしろよ？」

バキッ

「おまえがしっかりしろ！」

里奈はそう言うと、走って裏路地を去った。

い、いたい……わけわかんねえ……。そうだ！ジャックは……

俺は階段を見る。

骨組みだけの簡潔なその階段には、ジャックの姿は見当たらない。

上まで行ったのか……。

俺はため息をついて、6階建ての階段を上りはじめる。

。

「や……やっと見つけた……」

ジャックはご丁寧に一番上まで上っていた。

6階のドアに背中を預けていたジャックは、俺を見るといつきに笑顔になり、立ち上がる。

「政人さん！やっつけてくれたんですか！？」

俺はとりあえず膝に手を付き、呼吸を整える。

「ああ……」

「さすが政人さん！さすがおやじ臭でゲリラ！」

「どんな奇襲攻撃！？たしかに満員電車で奇襲された事はあるけどさ！同じ穴のムジナだよ！」

「ああ、お菓子村のじーさんね。」

「どのじーさんだよ！そんな夢のような村なんて無えよ！！」

「政人さん。夢はあきらめたらそこで終わりだ。あ、今良いこと言った。」

「勝手に喋って勝手に納得してんじゃねーよ！！」

俺はジャックの頭に手を置く。

「ほら、帰んぞ。」

「政人さん……それが……」

「オイ！そこにいんぞ！」

下で誰かが叫ぶ。

俺はてすりに手を付き、下を見下ろす。下の奴は、俺達の方をむいていた。

「え……？どついう事……？」

「いやあゝ、実はさっき言った事をもう一回やってたんですよ。もう世の中腐ってますよね」

ジャックは無邪気な笑顔を浮かべる。

「……………もういや……………」

俺はこの日、一週間分の体力を使った。もう金髪ボーイがトラウマになりそうだ……………。

あ、これサブタイトルに使おう。

第21話 ああ……金髪ボーイがトラウマになりそう……。 (後編) (後書き)

「……うーん……もうお腹いっぱい……」
「……くらー」

「完」

第22話 フタゴ……？アネ……？オンナノコ……？……ロリ？

「昨日は散々だったな……」

登校中。俺は思わず不満を声に出してしまう。

本当に昨日は散々だった。あのあと、ジャックと逃げまくったが、結局は俺が全員倒した。その夜は頭が痛いわ全身筋肉痛だわで、まったく眠れなかった。

校門に辿り着き、下駄箱へ歩いていると、見慣れた奴等が声を掛けてくる。

「政人。おはよう。」

「おう、A。おはようさん。」

「え？Aって何？」

「あ、いや、おまえの名字の頭文字だよ。」

「俺の名字は木ノ下だけど？」

妙な場面で名字発覚！

「おはよう！」

「おう、里奈。おっさん。」

「何おっさんって！？朝っぱらからおっさん呼ばわり！？」

「おはようさんの略だよ？まさか知らねーの？」

バキッ

「すいません知らないですよね。」

「ふふ、朝からデンジャラスね。」

綾ちゃん。立ち振る舞いは優雅だけど、デンジャラスはないと思う。

「綾、氷室っち。おはよ。」

「綾ちゃんおっさん。」

「やだ、政人さんったら朝から私をおっさん呼ばわりですか？あ？」

「すいません。」

……キャラ違うね？

「……フッ……」

「おいこら氷室っち。それがテメーの挨拶か？」

「アンタ等朝からデンジャラスだな。」

「なにそれ！？新しい球団！？俺等よりテメーの頭の方がデンジャラスなんだよ！なんだそれ？じいちゃんの陰毛か？」

「フツ…そうだよな……つてなるかボケエエエ！」

こいつ朝からテンションたけーなオイ！

俺達は下駄箱の前で全員集合した。

あ、克也忘れてた。

「こんな所で集まっていたら教師に注意されるぞ？」

「お、忘れられた存在が来た。」

「え？泣いていい？」

「克也おはよ〜！」

「柏木さん、おはよう。」

「ヨウ、柏木。」

「よう、過去の人。」

「政人はいつでも情け容赦ないな〜…ハハ…ハ………」

あつ、本当に泣いちゃった。

……ま、いいや。

「」「よくねえよ！」「」

皆俺の心が読めるらしい。恐ろしい奴等だな。

「政人さん、おはようございます。」

「おう、ジャック！おはようまでまでまで！」

靴を履き変えようとしていたジャックの肩を掴む。

「……えーと……君はなんでここに居るのかな？君はロリータだろ？」

「なんですかその理由！？僕は15歳！高校1年生ですよ！それで引越したから、ここに転校したんです。」

……あーあ、ロリータのくせに。

「政人。この子知り合い？」

「あ、初めまして。」

ジャックは俺達に向き直り、手を前に組む。

「1年生の、斎藤充です。政人さんとは従兄弟なんです。よろしくおねがいします。」

ジャックはそう言うと、深々と頭を下げた。

「こいつの容姿に騙されてはいけない。とんでもないデンジャラスロリハーフボーイだからな。略してデンジャラスロリハーフボーイだ。」

「なにこのボンクラ？略せてないし。あ、僕の事は充とか名前で読んでください。」

……なんか今ものすごくバカにされたような……。

「あ、じゃあ僕行きますね。オイ、ボンクラ。テメーもちゃんと勉強しろよ?」

……あれっ?おかしいよね……?

「あつ!今日の1限目は抜き打ちテストなんだ!私行くね!」

綾ちゃんは慌てた様子で靴を履き変える。

「海くん、さぼっちゃダメだからね!ボンクラ、テメーもちゃんと勉強しろよ?じゃあね!」

……ん?

キンコーンカーンコーン

「マズッ!私たちも早く行かなきゃ!オイボンクラ!いつまでつつ立ってんだよ!」

里奈も慌てながら靴を履き変えるってあれ?おかしいな。みんな俺をボンクラ扱いか?

「オイボンクラ……フッ……」

海テメーは呼んだだけか?

ポンッ

ん？なにこの肩に乗ってる手は。

横を見ると、克也がうれしそうに俺を見つめている。

「過去の人とボンクラ。いいじゃないか。共にいこう。」

なにがいいの？不安材料だらけですけど？そしてボクのあだ名はボンクラに決定なんでしょうか？えーと、まだまだ言いたい事があるのですが、場面が変わるらしいのでこのへんで。次は昼デスヨー。

。

……えーと、昼です。見事に変わりましたね。

えーと、ボクは今、屋上のフェンスに背中を預け、タバコをふかしています。一人です。

えーと、昼メシはありません。忘れました。それを気付いたのが遅すぎて、購買には不人気のパン一つしかなく、それを泣きながら食べました。

購買に残った一つのパンは、涙の味がしました。

えーと、だれか食料をください。栄養と言う名の人生の活力をください。

ペチャッ…

えーと、鳩さんがボクの頭にフンをくれました。
これを食べると言うのですか？文字通りくそ食らえと。うまいです
ね、鳩さん。

……うん。頭洗いに行こう。

。

俺は4階のトイレの近くの水道で頭を洗っていた。

くそ、あの鳩……。丸焼きにして鳩達に共食いさせてやろうか。

俺がそんなことを考えていると、ふと、横に人影が見えた。

「…もしかして、政人さんですか？」

落ち着いた物腰の女の子の声。

綾ちゃんか……？

俺はそう思い、水をかぶりながら声のした方向に顔を向ける。

そいつは正面を向いていた。端正な顔に、艶のある金髪が強く印象
を受ける。

って、ジャックじゃん。

「おう、政人デスヨー。いやあ、鳥のフンを頭に受けちゃってさ。まだついてる？」

「いや、もう大丈夫ですよ。」

俺は安心して、蛇口をひねり、水を止める。髪に浸透した水分を、手でできるだけ押し出す。

それをあきらめると、髪を掻き上げて顔に濡れた髪がつかないようにする。

髪から水滴がたれるが、もう十分だろ。

「ホント鳩うぜえ……」

俺はジャックの下半身を見て絶句する。

スカートを履いているのだ。

「おまつ…おか…」

「初めまして。」

…初めまして？

そいつは俺に向き直ると、深々と頭を下げる。艶のある長い金髪は、その動きに習ってサラサラと揺れる。そして頭を上げると、ほほ笑みながら喋りだした。

「私は1年生の斎藤^{みちる}満です。弟の充とは、もう会っているんですよ。私は充の双子の姉なんです。」

フタゴ…？アネ…？オンナノコ…？

あ…あの野郎…。姉貴がいるんだったら言えっつーの……。

「み…満か…よろしく……」

俺はそう言いながら、手を差し出す。彼女はほほ笑みながら、俺の手を握った。

「よろしくお願いしますね。あ、名前は呼び捨てでいいですよ。」

…や…ヤツタアアア！！

新キヤラは金髪美女ですよ！この前はお妙とかいうフザけたカマ野郎だったけど、今度はマジだ！マジだアアア！！

「あ、そうだ。政人さんお昼まだですか？私、間違えてお父さんのお弁当持ってきてちゃったんですよ。良かったら一緒に食べませんか？」

…きゅ…救世主…？あなたは救世主ですか？

「へい！あつしでよければ喜んでついていきやすぜ！」

俺がそう言つと、フフ、とミチルは口に手を添えながら微笑んだ。

……あー、この子が俺の家に挨拶に来て、ジャックみたいに俺のベツトに寝てくれてたら、どんなに良かったか……。

「じゃあ、屋上でも行くか。」

「はい、そうですね。今日は天気もいいし。」

では、夢の世界へしゅっぱーっ！

俺とミチルは階段を上り、俺は屋上への扉を再び開く。

そこはさつきと何も変わりの無い、いつも通りの屋上だった。まあ、こんな短時間で屋上に変わりがあった方がおかしいけど。

俺は屋上のフェンスの近くに腰掛け、再び背中を預ける。

ミチルは俺の向かいに行儀よく座った。

「これです。大きいでしょ？」

ミチルはそう言いながら、手に持っていた弁当を置いた。青いフロシキに包まれたその弁当箱は、なかなかの大きさだ。あのおっさんでさえからな。

フロシキの結び目を丁寧にほどき、フタを開けると、その大きな弁当箱にはギッシリと色々な食物が入っている。

たしかに、女の子一人でこれを食べるのは厳しいかもな。

「ん……？箸、一膳しかないよな……。」

「そんなの。一緒に使えばいいじゃないですか。」

ミチルは当たり前のように喋る。

「…………マジかつ？」

「それとも、政人さん、お箸もってるんですか？」

「持っていない！持っていないよ！持っていてそんな物は心の食器棚にしまっってしまうさ！」

「フフツ、そうですか。じゃあ、食べましょうか。」

ミチルは箸を取り、弁当の中のおかずを一口食べる。

「さすがお母さん！おいしいです！政人さんもどうぞ？」

ミチルは俺に弁当箱を差し出す。

待ちに待ったこの時！

これにはミチルの母、ビク・ママの（見たことは無いが）愛情が
いっぱい詰まったお弁当なんだねっ！
では！いただきまーす！

俺は差し出された弁当箱を受け取ろうとした。その時。

「斎藤くん！！」

うおっ！

ビクッ

ポト……

俺は声のした方、屋上の扉をゆっくりと見る。

そこには、一太郎が全身白タイツで立っていた。

一太郎は俺達へと駆け寄る。そして、いきなり土下座をした。

「おねがいします！もう一人モジモジ君は無理です！これで勘弁してください！」

一太郎が背中を見せると、“大日本帝国”と、震えた文字で書いてあった。

「…フッフッフ…一太郎君、答えはノーだよ…」

俺は体育館裏へ連れていき、今度は全身白タイツではなく、全身網タイツを着させ、日本一のストリップパーになれば、一太郎の将来を決めてやった。

うんうん、これで一太郎のパパとママも安心だな！！

第23話 ふおっほづ。ふおっほづ？ふおっほづ！！（前編）

カー…カー…

よう！俺政人！

今、学校の校門を出て、帰っているところだ！
別にカラスが鳴いているから帰るわけじゃない。俺はそんな物には
左右されない。

「ほほづ。君が政人君かの？」

不意に聞こえた声なんかには俺は振り返らない。

不意に聞こえる声は確実に迷惑事だと学習した。

俺は前を向いたまま、その場を立ち去ろうとする。

「きつきみ！政人君なんじゃろ？政人君？待たれい！待ってください。
い。」

俺はため息をついて、その声の方向に振り返る。

そこには真っ黒のセダン。後部座席には、声の主だろう人物が怪しく
ニヤついていた。

初老。白髪でてっぺんハゲ。残った白髪は殺傷能力がありそうな程
バリバリに尖っている。口にはヒゲをたっぷり蓄えている。服装
はもちろん白衣。

うん。博士だな。悪い博士。

俺がその車に近づくと、博士は車から降りて、杖を両手で持ち仁王立ちしていた。中々背が高いな。185くらいか？

「待っておつたよ。君を。」

相変わらずニヤつきながら、俺に話し掛けてきた。

「よう、博士。調子どう？」

俺が話し掛けてた途端、博士は表情を歪ませた。

「貴様なぜ私が博士だと知っている！？」

「明らかに博士だろ！しかも悪い博士な！」

「善悪というのに、確定した定義は無い。善悪は人の価値観が作った勝手な区別、いや差別なんです。」

「へえ、そうなの。で？俺になんか用？悪い博士？」

「善悪というのに、確定した定義は政人君！どこに行くの！？わかった！もうこの話はしないから！そうさ、おじさんは悪い博士さ！どうしようもないギザギザハートさ！」

「で？俺になんか用？」

博士は表情を戻し、再び怪しくニヤつく。

「ふおっほう。それがのう。政人君。私の実験に付き合ってほしいのじゃ。この間のケンカをたまたま見かけてのう。観察させてもらった所、君の運動能力はたいしたものじゃ。この実験は相当の運動能力を持つ者がいないとできん。たのむ！礼はもちろんはずむぞ！」

「博士ふおっほうってどんなだよ！」

「話を聞けエエエ！！ジジイ特有の雰囲気出そうと思ったたらちよつと噛んじゃったんだよ！あんまりそれに触れないで！恥ずかしいから！」

「そか。恥ずかしいのか。うんうん。じゃー！」

「待て待てまでーい！なぜ逃げる！」

博士は俺の肩を強く掴み、離そうとしない。

「離せ！そんなめんどくせー事やってられっか！」

俺は足に力を込めて、無理矢理前に進もうとする。

その時、博士はいきなり肩を離し、俺は勢い余って前につんのめる。

「うわっ！いきなり離すんじゃねえ！」

俺は振り向いて博士を睨む。博士は黙って右手の人差し指を立て、俺に向けていた。

「……なに？はなそ？」

「100万。今回の実験の成功報酬じゃ。」

「……………」

「それでも断ると言うなら……………」

「斎藤くん！」

校門から聞こえた声に、俺は校門に視線を移す。

校門からは、一太郎が必死の形相で走ってきている。もちろん全身網タイツだ。ブリーフは履いているが。

「たのむ！網タイツだけは許してくれエエエ！！……………え？」

ドン！

いきなり突っ込んできた車を避けられず、一太郎は数メートル吹っ飛び、ピクピクと痙攣している。

「君もあなる。」

博士は表情を崩さずに淡々と言う。

「い……………一太郎！！」

俺は倒れている一太郎に駆け寄る。丈夫な奴で、気を失ってはいるが、大事には至っていないようだ。ただの脳震盪だな。

…これは…ひでえ……………。

「オイ！とんでもないことしてくれたな！」

「クツクツク。」

「網タイツ破けてんじゃねーか！」

「とんでもない事ってそれ！？」

「これ俺の自腹なんだぞ！ああー、まだドンキに売ってつかない……？」

「おまえが着せてたの！？どんなイジメ！？それ着た時の精神への負担はかなりのもんだぜ！？」

「大丈夫。こいつは選ばれし勇者だから。こいつ勇敢だから。」

「どーせテメーが選んだんだろ！こんなのまさに勇ましい者しか着ねーよ！」

「プツ。オイ博士、見てみるよ？こいつのブリーフ戦隊物だぞ。」

「おまえブリーフの前にわかる事あんだろ！！引かれてるんですよ！車に！断ったら君もこうなるといふ警告をしたんですよ！」

「ふーん。“した”んだ？おまえが。」

「あっ！」

「こりゃあ、犯罪モンだな。なあ、博士？」

博士は事態に気付いて、狼狽している。

俺は博士に近付き、肩に手を置く。

「そうだ、引き受けるぜ？実験。200だったよな。」

「……ふおっほう……」

いやゝ！かなりおいしいな！200手に入れたらアレ買ってコレ買って……

「待った！ボクも行く！」

いきなり甲高い大声が聞こえたかと思うと、前から制服姿の女が走ってきた。

「…は…ハル！」

「フッフッフ……聞いちゃった。200万を山分けかぁ…。コレで手が出せなかった駆動系が買えるぞ……。」

「いや、帰れよ。」

「こっくりさん一緒に行つてあげただろ？ボクの事勝手にだきしめただろ？」

「……ふおっほう……」

ハルは勝ち誇った顔をして、へへ、と短く笑った。

「じゃ、行きますか！つてキャー！ツ！！」

ハルがいきなり叫び声をあげた。ハルを見ると、一太郎がハルの足にしがみついていた。

「200万…僕もつれていけ…」

「いや、病院行けよ。」

「ま…待ちなさい！」

博士が焦った顔をして割り込んでくる。

「政人君。だれでもというわけにはいかないんじゃないよ。最初に言っただじやろ？相当の運動能力を持った者じゃないとできんと。」

「なんだ、そんな事？ボクは大丈夫だよ？」

ハルはそう言うと、一太郎を蹴り飛ばした。さつき車に引かれた時に強打した場所を蹴られたらしく、一太郎はもんどりうつっていた。

「見ててよ。」

ハルは右足を半歩前に出し、態勢をかがめる。そしてバネの様に後ろに飛び上がると、空中で華麗に一回転。見事、足から着地した。

「どうだ！」

ハルは自慢げに鼻をならす。

「うん、水色。」

「てええめええらああ!!」

「ふ、ふん! そんなの僕にだってできる!」

一太郎は立ち上がると、右足を半歩前に出し、態勢をかがめる。そしてバネの様に後ろに飛び上がると、空中で華麗に半回転。見事、頭から着地した。

「ガピユ!!」

「……………」

俺とハルが黙って一太郎を見ていると、博士が何度かうなずき、口を開いた。

「お嬢ちゃん。合格じゃ。タイツ。テメーは帰れ。」

「な、なぜだ!」

一太郎が頭をおさえながら、涙目で抗議する。

いや、当たり前だろ。それじゃバック転じゃなくて自爆転だから。俺うまいな。

「なんで頭を打ったとき“ガピユ”なんだよ! 普通ふおっほっ。だろっが!」

不合格の原因それ！？ただふおっほうを正当化したいだけじゃないの！？

「わかりました！ふおっほう。コレでいいですか！？」

「軽々しく口にすんじゃないー！テメーにふおっほうがわかるかぁ！
！」

ふおっほうってそんなに偉いの！？テメーが“ほっほっ”を噛んで生まれた偶然の産物だろーが！

「ふおっほうって言うのはな、愛と勇気と憎しみって感情が込められてんだよー！」

どんだけ複雑な感情！？てかそんな言葉を俺に言ってたの！？

「わかりました！やってみます！」

一太郎はそう言うと、俺に顔を向ける。

「…ふおっほう。」

うるせーよ！

「上出来だ！」

うぜーよ！

「ボクも政人に言う！」

帰れよ!!

一太郎は喜びにうち震えていた。

「やった…これで僕も実験に参加できるんですね!？」

「え?無理でしょ。おまえ運動神経ないし。」

「……ふおっほう……」

。

車で連れていかれた先は山奥。そこにはいかにもな研究所が立っていた。

そして、そのとなりには真新しいコンクリートの建物。

「新しい方じゃ。」

車を降りると、博士がいかにもな雰囲気で怪しく喋りだす。

「では、君達に実験の概要を説明しよう。それを一言で表すと……」

博士は一度呼吸を置くと、目を見開いて、言った。

「迷路、じゃよ。」

第24話 来襲？召喚師バア様（中編）

迷路。

それは難解なまでに入り組んだ道。ならびに場所。

俺は博士が迷路と言った建物の入り口で、博士に質問をする。

「迷路？博士、あんたそんなくだらねーことしてたの？」

「くだらない……か。男とはくだらない事ほど好きなものはない。いや、男そのものがくだらないのじゃ。」

「だよね〜。ホント男ってくだらないよ。そう、それを理解したのは中学3年生の頃からです。」

おまえその頃に何があったの！？

「そう、あれは最後の夏休み……ホワワワァーン……（回想）」
いやしないから！ていねいに効果音までつけてるけどさ！

「ほほ、私もあの頃は若かった……。恋ってなに？新発売のペプシ？みたいな。」

どんな勘違いだよ！勘違いの仕方おかしいだろ！

「そう、あれは最後の夏休み……ホワワワァーン……（海草）」

海草！？海草シーンってこと！？

……って、え？ホントにするの！？

。

アレは、高校生最後の夏休みの事。

。

「………終わり！？ただ同じ事2回言っただけじゃねーか！
。なんていらねーよ！！」

「。を使ってみたかっただけだよ（笑）」

「うぜーよ！！その（笑）うぜーよ！！」

「……ごめんなさい…（汗）」

「それがうぜーんだよ！おい、ハル！おまえもなんか言っただけだよ
！」

ハルは空を仰ぎ、一雫の涙を流しながら目を閉じていた。

「あの時、トコロテンを右の扉に投げ付けていれば……………」

おまえの最後の夏休みに何があった！？

「……まあ、ハルはほつといて……。博士、なんか実験内容とか注意事項とかあんだろ？」

「おお、悪い悪い。そうじゃったの。（怒）」

なんで怒ってんの！？

。

「……ふむ。」

俺は口に手をあてながら、少し俯く。

どうやらこの実験は、本当に何の考えも無しにやっているらしい。前の開発で、一発当てたらしく、少し暇になった所で、この迷路を思いついた。で、どうせ資金も有り余っているし、やるなら本格的にやるべー！みたいな感じで、作つたみたいだ。

そしたら本格的に作りすぎて、迷路に入れる奴が限られてしまった。バカだな。

作つたのに中に入れないとなつては、作つた意味が無いので、実験体を探していたら、たまたま俺の喧嘩を見かけた、との事だ。

「いやあ、幼い頃から大の迷路好きでの。自分の手で迷路を作るのは夢だったのじゃ。」

博士はかなり興奮ぎみに喋る。

「じゃあ、俺達はこの迷路のゴールを目指せばいいんだな？」

「うむ。実験データを元に、また新たな迷路を作るんじゃない！」

…ん？でも……

「別にゴールはしなくてもいいんだよな？」

「うむ。しかし、ゴールには、実験報酬とは別に、50万がある。

まあ、ボーナスみたいなもんじゃな。」

「ご、50万！？

「まあ、説明はそんな所じゃな。迷路の説明をしたら意味がないじやろ？」

まあ、そうだな。

「じゃ、さっそくはいりますか！おい、ハル！行くぞ！」

「待つて！行かないで！ボクのどこが悪いの！？遊び心で誕生日に100万本のトコロテンを送っただけじゃないか！」

それはダメだろ。でろーんってしてんじゃない。ってかこいつトコロテン100万本数えたの！？無駄な事をこくろうさま！

「中に入ったら、この入り口はしまるからの。」

「ああ、わかった。」

俺は回想中のハルを引っ張って、建物の両開きのドアを開け、中へと歩みを進めた。

中に入ると、明かりは壁についているたいまつのみで、薄暗い。

俺達の前には、横に5人ならべるくらいの階段が一直線に続いている。壁のたいまつもそれに習い、無数にある。

「じゃ、下りますか。」

「うんつ。パーツの為！気張っていくぜ！」

おお、はりきってんな。

「じゃ、政人。前よろしく。」

「おう！つてええ！？あんだけ張り切っておいて！？」

「あ？テメーの家、トコロテンまみれにしてやるつか？」

俺が先頭になり、階段を下りていく。

しばらく歩いていると、先に扉が見えてきた。

しかし、扉は迷路らしく、

「3つか……。」

ハルは何かに気付いたらしく、扉に近づいてゆく。

「紙が張つてあるよ。なににな……」左は地獄の部屋。右は地獄の部屋。真ん中は田中さんの部屋。お薦めはもちろん田中さんです。」

「うん。おかしいね。」

地獄の部屋と田中さんの部屋は同等なの？

「お薦めされちゃあしょうがない。」

入るの！？田中さんの部屋に入るの！？絶対田中さんがいるぜ！？

「ほら、行こうよ。」

ハルはそう言いながら、俺の腕に組みつき、引っ張る。

ハルが俺の腕にぴったりと体をくつつけるもんだから………あ、ヤベ。鼻が修羅場。

ガチャ…

俺達はそのまま田中さんの部屋に入った。

「こりゃアアア！」

部屋にはヨボヨボのお婆ちゃんが、杖を振り回しながら怒っていた。この人が田中さんと思われる。

部屋は真っ白の無機質な壁に、床は真っ白なタイル。物は何もない。広さはかなりのもので、次の扉がタバコの箱並に見える。横も縦も同じくらい広い。

田中さんは部屋のド真ん中にいる。

……寝そべりながら。

「こりゃあー！もつとこつちにこんかー！」

ああ、めんどくさいんだ。

俺達はお婆ちゃんの近くに行くと、お婆ちゃんはいきなり持っていた杖を投げ付けた。

あぶ…っ！

ハルが驚いて手を放してくれたので、俺はすんでの所でそれを横っ飛びにかわした。

「何すんだテメー！」

「そつだ！危ないよ！杖からは電気や炎や、ましてや召喚獣だって出るんだぞ！てゆうか出せよ！」

「ハルちゃんお婆ちゃんに無理言っちゃいけない！出来る事と出来ない事があるんだよ？」

「シャバ増！なめるなよ！ワシにかかればそんなのおちあのこさいさいだよね？」

え？なんで俺に聞いた？

田中さんはそう言うと、投げた杖を拾った。てか、投げた意味あったの？

「出してやろう……禁断にして最強の召喚獣を……。」

な、何を出す気だよ……？

「死んだジイ様！」

やめとけよ！

田中さんは杖を強く握り締めると、目を瞑り、呪文らしき言葉を呟きだした。

「ナムアミダブツナムアミダブツ……」

おい！そんなの唱えたらジイ様出てきた瞬間に成仏しちゃうよ！

ん？ていうか無理だろ！どーせ屁でもこいて、召喚成功じゃあ！とか言っつのがオチだろ？

「んんんん……！ハアアアア！」

プウ

やっぱりな！

「召喚……成功じゃ……」

田中さんが呟いた瞬間、田中さんの着物が揺れだした。そして、中から何かかもぞもぞと出てきた。

「…よ…よば…呼ばれて飛びで…飛び出て…フウ…」

ジイ様変なところから出てきたよ！しかも飛び出てねーじゃん！物凄く苦しそうに出てきたじゃん！

「…ば…バア様や…あんまり呼ばんといってくれ…疲れるんじゃないよ………」

「あ？なめたクチ聞くんじゃないよ！」

「ひどいな…。ていうかジジイ酷使してもあんまり意味無くねーか？」

「なに！？うちのジイ様なめるんじゃないよ！ねっ、ジイ様？」

「うーん……！！！」

元気よく曖昧に答えたよ！

「ジイ様しっかりせんかい！…よし、それならタッグマッチ勝負じゃ！」

今、ジイ様が、えっマジで？って顔してたけど？

「それおもしろそう！政人、やろっよ！」

「いや、やんねえよ。それよりも早いとこ次の部屋に行こうぜ?」

俺がそう言つと、バア様は何故か笑いだした。

「クッククク…次の部屋への扉には鍵が掛かっておる。その鍵はもちろん……」

バア様が持つてゐるってワケか……。

「フン…やるしかねえみてーだな。」

。

俺はジイ様と、ハルはバア様と対峙している。

ジイ様もやつとやる気になったようだ。

「かかつてこいよお! もういいよお! どうせワシの人生は夢も希望も良い嫁さんもないさ!」

というか、もう自暴自棄だ。

「若造! 上等だよ! 行くぞオオオ! でも痛くしないでね。」

ワケわかんねえよこのジジイ!

ジイ様は奇声を上げながら、物凄い形相で向かってきた。

「又ヒヨオオオあつ。」

あ、つまづいた。

「ブヌツ」

あ、顔からイッた。

ジイ様はその態勢のままピクピクと痙攣している。
バア様がそれに気付き、ジイ様に駆け寄っていく。

「ジイ様アアア！」

バア様は走った勢いのまま、ジイ様のみぞおちに爪先を綺麗にお見舞いした。

つて、ええ！？こいつ何しに来たの！？トドメさしに来たの！？

ジイ様はピクリとも動かなくなった。

「……………よし。」

「よし。じゃねーよ！ババアテメーの一撃で戦闘不能だよ！ジイ様呼んだ意味ねーじゃん！」

「敵味方どちらであろうと、動けそうにない奴にはトドメを刺す。
これがワシにできる唯一の慈悲じゃ。」

ここって戦場！？田中さんの部屋は戦場だったの！？

「隙ありい！」

その声と共に、ハルがバア様に向かって飛び蹴りをくり出した。バア様は咄嗟のことに避けられず、腕で防御をしたものの、蹴りの威力に堪え切れずに後ろに吹っ飛んだ。

ハルは見事にジイ様の上に着地して、よろめくバア様を指差した。

「ババア、テメーここをどこだと思っている？田中さんの部屋だぞ！！」

いや、なんか田中さんの部屋イコール戦場みたいになってるけど。

「クッ……忘れておった……。ここは田中さんの部屋……。そう、戦場じゃ。」

あ、やっぱり戦場なんだ。

「仕方がない……。ワシも繰り出してやろう。……………飛び下痢を！！」

繰り出すな！絶対に繰り出すなよ！てか飛ばすなよ！

「飛行能力のある下痢……。そんな技を出されたら、ボクはもう終わりだ……。」

ホントだよ！人生おしまいにしたくなるから！

「……と……いいたい……所だが……。」

バア様はそう言うと、力無く地面になだれるように倒れた。

ってそれはいいけどさ。ハル、おまえいつまでジイ様の上に乗ってるつもり？

「バア様！」

あ、やっと退いた。

ハルはバア様に駆け寄っていった。
そしてバア様の上半身を抱え込む。

「どうやら…小娘、貴様の勝ちのようじゃな……」

「バ、バア様……。」

なんか、どもとと尊敬してんのかけなしてんのかわかんねえや。

俺もバア様の所に歩み寄る。

「ババア様、約束だぜ？ほれ。」

俺はそう言いながら、バア様に手の平を差し出す。

「…そうじゃったの……」

バア様は俺に杖を渡した。

「これが…次の部屋への鍵じゃ……。」

ふーん、杖が鍵だったのか……。

「うし、ハル、行こうぜ。ババア様、博士に医者呼んでもらえよ。」

「うん…。バア様、元気でね…。ボク、バア様のことを忘れないから……。」

「…小娘も元気での…ワシ等は今もう戦友じゃ…。」

え？戦友ってなんの？おまえ等は何と戦ってたの？

俺とハルは次の部屋への扉に行き、大きな鍵穴に杖を差し込むと、鍵の開く音がした。

「開けんぞ。」

「…うん。」

この迷路はいつまで続くのやら……。

第25話 だって若い子がお金持つとイケないことするでしょ？母の言い訳

扉を開けると錆びた蝶番の音がする。

扉の向こうには、下へ向かう階段がどこまでも続き、途中からは闇が広がり、終わりが見えない。

その光景は、何度目だろうか。

「なあ、迷路って階段を下りることを指すんだっけ？」

「ボクに聞かないでよ。」

この会話も何回もした。

田中さんの部屋を出てから、階段を下りて下りて下りて……。それだけしかやっていない。

俺達は、とりあえず階段を下りることにした。

あー……。なんか腹立ってきた…。

「俺は終わりの見えない迷路は大っ嫌いなんだよ！」

「ボクだってそうさ！終わりの見えないレースと希望の見えない明日は嫌いですから！」

「俺だってそうさ！見えそうで見えないぐらいのスカートは好きだけどね！」

「しらねーよ！」

バキッ

「あ、暴力ですかい？これだよ、最近のキャラはさ！俺殴られてはつかじゃん！」

「政人が殴られるような事ばっかするからだろ！この殴られキャラ！君の天職はサンドバックさ！」

「あ、いったね？いいの？俺、目覚めるよ？目覚めさせちゃいけねーもん目覚めさせるよ？」

「どうぞ？……うわぁー！」

俺はハルに後ろから抱きついた。そしてすっぽんのように離れない。

「ぐひよぐひよ！お持ち帰りぢゃー。ていくあうとぢゃー。」

一瞬、ハルが空気を吸い込んだかと思うと、一気にそれを吐き出し、それと共に強烈な後ろ蹴りを炸裂させた。

ボクのお股に。

「しょ……しよれは……はんしょく……」

ダメだ。二つのエナジーボールの内、一個は確実に破壊された。もう一つも三割の損傷が予想される。ああ、痛い痛い痛い痛い……。まさにドラゴンボールをドラゴンに驚掴みにされてる気分。

「まだまだあ！」

ハルはそう言うのと、俺の腕を掴んだ。足を折って少し態勢を屈められ、引っ張られると、俺の体はハルの背中に乗った。

そう思った瞬間、ハルが物凄い力で引っ張ると共に、上半身をさらに屈め、一気に足を立てる。

すると、俺の体は面白いように……っておいおい……。ココ階段だよ？わかるよね？ハルちゃんは、もうお姉さんだからわかるよね？

「とりゃああ！」

「…マジで……？」

グンッ

「死ぬってエエエ！」

俺は階段を転げ落ちました。コロコロ、コロコロと。ええ、そりやもうおむすび落としたじいさんのおむすびの様にね。

「痛い！」

体に、より一層大きな衝撃があつたと思うと、俺の体は止まっていた。

立ち上がって、体の具合をたしかめてみる。どうやら大きなケガは無いようだ。

「大丈夫っ？」

上を見上げると、ハルが笑顔で手を振りながらやってきた。

いや大丈夫くて。人を階段からたたき落として大丈夫くて。

大丈夫なわけないでしょうが！！

俺はそう思いながらうんこ座りをして、ハルを睨み付けた。

「な…なんだよ…？」

「いや、別に。確認作業してるだけ。」

ハルは不思議がりながら、ふと前を見つめると、目の前の何かを見つめたままになった。

「政人…これ…。」

ハルが俺の後ろを指差しながら言う。

俺は確認作業を中止して、後ろを振り返る。

そこには、先程と同じように扉があった。

ただ、違うのはその大きさと作りだ。

明らかに他の扉より豪華。

俺がそれを見つめていると、ハルがようやく俺のところまで辿り着いた。

ハルが、また何かを見つけた様で、扉に近づいていく。

「また貼り紙だ。なにになに……。」

何で見たことないものを見るときつて、なにになにっていうんだろうな。

何故“なに”を二回繰り返すのか。一回でよくない？

おさむ、コレ読んでみなさい。

えー、めんどくさいなあ。

お母さんの言うことを聞きなさい！

ああ、ハイハイ。

ハイは一回でしょ！

もう、わかったよ。えーと、なにになに……

「なには一回でしょ！」

「うわっ！……いきなりなんだよ！」

「あ、わり。おさむが言うことを聞かなくてさあ。」

「おさむ！？だれ！？」

「心の中で飼っている奴さ。」

「心の中におさむ飼ってんの！？なんか怪物よりタチわりいよ！」

「まま、続けて続けて……………続けては一回でしょ！」

「どうしたの！？またおさむが言うことを聞かないの！？」

「ちがう、今度はおさむのお母さん。」

「お母さん出てきた！？ファミリー総出で飼ってんのかよ！」

あ、やべ。これ話すすんでねーや。

「じゃあ、気を取り直して読んでくれ。」

「もう……………」

ハルがそう言いながら、読み始めた。

「『おめでとう！この扉の先はゴールです！でもこの扉は合い言葉を言わなければ開きません。合い言葉は全部で10文字です。（ヒント！最初の文字は“は”）がんばって！』だってさ。」

合い言葉？10文字ってかなり難しくねーか？

最初は“は”か。ふーむ……………。

俺が思案に耽っていると、ハルが急に笑いだした。

「ん？どうした？」

「簡単じゃないか！ボクはもうわかったよ！」

「おお！おまえすごいな！」

ハルは扉と向かい合って、大きく息を吸い込む。

「ひらけゴマ！」

バカ！？最初の文字も文字数も完全無視かよ！！

「あれ？違ったかな……………じゃあひらけゴマ！」

だからちげーんだよ！ーじゃあひらけゴマってなんだよ！なんも変わってねーだろ！

「うーん、ひらけグオマア！」

見直す所そこ！？発音の問題じゃねーだろ！

「ひらけゴマプリン！」

ゴマがプリン化しただけじゃねーか！ー！

「ひらけゴマもどき！」

にせもの！？

…………アホはほつとこ。

うーん…………10文字か…。パソコンのロックパスワードみたいなものだからな…………。

「ひらけスリゴマ！」

それである博士に関係する物……。たとえば、好きなものとか……。

「ひらけシロゴマ！」

好きなものか……。なんだろう……。最初は“は”だから……。

「ひらけクロゴマ！」

そうだな……。クロゴマとか好きそう……。

「ひらけアワセゴマ！」

あ、でもやっぱりどっちもある合わせゴマの方が……。って。

「うるせーよ！！」

「なっ……。なんだよ！人がせっかく頑張ってるのに！」

「おまえゴマにこだわりすぎだよ！なに！？こだわりの頑固ラーメン屋気取りですか！？今、考えてんだから静かにしてなさい！」

「もう……。ハイハイ。」

「ハイは一回でしょ！」

ギギギギ……

「「「……え？」「」」

扉はゆつくりと開き、やがて完全に開くと、錆びた蝶番の音も消えた。

「…開いたよ…。」

「ウソ…今のが正解なの……？」

俺とハルは、驚きの感想を言った後、互いに見つめ合い、同時に顔がほころんだ。

「「200まん！」」

俺とハルは同時に駆け出す。

階段は上りになっていて、上りきると扉があつた。

それを開ける。

光が差し込んだと思うと、そこは建物に入った時と同じ場所に出た。

俺の前には博士が居て、かなり驚いた顔をしている。

「まっ政人くん！ゴールできたのかね！」

「おう！余裕だぜ！こんなの！」

「ボク達にかかればね！」

おまえはバーサンに飛び蹴りかましたただけだな。

「さあ！実験代200万と成功報酬50万！」

「さあさあさあっ！」

俺達は満面の笑みで言う。それとは対照的に、何故か博士は冷や汗をかきながら、目を合わせようとしない。

「どうした？博士。」

「…ねが……い……」

「え？」

「……お金が無いんです……。」

俺達はいまだに笑顔だ。

「ハルう。どーするよ？金がないんだってよ？はっはっはっ。」

「じゃあ何で呼んだんだろうねえ？只働きさせるつもりだったのかなあ。ふっふっふっ。」

「ホントだのう？ほっほっほっ。」

「テメーが笑えた義理か？コラ。」

俺が博士のむなぐらを掴む。

「きっちりとお支払い頂くからな？オイ。」

ハルも博士のむなぐらを掴む。

「……1000回ローンじゃダメふおっほっ……？」

「ふざけんなアアッ！……」

バコーンッ！

博士は星になったよ。西に輝くふおっほっ座にな。

第26話 登場！バス停絡みの友基！

ジュー……

牛肉の焼ける音と共に、香ばしいブラックペッパーの匂いが鼻をくすぐる。

キッチンには白い煙が少し立ちこめているが、その煙さえもつまそうだ。

……グフフ……そう！今日はステーキなんです！

最近、金が無くて、まったく良い物食ってなかったから、今日は奮発しちゃったのですよ奥さん！

お肉屋さんで一番高い牛肉だよ奥さん！？

スーパーの肉じゃないんだよ奥さん！？そのへんわかってる！？

俺はミディアムレアに仕上げた牛肉を皿に盛り、リビングテーブルに置いた。

さてさて……。後はワインがあれば最高ですよ奥さん！

……奥さん？

……あれ？って、アアアアア！！
ワイン買うの忘れたあ！

俺は湯気の立つ、舌の上でとろけてしまいそうな高級牛肉を見つめる。

「……ちくしょう！ワインの無い高級ディナーなんて、ウオシュレツトの無い洋式と一緒にだ！！」

俺は牛肉から目を離し、玄関へと走った。

。

コンビニでワインを買い、急いで家に向かう途中、いきなり男の怒声が静かな住宅街に響いた。

「何だテメー！肩ぶつけやがってよ！一言も言わねーのかコラ！」

その声の主はかなり近く、目の前にある十字路の、左の曲がり角にいるみたいだ。そして俺はその曲がり角を行かなくては家に帰れない。

ああ……曲がりたくねーけど、遠回りしたら牛肉冷めちゃうし……。

俺は面倒に巻き込まれない事を祈りながら、左へと曲がった。

「おいテメー。びびって一言も喋れないってか？」

誰かに絡んできていると思っていたが、その声の主以外、人はいない。

……なにやってんだろ？

俺は立ち止まり、そいつを見る。

「テメー細い体してる割には、けっこう筋肉かてーじゃねーか。」

……そいつは、バス停に絡んでいた。

「なんか喋れって……言ってんだろ！」

男はそう言うと、バス停の時刻表の部分を掴み、バス停の名前が書かれた部分に、思いっきり額をぶつけた。

バカだああ！！

男はかなりよろめいて、額に手を当てて顔をしかめていた。

「ふっ、なかなかやるじゃねーか。」

バス停に中々もクソもねーよ！

「だからって調子のんじゃねーぞ！」

男は力任せにバス停を突き飛ばした。バス停は倒れそうになるが、ぎりぎりの所で持ちこたえ、石の重みで一氣に戻る。

そしてバス停の名前の部分が、男の鼻っ柱に命中した。

「うひゃっ!？」

男は反撃されると思ってなかったのか（当たり前だが）、かなり狼狽していた。

「テメー！上等じゃねーか！やってやんよ！」

うわー…バカだなー……。
てかバカだなー……。

……ん？つーか、こいつ、見たことあるような。

俺はそいつをまじまじと見る。

男はかなり小さい。160あるかないかぐらいだ。

短めのオレンジ色の髪に、半ば無理矢理パーマをかけている。

目は釣り目で奥二重。目付きは悪いが、なぜか悪そうな印象を受けない。

……こいつは…。

俺はそいつに近付き、話し掛ける。

「おーい、ともちゃーん。何やってんの？」

友基^{ともき}は俺のいる方を振り返ると、驚きの表情を見せた。

「その声は……政人!？」

友基は俺だとわかると、ニヤつきながらバス停を見た。

「へっ、いくらテメーが強くてもな、二人がかりじゃかなわねーだろ！政人、こいつどーするよ？」

「いや、どーするよって……。そつとしいてやれよ。こいつもずっと立っただままでつらいんだから。」

「なに言っただよ！そんな事言ったら、元クロスの名がすたるぜ！」

「いや、おまえそれバス停だよ？」

「……へ？」

友基はバス停を遠目でみたり、近づいて見たり、眉をひそめたりした後、バス停に手を置き、肩を震わせていた。

「なあ政人。俺ってなに？なにがいけなかったの？」

「……眼鏡しないからでしょ……。」

。

「はぐつむぐ。ひよへほひひは〜！」

テーブルの向かいで、友基は肉にがつつきながら、幸せそうに喋る。

今のうちに説明しておこう。

こいつは内田友基^{うちだともき}。

俺のいたチームの奴で、こいつとはけっこうウマが合った。

さっきの出来事でわかるように、こいつはかなり視力が悪い。

一回、あまりにも勘違いするから、眼鏡をしろって言ったんだけど、友基は

「眼鏡なんかしたら俺様の見える世界が変わっちまう。生まれたままの世界でいいんだよ。生まれたままの私を愛してほしいの！」とか言っていた。

要するに眼鏡が嫌いなだけだな。こいつ似合わないそうだし。

で、俺がまだチームに入っていた頃に、幻の秘宝を探しに行つてくる！とか言つて旅立つたはずだけど。

「おまえ幻の秘宝を探しに……つーかただ単に引つ越したんじゃないの？なんで戻ってきたんだ？」

幸せそうに肉を食っていた友基は、俺の言葉を聞いた途端、急に真剣な顔になった。

口に残っていた肉を、喉を鳴らして飲み込んだ後、友基は口を開く。

「俺、わかつたんだ。幻の秘宝は遠くには無い。」

「じゃあ幻の秘宝はどこにあんだよ？」

あれ？引つ越しの話じゃなくて、幻の秘宝の話になつてるんだけど。

「幻の秘宝は……そう、おまえさ……」

「ふーん、で？なんで戻ってきたの？」

「幻の秘宝は……そう、おまえさ……」

「ふーん、で？なんで戻ってきたの？」

「幻の秘宝は……」

「もう肉食わせねーぞ」

「いやあ、地元に戻りたくなつてさ。一人暮らしをしようと思ってきたわけさ。あ、肉食べていい？」

「ふーん、じゃあ高校は？」

「高校もここらへんに転校した」

「よく転校なんてできたな」

友基は、それは俺の、と言いながら自分の腕を叩いた。

どこの高校だろ。

……まさかね。

「…なあ、その高校の名前はなんて言うの？」

フォークに刺した肉を口に運ぼうとしていた友基は、そのフォークを皿に置いて、腕を組み、うつむいた。

「なーんつつたけなあ……」

覚えてろよ……。あ、いま不良の捨てセリフみたいになっちゃった。

「あつ、そくだ！ たしか……」

「たしか……？」

「こつこつ高校だ！いかれた名前だよな」

俺は無気力になり、テーブルの上に自分の頭を置いた。

「おい！何やってんだよ？おまえいかれてんな」

昂光高校。

まさに俺の通う高校だ。

こんな奴がいたらろくに勉強に励めない……。

……いや最初から励んでないけどさ。

俺は、はっとして顔を上げる。

「ああああアア！！俺の肉！」

友基の前にある皿。そこには肉のかけら一つ無かった。

……俺の肉……。高級牛肉……。

とろけるような舌触り。

俺はもうそれを確かめる事はできない。

「いや〜うまかった〜！久しぶりにうまいもん食ったぜ」

「なあ、おまえそれが幾らか知ってんか？」

テーブルの中心の、調味料がまとめられている所から、友基は楊枝を取り出し、口にくわえてシーシーと音を出している。

「あ？知らね。１００円とか？」

「１９８０円だバカヤロウ！」

「値段が細かけーよ！いいじゃねーか！また買えばよ！」

「じゃあ約２０００円……ってそんな事はどーでもいい！俺の肉だぞ！どうしてくれる！え！？どうしてくれるんだよ！」

「しらねーよ！食っちゃったもんはしょうがないべ！？あつ、じゃあこうしよう。３時間待て。俺様のブラウンゲートから出してやるからよ。へつくそくらえ！」

「うっぜー。君は本当にうざいんですね！うんうん。オラァ！」

俺は友基に向かって、拳を振り上げた。

「おっ！上等！食後の運動だ、やってやんよ！」

こうしていると昔を思い出す。友基とは、海と同じくらい殴り合っていた。

そうしていると、すぐにあいつが飛んで来て、強制的に止めるんだ。あいつ、何やってんのかな。

「アンタ等、今何時だと思ってるの！」

「はい、すみません」

管理人室。俺と友基は管理人の前で正座させられていた。

俺が思い出に耽るの止めて、取り敢えず頭に浮かんだ言葉を言つと、見事に友基とハモった。

「それで、なんで騒いでいたの？」

友基が膝を立てて、必死に喋りだす。

「聞いてくださいよ管理人さん！こいつったら、やつすい肉を食っただけで怒り出して、親にも殴られたことのない僕を殴ったんですよ！うつ……」

友基の言葉に、頷きながら聞いていた管理人が、その言葉を鵜呑みしそうになっていたのに気付き、俺も必死になりながら弁解する。

「ちつ違いますよ！僕は殴ってないんです！この人が家に勝手に上がり込んで、僕の夕飯を食べたので、僕がやめてくれって言ったらいきなり殴り付けてきて、一通り暴れたかと思うと、この人がずっとけたんです！だから僕は何もやってません！いてて……こりゃあ鞭打ちだ」

「なっ！ふざけんな！たしかに俺はこけたけどさ！こけてテーブルの角に鼻をオモツクソぶつけたけどさ！ここの目！これはテメーだろ！」

友基はそういいながら、俺に顔を近付け、自分の少し腫れた左目を興奮気味に指差す。

「え？なにそれ？目が腫れぼったいのは元からでしょ？現実を見ろよ。」

「うつせー！それはいつもねみーからだよ！奥二重だからだよ！眠気のない俺はすごいからね！きよし師匠並だから！」

「バレバレの嘘ついてんじゃないよ！『俺は奥二重』とか一重が言いそうな言い訳使いやがって！俺はモロ二重だからね！はっどうだ？この引きこもり二重が。」

「どうだじゃねーよ！二重がいつて訳じゃねーんだよ！テメーなんか死んだようなやる気のねえ目してんじゃねーか！俺なんかすごいからね！この鋭い瞳で刺激の欲しい女子校生を中心に大人気です。」

「今、誰に言った！？俺だつてなあ。このとろけるような甘い瞳で現代社会に疲れたOLさん。そんなに肩肘張らないで。」

「どこのOLに言った！？もう人気とかないしね！ここにはOLなんていねえんだよ！ここにின்のは、目の死んだ今時の若者と説教が趣味のいかれたババア。そしてこの俺T・O・M・O・K・O！」

「ともこつて誰？」

「うわあああ！昔の彼女の名前言っちゃったあ！」

「アンタ等ババアを無視するんじゃないよ！ババアも仲間に入れて！」

こうして、夜は更けていった……。友基の転校によって、
からの高校生活が波乱になることは間違いない。

……いや最初から波乱だけどさ。

第26話 登場！バス停絡みの友基！（後書き）

26話、読んでいただき、ありがとうございます！バス停に絡んだ話、かなり誇張していますが、実話です（笑）自分の友達の体験談です。視力が悪いとはいえ、バス停に絡むなんて……バカですね！。

第27話 海と友基のストーリー（前書き）

シリアスな感じになっていきます（汗

第27話 海と友基のストーリー

ジリリリリッ

耳障りな目覚まし時計の音で、俺の意識が徐々に覚めてくる。

それでもベットの上でうなだれていたが、段々とその音に腹が立つて来た。

「……………うるせえええ!!」

俺は怒声と共に、目覚まし時計に向かって暴力と言う名の制裁を与えた。

バキッパリン

……………ん？

俺は嫌な音がした、目覚まし時計に視線を向ける。

「……………アアアアア!!」

目覚まし時計の時刻を知らせる部分が、無惨に破壊されていた。プラスチックは割れ、短針と長針は折れ曲がり、秒針に至ってはどこかにぶっ飛んでいた。

……………あれ？秒針は最初からなかったんだっけ？……………って、そんなことはいい。

壊れたんかい？

俺は、見るも無惨な目覚まし時計を拾った。

「……おい、うそだろ…？目を覚ませよ。おまえが寝てどうすんだよ。……おまえがいなくなったら……俺は……俺は…！」

俺は両手で持っている目覚まし時計を強く握り締めた。

「オマアアアアンツ！！オマーン！？」

はっ…。

あ、どうも皆さん。

僕の名前は斎藤政人です。

ぷりっぷりの高校二年生！よろしくな！さっ今日も一日ガンバルゾ

俺はベットから降りて、リビングへと歩く。

そういえば、昨日は夕飯食ってないんだっけ。どうりで腹がへるわけだ……。

朝食は何にするかを考えながら、リビングのドアを開ける。

「ンガガガッすぴー……」

……そうだ。こいつ居るんだっ…。

リビングのソファで爆音を奏でている友基の姿に、思わず溜め息を吐いてしまう。

昨日、結局こいつは俺の家に泊まった。

引越したばかりなので、部屋の中がダンボールだらけで寝れないとかほざき始めたこいつを、なんとかお帰り頂こうとしたが、結局無理だった。

うざいよね。

「ま、いいや」

俺は過去を振り返らないのさ。

起きる様子の無い友基を無視して、俺は朝食を作ることにした。

。

こいつ、いつまでも寝てんな。

朝食を作り終えた俺は、友基の幸せそうな寝顔を覗いていた。

「んがーちゅちゅ」

どんなイビキだよ……。

「んがーちゅちゅちゅちゅちゅ……スポーン！」

何かが抜けた！？

「すぴー…すぴ？スピ…スピ…」

ん？苦しみだしたぞ？

「スピリチュアル！！」

友基はそう言うと、ソファの上で突然立ち上がり、『白鳥の舞い』のような、両足を爪先立ちしながら揃え、両手を上げたポーズを取った。

「フィニッシュ！」

「何がだよ！」

俺がつっこむと、友基は我に返り、リビングを素早く見回した。そして視界を俺に留めると、物凄く驚いていた。

「まっ政人！なんでおまえがいんだよ！人ン家に勝手に上がり込んで！キモッ！」

俺がしばらく黙っていると、友基はそれに気付き、もう一度リビングを見回した。

「……ど……？」

俺は早くも今日二度目の溜め息をついた。

。

「はぐっはぐっ！ほへふはひは」

「昨日と全く同じセリフだな」

俺と友基はリビングテーブルを挟み、向かい合って朝食を食べている。

ちなみに昨日の牛肉が食費に響いたので、今日はパンとハムだけだ。

「お？まだ飼ってたんかよ？この亀」

友基は亀吉さんの水槽に、パンを片手に近づいていった。

「ああ。俺と亀吉さんは切っても切れない仲だからな」

ふーん、と興味なさ気な声を出しながら、友基は水槽にハムを落として、亀吉さんを観察していた。

亀吉さんは目にも留まらぬ速さで首を突き出し、ハムにがつついた。

「おおー！はえーな！まあでも俺のチョーパンよりはおせーけど！」

「ア？若造ガ。ベコベコニシテヤロウカ」

「んー、なんか食い足りないなあ。あ、政人。パンもう一枚いい？」

「うんうん、じゃんじゃん食えよ！」

「あつても俺今日からもう登校しなきゃだから制服家からとってくるわ学校でまた会おうぜじゃーな！」

「へえー転校すんの速いんだな遅刻しないようにしろよへえー速いんだな、あつ、二回言っちゃった」

友基は決して水槽を見ずに、玄関から出ていった。

「さつ、俺も用意すつかな」

俺は何事もなかったかの様に着替えを済ませ、亀吉さんに魚肉ソーセージをあげて、アパートを後にした。

。

「だあーっ！もうダメっ」

まだ3限が終わった頃なのに、俺はなんかもうすごいダメだった。

俺は机に突っ伏す事で、それを体で表現する。
その体勢のまま首だけ右に向けると、海も同じ様にしていた。

「へっ、海。テメーはもうくたばったのか？」

俺がそう言つと、海も同じ様に首だけこっちに向けた。

「……アンタも同じじゃねーか」

俺と海は突っ伏したまま睨み合う。

「おい、政人！あははっ！俺、滑舌わりいから自己紹介の時かみ

かみでぐだぐだで女子にも引かれてなんかもうすごいダメだ死にたい」

挨拶も無しにいきなり現れた友基は、俺に近付きながら喋った。セリフに反してももの凄く笑顔だ。

友基は海の後ろ姿をふいと見ると、不思議そうな顔をする。その時、海が机に突っ伏すのやめた。海は友基の視線を感じたのか、友基の方を向いた。

二人は見つめ合ったまま動かなくなった。

「ツツツアアアアツ！！テメーは氷室！」

友基は海を指差して、大げさな程に叫んだ。

「……ああ、内田か」

海はようやく友基を思い出したようだ。

友基の大声で、クラスの奴等は何事かと二人に注目している。教室は、異様なまでの静けさにつつまれた。

「なんでテメーがクロスの地元にいんだよ、オイ？」

友基はそう言いながら、両手で海の胸ぐらを掴み、無理矢理海を立てた。

……あつ、そうか！友基は海が来た理由を知らないのか。知らなかったらそりゃケン力になるよね。俺と友基のいたチームと、

海のいたチームは仲わりいんだからな。

「……アンタに言う義理はねえな」

胸ぐらを掴まれた事が気に入らないのか、海は友基を睨みながら答えた。

「……は？」

友基は眉をしかめたまま、目を見開いてニヤリと笑った。

ゴッ

「……たあッッ！」

俺の振り下ろした拳が、友基の頭頂部に当り、その音が教室に響き渡る。

友基は頭を押さえながら、ゴロゴロと転がりもんどりうっている。

海は今の状況を飲み込めず、拳を構えたまま驚いていた。

「まっ政人！ テメツいてーよ！」

やっと立ち上がった友基は、涙目になりながら俺に抗議をした。

「ハイハイ、喧嘩なら外でやってください。大気圏外でやってください」

「俺、息できない！」

「大丈夫。俺が見てやるから」

「状況は変わんねーよ！なんだテメー！息子が初めて自転車に乗る時に、優しく大らかな瞳で見守るお父さんのつもり！？」

「いやちげえ。息子が初めて自転車に乗る時に、『ちゃんと後ろ掴んでてよ！？』って言われて『大丈夫。絶対離さないから』って言うんだけど、スキを見て離して息子が『ねえ、ちゃんと掴んでる！？』って言つて、掴んでないのに『ああ、掴んでるよ』とか言つて、でも息子はその声が遠い事に気付いて後ろを振り返った時にはもう遅い！」

「なんの話だよ！もう優しく大らかな瞳とかねーじゃん！しかも話のしめ方おかしいよ！？でもそれボクやられました。」

俺と友基のやりとりをクラスが聞いているうちに、教室内はいつもの雰囲気に戻り始めた。

ふう………つたく、こんな所でキレんなつつの。

友基は教室の喧騒で我に返った。

「ほらー、授業だ生徒達ー。座れ座れー！」

4限の教師が入ってきて、教室内の生徒を促す。

生徒達が席に着き始めた時に、4限のチャイムがなった。

「………ふんっ」

友基はしばしその状況を見つめた後、子供のような怒り方をして教室から出ていった。

「……チッ」

海は友基が教室から出ていく様を見つめた後、不機嫌そうに自分の席についた。

うーん、こんなに仲が悪かったのか……。ま、俺も海が転校してきたばかりの頃はこんなだったからな。

……いや、それよりもひどいか……。

俺がまだ席に座らずに思考に耽っていると、3限が終わっていつのまにか居なくなっていた克也が、清々しい顔をして教室に戻ってきた。

「はあ。すっきりした。ん？政人、何かあったのか？」

「克也、俺の様子に気付いたのはさすが親友といったところだけとおまえは一生ダメキャラだな！うん、決定！おまえはなんかもうすごいダメなキャラ！」

「え？え？」

状況を飲み込めずにいる克也をほっといて、俺は自分の席に着いた。

海と友基。こいつらをなんとかしないと……。――。

友基がさっそく波乱を起こしてくれたことに、俺はため息しかでなかった。

第28話 海と友基のストーリー（2）

克也と食堂で昼食を済ませた後、タバコを吸うために俺は屋上に向かった。…が、屋上へのドアの前で、家にタバコを置き忘れてしまった事に気付く。

最悪……ま、いいや。寝るべ。

そんな事を考えながらドアを開けると、フェンスに背を向けて寄り掛かり、タバコをふかしている奴が見えた。

俺はその先客に近づく。

「ハイブラザー！タバコプリーズ！早くよこせ」

先客、海はゆっくりこちらに振り向き、俺の顔を見つめ、タバコを吸い、そしてうまそうに吐きながら答えた。

「悪いな、禁煙中だ」

「はいうざいねー！」

海はポケットを乱暴にまさぐり、まさぐりまさぐりまさぐり、ぐへ、ほれっここはどうじゃっ！いやっ！そんな乱暴にしないで！大丈夫、痛いのは最初だけだか

「ほら」

……はい、情景描写ね情景描写。

えーと、海は手をポケットに乱暴に突っ込んでピースのソフトを掴

み、一本だけ上手に出して、そのまま俺につきだした。はい、これで満足？満足した？満足したの？ねえ、答えてよ！返事をして……っか……

「ピースかよ……」

「貰う奴が文句言ってるな」

俺は渋々差し出された一本を取り、その後海が投げしてきたデュポンで火を付けて、軽くふかした。

俺はタバコを口にくわえたまま、両手でデュポンを眺めた。

「おまえデュポンかよ。いいご身分ですねえ」

「パチモンだ」

からかった俺に、海は空を見上げながら答えた。

俺は海にデュポンを放り、海がそれを見ずに手で取ったのを確認した後、フェンスに寄り掛かり、海と同じ様に空を仰ぐ。
空は中々の快晴だった。

俺と海は、沈黙のまま空を眺めていた。

「……なあ」

俺は沈黙を破り海に問い掛ける。

「あいつの事、あんまし邪険にしないでくれよ」

海は答えない。俺はさらに言葉を紡ぐ。

「ほら、あいつもこつち戻ってきたばっかでさ。事情をまだ知らねえんだよ。クロスもSSもバリバリ活動中だ思ってるからさ。俺から言っとくから」

「関係ねえよ」

俺は海の方へ向いた。

海は未だ空を見上げている。

「俺はチーム抜けてクロスの地元に来たんだから、そっいつのは関係ねえと思ってる。…けどな」

海はこちらを向き、言葉を続けた。

「俺はあいつ個人が気に入らねえんだよ」

……シリアス！シリアスだよあんた！あんたにコメディーは到底むり！こういうシリアスな場面にもギャグをちりばめるといふ心意気がなくなってな

「オイ…俺けっこう真剣に話してんだけど」

「え？ああ、聞いてる聞いてる。で？じゃあどうすんの？喧嘩で決着つけんのか？」

海は再び空を見上げた。

……こいつ空から金でも降ってくると思ってんのか？

「さあな」

……結局、俺が説得しても話は進まないって事が……

「でも！なるべく喧嘩はすんなよな！」

無駄かも知れないが、俺は一応釘を刺しておく。

「フツ……アンタの言うセリフか？」

「うつせー。俺は面倒事にしたくねーだけだ」

「……でも、俺はそんなに暴れはしねえよ」

「はっ、おまえだつてずいぶんとアレじゃねえか！うん！アレだ！」

「……………」

「……こほん。うん、前のおまえじゃ考えらんねー言葉だな。なん
でだよ？」

「前とは違うんだよ」

海はそう言つて、空に向かって笑つた。

「あんまり暴れると、説教する奴ができたからな」

海がそう言つた瞬間、海の顔が水浸しになった。状況を理解できずに、前を向くと、綾ちゃんがバケツを持って立っていた。

「こんな所でタバコ吸つて！中学と何も変わってないじゃない！海

君！それに政人さんも！」

「……………な？」

俺は啞然としたまま海の方を向いた。

海は、体中水浸しになってたが、タバコの火は消えてなく、煙をはいてから、嬉しそうに笑った。

綾ちゃんはそれに気付いて、バケツに残った水を放った。

。

真夜中の俺のアパート。

友基はまたしても押し掛けていた。

「そんでそいつがあんまりうつせーからよ。『テメーの家にあるもん全部ひっくり返してやろうか』って脅しかけたらよ、そいつが『やめて！プリンが逆さまになっちゃう！カaramelソースが下になきやダメなんだ』とか言っちゃってよ！ギャハハ！！でもやつぱりプリンはカaramelソースが上だよな。おまえはどっち派？」

「俺はゼリー党だ」

「うつわ、おまえあんなもん食うのかよ！あつ、それよりさ。聞いてくれよ。俺、昨日運命の女の子に出会っちゃったよ！もうたまらん！うひゃっ」

「ちよつと、俺の話を聞けよ。2分だけでもいい」

「歌うなよ音痴。で、何の話？俺様を飽きさせない話だろうな？」

……なんか、話す気が失せてきた……。ああ、ぶん殴りたい。ぶん殴りたいぶん殴りたいぶん殴りたい……。

「おい、死んだ目してないで早く話せよ」

。

「……………」

俺の話を聞き終えた友基は、ソファに座り込んだまま俯き、黙っている。

頭に大きなタンコブがあるが、それが理由じゃないと思う。

海は話そうとしなかったが、俺は、友基がいなくなっただけからの出来事をすべて話した。

俺のチームの事と、あと海の事も。

俺が話していく内に、友基は段々と口数が減り、そして話し終えた頃にはこの状況だ。

「だから、」

「だから？」

俺が言った言葉を、友基は疑問符を付けて返してくる。

「関係ないね、あいつの事情なんて。俺はあいつ自身がウゼーんだよ」

静かに淡々と話すという、友基にしてはかなり珍しい行動に、俺は何も言い返せなかった。

こいつ、そんなに海の事が……。

「大体、あいつはなんなんだよ！『俺は助っ人だ。……フツ……』とか抜かして俺等のチーム荒らすだけ荒らして、その後はそ知らぬ顔して俺等の前に姿現しやがって！俺はなあ！あいつと喧嘩して財布を落とした日から、あいつの事が大っ嫌いなんだよ！あの財布の中には一カ月の豆乳代が入ってたのに！ああつくそ！思い出したら豆乳飲みたくなってきた！」

こいつ、そんなに豆乳の事が……。

……って違う違う。

まあ、海と友基が素直に言うことを聞くとは、ハナから思ってなかったし。

こうなったら……

「ともちゃーん」

「あんだよ！俺ア、豆乳が飲みたくてイライラしてんだ！静かにしないと容赦しないよっ！」

テメーが静かにしろよ……。

俺はそう言いたいのを我慢して、笑顔でキッチンから手招きした。友基は不思議がりながらも、キッチンに向かってくる。

「あんだよ？」

「ふふんっ。これを見る！」

俺はキッチンの冷蔵庫を、じゃじゃーん！という効果音付きで開けた。

友基は目を見開き、その光景に釘付けになった。

そこには豆乳１リットルサイズが所狭しと並んでいた。

……まあ、食材とかもあるから実際には前に数本並べただけだけど。

「おっ、おみゃーこれ全部飲んでいいけ！？けけけのけ！？」

「ああ、いいぜ。ただし！」

俺の言葉の最初で、友基は豆乳にがつつこうとした。俺はそれを、友基の頭を掴む事によって阻止する。

「なに！？オジサンなんでも言うこと聞いちゃうよ！？言ってごらん！」

「じゃあ、オジサン。海君と仲良くしてくんない？」

「ぐっ……」

その言葉に、友基の勢いが弱くなる。

「海君と仲良くしてくんなかったらあ、オジサンは豆乳と仲良くできないう〜？どおするう？」

友基は豆乳と俺を交互に素早く見つめる。

「ぐっ……うっ……」

しかし、やがては豆乳に見入ってしまったのだった。

。

「氷室！昨日はわりいな！」

朝の教室。友基は笑顔で海と握手を交わしていた。

「……………」

海は何が起きたのかわからず、しばらくぼうけていたが、やがて何かに気付くとニヤリとした。そしてそれが、全くの笑顔になる。

「ああ、俺も悪かった。ごめんな」

お互い笑い合っている。……笑い合っているはずなのに。なぜか二人はオーラを纏っていた。そして握り合っている手が真っ白になっている。

「ま、いいか……」

いつもの口癖を出してみたが、この状況は全くよくない。

この握手のせいで、二人の仲が、さらに悪くなったかもしれない…。

……後で友基の腹を殴り、昨日の豆乳をすべて吐き出させようと思う。

第29話 友基……おまえセリフ噛みすぎ……。

昼休み。

俺様は屋上で、失敗した自分の弁当を食っていた。

その味をごまかし、胃に送るために豆乳をめいっぱい飲む。もちろん豆乳は1リットルサイズだ。

あ、みんな。俺は友基！

俺様視点になったって事は、俺の身に何かが起こるって事だよな。チヨー恐い。

俺は空になった弁当を、ビニール袋の中に適当に放って仰向けに倒れ、体を大の字にした。食後の一服はこの体勢に限るぜ。

俺はタバコの箱とライターをポケットから取り出して、慣れた手つきで一本に火を付けた。煙を吐くときにメンソールが喉に心地いい。

あー……ビバ不健康！

昨日とは打って変わって曇った空を見ながら、俺はさっきの出来事を思い出した。

氷室、ウゼーなあ……。

政人のボディブロー、痛かったなあ……。朝の豆乳がちこつと出てきたよ。

……なんで政人は、氷室と仲が良いんだろ？ま、あいづらなんだかなだ似たもの同士だしな。

……でも、俺は……

ガチャン

扉の開く、金属が擦れ合う音によって、俺の思考は扉に移った。

扉には無表情でこちらを見つめる氷室の姿があった。

氷室は踵を返して扉を閉めようとする。

「待てよ」

俺の言葉に氷室の動きが止まった。俺は立ち上がり、扉まで行く。

「氷室、テメーが何考えてんのか知らねーけどな。俺はテメーがウゼエ。次会ったら……やっちまうぞ」

氷室は俺に背中を向けていたので表情は掴めない。だが、顔は俯き、なにやら笑っている気がした。

「意見が合うな。俺もテメーが嫌いだ」

そう言っただけで振り返った氷室の表情は、確実に俺をバカにしたものだった。

「てめえ……!!」

前言撤回だ、今ここでやっちまおう。

俺は氷室の胸ぐらを掴み、そして拳を振り上げた。

「何やつとる!!」

その大声に反射的に動きが止まり、声のした方向を見る。
そこには運悪く男の教師が立っていた。

。

「あー……暇!」

陽が沈みかける頃。まだ段ボールが片付いていない部屋で、俺は段ボールを背もたれにしてタバコをふかす。横にある灰皿はすでに吸い殻が山の様に積まれていたが眼中にねえな!はっ!

あの男の教師は、更に運悪く生徒指導担当の奴だった。

俺と氷室は3日間の停学、自宅謹慎処分を受けた。
ま、あん時殴ってたら終わってたな。うん。

……こんな所でうだうだしててもしょうがねえ。せつかく学校公認の休みをもらったんだ、旅に出るか!

そう思うが早いか、俺は速攻で着替え、玄関の扉を開けた。

。

俺のアパートは地元から少し離れていたが、少し歩けばすぐに見慣れた町並みになる。

夜になつても人通りの絶えない駅前に着き、いつもの溜り場、ゲームセンターの自動ドアを開けた。

「……変わつてねえな」

全く様変わりしていない店内に、思わず笑みがこぼれてしまう。

お、これ最新の格ゲーじゃん。

俺は財布から硬貨を取出し、そのゲーム機の硬貨入れに入れて、ドカッと椅子に腰を降ろした。

「ぬあつ！敵つえーじゃねーか！格ゲーのカリスマ友基様なめやがつて！」

俺がしばらくゲームに熱中していると、突然、後ろから肩を叩かれた。

「ああっ？だりえだ！？」

「……噛んじやつた。」

俺が振り返った先には3人の不良がいた。

「ダッセー。中坊みてーな服装してんな。俺を見習いやがれ！」

「まちがいねえ。こいつ、内田友基だよ」

「オイ、内田テメー。俺等の顔見てなんか思い出さねえか？」

不良の一人、このグループのリーダー的存在が、俺の胸ぐらを掴み、顔を、凄みを効かせて近付けてくる。

……近いっ。何コイツ、俺とチュウしたいの？

「えーと……あつ。アレだ、アレだべ？うん、アレだ」

「テメーわかんねーんだったら最初から言え！」

「あつ、今思い出した！佐々木君だ！そうだ、誕生日おめでとう！」

「俺の名前は近藤だそして誕生日でもないだけんどありがとう！」

俺の胸ぐらを掴む奴はそう言うつと、拳を振り上げてきた。その拳を、後ろにいた奴が掴む。

「ここでやんのはマジイだろ。外に出ようぜ」

拳を振り上げてきた男は、しばらくそいつと睨み合っていたが、やがて怒りを吐き出すように息をつき、再び俺に振り返った。

「そうだな。オイ内田。俺等、今クロス狩りっつーのやってんだけどよ、テメーには色々と恨みがあんだよ？俺等の遊びに付き合ってくれよ」

俺はそれを鼻で笑って返した。

「テメー何笑ってんだよ！」

胸ぐらを掴む奴の力が強くなる。

いい加減ウゼーな……。よしっ、俺様の握力を見せちゃるっ！

俺は近藤とか言う奴の腕を掴む。

へっ、奴はきつと『ぐあああ！腕があっ！』とか言って手を放すぜ。

俺は力の限り近藤の腕を握った。

「ふぬおおおお……」

「……………は？」

「ぐあああ！腕がつったあああ！」

「……………」

「…………ふっ、クロス狩りだかパンティー狩りだか知らねーがな。上等だよ、やってやんじえ！！あつ噛んじやった」

「……………」

うん、我ながらグダグダ。

。

自然公園。そこに昏倒している奴等に蹴りを入れる。

「はっ、クソだな。近藤さん、残るはオメーだけだな」

地面に腰を付き、顔面修羅場の近藤さん。しかし、俺の気はこんなもんじゃ済まない。

「ひ、ひいつ」

「あ？なんだそりゃ？馬の鳴き真似か？」

俺は近藤ににじみ寄る。

その時、バイクの音が近づいてくる事に、俺は気を取られた。

その音源の方を見ると、5台ぐらいのバイクに、全員2ケツしてやる。コイツの仲間だろう。角材やらなにやら色々持っている。

じゅ、10人！？むりむりむりむり絶対無理！どれくらい無理があるかつつと、公衆便所でビックな方をしてる時に、ドリフのコントみたいに壁が倒れて女の子の目撃者がきやああああって、もうきやああああって、んでその女の子が手で顔を覆うんだけど、手の隙間からチラッチラツて、そういう緊迫したシチュエーションより無理がある！

その時、俺の頭に衝撃が走った。

耳鳴りと、頭の痺れる感覚、それが痛みに変わる頃に、原因がわかった。

「へへ、へ……」

近藤が、鉄パイプを持って怪しくニヤついていた。
近藤の仲間が続々と集まり、俺を囲んでいく。

血がとめどなく溢れてくる、生暖かい感覚が伝わる。俺の視界が、
赤と白に包まれていく。

「マジ……か」

完全に視界が白になった時、地面に倒れる衝撃が体に響く。

意識が薄れていく中、バイクの排気音と共に、聞き慣れた声が聞こえた気がした……

。

ぼんやりと視界が戻ってくる。

……長い間眠ってたような……眠ってないような……

俺は何故かベンチに寝ていた。場所は……さっきの自然公園みたいだ。

「そつだつ、奴らは……」

俺は飛び起きて、周りを見渡す。

「……おねんねの時間？」

奴等は全員、地面に突っ伏していた。誰一人動かずに。

俺は奴等の近くまで行ってみる。一体誰が……。

奴等はボッコボコにはなっていなかった。こいつらをやった奴は、相手を気遣って倒したみたいだ。

ふと、地面に落ちている物に気付く。それを拾ってみる。

「…………デュポン…………？」

うーん、こいつらのかな？…………いただきます！

俺はタバコを取り出し、デュポンで火を付けて、地面に突っ伏す奴等を見た。

クロス狩り…………とか言ってたな。クロスは散々暴れたからなあ。ツケが回ってきたな。ってか、政人も危ないんじゃないかね？うーん、どうすれば…………。

…………。

よしっ！帰って寝よう！

俺は帰路に着くことにした。

自然公園から出る頃、急に頭が痛みだす。俺は思わず頭を抱えた。

……ん？

頭に何かを巻かれていたようだ。取ってみると、俺の血が滲んだ包帯だった。

あいつらぶつ飛ばしてくれた奴が、やってくれたのかな？……ん？

何かが俺の顔に、ツー、と流れてきた。俺はそれを手で拭き取り、手を確認する。

……血じゃん！やべー、傷口開いた！？

病院に行くか……？いや、こんな傷、確実に学校に連絡される。もし、謹慎中なのにケンカした事がバレたら……。

タイ……ガク……？

ノンノン、タイガクダメネ。タイガクダッタトーフノカドニアタマブツケテシンダホウガマシ。ウンウン、トーフノカドニアタマブツケテしねええええ！！

……どうしよう。政人の家に行ったら絶対理由聞かれるし……。

……よし、あいつんちに行こう。

俺は流れる血を、手で乱暴に止めながら、あいつの家への長い道程を歩きだした。

とまあ、微妙に伏線を引いて今回はおしまい！あいつって誰なのか気になるよね？うんうん。

次回も俺視点かな？俺視点だよな？俺視点だな、うん。じゃ、みなさん、今回はこのへんで！俺様の今後の活躍を祈れよな！ふっ、あびゃよ！

………うっ………。

第29話 友基……おまえセリフ噛みすぎ……。 (後書き)

ヨー！おれの名前はMCおもむろヨーヨウツ！……はい、作者紹介終了。読者様、今回も読んでいただき、ありがとうございます！さて、自分はこの頃思っわけです。この後書きを有意義に使えないものか？この前なんかは、へんな会話文を後書きに掲載して、読者様に多大な失望を与えたワケですが……ですが！自分なりに色々考えた結果、次回の後書きから、メインキャラたちの設定と、自分のぶつちやけトークを織り交ぜた後書き。題して『爆笑必死！？！こうさせていゝポロリもあるよゝ』をお送りしたいと思います！文字数が！でっでは、お楽しみにゝ！

第30話 俺は何も知らない俺は何も知らない、俺は何も知らナイダヨ……

……ん？

よっしやあああ！今回も俺視点！

俺は自然公園から歩くこと20分。ようやく目当ての家の前まで来た。

門を開け、未だに流れる血を押さえながら、インターホンを連打する。

「さああくらちゃん！あつそびいましょっ！」

その刹那、扉が勢い良く開いたかと思うと、気付いたら俺の大事な大事なデリケートゾーンに蹴りが飛んできていた。

「あはあああつ！？」

「うるさいっ！何時だと思ってるのっ！？」

俺は膝を付き、股間を押さえながら、目の前に仁王立ちしている人物を見上げた。

背中を少し隠す程度の、赤みがあった綺麗なセミロングの髪を、今はダクカールで後ろにまとめている。

顔は透き通るような白い肌に、目付きが鋭い……のは今だけか。いつもは可愛いのに今はただひたすら恐い。体は……うんうん、2年前と比べると成長したな！おじさんは嬉しいぞ！

「さくら、久しぶりだな！おじさんは嬉しいぞ！」

「おじさんの知り合いなんて私は……友基？え……友基なのっ？」

さくらは俺に駆け寄り、俺の顔を間近で確認する。

何コイツ、俺とチュウしたいの？いた仕方ない……いや、かたじけない。

ん……

「え……きゃあ！」

バキッ

え……？バキッ……？パチンならわかるけどバキッ……？

さくらが俺を揺さ振る振動を感じながら、俺は意識を手放した。

。

「アレは、友基が口を近付けるからでしょっ？」

さくらが俺の傷口を消毒しながら抗議する。

「それにしたって、2年振りの再会で、のっけから蹴りかまして最後に殴って相手を落とすって……これどうよ？」

「乙女の家のアポなしで来ておじさんは嬉しいぞとか意味わかんない事言ってしまうにはキスを迫って……これはどうなの？」

俺は頭に包帯を巻かれながら、反論できなくなってしまった。

「まったく……それでも手当てをする私って、天使？」

「は？天使？おまえいかれてんな」

「できたよバカヤロウ！」

バチーン！

「あはああああ！？」

こ、こいつ、俺の頭を……。

「ふう、久しぶりに手当てしたら、なんか疲れちゃったなあ」

さくらはそう言いながら、キッチンへと入っていった。あ、ちなみにここはリビングね。

さくらの両親は仕事が忙しいだのなんだので、ほとんど家に居ないらしい。さくらは一人っ子だから、家には俺とさくらだけだ。

……って、こんな事言つと、とっても素敵なシチュエーションに聞こえるが、そういう雰囲気には全くなならないぞ。いやなりたくねーな。アレは完璧な恋愛対象外だ。

クリーム色のソファに深く腰掛けながらそんな考えていると、芳ば

しい薫りが鼻をくすぐってくる。

この匂いは……。

「さくらー！俺は砂糖3つだからな！」

こいつの家はダイニングキッチンだ。だから、キッチンに立ってるさくらがみえるので、それに話し掛ける。

「わかった！佐藤さんが3つねっ！」

「だれ佐藤さん！？その人コーヒーカップの中入るの！？まず人間じゃねーな！」

さくらはコーヒーカップを2つ持ってリビングに戻ってきた。適当にソファに腰掛けると、1つを俺に寄こす。

「はい、佐藤さん3つ」

「入れちゃった！？可哀相な佐藤さん！きつと佐藤さんは35歳の妻子持ち、長男まさるが小学校に入学したてで、入り用だからお父さん頑張っちゃうぞ！って。髪が薄くなりはじめて上司にもいびられ医者にも糖の摂り過ぎと宣告されてもお父さん頑張っちゃうぞ！って！ねえ！頑張ろう！？」

立ち上がって熱弁する俺に、さくらはコーヒーを一口飲んでから答える。

「砂糖だよ」

「はあっはあっ……うん、そっか……」

俺はソファに再び腰を降ろし、コーヒーをすすった。うん、甘い。さすが砂糖さん。……佐藤さんじゃないよ？

俺は呑気にコーヒーをすすっているさくらを見る。こいつと思い出話に花を咲かせる前に、聞きたいことがあった。

「おまえ、政人と会ってねーの？」

質問が唐突過ぎたのか、さくらは『むぐっ』と奇声を発した後に、口に手を添えながら、激しくむせている。

「なっ……なんで」

さくらはその言葉を絞りだすように言った。その後、咳も治まってきた所で、平静を装うように、再びコーヒーを喉に運ぶ。

「いや、別に、なんとなく。だっておまえら付き合ってたんじゃないの？」

「かはっ」

……大丈夫？

と、心の中で言いながら、俺はさくらが呼吸困難気味な姿を傍観していた。

二度目の咳もやっと治まり、さくらは喉を押さえながら苦しそうに喋る。

「付き合ってなんて……ナイダヨッ！」

「ふーん。会ってもナイダノ？」

「う……うん、会ってもナイダヨ……」

……あ、なんだろうこの雰囲気。俺もしかしてやっちゃった？

さくらは膝に、手を強く握り締めながら置き、少し俯いている。

「い、いや、だっておまえら、なんか約束してたじゃんっ！？会って話せばいいだけだろっ？」

不自然に明るく振る舞うが、さくらはまったく姿勢を変えない。：

……どころか、更に表情を暗くさせた。

「だって……もし、政人が約束を忘れてたら……？言ったら……全部、無くなっちゃいそうなんだもん……」

やばいやばいやばい……。帰りたい。どうしよう、俺、帰りたいよ。この雰囲気能耐えられないよ。

……………帰ろう！

「大丈夫！俺も帰ってきたんだし、ちょっとくらいは手伝ってやんから！あっ、やっべー！家にいるゴキブリにエサやる時間だ！それじゃっ！」

俺は立ち上がり、有無を言わずに玄関へと走った。玄関で靴を中々履けず、もどかしい。

くそつ、ティンバーなんて履いてこなきゃよかった……！

「友基」

背中から声がする。思わず背筋を伸ばして、ゆっくりと振り向く。さくらはリビングへの入り口に立っていた。表情はまだ晴れていない。

「……ありがとう。その時になったら手伝ってもらうね」

遠慮気味にほほ笑み、少し晴れた表情で、俺を頼る様に見つめる。

言わなきゃよかった……。断れ友基！おまえにや無理だ！いまなら間に合うって！

俺は丁重にお断わりすべく、口を開いた。

「ああ、まかせろって！」

。

「……とか言っちゃいました……」

翌日の昼。昨日と全く同じ所でタバコをふかす。今の俺の心情には、自己嫌悪、という言葉がよく当てはまる。

部屋に充満した煙を見つめながらも、換気する気力さえ起きない。灰皿にある吸い殻も、昨日から捨てていないので、山のように……なんて比喻じゃ生易しいな。もうエベレストだ。

俺はエベレストの頂上に、うまく灰を落とす。

突然、アパートのインターホンが鳴り響く。俺はその音に驚き、腕がエベレストに当たってしまった。

崩れゆくエベレスト。俺は為す術も無く、それを見ているしかなかった。

「あー、くそつ。誰だよ……」

俺は怒りを覚えながら、床を強く踏みしめ、玄関に向かうと、扉を強引に開けた。

そこに立つ人物に思わず昨日の事を思い出し、少し動揺してしまう。

「ま、まさていー」

「何そのあだ名！センスわりーよ！」

政人は何も知らずに、いつものテンションで突っ込む。

こいつは、まあよくもののうと……。

「何の用だよ？俺は今色々あったり豆乳のストック切れてたりでイラついてんだよ」

「……おまえは相変わらずだな。でもお、そんな態度取っていいの

かなあゝ？」

政人はニヤつきながら、両手に持つビニール袋を掲げる。

「そ、それは」

一つは豆乳１リットルサイズ。俺は心踊った。
てか踊った。

もう一つは俺の大好きな弁当屋、『けせらせ・ら』の高級ステーキ弁当だった。俺は舌なめずりしつつ、踊った。
てか疲れてきた。

最後に、政人が手に持っている、俺の吸う銘柄『マールボロ・メンソール博士』。俺はゼイゼイ言った。
もう体力の限界だった。

「は、入って……」

政人はいつもの呆れた表情を浮かべながら、俺のアパートへと入った。

俺は元いた場所へと戻り、腰を降ろす。政人も適当な所に座った。

「うわっ、おまえ何これ？」

政人は灰皿を指差す。灰皿の辺りは吸い殻と灰でいっぱいだ。

「は？どう見てもエベレストだろ」

「どこをどう見れば!？」

政人はため息をつきながら、散らばった吸い殻を片付ける。

「聞いたぜ？海とケンカしたって」

……そうだった？ああ、そうだった。俺は氷室がうざいんだったよ。だから停学なんじゃん。

「その包帯もその時のケンカ傷なのか？」

……そうだった？いや、そうじゃねえ。

「これはクロ……」

クロス狩りの事は言わないほうがいいな……。こんな問題、俺一人で十分だ。

「クロ？」

「あ、いや、クロ○コ大和の宅急便さんに一歩前に行かれてよ、そしたらこのザマさ」

「なにがどうなれば!？」

吸い殻を片付け終わった政人は、俺に弁当と豆乳を投げて寄こしてくる。

「ほらよ。ありがたく頂戴しろ」

「おおつ、ありがたく頂戴する！」

俺は弁当を開けて、無心で食った。

……。

……。

……
「おい」

政人は自分の弁当を食べながら、呆れた表情で俺を見ている。

「ふえ？ふあひ？」

「無心で食うのはやめろよ……」

…… ああ、物語が進まないってやつね。

「大丈夫、もう食ったから」

俺は空になった弁当を投げ捨て、豆乳を口に残っているステーキと一緒に、喉に流し込んだ。

「つぷはー！で、なんで来たの？」

「唐突すぎない！？」

「物語をすすめなきゃだからな」

「……いや、まあ、な。まだおまえらケンカしてんのかな、と」

まだ言ってるのか……。

「言ったべ？俺アあいつがウゼーって。なんでおまえ、そこまでこ
だわんだよ？あいつの良さがわかんねえ」

「いや、あいつだって良いところはあるよ？それに仲間なんだし」

「仲間？はっ、ざけんな」

俺はその言葉を嘲笑しながら、政人からもらったタバコから、それ
を一本取り出し、デュポンで火を付ける。

「ん？おまえデュポンなんて……あれ？」

政人は俺がタバコに火を付ける姿を見ながら、固まっていた。

「あ？なんだよ。タバコに火を付ける俺ってそんなに渋い？そうだ
ろっ？うんうん」

「そのデュポン……海のじゃん」

「え……」

俺は口にくわえたタバコを落としそうになった。

「うん、間違いない。この黒い大理石に銀のフレーム。なんでもまえが持ってたの?」

「え、いや……うん!そういう事だ!さつ、俺様に食物を献上するのは済んだんだ。ほら、帰った帰った」

俺は弁当を両手に持つ政人の背中を押して、玄関へと促す。

「どついう事だよ!しかも、献上っ?ふざけ……!おまつ……ちよっ……」

ボタン

政人を追いやった俺は、玄関の扉に背を預けながら、手に持つデュポンを眺めた。

「これは氷室の……じゃああの時、俺を助けたのは……やべっ」

俺は体ごと振り返って、急いでドアノブに手を掛けて押した。

「まさっ……と。……いねえ」

さくらの事聞くの忘れちゃった……。いや、それより今は……。

俺は再びデュポンを眺める。

手に持つデュポンが、なんだか暖かく思えた。

第30話 俺は何も知らない俺は何も知らない、俺は何も知らナイダヨ……（後

人物設定！まずは主人公、斎藤政人！パチパチパチ！身長177、
体重68。無造作に伸ばした茶髪は目にかかるが、ワックスで適当
にあしらっている。やる気の無い目。面倒事が嫌いでも事無かれ主義
だが、いつも事になる。ナルシストのボケ役……でしたが、作者は
気付いたのです。『こいつ一人じゃ何もできねえ』と！1話あたり
を読めばわかりますが、一人だとかなりグダグダです。……ええ、
変えましたとも。初期設定なんて関係ねえっすよ！それと共にナル
シストも消えました。まあ、要所要所で眠れるナルシスト魂を発揮
しますが（笑）

NEXT・柏木克也

第31話 ヤッフウー!?

次の日。

俺は謹慎最後の日という事もあって、家でゆっくりしようと思った、が……。

俺はポケットからデュポンを取り出し、自分の目線に合わせてしばらく眺めた後、再びポケットに戻した。

こいつの所為で色々考えちまうから、外に出てスッキリしようと考えたワケよ。

駅前への人通りの少ない道を、のんびりと歩く。

夏の夜の匂いは懐かしく、なんとなく耳を澄ませて、鈴虫の羽音なんかを聞いてみたくなる。

もうすぐ駅前に着くので、雑踏なんかが耳障りだが、ここは裏通りだから少しは聞けるかもな。

リーリーリー…

ほら。うーん、いい音色だ。

リーリーリーおらあっ！

……え？なんだ今の。
オラオラ系の鈴虫？

「おらあつ！」

ちげえな。人の声だ。

その声は、難解な裏通りの奥から聞こえてくる。喧嘩かなんかやってんだろう。

……行くしかねえな！

俺は野次馬魂に火が付いた。

小走りで声のする方へ行くと……案の定、喧嘩だった。一人を十数人で囲み、リンチをかけている。

俺はうまくコンクリートの影に隠れ、その様子を覗き見る。

「頼む……」

俺は、囲まれて輪の中心にいる人物に、自分の目を疑った。

鋭い目付き。アツシユのツイスト。

そいつは紛れも無く、氷室海だった。

氷室は地面に膝を付き、手を付き、更には頭まで下げている。

俺は足を一步踏み出した。……しかし、そこで思い止まる。

俺は氷室が嫌いなんじゃないのか？ 奴に加勢する理由はあるのか？
その思いが、俺をこの場に止まらせた。そして再び、角から様子を
うかがう。

「頼む……クロス狩りを……止める」

クロス狩り……！？

なんで氷室がその事を……。いや、あいつら言い触らしてそうだから、噂がまわってきたんだろう。だとしても、氷室の出る幕じゃねえだろ……！

氷室の頭を、氷室の正面に立つ男が足蹴にする。

あいつ、近藤じゃねえか……。

「止める？それが人をお願いする奴の態度かよ、あ？止めてください、だろ？」

近藤が笑いだす。つられて周りの奴等も笑いだした。

氷室は肩をわななかせ、拳を握り締める。そして……

「……止めて……ください」

……！！

氷室を囲む奴等が、より一層笑いだす。

近藤がニヤけた顔でしゃがみ、その視線を氷室と合わせる。

「テメエは変な奴だな。なんでそこまですんだよ?」

「……仲間の、為だ」

その言葉が俺の心に強く響く。

その時、すでに俺は駆け出していた。

囲んでいる奴等を押し退け、氷室の隣に立つ。

「テメエ、内田!」

奴等の笑いが一瞬にして消えた。皆、一様に俺の事を睨み付ける。

俺は膝を付き、手を付き、そして、頭を付けた。

「クロス狩り、止めてください!お願いします!」

「……は?」

皆、氷室までもが呆気にとられている様だ。

「内田……なんでだ」

頭を下げているので、表情こそ見えないが、その声は不思議でしやうがない、と言った感じた。

「仲間の為、だろ?」

俺は顔を上げる。

氷室は予想どおりの表情をしていた。そしてその表情が、少し緩む。

「……………フツ……………だな」

その時、奴等の一人が、近藤に耳打ちをした。しばらくすると、近藤の顔が嫌な笑みに満ちる。

「クロス狩りの事、特別に止めてやるよ。……………そのかわり」

言葉を止めて、近藤は氷室の前でしゃがむ。
嫌な予感が、俺の思考回路を駆け巡る。

「村上綾っていんだろ？ テメエの彼女。そいつをくれよ」

氷室の驚愕の表情。近藤のニヤけ顔。周りからは笑いが巻き起こる。

「いやゝ！ あの子めっちゃかわいいんだよな！」

「あの体はたまんねえよ！」

「俺が一番な！」

「ギャハハ！ おまえ何の一番だよ！」

「バツカ、決まってんべ？」

「おいおい、ここは公平にジャンケンだろ！」

俺は立ち上がった。

ジャンケンに白熱している奴等の所まで、歩いて進む。

俺は一人の肩を、後ろから掴んだ。

「あ……？」

右手から繰り出す渾身の一撃。

それを振り向きざまの相手の頬にたたき込む。

相手は豪快に吹っ飛ぶと、ぐうの音も出さずに、地面に横たわっていた。

それを見た周りは、事態が把握できていないのか、場は沈黙に包まれた。

「テメー何しやがんだ！！」

近藤の発した叫び声によって、皆が臨戦態勢に入り、再び俺達二人を囲んだ。

俺達は自然に背中を合わせる形になった。背後からは、悲しみとも諦めとも呆れとも取れる、なんとも予想しがたいため息が聞こえる。

「俺の苦勞を……全部台無しだ……」

周りに目を配りながら、俺も臨戦態勢に入る。

「なんだよ、じゃあおまえは彼女渡すつもりだったのかよ？」

武装してんのは……1、2、3……意外と少ないな。

「冗談言つな」

手の力を抜き、再び握り締める。

「だろ？それに俺等は謝るなんてムリムリ。俺等にやこれっきゃねーだろ」

周りからは罵声が聞こえ、今にも飛び掛かってきそうだ。

「……フツ……だろうな。じゃあ行くぞ、友基」

予想しなかったその言葉に、俺の頬が緩む。

「ああ。まっ、せいぜい頑張れや、海」

それが二人の合図だった。俺達は別々の方向へと突っ込んでゆく。俺は拳を振り上げ、強く握り締めた。

「いくぞオラァー!!」

。

拳にはまだ新しい痛み。地面には十数の人間。

立っている者は、俺と海の二人になった。

「つ、疲れた……」

俺はコンクリートの壁に背中を付け、そのままズルズルと地面に座った。

「もう音を上げんのか？まだ終わってねえぞ」

「え？そなの？」

俺は取り敢えず腰を降ろしたまま、タバコに火を付け、海の様子を窺うことにした。

海は地面に横たわる近藤の胸ぐらを掴み、数回頬を叩いた。近藤は腫れた目を少し開ける。

「オイ、アンタ等のボスがいるだろ？場所教えろ」

え！ボスいんの！？

近藤は薄ら笑いを浮かべ、乾いた声を絞りだす。

「へへ……だ、誰が教えるかよ」

バチーン！

「はうつ！」

顔を散々殴られた近藤は、ビンタでも相当痛いだろう。

……おもしろそうだな。

無理矢理上半身を起こされ、首の座っていない近藤に俺は近づき、海の中へ話し掛ける。

「ちょっと、俺もまぜろよ」

海は振り向くと、優しく微笑んだ。

「ああ。じゃあ、俺が左頬。友基が右頬だ」

俺はしゃがみ込んで、左手を構えた。その行動に近藤は怯む。

「じゃっ、言ってもらおうか？ボスの居場所」

「だ、だから言わな」

バチーンバチーン！

「暴力を振るっても絶対に」

バチーンバチーン！！

「いつてえ……」

バチーンバチーン！！

「ちょっと、痛いって言っただけじゃ」

バキッ

「え……っ？殴った……？」

バキッバキヤ

「わかった、言う。言うから」

ドカッバキッポポポコッメキヤッヤッフウー！！

「言わせて下さいー！！」

パッコーン！

。

地下のバー。

そこはクロス狩りを企てる奴等の溜り場だった。

カウンター席の奥の開けた場所。そこにはビリヤード台でふざけ合う青年達。更にその奥で、重厚な黒革のソファにふんぞり返る男。

どうやら、このグループのリーダー格が、この男らしい。

彼等は、今置かれている状況を全く知らずに、呑気に笑い合っている。

突然、入り口の扉が蹴破られる轟音。それと共に、外を見張っていた青年二人がなだれ込み、地面に力無くうなだれている。

一瞬、何が起きたのか解らず、目を見開き、入り口を凝視したまま

固まるグループ。

入り口から、二人の青年がゆっくりと店に入る。

先に入った一人は低い身長。自称奥二重で、辺りを観察している。オレンジの髪色に、無理矢理かけたツイストパーマ。毛束はまとまっているが、そのそれぞれが思い思いの方向を向き、天然の無造作を作り出している。

もう一人は年相応の身長。目が隠れる程度の銀色の髪に、ツイストパーマを掛けている。端正な顔立ちに、鋭い目付き。無表情が、冷酷さを思わせる。視線は一点を集中し、それは確実にソファにふんぞり返る男に向けている。

二人とも殴り込みに来たはずなのに、武器などを持ち合わせている様子は一切無い。

「だ、だれだテメー等！」

沈黙に耐えられなかったのだろう。ソファに座る男が、必要以上に大声を張り上げる。

小柄な青年が、にんまりと笑い、腰に手を掛けながら高らかに言った。

「ツイストブラザーズだっ！！」

……センス悪っ！

この場にいる誰もがそう思っただろう。言った本人も後悔したに違いない。

そしてこの日、『ツイストブラザーズ』は伝説として、名を残したのだった……。

。

昼休み、屋上に行くと、海と友基が笑い合っていた。

「なんでそんなに仲が良くなったんだ？」

と聞くと、海と友基は口をそろえてこう言った。

「ツイストブラザーズだから」

俺には全くワケが解らなかったが、二人の笑い合う姿を見ると少しホッとした。ま、仲がいいのが一番だからな。ああ、俺って平和主義者。

ほのぼのとした情景を見ながらも、俺はこの先、さらにハチャメチャになる事が頭をよぎった。

ってか、なるんでしょ？

「おい、政人！おまえタバコで滝のぼりできる！？」

「は？知らねーよ。」

「フツ……アンタは出来ない時はいつもそうだな」

「あ？おまえ俺を誰だと思ってるの？そんなちゃっちい技はしねえ！ドラゴンを見せてやる！」

「マジで！？政人アレ出来るの！？」

「おうっ！いいか、こうやって、こうやってだな……ゴホッゴホッ！」

「ギャハハ！出来てねーじゃん………」

第31話 ヤッフウー!? (後書き)

柏木克也。身長173。体重63。眉を隠す程度の黒髪。フレームの無い眼鏡を付け、表情はいつも優しい。趣味は読書。本をいつも手放さない。政人の親友にしてツッコミ役。……そうです。政人がツッコミ役になったので、克也の出演が激減したのです。こいつに大分皺寄せが来ました(笑)今ではちょこっと出てきては、しょうもない役回りです。でも自分は克也、好きですよ。こういう可哀相なキャラ(笑)

NEXT・渡辺里奈!

第32話 俺とさくらとスニッカーズと

「くああ……ねみ……」

俺は大口を開けながら、おぼつかない足取りで学校を目指していた。改札にキップを入れ、他の人込みと一緒に駅から出る。

「でよー！あいつがうぜえから俺、一発力マしてやったんだよ！ははっ」

並んで歩いている友基は朝からハイテンションだ。

「おまえさー……。俺んアパートからここまで、ずっと喋りっぱなしじゃん。しかもおまえ来んの早いから、俺朝飯食いそびれたんだよ。だからおまえのテンションについていけない俺がいる」

「うつせー！テメーにだきやあテンションのダメ出しはされたくねえ！ー！ボケが！死ねば！？」

え……？俺そこまで言われるようなこと言った……？

「へっ！反論もできないか。この乳酸……菌……が」

「誰が乳酸菌だコノヤロウ！乳酸菌だってなあ、生きて腸に届くために頑張ってたんだよ！それをおまえ……ん？」

友基の視線が固定されたまま、表情も固まってるのに気付कि、俺は友基の視線の先に注目してみた。

あ、アレは……。

「おい、ハル―！」

俺の声に気付いたハルは、俺の姿を確認すると、こちらに小走りで向かってきた。ハルはチェックの入ったスカートに、淡い水色のワイシャツを、長袖を折って着ていた。裾をスカートにしまわない所はハルらしい。

「政人！何やってんの？」

「いや、登校中だよ。みればわかんたる。ハルは？」

って、ハルは今制服だし、こいつも登校中だよな。

「みればわかるだろ？暴走中だよ」

「いやわかんねーよ！」

俺達は今、人通りのド真ん中にいた。かなり邪魔だな……。なんか道行く人々の視線が痛いもん。

時間はと……。うん、まだまだあるな。てか朝のショートホームルームの時間まで1時間30分もある。

「ハル、どつかで朝メシ食わねえ？」

「んお？いいよ。ボクは最初からそうしよつと思ってたし」

あ、だからこんなに朝早いのか。

「じゃ、行くか。オイ、友基、行くぞ」

友基を見ると、未だにつつ立ったまんまだ。

「……つけた」

「は？」

「見つけたああ！俺様の舞水ー都派弔いいい（マイスイートハニー）
！！」

そう言うとき友基は駆け出した。ハルへと一直線に。

ハルは友基に背中を向けていたが、何か殺氣じみたものを感じたのか、フツと振り返った。

「ん……………え！？」

ハルが気付いた頃には遅かった。友基は飛びつかんばかりの勢いで、ハルを抱き締める。

「うつひゃあ！会いたかったよ！」

「えっ、なん、誰こいつ……………ってコラ！顔を近付けるなっ！政人ー！助けてー！」

……………。

「未長くお幸せにな」

朝からこんなんに付き合ってたらねえ。

俺は二人に背を向け、学校へと歩きだした。メシは購買で買おう。

背中から、感謝の言葉と死刑宣告が同時に聞こえたが、俺が振り返る事は無かった。

。

「おばちゃん、パンをくれ」

購買のおばちゃんは愛想良く俺に笑いかける。

「はいはい、どのパンだい？」

「え？どのパン？うーん、なんかこう、漲る勇氣、溢れるパワーで元氣１００倍！みたいな」

「はいはい、アンパンだね」

このババア……できる。

「おばちゃん、あと豆乳！」

横からヌツと出てきた奴、そいつは……。

「ア、アンパンメエン」

「え！？なんで最後だけ発音良いの！？」

もとい、友基だ。

ハルにやられたんだろう、顔がパンパンに腫れ上がり、まさにアンパンマンだ。うん、アンパンマン。

「はい、アンパンと豆乳１リットル」

え！？なぜに１リットル！？

「おおー、わかってるねおばちゃん」

「でしょ？違いのわかるババアですから」

わかってねーよ。俺の気持ちをわかってくれよ。

とりあえず会計を済ませた俺は、友基と一緒に屋上へと向かった。

学生は雨が降ろうと槍が降ろうと屋上だからね。鍵が掛かってたらブチ壊しなさい。青春の神様は許してくれっから。

ガチャ

「うわー！青春だねえ！豆乳だねえ！」

おまえ、体の７割は豆乳だろ。

屋上は日の光がモロに当たって、気温が何度か上がってんじゃねー
かってくらい暑かった。

今日は雲一つ無い晴天なので、太陽は隠れる事を知らない。空の隅
々が青一色だ。

俺は適当に座り、フェンスに寄り掛かる。友基は俺の目の前で仰向
けに寝転んだ。

俺は豆乳を友基に投げてよこし、それからアンパンにかじりついた。

……うん、喉乾くわ。

「おい、友基。豆乳ちよつとくれ……」

友基は俺の言葉が耳に入っていないらしく、豆乳を飲むのに必死だ。
……それも器用に仰向けのままで飲んでいる。

俺は豆乳のパックを握った。

「ぶほつつつ！」

友基は変な声でむせた。行き場の無くした豆乳は、友基の顔に流れ
続ける。

そこでやっと友基が豆乳パックを離れたので、俺がそれを取って、
自分の口に運び、喉を鳴らして飲んだ。

「……ふう。はい、返す」

「てっ、テメー！この俺の顔を見て、なんか言うことはねーのかよ

「！」

「…………アンパンメェン」

「だからなんで最後だけ発音バツチリ!？」

友基は俺の手から豆乳を強引に取ると、さっきのポーズに戻った。

アンパンも食い終わったので、俺はタバコを一本口にくわえる。

「…………なあ」

友基が急に真剣な口振りて話し掛ける。俺はタバコに火を付けながら答えた。

「んだよ？」

そして口にためた煙を肺に押し込む。

「おまえ、さくらと会ってねーの？」

「けはっ」

その唐突すぎる言葉に、俺は咳き込んでしまった。

呼吸を整えながら、質問の意図を知りたくて友基を見ると、なぜか友基はニヤついていた。

「…………おんなじ反応」

「なっ、なにがだよっ」

「べっつに〜。で、会ってねーの?」

『会ってないんだろ』と言うような口振りに、俺は疑問を持ったが、別に隠す事では無いので正直に答える事にした。

「……会ってねーよ」

「なんで?」

「そ、そりゃっ!向こうだって違う高校で違うダチ作ってるかもしれないのに、俺がポツと出ちゃ迷惑だろ」

なんだか焦れったそうな表情の友基。

「っだああ!めんどくせーな!テメー約束したんだべ!？」

約束。

その言葉の意味を、俺は思い出す。

遠い記憶。中学3年生の頃だ。

その時は克也もいなくて、里奈とも話してなかった。

チームにいた頃の日常が、そこにあった。

いつもの倉庫で俺はいつもたまっていた。

誰かがゴミからあさってきた、ボロボロの黒革ソファ。3人座れるそのソファは、俺のお気に入りだ。

背もたれのとっぺんに頭を乗せ、天井を虚ろに見つめながらタバコをふかす。

「なあ」

隣から聞こえる友基の声が倉庫に響く。向くと、俺と寸分違わないポーズだった。

「なーんか楽しい事ねーのかよ？」

「そればかり……」

俺の代わりに答えたのは、さくら。

背もたれに上手く腰掛けながら、俺達の吸うタバコの煙にむせていた。

集合も掛かってないので、倉庫には俺達しかいない。倉庫の鍵番はさくらだから、俺達は勝手にここを溜り場にしていた。

夕暮れ時。やる事が無いと、いつもここに来る。まあ、来てもやることはねえけど。

「政人、テメーなんかやれよ」

「あー？だりいしうぜえしやってもおまえ等笑わなそうだからヤダ」

「なんだとテメー！テメーだって笑わねーじゃねーか！」

「だっておまえつまんねーんだもん。なに？『豆乳飲んでインサイダー事件』って。どこで笑えるのが不思議でしょうがねー」

「うるせー！あれはインサイダー事件と、豆乳の中にサイダー。つまり豆乳・イン・サイダーを上手くかけたんだよ！」

「上手くねーよ！どんだけ不可解なんだよ！コナンでも解けないねー！」

「テメーコナンだって頑張ってただよ！コナンの悪口言っんじゃねー！」

「誰がコナンの悪口言った！？テメーの悪口だよテメーの！」

「うるさーいっ！」

ゴゴンッ！

「「ごめんなさい」「」

いつものやりとりを終えると、友基は思い出した様にソファから立ち上がった。

「やべー！今日は豆乳の特売日だ！じゃあな腐ったミカンどもお！」

「「なんだと！」」

俺とさくらがそう言うと、友基は逃げるようにして倉庫から出てい

った。

俺が友基の出でいった扉を見つめっていると、さくらが友基の代わりに隣に座った。

中々に勢い良く座ったので、黒革の切れ目から出てきた埃に少しむせる。

「……ひまだねー」

「だな……」

少しの間、沈黙が流れる。

「……なあ」

先に沈黙を破ったのは俺。

「んー？」

さくらが気の無い返事を返す。

「おまえの付き合ってもいい男の条件って、なんだったっけ？」

「あゝ、この前話したやつ？えっとね、優しくて、自分を持ってて、群れてない奴っ！つまり、今のあんたの真逆ってことすな」

さくらが嫌な視線を俺に向けている気がする。俺はずっと前を向い

てるからわからないが。

「……もし」

「え？」

俺は煙を吐いて、タバコを捨てて、言った。

「もし、俺がチーム辞めたら、条件にぴったりなんじゃねえの？」

さくらを見る。さくらは俺を見つめたまま呆気な表情でいた。

さくらの表情が、優しい微笑みに変わり、その表情に俺はドキリとした。

さくらは立ち上がり、俺に背を向ける。

「それは……告白？」

俺はさくらの背中に喋りかける。

「え……？うーん……そりゃあ、ねえ？」

「なにその曖昧さ？」

さくらは笑い声を交えながら喋る。表情が見えないので、その笑い声の意味がわからない。

今度は俺が呆気にと取られていると、いつのまにかさくらは倉庫の扉の前まで歩いていた。

答えを聞いていない。

俺はさくらを引き止めようとソファから立ち上がる。その時、さくらが扉の前で歩みを止めたので、次の行動を待つことにした。

「いいよ」

急に発せられた、さくらのよく通る少し低めの声。

「い、いいの……？」

扉を開け、倉庫から出る瞬間。さくらは俺に振り向き、楽しそうに笑った。

「もし辞めれたらね？」

扉の閉まる音。倉庫に一人で立ち尽くす俺。

「え……な、なにがいいんだっけ……？」

。

……と、なにがいいのかわかんなかったが、多分アレは付き合ってもいいよ、だと思う。

ハッとして前を見ると、そこには豆乳のパック……………それだけ。

「あれ？友基ー？ともちゃああん！」

俺はまさかと思い、時刻を確認する。

「うーん、なんかこう、遅刻っぽいなっ！…………ドちくしょおおお
！！」

俺は立ち上がり、屋上の扉を開け、そして走り出した。

さくらとの約束を思いだしたからか、動悸が早くなる。

…………いや、走ってるからかもな。

。

放課後。

俺は一人で歩いていた。正門から出るところだ。

なんか最近一人で帰んのが多いなー。なんかいつも克也と里奈が二人で先に帰ってしまう…………。

学生カバンを肩に掛け、少し俯いて歩いていると、目の前に女生徒

が立っているのが見えた。
制服からして、違う高校の奴だ。

……美脚ぢゃのう。うへっうへへっ！

そう思いながら顔を上げる。

俺は女生徒の顔を見たまま立ち止まってしまっ

タイミング良すぎだろ……

「さくら……」

そこには幼さの抜けた、他より少し大人びた少女。2年前の面影が
少し残っているので、一目でわかった。

さくらの肩より少し伸びた赤みがかった綺麗な髪が、涼しい風でな
びく。

2年前と変わらない、優しい微笑みを見せ、口を開いた。

「……お腹すいたね」

……久しぶりは！？

「おまえ2年ぶりの奴に言うことはそれ！？」

「あつ、そだよね」

さくらは照れたように少し俯く。

「たく、少し抜けてる所は全くかわんねーな……」。

「えーと、お腹すいたね。なんか食べない？」

「……話を聞いてねえ!!」

俺はため息を一つ吐いて、それからさくらに歩み寄った。

。

「……で、なんで公園でスニッカーズ？」

夕暮れ時の公園。

ベンチに並んで座る俺とさくら。

手にはスニッカーズ一本。

「バッカ、『○○が○○○○スニッ○○○○』ってよく言っただろ？」

「なんで伏せ字だらけ！？まあ、そりゃ『お腹がすいたらスニッカーズ』っていうけどさ……」

あーあ、俺のセリフの伏せ字が台無しですわ。

さくらは包装からスニッカーズを取出し、一口かぶりつく。

「うーん、ナッツぎっしりカロリーたっぷりで太ること間違い無し！
って太るじゃない！」

バキッ

うーん、おかしいね。今俺を殴る意味ありましたか？

っていうか、なんでこいつ、いきなり俺に会いに来たんだろ？

「なあ……」

「はあー！くどいくどい！喉の渇きと私の体重が増しただけねっ！
帰ろっ！」

そう言つて、さくらはジャンプするようにベンチから勢い良く立ち上がった。

「えっ、おい。おまえ今日は何しにきたんだよっ？」

「え？うーん、なんか色々話したい事があつたような気がするけど、
政人の顔見たら全部忘れちゃったっ！じゃね！」

そう言つて踵を返した瞬間、さくらの横顔が寂しげに見えた。

俺はベンチから立ち上がり、俺に背中を向けるさくらの肩をつかむ。

「……………」

おまえ、俺との約束……覚えてるか？

さくらは振り返る。その顔は前と変わらない、優しげな笑顔だった。

「いや……なんでもない」

俺は掴んだ肩を離す。

覚えてるわけ……ねーよな……。

「……………」

さくらは再び俺に背を向け、歩きだす。

さくらの後ろ姿が夕暮れに照らされ、その光景になぜか焦燥感を覚える。

今、言わなかったら、一生後悔するようないや……。今、呼び止めなかったら、一生会えないようないや……。

さくらはもう公園の出口のすぐそばだ。

「さくらーっ!!」

さくらはふと立ち止まり、首だけ振り返る。

「またなーっ!!」

遠くてさくらの表情が見えない。

でも、さくらは笑った。……気がした。

「うんっ! またねーっ!」

さくらは口に手を添えそう叫ぶと、踵を返し、今度こそ振り返ることは無かった。

夕暮れ時。公園には一人立ち尽くす俺。

「……またなってなんだよ……」

いや、今度会うときに聞けばいい。そう!俺は今チームを抜けてん

だし、ダンディズムなキャラを持ってる！いける！いまならいける！
そう心に誓っても、2年前と全く変わらないこの状況に、ちこつと不
安を感じる俺だった。

第32話 俺とさくらとスニツカーズと（後書き）

渡辺里奈。身長155、体重43。茶色に染め上げた胸にかかる程度の髪を、ヘアピンとダックカールで上げている。猫目。性格は少しルーズ。人に命令されるのが大嫌い。……はい、こんな感じですか。里奈は決してツツコミ役ではありません。ムカツときた時だけ殴ります（主に政人）。里奈も最近出番が少ないですねー（汗）すんません、キャラコントロール悪くて……。この頃は克也と仲がよいようですね。まあ、その話は本編で（笑）

NEXT・氷室海

第33話 すっごい中途半端だけどね〜30話記念〜（前書き）

読者の皆さん！この作品も30到達！長かった……。そこで、サブタイトル通りかなり中途半端ですが、30話記念パーティーです！豪華3本立て！それではどうぞ！

第33話 すっごい中途半端だけどね〜30話記念〜

「うわっ！すっごー！」

「大きいね……」

「ボク旅館に泊まるの初めてなんだ〜っ！」

「でか〜……」

旅館に一足早く着いた里奈、綾ちゃん、ハル、さくらが、それぞれ驚嘆の声を上げる。

地方ならではの雑踏の聞こえない静かな雰囲気。森が近くて心なしか空気もつまい。夕暮れ時だからか、なんだか懐かしい気持ちにもなる。

旅館の外見は純日本。内装も清潔にされているだろう。

場所、建物、文句の付け所が無い。すごい、すごいよ。

すごいけどさ……

「君たちの荷物もすごいよね……」

「同感だ……」

「づ、づぶれでじまう」

横一直線に並ぶのは、漫画並にバ力でかいバックを背負う、海と友基、そしてこの俺イケ面高校生、政人様。上から読んでも、下から読んでも政人様だ。

「だ、大丈夫ですか……？」

「僕も少し持ちますよ」

後ろから心配そうに俺達を見つめるデンジャラスロリボーイ・アンド・ガール。充と満。^{みづる みちる}

「い、いや……だいじょ……」

「ミツ〜！ミチ〜！中もすごいよ〜！」

「ホントですか!？」

「わ〜いつ」

里奈に手招きされ、充と満は満面の笑みで駆け出していった。

あ、あいつら……

俺はもう誰も信じない。俺の足だけを信じて、一步一步進み、自分の力のみで

「お疲れ。……大丈夫か？」

そこには涼しい顔の克也。

こいつはたしか、この一泊二日のプロデュースを全て任されていたんだっけ。

みんなより一足先に旅館に着いていたらしい。

「「「……………」」」

「え、どうしたんだ……？みんな黙って俺を見つめて」

「……頼んだ、男前」

海が、自分と綾ちゃんの荷物を渡し、旅館へと歩いていく。

「うつ、えっ？」

「おおっ、君眼鏡が似合うねえー！かつこいいよ！だからハイ」

友基が、自分とハルの荷物を渡し、海に続く。

「ぐっ、まっ……！」

「おお、おまえの小指の第一関節スゲーかつこいいじゃん！はい」

俺は自分とさくら、里奈の荷物を渡す。

「びっ、びみよおおおおお……！」

「……ん？……あ」

そう、こいつもいるんだった。

自分の荷物だけでいっぱいっぱいの一太郎。
肩で息をして、虚ろな目に顔は青白い。

「ひっひっふう……ひっひっふう……」

なぜかラマーズ呼吸だ。

「ハア……先行くぜ。眼鏡同士、仲良くしてな」

俺は軽い足取りで旅館へと歩きだす。

「おおおおお……！」

「ひっひっふう……ひっひっふう……」

後ろから二つの奇声が聞こえるが、振り返ったら悲しい現実を見てしまいそうなので、決して振り返りませんよ、アタシは。

旅館の建物の入り口をくぐるとみんないた。もうわらわらと。

目の前には、若女将っぽいのがお辞儀をしている。藤色の大人びた着物を完璧に着こなし、それに色白の肌が映えている。

……いい！美人の若女将！たまらんな、うなじが素晴らしい。

殺気を感じ、その方を見るとさくらが睨み付けていた。もう何も言われてないけど土下座したくなってきちゃう

「『こうこうせい御一行』様ですね、お待ちしております。……おや、これで皆様お揃いでしょうか？」

……あー、あいつらはいいか。

「あーっと、あと眼鏡と荷物が来ますけど。まあ、そんなんはどうでもいいんで、先に案内お願いします」

「はあ、わかりました……。では、こちらへどうぞ」

俺達は靴を脱ぎ、女将についていった。

。

「おおー！広い広い！」

「「すごい！」」

先に部屋に入ったハルとロリ二人が、15畳程の和室を走り回る。

部屋の中央には大きな茶色のテーブル。外には縁側があり、そこからは壮大な森が拝める。

里奈とさくらは目を輝かせ、いつもは大人しい綾ちゃんでさえテンションが上がっている。

旅館で同じ部屋に泊まる男女……。そのシチュエーションで何も無いわけがない！……うふ、うふふふふ……！

俺は偉大なる期待に胸を膨らませながら、部屋に足を一步踏み入れる。

目の前には手のひら。

里奈が俺の眼前に手のひらを出し、首を横に振っている。

「……なんだよ？」

「ここは、れでいの部屋ですけど？」

「へ？」

俺の後ろにいた友基は、さも不思議そうな顔だ。その横の海も同じ表情。

「君たちの部屋は違う所」

……………。

「「「……………へ？」「「

。

日当たりの無い部屋。6畳の和室の真ん中には、申し訳程度に小さなちゃぶ台が置かれている。湿気た匂いに、なんだか気が滅入る。

ここが男達の部屋らしい。

……………おかしくない？この落差おかしくない？ついでにロリボーイは女の部屋っておかしくない？

「ちくしょうっ！せめてあと1畳広ければ最高だったのにな」

おかしくない？おまえのそのポジティブな発想おかしくない？

「……フッ……」

おかしくない？この状況で鼻で笑えるおまえの強い心がおかしくない？

俺は全身の力を抜くように四つんばいになった。

「旅館に来てまで、何が悲しくて男と同じ部屋なんだよ……？」

「まっ、これがコメディの運命だな」

「同感だ」

「同感できねーよ！そんな運命なんて俺が変えてやる！運命も俺のキャラ設定もメチャクチャにしてやる！うひゃひゃー！パンツがお股に食い込んでいい感じ……あれ？いつもと変わんないかも」

「無理な事してねーで現実を見ろよ？俺達にはまだ希望が残されているじゃないか」

友基は目を少女まんが並に輝かせて言う。

……そうか！

「温泉！」

海のため息が聞こえたが、俺はそんな事を気にしない程にテンションが上がっていった。

。

チャポーン……

そんな擬音が似合う場所、温泉。

俺と友基と一太郎は、女組より先回りして混浴の露天風呂の岩陰で身をひそめている。

他の男共は先に出ていった。

まっ、海は気取っちゃってるし、充は女の体とか興味なさそうだし、克也は眼鏡だしね。

「女体の神秘を観察とは。なかなか興味深いですね」

横で一太郎がニヤリと笑う。こいつの曇った眼鏡の奥には野獣の瞳が隠れているのだろう。

「オパーイ！オパーイ！」

友基はさっきからこんな感じだ。

俺はというと、来たるべき夢の世界に備え、精神統一をしている。

そう、これは遊びじゃない。殺るか殺られるかだ。

「……あっ、向こう露天風呂みたいですよ……」

俺は聞き逃さなかった。

遠くから聞こえる満の声を。そして他の女の子達も。

「露天風呂！？いくつきゃないでしょ！」

そうだ里奈。みんなを引っ張れ。

「でも……混浴みたいけど……」

綾ちゃん！大丈夫さ！混浴への扉を開けてごらん？

「でも、露天風呂入ってみたいな」

そうださくら！綾ちゃんを説得してくれ！

「いっちばーんっ！」

ハルの声と一緒に、カラカラと横開きの扉の開く音。

き、キターーーー！！

ぞろぞろとハルに続いて、みんな入ってくるのはわかるが、湯煙でシルエットしか見えない。

「うおおおおお！スゲー！」

友基はかなり興奮気味だ。

「目悪いからなんも見えねー！」

じゃあ君は何に興奮したの!?

「女の体というものは不思議なものです。無性に男の本能をくすぐる。そもそも……」

「うるせー眼鏡!ごたくはいいんだよボケ!」

友基と一太郎がモメだしたかと思うと、友基が一太郎にビンタを食らわし、一太郎の眼鏡が吹っ飛んだ。

吹っ飛んだ眼鏡はお湯に沈んでいく。

「おまえ内輪揉めしてどうすんだよ!?!バレたら俺の人生もこの小説も終わりなんだぞ!」

「そつ、そうだった!おい一太郎、大丈夫かよ!?!」

「ナニモミエナイ、ナニモミエナイ」

……え?

一太郎は両手をゾンビの様に前に突き出し、岩陰から飛び出した。

「おつ、おい!」

「ナニモミエナイ、ナニモミエナイ……」

一太郎は向かっていった。

女達のいる場所へと。

俺と友基は岩陰に完全に隠れ、一太郎の健闘を祈る事しかできなかった。

俺は耳を澄ませ、状況を確認する。

「ナニモミエナイ、ナニモミエナイ」

「ん……？ なにか聞こえない……？」

「あ、ホントだ……って綾、後ろ……！」

「え……きゃあああ……！」

「ナニモミエナイ、ナニモミエナイ」

「どーしたの！？ きゃっ！ 変質者っ！？」

「変質者だと！？ 変質者め、女をなめるな！」

バキッ

「わっ、私、従業員さん呼んできます！」

……従業員！？

「おい友基！ ここは退却だ！」

「ああ！ でも一太郎はどうすんだよ？」

「いや、眼中にないでしょ」

「うん、だよな」

そうして俺と友基は、湯煙に混じる女の子のかほりを名残惜しみながらも、無事男湯に戻れた。

後ろでさくらが

「この椅子鉄だよっ！」

と未恐ろしい事を言っていたが、聞かない事にした。

第33話 すっごい中途半端だけどね〜30話記念〜（後書き）

氷室海。身長176、体重67。銀髪のツイストパーマ。髪の毛の長さは政人と同じくらい。かなりのイケ面。クール。……こんな感じで
すね。ハルと峠で勝負した時はクールとはかけ離れたものだったが
（笑）ちなみに服装はストリートBです。ちなみに好きな食物は綾
の弁当です。ちなみに次は村上綾です。

第34話 男は口で語らず、ピンポンで語る

風呂を出た後、娯楽コーナーに行ってみると、他の男達が浴衣姿でまったりしていた。

海と充は卓球で勝負をしていて、克也はそれを椅子に座りながら眺めている。

「……………どうだったんだ？」

俺達が着いた途端、克也が近寄り、小声で聞いてくる。

「いやあ、姿は見えなかったんだけどさ、かほりが凄かったね。な？友基？」

「ああ、かほりがたまんねんだ。かほりがよ？」

「か、かほり……………」

克也が生唾を飲むのと、後ろで充がうなだれた声を出したのは同時だった。

「あ……………負けちゃった……………」

「アンタ、中々筋が良い。その腕なら政人に余裕で勝てるな」

うんうん、こいつはいつでも俺を挑発さ。

「海テメー、俺がピンポンを教えてやったことを忘れたのか？ああ

？」

「違うな、教えたのは俺だ。あれはたしか、おまえがやっとオムツを卒業した頃だった。あの時アンタが高熱を出して、それはそれは大変だったよ」

「なんの話！？しかもおまえって俺のなに！？」

「フツ……なら賭けでもするか」

「ならってなに！？『なら』って今までの会話の流れ的におかしくない！？」

「いえ、政人さん。いいんですよ。今のは『おまえの親父さん会社員？』『いや、大工だよ』『へえ、じゃあマイホームとか自分で建てれるんだ？』『ああ、そだよ。じゃあ湘南行くか』『みたいな感じじゃないですか。すごく自然な流れですよ』」

「いいんでないしセリフ長いし例文の流れがまず不自然だしおまえなんでこのタイミングで会話に混ざったの！？」

あ、もうやめよ。收拾つかねえや。

「ま、要は賭けすりやいいんだろ？じゃあ俺が勝ったら、おまえが指をパッチンパッチン鳴らしながら気分はアカペラの人で、綾ちゃんに『俺メインコーラスで、おまえはシンバルな！口で音出せよ』って言う！よし、決まり！」

「なつつつ！」

フツ、こんな罰ゲーム、俺しか思いつかねえよ？

海はかなり嫌そうな顔をしている。と、そこへ友基が含んだ笑いを俺に見せながら、海に近付き耳打ちをした。

ま、友基が何を吹き込もうと、俺以上の罰ゲームはないだろ。はっ、ちよろいちよろい。

「……俺が勝つたら……政人が……さくらに……告白する……？」

「はっ、ちよろいちよろおおおおおい！？」

なっ！俺が、さくらに、告白！？

俺がさ、くらに告、白！？

俺の反応を見た海が、納得したようにうなずいている。ふと気付いて周りを見ると、克也と充も同じような反応だ。

「さ、始めるか」

「いやいやいや！待てって！」

「政人、そうだったのか」

「いやいやいや！おかしいって！」

「頑張ってください海さん！政人さんはその後に頑張ってください！」

「おませなロリボーイ！少しお口をチャックしな！」

「まあ勝てば良いんだし？つーか逃げんの？こんだけ引つ張つてそれは無いよな〜！」

「……………」

……………やってやるよ。やるしかねえんだろ？

「ちくしょうっ！テメーなんか寝起きにプリン食べて、いつもはおいしいのにやつぱり寝起きだと食う気しねーなあーでもやつぱカラムルソースうめえーくらいの勢いで圧勝してやる！」

。

「……………デユース」

充のこの言葉を、俺は何回聞いたんだろう。

俺は風呂上がりにも関わらず、大量の汗をかいていた。

卓球台を挟んで正面に立つ海も、俺と同じくらいの疲労を感じさせる。

「そろそろ……………決めるぞ」

海は手に持つピンポン玉を頭上に放り投げ、重力によって落ちてきたそれを、渾身の力で打ち込んだ。

玉は海側のコートでワンバウンド。低い弾道を保ちながら、こちら

の台の隅ギリギリに落ちる。

あまりにも速すぎる玉を、俺は受け身で打つことが精一杯だった。

強く打ち込めなかった玉は、緩やかな曲線を描きながら、ゆっくりとネット向こうに落ちる。それを見逃す海じゃない。

「シッ！」

浅く速く吐き出された息と同時に、海は宙に浮く玉目かけ、ラケットを振り込んだ。

シェイクのラバーが、玉に食い付く。

それによって生まれる回転。

玉の上をかすめる様に打った海は、勝利を確信したのか笑みを浮かべる。

俺のコートの中央に高速で回転している玉が落ちた瞬間、その回転によって、台の上を滑るように玉はこちに向かってくる。

「くっ」

そう言った時には、すでに玉は俺の横を擦り抜けていた。

後ろの壁に当たり、軽い音を出しながらバウンドするピンポン玉。

「マッチポイント。海さん」

「おまえ本格的すぎんだろ……」

椅子に座って見ている克也と友基も、目をパチクリさせている。

「フツ……アンタは負けるんだよ」

海は嘲るような視線を俺に送る。もう卓球じゃなくて喧嘩でケリを着けたい。

俺はそんな思いを胸に留め、床に転がるピンポン玉を拾い上げる。

「見せてやるぜ……俺の必殺技を……」

俺は玉を左手に持ち、態勢を低くして構える。

「……フツ……必殺？上等だ、やってみ」

「あっ、綾さん！こんちゃーっす！」

「なっ！？」

パソコン！

「……デユース」

「やったあああ！」

「綾なんていねえじゃねえか！」

「え？綾ちゃんじゃないよ？綾さんだもん。綾さんはこちら辺一帯を締める伝説のヘッドだぜ？」

「デメー！」

海はラケットを放り投げ、俺の胸倉を掴む。なんか予想以上にビビったらしい。

「ついていい嘘とついちゃいけねー嘘つてもんが」

「あ……綾ちゃん」

綾ちゃんは海の後ろで、俺の胸ぐらを掴む海を睨み付けている。

「アンタ俺が何回も騙されると思ってんのか？綾なんて恐くもなんとねえんだよ！」

「ふーん、なんともないんだ？」

その声に、海が一瞬固まる。ゆっくり振り向き、綾ちゃんの姿を確認すると、顔面がみるみる青ざめていった。

「どついうふうになんともないのか、あつちで教えて貰おうかしら？」

「え、いや、あのね、そのね……」

綾ちゃんは海的首根っ子を掴んで、どこかに消えていった。

気付くと、ハルと満が向こうから歩いてくる。二人とも風呂上がりらしい。

「皆さんご飯ですよ！」

満が濡れた艶やかな金髪を揺らしながら、こちらにうれしそうにやってくる。

「夕飯はボク達の部屋で食べるんだよ」

ハルは……風呂上がりでもあんま変わんないな。ショートカットだし。

「よっしゃあああ！メシじゃあああ！！ハルちゃん食べあいっこしようね！」

「いや、しねーよ」

「わーいつ、ご飯ご飯！」

「こら、充。走ると危ないぞ」

……どうやら罰ゲームの事はみんな忘れたらしいな。

「政人さん、どうしたんですか？早く行きましょう？」

立ち止まり、俯いていた俺を、満が覗き込んでくる。

「おう、わかった」

俺はみんなが歩いている所へ、満と早歩きでついていった。

追い付くと、ハルに抱きついては殴られ、抱きついては殴られてい

た友基が俺の方を向く。

「あ、政人。引き分けだから二人とも罰ゲームな」

「……え？」

「うん、それが妥当だな」

克也も納得したようにうなずいている。

「え、罰ゲームってなに？」

ハルが後ろを歩く俺に振り向き、さも不思議そうな顔をする。

「ハルちゃん、それがね。こいつがさくらに」

ゴンツツ

「はああああ……てっ、テメー政人！」

「うるせえ！みんなに言う事じゃねーだろうが」

「なんだと！ってか俺はハルちゃんに殴られるのは認めるけど、テメーに殴られんのは気に入らねーんだよ！ねー、ハルちゃん！」

ギュッ

「しつこい！」

バキッ

「.....ね？」

第34話 男は口で語らず、ピンポンで語る（後書き）

村上綾。身長160。体重44。海の中学3年からの幼なじみ。成績優秀、容姿端麗。腰に掛かるほどの黒い艶やかな髪。性格よし。……完璧ですね。たまらんですね。実は、最初は政人とくつつけようとしたんですが、なんだか成り行きで海とくつついてしまいました。政人かわいそう（笑）最近海に暴力三昧みたいですね。海かわいそう。

第35話 結局はお酒だよ

部屋に入ると、里奈、綾ちゃん、さくらが席にしていた。あとボコボコの一太郎と海も。

テーブルにはすでに豪華な夕食が並んでいる。海鮮が豊富な和食だ。

「うおおっ！ すごい豪華じゃん！ すごいねハルちゃん！」

ギュッ

「そうだね」

バキッ

友基もすでにボコボコだ。

「ほら、政人が主役なんだから音頭とって」

里奈がそう言いながら俺にビールの入ったコップを渡してくる。

って、ビール！？

……ま、30話記念だしね。

みんながそれぞれ席に着いた事を確認して、俺はテーブルの上座に移動する。

「えー、皆さん。今回は30話記念パーティーということで旅館に宿泊したワケですが、私達はこれによって体を休め、さらにハードなコメディーに挑戦すると共に……」

「……………かんぱーい!」「……………」

結局シカトかよ!? てかカツコ多っ!

みんな飲んだり食ったりし始めたので、俺は諦めて自分の席に着いた。

うん、最悪の席だ。

俺の左には海。海の左にいる綾ちゃんとイチヤイチャイチヤイチヤ……………。

俺の右には友基。友基の右にいるハルにバキバキバキバキ……………。

へへ……………もういい。テメー等がイチヤイチャバキバキすんだったら俺はメチャクチャにしてやる……………。

「かーつやつ!」

俺は自分の席を立ち、里奈と話している克也に満面の笑みで話し掛ける。

「ん、なんだ?」

「おまえちよつとこれ持ってみ?」

俺は日本酒がなみなみ入ったジョッキを克也に無理矢理持たす。

「え……これがどうし……」

「あれ？克也君？何持ってたんの？」

俺の意図に気付いたワル乗り好きの里奈が俺にニヤリと笑い掛ける。

「「なーに持ってたんの？なーに持ってたんの？飲みたいーから持ってたんの！はい、一気！一気！一気！一気！」」

俺と里奈の一気コールによって、克也は強制的に一気した。

このコールはかなり不思議な力を持っている。酒を持っている時にこのコールがかかったら、是が否でも飲まなくてはいけないのだ。

ジョッキに入った日本酒を一気した克也は俯いている。

「……………ういゝ」

そして顔を上げた克也は、目が座っていた。

よし、まずは一人。

「よっしゃ克也！すべてをメチャクチャにすんぞ！」

「ういゝ」

フフ……もうすべてを破壊やる。フハ、フハハ、フハハハハハハハ

……

。

……まずい、やりすぎたかも。

みんなに一气コールしたから、もうホントにメチャクチャだ。俺も何回か一气コールされたから、少し酔っ払ってきた。

俺は今座って大人しく飲んでいたが、正気なのは俺だけかもしれない。

俺はなんとなく前に座るハルと友基を観察する。

「ハルちゃん、俺酔っ払っちゃったよ」

ギョッ

「ボクも」

バキッ

「ん？これ、ハルちゃんの足？」

むにゅ

「胸だよ」

バキッ

もう、さっきからこの状況だ。友基もめげないな。

「政人さ〜ん……」

その声に振り向くと、満が真っ赤な顔をしながら、定まらない視線でなんとか俺を見ていた。

「体が熱いですう……」

そう言って満は俺に寄り掛かってきた。

……っひゃ！

「そうかそうか。じゃあおぢさんと向こうの部屋に行こうか。おぢさん頑張っちゃうぞ！」

「は〜い、私も頑張ります……」

「そうだな、一緒に頑張ろうじゃないか」

俺は満を抱えて、部屋から出ようとした。

「とっつー！」

背後からそんな声が聞こえ、嫌な予感がして振り返る。

充が、飛んでいた。

ドゴッ

「くぴゃ」

俺は充の飛び蹴りをモロに受けて、為す術もなく吹っ飛んだ。

充は見事に着地して、満を抱き抱えた。

「満は渡しませんよ！」

く、くそ……。変な所で姉弟愛見せやがって……。

「ちよつと、大丈夫!？」

そう言って駆け付けてきたのは里奈だった。

ホッ、こいつはまだシラフみたいだ。

「ああ、大丈夫だから、ちよつと手貸して……」

その声が聞こえていないのか、里奈が俺に馬乗りになる。

「ちよつとお……さっきミチに何しようとしたのよ」

里奈は顔を近付けてくる。……ってクサッ！酒クサッ！

「ねえ、聞いてんの？何しようとしたのよ？」

むにゅ

「ちょっと！近い！里奈近いから！しかもアレが当たってる！当たってますよ！」

「とうっ！」

俺はその声のした方に振り向く。

今度は克也が飛んでいた。

「おっ、おい！それはおかしいだろ！俺はなんも……！おい、里奈どけ！動けな……」

ドゴン

「くぴゃ」

里奈が上に乗っていて動けない無防備な俺を、克也は容赦なく飛び蹴り。

「里奈は渡さない」

……え？それ告白じゃん。

「オイ、政人」

海の声に振り向くと、海は日本酒の一升瓶を持って笑っていた。どうやらこいつはまだまだシラフらしい。

「……さっきの続きだ。コレでケリつけるぞ」

「あ？テメー『クロガネの肝臓』と言われたこの俺に勝てると思っ
てんの？」

「フッ……俺は『シロガネーゼ肝臓』と言われてる」

「なんかセレブな肝臓じゃん！上等！飲み比べだ！」

。

「ヒック……へっ、海……テメーはもう降参か？」

海はコップを持ったまま固まってしまっている。

「……フッ……」

ゴクッゴクッゴク……

海はコップに注がれた日本酒を飲み干した。

「フッ……テメーの番……だ……」

海はコップを持ったままテーブルに突っ伏した。

はっ、俺に勝とうなんざ100年早いわ！

俺は周りの状況を確認する。

海との勝負に熱中して気付かなかったが、みんな酔い潰れていたようだ。

……ふう、ちよつと外に出て酔いを覚ますか……。

縁側に出ると、夜の森林の匂いが鼻を掠め、酔いが少し覚めてきた。タバコに火を付けて、一息ついてから空を見上げる。空は小さな光が無数にちりばめられ、幻想的な光景だった。

「なーにやってんのっ」

その声に少しドキリとしたが、振り向かずに無視してみる。するとその人物は遠慮も無しに俺の隣に座った。

そこでやっと横を見ると、さくらが頬を少し赤らめた顔で空を見上げている。

手には一升瓶とコップ二つ。

「おまえ……」

「ふふ、まだまだ飲み足りないでしょ」

そうだ……こいつ、俺より酒強いんだった……。

「……はあ、しょうがねえな」

俺はさくらからコップを受け取り、さくらはそれに日本酒を注ぐ。

一口飲んで、また空を見上げる。

周りは静かで、俺とさくらの二人きりの様だ。

さくらに告白する。

その言葉に不動脈を起こす。

告白……。

「……さくら」

コップを両手で持って、ゆっくり飲んでいるさくらに、俺は呼び掛ける。さくらは一口飲んでからゆっくりと振り向いた。

「ん、なに？」

長い髪がまだ濡れていて、それを上げている。
そして艶やかに覗かせるうなじ。うなじ……

「……うなじ」

「……うなじ？」

……うなじ？

俺は視線を前に戻す。

無理だろ。ていうか無理だろ。

俺は視線を感じて後ろを見る。

……後ろには、みんなが俺達を覗いていた。

「テメーら！」

「おまえ意気地がねーなあ」

「フツ……意気地なし」

「うるせー！」

「あつ、政人さん！もう終わりらしいですっ！」

「え、そなの？えーと、ゴホン。読者の皆さん。30話も読んでくれてありがとうございます。30話に行くまでは長い道程でした…

…しかし！私は思うのです！この30話があつたからこそ…

「……………」これからよろしく願いします！」「」「」

「……………」

結局かい…！

翌日、さくら以外、みんな青い顔をしていたとき。

第35話 結局はお酒だよね（後書き）

30話記念パーティー。読んでいただきありがとうございます！いかがでしたでしょうか？まあ、これからも連載していくので、読者さん、どうか愛想を尽かさずに最後までお付き合いをお願いします！では！あ、今回のキャラ設定はお休みです……。ではでは！

第36話 ナンパ大作戦

「うみだな！政人！」

「そうだな！友基！」

「ところでなんで俺達は海にいるんだい！？」

「わかんね！」

「つちゅうワケで、今回、俺達は海にいる。

理由なんて知らない。男が海に行くのに、理由なんていらねえんだ。

……まっ、実際は暇だから来たんだけどね。他の奴らは忙しかったりデートだったりかったるかったりで来なかった。

季節は夏。学生は夏休み。海は人だらけ。

俺達はすでに水着に着替えている。膝下まである一般的な男性用に着だ。

「おい友基！海って言ったらやっぱり……」

俺と友基は目を合わせ、互いに笑う。

「ナンパだろ！」

「水着のお姉さんだろ！」

「「えっ！？あついや、それもアリだな……」」

今回はなんだか妙に気の合う俺達は、水着のお姉さんをナンパする事にした。

俺達は海岸を見渡す。

……おっ。

「友基、あのお姉さんなんかよくね？」

「おっ、そうだな！俺なんも見えないけど！」

だから眼鏡をしろ！

「おっしゃ！まずはこの俺様が実力を見せてやんよ！」

おっ、なんか自信ありげだな。よし、こいつにまかせてみるか。

俺は自信満々の友基を、少し離れた所から見守る事にした。

『友基の場合』

友基がお姉さんに話し掛ける。

「ねえねえお姉さん。あつちでスイカってあだ名の俺のダチが待ってただけどさ。そいつを一緒に割らねえ？」

こいつとんだ俺をけなしてんの！？俺はスイカ役かよ！

「私、スイカよりドリアン派だから」

ドリアン派！？そんな派閥ねーよ！

くそ、失敗か……。よし、次は俺がいつてやる！

『上から読んでも下から読んでも政人様の場合』

俺は歩いてくるビキニのお姉さんに話し掛ける。

「ねえねえお姉さん。向ここの海の家でメシ食わね？俺が奢るよ」

うんうん。我ながら中々のセリフだ。

「私、海の家より牛の家のほうが好きだから」

どこの家！？

「あ、牛肉の食える所？そんならいいとこ知ってるよ」

「違います。生きた牛のいる家です」

だからどこの家だよ！？そんな家ねーよ！

お姉さんは毅然とした態度で立ち去っていった。

はあ、ダメか……。

「おい政人、おまえダメ！ なってない！」

「何がなつてないだよ！ おまえなんてドリアン派って理由で断られたくせによ！」

「うるせー！ もっかい俺にやらせろ！」

はあ、しょうがねえな。

『ドリアン派にナンパを断られた友基の場合』

「ねえねえお姉さん。あつちでドリアンってあだ名の体も言葉もくっせえ奴がいんだけどさ。そいつを一緒に割らねえ？」

そのセリフ失敗だよ！？ さっきの出来事は教訓にならないよ！？ しかも最後は結局割ってるし！

「私、向こうで硫黄のように臭い彼氏が待ってますから」

彼氏の方がすごかった！

「おいおいすげーな！ それホントかよ！」

「はい、ホントに硫黄のように臭いんです。卵の腐った臭いがして、黄色と白が混ざった感じの色で、液体状なんです」

それもう硫黄のよつにの『よつに』いらねーよ！純度100%の硫黄だよ！

「まじかよ！それって人間？彼氏の名前は？」

「硫黄です」

硫黄なんじゃん！彼氏でもなんでもねーじゃん！

……ダメじゃん！

こつなつたら二人で行くか……。

俺は二人組のお姉さんを見付け、話し掛けた。

「お姉さん、ナンパされてみない？」

二人組は俺達を見定め、笑顔でうなずいた。

「うん、いいよ。お兄さん達カツコいいし」

……よっしゃアアア！

「じゃあ、海の家でなんか食って、それから遊びますか！」

「うんっ！」

「まてまてまてーい！」

お姉さん二人組の後ろから掛かる声。そこには男二人組がいた。俺達と同じ年くらいだ。

「このお姉さん達は俺等が最初に見つけたんだ。だから俺等と遊ぶんだよ！」

その言葉に友基がすぐさま反応した。

「あ？テメー等はお呼びじゃねえ！」

向こうの喧嘩っ早そうな一人の表情が変わる。

「なんだテメー！やんのかオイ？」

「上等だオラ！ベッコベコにしてやんよ！」

二人が睨み合う中、俺と向こうの一人のため息が重なった。

そいつと目が合う。そいつは呆れた表情で肩をすくめていた。なんだかこいつとは気が合いそうだ。

「ねえ、私達はどっちでもいいんだけど。どっちにするの？」

「待っててお姉さん！いま俺様がこのザコをやっちゃうから」

「ア！？やられんのはテメーだろうがボケ！」

ゴゴンッ

俺と向こうの奴が、睨み合う二人の後頭部を殴り、それによって前のめりになった二人は互いに額をぶつけ合った。

「あつはああああ……」

「ふおっほおおい……」

殴られた二人は頭を押さえながら屈み、肩を震わせる。

「友基、れでいの前で暴力はよろしくないな」

「そうそう、ここはさわやかにスポーツでケリをつけよう」

スポーツか……まあ、それでいいか……。

「ふっふっふっ……政人、こんな奴ぐちょんぐちょんのにつちやにちやにしてやるうぜ」

おまえなんか生々しいからやめて。

「はっはっはっ……桂吾、こんな奴目をつぶつても勝てんよな？」

「いや、さすがに目を瞑ってたら勝てないんじゃない？」

向こうの二人も俺達と同じようなやりとりをしている。

あ、そういやまだ名前聞いてなかったな。

「おまえ等、名前は？俺は政人だ」

「……俺は友基」

友基は喧嘩ができなくてふてってしまっている。

「あ、俺は正樹^{まひき}ってんだ。政人だっけ？おまえは良い奴そうだな。このチビと違って」

短髪で活発そうな正樹の発言で、再び友基と睨み合う。

……もういいや。ほっとこ。

「俺は桂吾^{けいご}。よろしく」

桂吾はさわやかに笑いながら俺に握手を求めてきた。

「え？あ、はい」

なんだかわからないまま、俺は差し出された手を握ってしまった。なんだか独特のペースを持った奴だ。

「じゃあ、私達はあっちの海の家で待ってるから。終わったら呼んでね」

お姉さん達はそう言い残して、海の家へと歩いていった。

なんだか面倒な事になったけど……勝ったらお姉さんなんだ。やるしかないな。

「じゃあ、何のスポーツをやるうか？」

桂吾が周りを見ながら聞く。まだこいつも種目までは決めてなかったみたいだ。

友基はすぐさま手をあげた。

「アレだ、アレにしよう！ほら、相手の顔面殴ったり、蹴ったりするやつ！」

喧嘩じゃねーか！

「ボールとか無いし、ビーチフラッグとかでいいんじゃないの？」

俺が適当に提案すると、みんながうなずいた。

「ああ、いいな、それ」

「うん、じゃあそれで決定だね」

「政人、ビーチフラッグってあれだよな？なんか相手の顔面殴ったり蹴ったりするやつだよな！」

一人勘違いしてる奴がいるけど無視しとこう。

。

俺達4人は旗代わりの木の棒に足向け、寝そべっている。その木の棒は30メートル先に置いた。

審判は道行く若者に頼んだ。そいつが手を上げる。

「行きますよ、レディー……………」

「ゴー！」

その声が聞こえた瞬間、俺は全身に力を込めて飛び上がった。

「よっしゃあ！やってやんぜ！オラアツ！」

バキッ

「いてえ！テメーなにしゃがんだ！」

勘違いで正樹を殴った友基達の喧騒を背中で聞きながら、俺は更に加速していく。

横を見ると、桂吾は俺の真横を走っていた。

木の棒までは10メートルくらい。これはとり方できまるな……。

3メートルまでに近づいた所で、俺は態勢を前にして、頭から突っ込んだ。

「うおおっ！」

浜辺の砂が舞う中。

……俺の手には木の棒。

「よっしゃあ！」

俺は思わずガッツポーズをする。

「速いなあ。負けちゃったよ」

桂吾は腰に手を当てながら、残念そうな顔をする。しかし、あまり悔しそうじゃない。たぶんナンパも正樹が勝手にやったんだろう。

後ろをみると、友基達はまだ揉め合っている。

「ハア、何やってんだあいつら……もういいや。桂吾、俺達でお姉さんと遊ぼうぜ」

桂吾はきょとんとしている。

「え……？でも、いいの？」

「いいのいいの。あいつらはお姉さん達よりも喧嘩が好きな硬派な人なんだよ」

「ははは、きっとそうだね、じゃあ俺達で行こうか」

この適当な感じ。ホントに気が合いそうだな。

俺達は意気投合しながら、お姉さん達の待つ海の家に向かった。

「はっはっはあっ！」

海の家の前まで着くと、中から男の高笑いが聞こえる。
不審に思いながら中に入ると、そこには……

「ああ！一太郎！」

高笑いの主は一太郎だった。さっきのお姉さん二人を両手に従えて、成金並の邪悪な笑みを浮かべている。

「おや、これはこれは……政人さん。海というのは最高の一言に尽きますねえ」

一太郎は両側のお姉さん達の頬にキスをする。

「きゃっ！もう、一太郎様ったら」

「はっはっはあっ！ドンペリじゃあ！ドンペリを持って来い！」

なんかこいつやりたい放題だな……。

「一太郎様、ドンペリですか！？そんなにお金あるんですか？」

「よくぞ聞いてくれた！私は金も女も手に入れた！その訳はこれ！トルマリンパワー眼鏡！これをつけたその日から、もう人生の勝ち組ですわ！いまならトルマリンパワーレンズもついて……ん？どうしたんですか？」

俺と桂吾は一太郎の前に仁王立ちする。

「一太郎様あ……そんなのはどうでもいいんだけどさあ、そのお姉さん、俺達と約束してたんだぜ？」

「横取りはいけないよ？一太郎様？」

「え……？なんで二人とも拳を振り上げてるんですか……？ちよつとま……ぎやあああああ……」

その日、ビーチに一太郎の悲鳴がこだました。

その後、未だに喧嘩している二人を放っておいて、俺と桂吾は海を満喫した。

夜の浜辺。

「ハアツ……ハアツ……くそ……」

ボタン……

「……よっしゃああああ！ビーチフラッグ勝利いい！オイ政人！俺達の勝利だぞ！……政人……？あれ？政人？あれ？お姉さん？……あれえええええ！？」

お
し
ま
い

第36話 ナンパ大作戦（後書き）

水島ハル。身長163。体重45。走り屋のバイクマニア。ショートカットの黒髪で、ファッションにはあまり気を遣わない。サバサバした性格。呼称はボク。愛車はネイキッドの400。……ボクっ娘ですね、はい。しっかりしたキャラを持つてるのはハルくらいじゃないでしょうか。今度ハルのバイクを公開しようかな。……いや、マニユアルだからめんどくせえな。……ではでは！

第37話 亀吉さん奮闘記・番外編（前書き）

今回は亀吉さん視点の物語です。政人が『30話記念パーティー』に出かけている間のお話です。亀吉さん視点というネタの提案は4&4K先生がしてくれました。この場を借りて感謝致します。では、どうぞ！

第37話 亀吉さん奮闘記・番外編

私は亀である。名は亀吉さんだ。

時刻は昼時。

「じゃ、行ってくるぜ、亀吉さん」

うむ、行ってこい。

政人は今日から『さんじゅうわきねんぱあてい』の為に、旅館に一泊二日するらしい。よくわからないが。

玄関の扉が開き、そして閉まる音が聞こえると、この部屋にいるのは私だけになった。

私の2日分の食物は魚肉ソーセージ10本。政人め、全てを水槽にブチ込みおつて……。

まあいい、この静寂をゆるやかに堪能するか。

私は今いる砂利から水中に移動して、首だけ出し、のんびりとしていた。

カリツカリツ

ん、なんだ？この音は。

私は音のする、窓の方を見る。

そこには猫が手摺りに乗り、必死に窓を開けようとしている。

フツ……阿呆が。開いている筈がなかるう。政人としてそこまで抜け
ては……

ガラ

開いたアアアア！？

バカッ！政人のバカッ！そして政人を信じた私のバカッ！

猫は開いた窓から部屋に飛び降り、キョロキョロとしている。
風貌は全身黒。首輪が無いとなると野良か。野性はかなり荒っぽい
だろう……。

猫はふと、私のいる水槽を見つめた。

すると、器用に水槽のフタの上に乗り、今度はフタを引っ掻き始め
た。

もしか……この魚肉ソーセージが欲しいのか……？

フツ、必死になりおって……開くワケがあるまい。滑稽じゃな。フ
ハ、フハ、フハハハハハ！

ガタン

開いたアアアア！？

ストツ

入ったアアアア！？

私の体長の20倍はあろうかと思うくらいの大きさ。猫は魚肉ソーセージを加え、遠慮も無しに食べ始める。

やめつやめてええええ！！私の魚肉ソーセージ！

猫はもう5本目だ。止まることを知らぬのか！止まることを知らない青春パワーか！

猫が食べる事をやめ、私を見つめる。

あ。私死んだ。

猫は何を思ったのか、私をくわえ、水槽から飛び出した。

そして窓の外の手摺りに移動する。

やめ、やめろ！私は美味くないぞ！

「ペッ」

こっ、ここで捨てるなあああ！

ごっつん、とアスファルトに背中から落下し、甲羅に衝撃が走った。しかし甲羅は強かった。どうやら傷一つ付いていない……と思う。背中は見えないからな、うん。

なんとかクルツと回転して、私は四つんばいになった。

周りを見渡す。どうやら外に出てきてしまったようだ。

私の任務は政人の自宅へ戻る事。

ふ、気分はアレだな。政人がいつしか見ていた『みつしゅんいんぽつしぼう』だな。

私の頭にあのテーマソングが流れる。

私は任務開始の第一歩を踏み出し……

「あ、カメさんだあつ！」

え……？

私の頭上にはランドセルを背負った幼い人間の女。

「ママーッ！カメさんだよー！」

そいつはそう言うと、私をひょいと持ち上げ、もう一人の人間の女に駆け寄った。

ママと呼ばれたその女は、心底呆れた表情をする。

「もう、どこで拾ってきたの！ポイしなさい、ポイ！」

うむ、その意見には私も賛成だ。女子よ、早く降ろしてくれ。

「うんっ！わかった！」

女子は私を右手に持ち、腰をひねり、片足を大きくあげた。

まっ、待て！その本格的なフォームでどうポイするつもり……

「ぽおおおおいいいい！！！」

遠投しやがったあああ！

私は電信柱より上まで高く飛ばされた。

まずい！この高さでは甲羅もさすがに……

重力に従い、私の体は地面へと引き込まれていく。

うわあああああ！

ぽて……

……へ？

私は状況を確認する。

落ちた場所は……電信柱の天辺だった。

。

うう……死ぬ……。

日は沈み、そして昇り、太陽は真上に位置している。

あれから私は、為す術もなく電信柱の天辺で立往生していた。

甲羅はカラカラに日枯らび、喉の渇きも限界に近い。

私はこんな変な所で事切れるのか……。

人生を諦めかけ、思い出が走馬灯のように駆け巡った時、見慣れた人物が目に入った。

「マツ、マツ、政人おおおお！」

電信柱の真下に、一泊二日から帰ってきた政人の姿があった。

名前を呼ばれ、不思議そうに周囲を見回している。

飛び降りるなら今しかない……。政人の頭に丁度よく落ちれば甲羅は割れないかもしれないし、政人が私の姿を見て家に送ってくれるかもしれない。

政人は小首を傾げ、ゆっくりと歩きだした。

行くしかない……。

「とっつ！」

政人の歩く速度。風の流れ。落下地点は……頭！

政人の頭が近付いてくる。

政人は立ち止まった。

なっ、なぜ止まるううう！

。

あっ、くしゃみ出そう……

「ぶえつくしよーい！ちくしょっ！」

ゴンッ

「……ん？」

目の前に何かが落下してきた。こいつは……

「亀吉さん……?」

。

俺はアパートに帰り、なぜか俺の目の前に落下してきた亀吉さんを水槽に戻した。……あれっ?なんで窓が開いてんだ?

俺は荷物を降ろし、半開きの窓を閉めた。

「政人……」

背後から掛かる声。

うわぁー。また喋ってるよー。しかも片言じゃねー。

「……なんでしょう?」

俺は水槽に近付き、いつもと違う雰囲気亀吉さんを見つめた。

「……貴様には色々言いたいことがあるが……まあそれはいいだろう」

「はぁ、そうっすか」

「だがこれだけは言っておく。貴様は亀吉さん亀吉さんといつも言っているが……」

俺と亀吉さんの間に流れる沈黙。

「……私はメスだ」

「ええええええええええ！？」

おしまい

第37話 亀吉さん奮闘記・番外編（後書き）

内田友基。身長163。体重60。オレンジの短髪に無理矢理パーマをかけている。奥二重で鋭い瞳。豆乳ラヴ。……こんな感じですかね。一言で言うなら喧嘩ッ早いチビです。今後ハルとどうなってしまうのか……。お楽しみに（笑）

第38話 あはん充のラブストーリー

部屋に響く、携帯電話の規則的な着信音。

「…………んああ？…………誰だよ…………」

俺はベットに寝転んだまま、音源の方へと手をのばす。

携帯を掴み、二つ折りのそれを開く。俺は画面も見ずに通話ボタンを押して、耳にあてがった。

「…………はい、だれ…………？」

『もしもし、政人さんですか！僕です、一太郎です！』

俺は電話の向こうの大声に顔をしかめ、耳から離して画面を焦点の合わない目で睨み付けた。

携帯の画面には“一太郎”の表示。ついでに時間を確認すると10時前だ。

俺はさつさと用件を聞いて、さつさと寝たかった。

再び携帯を耳にあてがうと、向こうは相変わらずの喧騒。

『政人さん！？政人さああああん！？』

「んだようるせーな…………早く用件を言えよ…………1秒以内だ。はい、時間切れー」

『えっ？えっ？ちょっと……』

俺は携帯を閉じる。こうすると通話は自動的に切れるのだ。携帯も閉じられて一石二鳥だな。

俺は静かになつた携帯電話を適当に放り投げ、再び目を閉じた。

ピンポン

……。

ピンポン

……。

ポンピン

逆になつた！？

俺は無視するのを諦めて、ため息をつきながらベットから降り、玄関へと向かった。

玄関に着いて、ドアを開けると、そこには……

「政人さん！」

一太郎がいた。

ボタン

……こいつストーカーか!?

ポーンピン

「だああ!しつけれ!その音なんか間抜けでムカムカすんだよ!やめろ!」

ポーーーーン……ピン

。

「と、いうわけなんですよ」

リビングテーブルに座りながら、コーヒーをすする頬の腫れた一太郎。

「いや、俺まだ何にも説明されてないけど?というわけもクソもないよね?」

一太郎の向かいに座る俺は、とりあえずタバコをふかす。

てか、なんでこいつ俺の家知ってんだ……?ホントにストーカーだ

る？こいつ。

しかもさつきからなんかモジモジして用件言わないし。もう一回殴ってもいい？

「もうちゃっちゃと言え！焦れたいよおまえ！」

俺の言葉に、一太郎はやっと決心がついたようだ。

「わかりました！ズバリ言うわよ！」

「おう、ズバリ言え」

「ズバリ、女性が欲しいんです！紹介して下さい！」

「おう、ズバリ帰れ」

「はい？……ちょっと政人さん。それはあまりにも残酷と言うものですよ」

「いや、なんかおまえ自分が正しいような物言いだけとおまえ正しくないよ！？ちよつと態度でかくない！？」

「ですよね。ホントにもう」

「おまえ性格変わったな……。ム力つくし、眼鏡が無性にうぜえからやだ。紹介やだ。おまえやだ」

一太郎は勢い良く立ち上がり、力任せにテーブルを強く叩き、痛そうに顔を歪めてから口を開いた。

「痛いですよ!？」

「それ俺に聞くこと!？ほれ、用件は済んだんだ!帰った帰った」

俺は立ち上がり、一太郎の背中を押して玄関へと促した。一太郎はそれに必死で抵抗しているが、力は当然俺の方が強い。俺と一太郎はぐんぐんと玄関に向かっていく。

「ちよつ……待って下さい!話を最後まで聞いて下さい!」

「必要無い。坊主の人がカチューシャするくらい必要無いから」

玄関の扉を開け、一太郎を無理矢理押し出す、靴を放り投げ、後は扉を閉めるだけだ。

ノブに手を掛け、ためらい無く閉めようとした。

「5万!」

扉が、途中で止まる。

俺は黙ったまま一太郎を見つめた。一太郎は自分の片手の指を全部突き出している。

「何もタダとは言ってます。僕も本気ですから」

一太郎は真摯な表情だ。

俺は鼻で笑った。一太郎の表情が焦りに変わる。

「5万？……ハッ、金ですべて解決できると思ってんのか？あんな
りこの政人をなめんじゃねーぞ」

。

「……で、10万で手を打ったのか」

「うん」

向かいに座る海はかなり呆れた表情だ。

喧騒の絶えない駅前。その駅前のハンバーガー屋の2階に俺と海は
いた。

結局俺は頼みを受けた。だって10万だよ？俺生活費無いんだよ？

「なんで俺の所に来たん？他にもいるだろ」

海は物凄い面倒そうな表情でコーヒーを飲んでいる。

「だっておまえ女の子いっぱいいるじゃんか。うちの生徒にすげー
聞かれてたろ？」

「全部断った」

「おまつ……！マジで！？」

「ああ、俺には綾がいるだろ」

海は当たり前のように言う。

「おまえ男らしいけどうぜえな！ テメーはそうやってあやあや言うてな！ あーあ！ 綾ちゃんかわいい！」

これで振り出しに戻っちゃったな……。

「女の事は女に聞けばいいんじゃないのか？」

女に、か……。

。

「……で、私の所に来たワケだ？」

「うん」

駅から少し離れた場所にある喫茶店。 そのオープンテラスに、俺と海と里奈はいた。

「うーん、女の子ねえ……。 あ、すいません、スペシャルパフェーつ。 政人、ゴチね」

わーお！ さっそくスペシャル注文ですね！ 迷いが無いですね！ とうか遠慮が無いですね！

「イチタロに紹介かあ…… うん、たぶん無理」

じゃあ注文すんじゃないよ！

「そうか……。これでまた振り出しに戻ったな……。あ、すいませ
ん、シーフードパスタ一つ」

「いや、なんか当たり前のように注文してるけどさ、なんで海も付
いてきてんの？おまえ女いないんだったら用無しなんだよ？」

「は？取り分1割くれるんだろ？相棒」

「おかしいよね？おまえなんかした？相棒呼びわりするような事し
ました？」

「いや、してないんだけど。なんか、あいついるだろ？西海岸の覇
者倉田さん。あの人がおまえ等は相棒だって言ってた」

「いるだろ？じゃねえよ！誰だよそいつ！」

「バカ、西海岸で『貝殻拾いの覇者』って呼ばれてる人だよ」

「知らねーよ！これまでもこれからも俺の人生には絶対関わらない
人だよ！」

「まあまあ、そんな事はどうでもいいでしょ？」

里奈がパフェを待ち遠しそうにしながら、割って入ってくる。

まあ、確かに全身全霊でどうでもいいな。

「それよりも、どすんの？相棒」

君まで相棒呼ばわり！？

……もういいや……。それでも8万だし。

「おまえら……ちゃんと報酬分働けよ？」

「分かってるわよ。いや、分からないかな？」

いや分かれよ！

「ああ、ちゃんと働く？」

いや俺に聞くなよ！

「お待たせしましたー。スペシャルパフェと、地中海シーフードパスタになりまーす」

ウェイターが注文した品をテーブルに置いていく。

それを見た二人は話し合う様子も無い。目の前の食物に釘づけになっている。

「とりあえず腹ごしらえだな」

「さんせーい！」

それから二人は無心で食べ始めてしまった。

ハア……俺もなんか食うか。

「すみません、カルボナーラ下さい」

「やだね」

……。

ええええええ！！！！

断られた！初めて喫茶店で注文断られたよ！何この店！？二度と来るか！

「ねえ、政人。これからどすんの？当てでもあんの？」

里奈がパフェを頬張りながら聞いてくる。

「うーん、里奈の言う通り、あの眼鏡じゃあなあ……。誰に聞いても紹介は無理だろうな」

「大体、なんでいきなり『女が欲しい』なんて言い出したんだ？」

海がパスタを頬張りながら聞いてくる。……てか二人とも行儀わりいよ。

「ああ、なんか最近女と触れ合う事が多くて、興味を持ち始めたんだ。だから『一日だけでいいですから』って必死になってたぜ？」

「一日だけでいいの!？」

パフェを口いっぱい頬張っていた里奈が、いきなり俺に顔を向け
て声を張り上げた。当然のごとく、クリームやら何やらが俺の顔に
飛んできた。

「……うん。喋る時はお口の物をごくんしてから喋ろうね〜っ
てママに教わっただろうがコノヤロウ!」

「一日かぁ。……うん、だったらアテがあるよ」

こいつ俺の話をまったく聞いてねえ……。あーあ、いつから里奈は
こんなこんなこんな……。え!？

「あるの!？」

「うん、女じゃないけどね〜」

里奈はスプーンを指で遊ばせながら、含んだ笑みを見せた。

。

「……で、僕の所に来たワケですか」

「「「うん」「」」

「って意味分かんないですよ!」

里奈の自室。小綺麗な女の子らしい部屋に、4人はいた。

ベットに俺と海。勉強机とセットになった椅子に里奈。そして部屋の真ん中。客人用の椅子に座るのは……充だ。

「なんで僕がそんな事を……。全く理解できません！」

充は椅子から立ち上がり、感情をあらわにした。

里奈は椅子の背もたれを前にして、そこに腕と顎を乗せて面倒臭そうにしながら口を開く。

「もう、理解できない？だから、君が、女装、をす、るの」

「区切り方ちよっとおかしいですよ！？というか嫌ですよ！言葉じやなくて、その発想が理解できないんです！」

「別にいいじゃん。報酬も2割なんだし。ミツは女装しても絶対イケるって！エロかわいくしてあげるから」

「嫌です！だったらちよいワル親父にしてください」

「えー、それで女装したらちよいワルおばさんじゃん」

「あー、なんかレジの順番とか抜かしそうですねーって違う！まず女装が嫌なんです！ぜつつつたいやりませんからね！」

充はふんつと鼻を鳴らしながら椅子に力任せに座った。

こりゃあ時間が掛かりそうだな……。しょうがない、俺が説得するか。

「充、正直に答えろよ」

「え、はい」

「おまえ、学校で気になるクラスメイトがいるだろ」

充の白い頬が、見る見る内に紅潮していく。

「いやっ、いやぁ。僕は女子が気になるなんて事は……」

「ふーん、女子が気になるんだ」

充は自分の発言に気付き、狼狽している。やがて諦めたように肩を落とした。

「……はい……気になる女の子がクラスにいます……」

「その子、もうすぐ誕生日なんだろ？」

「なっ！」

「んで、その子、骨董品の古いオルゴールが欲しいんだろ？」

「そんな事まで……」

「フッ、俺の情報網をなめんなよ？」

まあ、ホントはもしもの為にと、さつき一太郎に頑張ってもらったんだけど。効果できめんみたいだな。

「そしてなんと！そのオルゴールはジャスト2万円！さあ、どうする？」

「……………」

充は俯いたまま、押し黙ってしまった。

「サア！あサア！あサアサアサアサア！」

。

「入っていいよ」

ドア越しに里奈の声が聞こえる。

ドアに寄り掛かっていた海は、待ちくたびれた様子で踵を返し、ドアを開けた。

そして驚きの表情のまま、動かなくなってしまった。

「なんだよー、早く俺にも見せてくれよー」

俺は固まっている海の肩越しに、部屋の中をみる。

「……………うおお」

そこには、かわいらしい一人の美少女がいた。

ノースリーブの爽やかな春色のワンピース。

肩にかかる程度の栗色の髪。

その色が見事に映える純白の肌。

整った顔を恥ずかしそうに少し俯かせる、その表情はとても初々しい。

俺達の視線に気付くと、不安げに上目使いで表情を伺い、ツヤのある唇に手を持って行き、再び恥ずかしそうに俯いた。

てか……君だれ……？

「ふふん、どうよ？私のテクニクは」

「文句もツツコミも出来ないぞ、こりゃ……」

充は恨めしげに俺を睨んだ。……やべえ怖くねえ可愛い君が愛おしい。

「政人さん、本当に報酬もらいますからね！くそつ、なんで僕がこんな……」

「ちやうちやう。私は、だろ？」

「……あはん、なんで私がこんな目に」

「へえ、『クソツ』て言葉、女の子は『あはん』になるんだふざけるな。……まあいい。これでバレずに一日過ごしゃあ報酬は俺の

もんでゲス！うしゃっしゃっしゃ！」

こうして、あはん充と、でゲス政人と、その他大勢の十万円を賭けたミッションが始まるのだった……。

第38話 あはん充のラブストーリー（後書き）

みなさん。本当にすみませんでした…。もう一生更新しないだろう
とと思っていたのですが、それじゃダメだよと思いなおし、こうして
書き出すことにしました。しょうがねえ付き合っでやるか、という
読者の方、またよろしく願いします！では！

第39話 カレーにはドレッシングでしょっ

「……本当にやるんですか？」

最後まで不安顔の充。

「……今更だろ」

壁にもたれて腕を組み、目を伏せたままの海。

「もう行くっきゃないって！」

にやけ面のままグイグイと充の背中を押す里奈。

「つーわけだ。行つてこい！」

ここは一太郎との待ち合わせ場所 駅前の噴水がよく見える少し離れた裏路地だ。一太郎は既に噴水の前にいて、そわそわと落ち着きがない。

みんなに言い伏せられようやく諦めたのか、充は大きなため息を一つ吐いて、わかりましたよ……と呟きながらとぼとぼと歩いて行った。

「……あいつ、大丈夫なのか」

もうそわそわしすぎて小動物と化した一太郎へ、ためらいながらも歩いていく充の後ろ姿を見ながら、海はため息混じりに言った。

「うーん……。一応デートの内容は一太郎から聞いてるし、充にも伝えたから、ハプニングが起きない限り大丈夫じゃね？」

もしハプニングが起きたとしても俺等が対処すりゃいいんだしな。……でも声ぐらい聞けたらなあ。おもしれーのに。

「ん？なにやってんだ、里奈」

妙に静かだと思ったら、里奈はしゃがんで自分のバックからゴソゴソと何かを取り出そうとしている。

「えーっと……あつた！これこれっ」

俺と海の前に突き出した無機質な黒い物。これは……

「……盗聴器？」

「ピンポーン！通称盗る盗るくん！みつにマイクを持たせておいたのよっ」

青いタヌキよろしく、里奈は自慢げに盗聴器を掲げる。

「ふーん、ありがちな名前だね、青いタヌキくん」

「違う！僕はネコ型ロボットだ！」

ちげえお前は里奈だ。

「てかなんでんなもん持ってただよ！？はっ、まさか俺の事も盗聴とか盗撮とかしてねーだろうな！？」

「なんで政人を？そんな利用価値の無いことするわけないじゃん。存在価値さえないんだから」

はいキター。利用価値はまだいいとして存在価値これキター。

「まっ、海ツチは人気だからよく激写させてもらってるけどねー」

はいキター。人気ってどうせ女子にだろこれキター。

「なっ………！」

海は狼狽して、とっさに自分の体にも盗撮器がついてないかを確認しだす。

「まっ、それはおいといて。この盗聴器は安物だから10メートル先までしかできないの。だから上手く尾行しなきゃバレルよ。いい？ここからは私のテリトリーよ？いうとーりに動きなさいよ」

それだけ言うと、里奈は一太郎達の尾行を開始した。

……… かつけえ。かつこよすぎてなんか背筋がゾクゾクするってか普通に通にこえーし引くわ。

「海、早く行くぞ」

まだ自分に盗聴器の類がついてないか必死で確認している海。

「なあ！俺になんか付いてるか！？」

「付いてねーっつーの！付いてるとしたら背中に張り付いてる盗聴器ぐらいだよ！ほら、行くぞ！」

「そ、そうか。なら良かったいや良くねええええ！」

。

駅前から少し離れたカフェ。そこで軽食を取る一太郎と充。俺達は少し離れたテーブルで一太郎達を観察している。

「いやゝ、意外とバレないもんねえゝ。あ、私はレアチーズケーキ」

里奈は二人を見ながらも注文はしっかりしている。

「かしこまりました」

「まあ……一太郎だからだろ。俺はこれ。ああ、あとアイスコーヒー」

海は二人の様子にあまり興味がないのか、二人の方には見向きもせず注文をする。

「かしこまりました。他にご注文は？」

あ、俺も飲み物くらい頼んどくか。

「あとコーラーっつ」

「いやむり」

……やっぱりかあああ!!

もういいや……。二人の様子見るか……。

一太郎は充の正体に全く気づく様子がない。

俺は里奈から受け取ったイヤホンを片耳に付けて、二人の会話をきいてみる事にした。

おおっ、スゲー。ノイズが全く無いぞ。

『み、みち子さんは好きな食べ物とがありますか?』

メニューを眺めながら緊張した面持ちで喋る一太郎。ちなみにみち子とは充の事だ。

『べつに』

そっけなさすぎんぞみち子!!

『そ、そうですか……。あっ、みち子さんって好きな食べ物とがあります?』

おんなじ事聞してるよ! 今別について言っただじゃねーか!

『ピーマン』

あるのかよ!!

「大丈夫か……？あの二人……」

海はさっきと同じ事を、しかしさっきよりも更に心配そうに聞いている。

うーん、これはちつとマズイかもな……。

俺は携帯を取り出し、充にメールを打つ。

えーっと……『おまえそっけなさすぎるぞ。カレーにはドレッシングでしょ張りにいってやれよ。』と。よし、送信。

充は携帯を取り出し、内容を確認している。そして文字をうちはじめた。

しばらくすると、俺の携帯に充からのメールが届く。

「おつ、来たか。なにに……」『わかったよくそやろう』……」

タメ語！？うぜえ！人にくそやろうなんて言っちゃいけないんだぞくそやろう！

……まあいい。これで少しはちゃんと会話してくれるだろ。

俺は再びイヤホンの音に耳を傾ける。

『あつ、僕ピラフにしようかな』

『カレーにはドレッシングだろうが。カレー頼め』

意味わかんねえ！しかもなんか命令口調！

「た、たしかに」

こいつ無理矢理話合わせちゃったよ！

その後一太郎は注文したカレーにドレッシングをかけていた。もうなんかかけすぎてスープカレーになってる。

「まあ何とか大丈夫そうだな。一太郎は充の言いなりだし」

「うーん。でもいつまでもつかなあ……」

里奈はかなり不安げな表情で二人をみつめている。

二人は丁度食事を終え、デザートを頼むようだ。

『僕あんみつが好きなんですよ。よし、あんみつにしよう！』

『よし、じゃあパフェを食べ』

充話聞いてねえ！

『パフェにもドレッシングだ。できるだろ？』

できねーだろ！ていうか充なんかキャラ違くない！？

『た、たしかに』

おまえはノーと言え！

充は呼び出しボタンを押す。

もう早く終わってくれ……。

もう見るのも疲れた。俺は疲労感を紛らわすためにテーブルに突っ伏す。

「お、おい。充の様子がおかしいぞ」

海の焦った声。俺は体勢はそのまま、首だけ動かして充の状態を見た。

「んだよ。充はいつだって様子おかし……」

俺はそのまま固まった。

俺の見る先、一太郎達のテーブルにはウェイトレスが来ている。

ウェイトレスは充を、充もまたウェイトレスを見たまま固まっていた。

そのウェイトレスは……。

『せ……セツナちゃん……』

充のクラスメート。そう、充が気になっている女の子だった。

『え？セツナちゃんってあの……』

一太郎は言葉を濁す。充の気になる女の子は一太郎に調べてもらったんだから、当然一太郎は知っているはずだ。

『え……あの……もしかして……』

セツナちゃんは口到手を当て、困ったような表情をしている。そして……

『みつる……くん……？』

言っちゃった……。

セツナちゃんは自分が発した言葉でやっと確信したのか、さっきの表情から一変、驚愕の表情になる。

『な……なんで……どうして……！』

『え？充君って……え？』

一太郎もようやく今の状況のに気付き始める。
充はうつ向き、肩を震わせていた。

ヤバイヤバイヤバイ！今物凄い修羅場なんですけど！

充！おまえの言葉次第ですべてが決まるぞ！

『みつるくんどうして女装なんてしてるの!?!』

『充君!君は僕を騙そうとしていたのか!でもギザ萌ユルス!』

『ねえ、なんか喋ってよ!』

『ギザモユルス!テラカワユス!』

一太郎テメーは黙れ!

『みつるくんっ!』

『充君!』

俺達は充が口を開くのを、固唾を飲んで見守る。

『ぼ……僕……は……』

『僕は女の子になりたかったんだよっ ばーかわーい!』

壊れたーっ!!

その言葉を残し、爆笑しながら走り去る充。

魂が抜けたように脱力する一太郎。

床にへたりこみ、嗚咽を漏らすセツナちゃん。

あーあ、もうなにもかも充の頭もパアになっちゃったっ

……その後、充にフルパワー正拳突きを喰らい、一太郎からは当然報酬金なんか貰えず、更にこいつも俺を殴ろうとしたので、むかつくから里奈と海との三人で袋叩きにした。

うーん、なんていうか……やっぱりカレーにはドレッシングでしょっ
あっ、サブタイトルはこれで決まりだね！

おしまいっ

第39話 カレーにはドレッシングでしょっ （後書き）

みなさんこんにちは！本編はいかかでしたか？楽しんで頂けましたか？まあ、本編なんかは置いて。読者の方々は後書きはみてくれているのか……。作者は後書きでしか自己主張できないので見てやって下さい。僕もまあ言いたい放題してますしね。うふうっ！綾ちゃんは俺のもの！綾ちゃんは俺のもの！まあ、それも置いて……。みなさん、30話の後書きからキャラのプロフィールを公開しています。そして前話はガッツリ忘れてました俺のばーかわーい！……と、いうわけで次話からプロフィール再開！次は一太郎！こいつの名字は赤木です！田中じゃないよ！でわでわ！

第40話 40記念？つてまったくグダグダじゃねえか！

あ……暑い……。

目が覚めると、室内はあり得ない気温になっていた。

寝た体勢のまま、壁掛け時計を見ると、午前9時を少し過ぎた所。いつもの俺が起きる時間じゃない。

俺は汗で張り付く部屋着とベッドのシーツを睨みながら、体を起こした。

あつつつー……。暑すぎてでんぐりかえってそのままの勢いで土下座するくらい暑い。いやしないけどさ。

うなだれながら、タイマーで消えていたクーラーの電源をもう一度つける。クーラーから出る風が気持ちいい。

あゝすずし。涼しすぎてでんぐりかえってでんぐりかえってでんぐりかえって調子乗りすぎてタンスの角に鎖骨辺りを強打して死ねっ！てくらい涼しい。いややらないし死なないけどね？

室内の温度が下がり、ようやく心持ちも落ち着いてきた。

みなさんご機嫌よう。毎度おなじみの政人様だよ！えーと、今回は40話だっけ？

……ん？40話？

って40話じゃん！！

『40話記念。奴らは川からやってくる！笑いあり涙ありポロリありシツポリありパシリありなんでもありの2日間！こうこうせい御一行1泊2日バーベキュー大会！』

ミッション1『強制召集』

「あ、もしもし！友基？いまからバーベキューるんだけどさ」

『は？無理無理！俺は今ハルちゃんと峠を流してんだよ！じゃーな
』！』

プツ、ツーツー……

……………。

「あ、もしもし？海？いまからバーベキューするんだけど行かね？」

『……俺は今綾と遊園地にいる』

……。

「しねえええっー!!」

ブツ、ツーッー……

「あ、もしもし？充？いまからバーベキューするんだけど別に任意だけで行かないとか言ったらおまえの頭がパプリカみてーに面白くなるんだけど？」

『い、いきなりですね。しかも頭がパプリカってどういう状況ですか……。いや、でもすいません。僕、今満とシヨッ』

「しねえええっー!!」

ブツ、ツーッー……

……あれ！？誰も来ねーじゃんコンチクショウ！てか充は最後になにを言おうとした！？満と……シッポリか！？シッポリかコノヤロウ！いや、でも『シヨッ』って言ってたな……。

シヨツポリかコノヤロウ！

ミツシヨン2 『材料収集』

今俺がいる場所はホームセンター。とりあえず品物を先に集める事にした。

必要なものをカートに入れて、レジに並ぶ。

「お次の方どうぞー」

レジのお姉さんの声。おお、俺の番か。

お姉さんはカートに入っている品物に次々とバーコードを当て、小物は袋に入れるなどテキパキと作業をこなす。

全ての品物をカートに戻すと、お姉さんは口を開いた。

「えーと、お会計1万と6000円になります」

た……足りない。少しどころか1万6000ガツツリ足りない。てか財布にツタヤカードしか入ってない俺はここになににきたんだろつか？

いつまでも財布を見ながら固まっている俺を、お姉さんは不思議そうな顔で見つめる。

ええい、こうなりゃ裏技じゃっ！

俺はとっさにお姉さんの手を掴み、顔を近付ける。

「お姉さん。俺が本当に欲しかったのは、こんなホームセンターなんかで買えるような品物じゃない。そう、お姉さんの輝く笑顔さ。惚れた。惚れたよ」

「え……えっ!？」

お姉さんはみるみるうちに顔が真っ赤に染まり、助けを求めるように周囲をキョロキョロと見回す。

「お姉さん、こっち向いて」

「え、あの、はい……」

困ったように、遠慮がちに俺を見上げるお姉さん。しかしその瞳は、やがてしっかりと俺の目に吸い込まれいった。

よっしゃあ! 堕ちた!

「俺と……」

「……はい……」

惚けたような表情のお姉さん。

「俺と、夜のバーベキュー……しないか？」

「は? いや無理」

無表情のお姉さん。

「え……？」

「はいはい、会計1万6000になりますよ。早くしてよ、後ろ詰まってるんだから」

「え……あの……うわあああんっ！」

やりきれなくなった俺は品物の詰まったカートを掴み、全力で外へと走る。

「き、きやあ！誰か！盗人よっ！」

お姉さんの悲鳴にすぐさま駆けつける屈強な警備員達。

俺はあっさりとその警備員達に捕まった。

「やめろっ！はなせっ！俺は政人様だぞっ！俺がお腹いっぱいだったからおまいらなんか上腕二等筋をムキツてさせるだけでたおせるんだぞっ！いやごめんなさいごめんなさい！つれていかないで……」。

ミッション3 『亀吉野郎』

「ひっぐ……えっぐ……」

嗚咽混じりに自宅のドアを開ける。

「ど、どうしたっ？政人」

水槽辺りから聞こえる声。この少し低い、独特のお姉さんの声は亀吉さんのものだ。最近はまだ亀が喋る時代なのかな、ぐらいに思っ
て諦めてる。

俺は水槽の前で正座して、亀吉さんに全てを話す。

「ひつぐ……あのね、お姉さんが1万6000円でね、ツタヤカードでね、夜のバーベキュー無理で警備員が上腕二等筋ムキツて殴ったあゝ」

「そうか、風俗でお姉さんが1万6000円だったが、財布にはツタヤカードしかなく、夜のバーベキューふれいも断られ、結局は黒服につまみ出されたのじゃな」

……まあ、あながち間違っ
てないかな。

「気に病むな。人生は長い。そんなこともあるろ。よしよし」

優しい口調で俺をなぐさめる亀吉さん。

……………。

「亀吉さん」

「ん、どうした、頼み事か？仕様のない奴じゃ。なんでも言ってみろ」

「……俺と、夜のバーベキュー行かない？」

「は？いや無理」

俺は無言で水槽の両端を掴む。そして左右に揺らした。最初はゆっくりと。だが徐々に早く……。

……そして強く！！

「おーらオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ悟空！よろしくな！」

「にぎやああああああああ……。」

ファイナルミッション『最終宣告』

時刻はすでに昼過ぎ。今日バーベキューをするのならもうこの時間はギリギリ。これが最後のチャンスだろう。

俺は高鳴る鼓動を押さえ、通話ボタンを押した。

「あ、もしもし？克也？今からバーベキューするんだけど、行かね？」

『え？いや、悪い。今里奈と図書館で宿題を片付けてるんだ。よう

やく里奈がやる気を出したところで』

「ところでしねええっ!!」

プツ、ツーツー……

……………。

「あ、もしもし？一太郎？おまえ今なにやってんの？」

『え、いま家で暇してますけど』

「しねえええっ!!」

プツ、ツーツー……

誰もいないじゃねーか！てかみんな見事にカップル成立してね！？
俺は亀とでも戯れてろってかコノヤロウ!!

その時、俺の携帯が震えた。同時に鳴る着信音。

誰か来てくれるのか!？

俺は歓喜のあまり携帯を落としそうになるが、焦る気持ちを押さえ
付け、携帯を開く。

ディスプレイには、『一太郎』の文字。

.....。

通話ボタンを押す。

『も』

「しも死ねええつ!！」

プツ、ツーツー……

がつくりと肩を落とし、諦めて携帯を放り投げようとした時、再び着信音がなった。

速攻で通話ボタンを押す。二の次は言わせねえ。

「も」

「うあかん!うちもうあかんしねええつ?え?」

電話越しに聞こえた声を違和感を覚え、耳から離してディスプレイを見ると知らない番号。しかしその声にはしっかりと聴き覚えがあった。

再びゆっくりと携帯を耳に押し当てる。

『……政人、どうしたの?……まあ、いつもの事だけどさ』

「さ……くら。か……?」

『はいはい、私はさくらですよー』

俺は真っ白になっている頭をフル回転させて、言葉を紡ぐ。

「な、なんの用だよ。てかなんで俺の番号知ってんの？」

「番号は友基に教えて貰ったの。で、用件は……」

少しの間。そして、さくらの声が頭に響いた。

『政人いま暇？遊びに行かない？』

キターーーーー！！

キタ！これキタ！いんじゃん！俺にはさくらがいんじゃん！

「さくら！俺とバーベキュー行かね！？」

『え？うん、別にいいけど……二人だけ？』

「もう人数なんて関係ねえ！夜のバーベキューだよ夜の！」

『な、なんかやらしいねそれ……』

「よっし！じゃあ早速銀行行って金降ろしてもう一回ホームセンタ
ーいって」

『あ』

「ん、どうした？……ああ、金なら気にすんなよ！全部俺にまかせ」

第40話 40記念?つてまったくグダグダじゃねえか! (後書き)

毎度どうも。最近『あちー』と『ねみー』と『投資信託』が口癖のMCおもむろです。あ、次回はちゃんと40話記念なのでご安心を。早速プロフィールいきましょ。赤木一太郎。身長160。体重48。チャームポイントは分厚いビン底メガネ。克也は目の敵。こんぐらいですかねー。最初は克也をライバル視しているガリベン君ってだけだったのに、最近では濃っいーイジられキャラになってますね。毎回酷い思いをします。たぶん政人よりも酷いです。そんな可哀想な奴なのに、無性にム力つくのは僕だけでしょうか。なんか書いてイラツときます。というかぼーっと執筆していると、必ず一太郎が登場してます。あれ?俺、まさか……一太郎が、好……き……?

第41話 40話記念！一泊二日バーベキュー！……できるのか？

川辺に腰を下ろして、見上げる夜空。雲一つない夜空には、無数の光が散りばめられ、その中でも一際大きな光 満月に俺は吸い込まれてしまいそうな錯覚をおぼえる。

耳からは川のせせらぎ、鈴虫の羽音、森の葉が擦れあうざわめき。まさに自然の音楽だ。

時折流れてくるそよ風は体を程良く冷やし、この気持ちよさにこのまま眠ってしまいそうだ。

星空のキャンパス。

自然の音楽。

そよ風のクーラー。

そして隣には 愛しのマイハニー 太郎たん。

「ああ、一太郎たん……こんな星空のキャンパスで、君という可憐な美少年と過ごせるなんて夢のようだ」

「ええ……私もよ。愛しの政人たん」

俺のマイハニーは憂いを帯びた表情で見つめてくる。そのメガネの向こうでは、きっと輝いた瞳があるに違いない。

俺は一太郎たんに顔を近づけ、ささやく様に語りかけた。

「一太郎たん。君の輝く瞳が見たいんだ。その宝箱という名のメガネを外して、俺に宝石という名の瞳を見せてくれないか……？」

マイハニーは少し間を置くと、微笑みながらこくと頷いた。

俺はマイハニーの透き通る肌を傷付けないように、優しくメガネを外す。

そこには……本当に輝くような瞳があった。

息を飲む。綺麗だった。本当に綺麗だった。

「政人たん……」

マイハニーはその輝く瞳を瞼で隠して、唇を少し尖らせた。

言わずもがな、何を求めているのかくらい分かる。

俺は一太郎さんにゆっくりと顔を近付けた。そしてゆっくりと瞳を閉じる。

ゆっくりと。そう、ゆっくりと……。

そして俺達は……熱いキッ

「うわあああああああああああああああああつ！
！……あ？」

目の前に広がるのは星空……じゃなくて白い天井。紛れもなく俺の家の天井。

「ゆ……夢……か」

言葉にして、ようやく認識する。いままで見た中で上位に食い込む程の悪夢だ。

鼓動も抑まり始め、体を動かそうとした時、思うように動かない事に気づく。

そういえば昨日、友基が『絶対朝起きれないから、俺を家に泊めて、俺を起こせばそれでいいんじゃない?』とか上から目線の言動で無理矢理泊まって来たな。寝相の悪い友基の事だ。多分寝ばけて俺のベッドに入ったに違いない。

絶対コイツのせいで悪夢を見たんだ。

俺は視線を下に落として口を開く。

「てめえ友基コノヤロ……う……」

俺の胸でスヤスヤと寝息を立てる、赤みがかった髪の少女。華奢な肩を縮みこませ、手を口辺りに持って行き、うつ伏せになっている。

「ん……」

体勢が気に食わないのかもぞと彼女は少し動く。

さすが女性と思わせる柔らかい感触。そして俺の腹辺りに感じる更に柔らかい……。

俺は早速、今日二度目の悲鳴を上げるのだった。

。

「ったく……。なんで俺のベッドでさくらが寝てんだよ」

「なによ、起こしてあげようとしたんでしょーっ？」

「じゃあなんでおまえも寝るんだよ!？」

「だって政人があまりにも気持ちよさそうに寝てたから……。ム力つくから私も寝るっ!みたいな?」

「なんでそこでム力つくの!?!起こしちゃ悪いとかじゃないの!？」

リビングで言い合う俺達。さくらはソファでコーヒーを飲みながら、俺はせわしなく出かける用意をしながら。

えっと、次は歯磨きだな。

俺は台所へ向かい、マイ歯ブラシを取り出して歯磨き粉をそこにウニツと出した。それを口に運ぶ。

あっそうそう。今日こそは40話記念でバーベキューですから。

「はくらー、おまへ友基ひってるー?」

背中のリビングのソファにいるだろうさくらに向けて、少し大きめ

の声で話す。

「ああ、友基はなんか『待ち合わせに遅れちゃうぜ！俺様としたことが！』とかいつて私に政人をまかせて行っちゃったよ？」

おまえ友基のマネ似てるね。……ん？おくれちゃう？

「俺は歯ブラシをくわえたままふと振り返り、リビングの壁掛け時計を見た」

「なんで口に出してんの？というか歯ブラシくわえたままなのに滑舌すごくいいね」

「というか遅刻じゃねえかあああああ！！」

「というか……えっ！？ホントだ！」

というか気付け！

待ち合わせは9時に地元の駅。ただいま時刻9時ピッタリ。駅まで歩いて10分。俺今パンツ一丁。

「やべえ！荷物は用意できてるから出るぞ！」

「えっ！？服着ろバカッ！」

「バツカ、服着てんじゃん。この世にも珍しい透明の服をよ。王様の耳はロバの耳」

「なんか話ごっちゃになってるよ！いいから早くして！」

俺は俊足で服を着て、あっ、このコーデはちと微妙だな。こっちはどうだろう。うーん、これじゃ山道歩きにくそう。あっ、じゃあ

メキヤッ

「早くしてね」

「はい」

ようやく用意の出来た俺達は、バタバタとアパートの階段を降りる。

あっ、そういえばこの前やっと原付直ったんだっ！

「さくら！原付で行くぞ！」

「えっ、やだよ。私今日スカートだし」

「大丈夫大丈夫。誰もおまえのパンツなんて見ないし」

メキユッ

「ああ。みんなおまえのパンツに釘付けさ」

俺達は駅へと走って向かっていった。

。

「政人さん遅いですねえ……」

「そうだね……」

心配そうな表情で、ホームへの階段を見やる充と満。

こうこうせい御一行は駅で政人達を待つていた。時刻は9時を20分ほど回った所。そろそろ皆も痺れが切れてくる頃。

特に里奈。

「もうおつつつそいつつのっ!!」

里奈は両手両足をジタバタさせ、体全体で感情を表した。側にいた克也はそれを慌てて止める。

「どうしたんだろう……政人さんとはかく、さくらさんがついてるのに……」

何気なく政人をけなす綾と、鼻で笑うだけの海。

「政人は電話出ねえし、さくらにもしてみつか」

友基は携帯を耳に当てがい、そこから聞こえるコール音に耳を澄ます。

その頃。

「あれっ？」

なにかに気付いたのか、俺の横を走りながらバックをまさぐるさくら。てかこいつ器用だな……。前見るよ。

「あつ、政人の家に携帯忘れたっばいかも！」

「おまえバカだな。戻る時間なんてねえぞ。もうすぐ駅着くし」

「ええ？じゃあ政人誰かに電話して謝つていてよ」

ああ、そういうことね。

俺はいつも携帯を入れている右のポケットに手を入れる。……しかし中身は空っぽだった。

「やべ、俺も忘れたくせえ……」

10数回目かのコールを聞き終わると、友基は諦めたように携帯を降ろし、ため息を吐いた。

「ダメだ。出ねえ」

「ボクがバイクで迎えに行こうか？」

「ハルちゃんはそんなんなくていいよ」

覇気の無いデレツとした顔で横から抱きつこうとした友基に、ハルは友基の方すら見ずに無表情でカウンターぱんちをお見舞いする。

「どうする？先に行くか？」

「でもあのバカ置いて大丈夫かなあ……」

克也と里奈は先に行くか考えるらしい。

「いえ、政人さんならこのバーベキューの主催者だし、場所なども詳しく知っているはずです。先に向かっても支障はないでしょう」

そして場を仕切るのは……何故か一太郎だった。

皆は一太郎に促されて、電車へと乗り込んでゆく。

「クツクツク……政人さんがいなければ僕が主人公……」

一太郎の誰にも聞こえない独り言を残して、電車はホームから離れていった。

「はあっはあ……やっと着いたぞ……」

ホームの階段を上りきり、膝に手を付いていた俺は爽やかに顔をあげた。

「やあみんな！遅れてすまないねって居ねーしっ！！」

後から登ってきたさくらも、その光景に啞然とする。

いない。どこを見回してもいない。

「もしかして……行っちゃった……？」

誰に言うでもなく呟くさくら。

これからどうなってしまうのか。無事にみんなと合流出来るのか。おやつにバナナは含まれないのか。今日録画予約したガキ使はきちんと録画出来るのだろうか。さつき走っていた時に柔らかい物を踏んでしまったのだが、これはもしかしたらもしかするのだろうか。

様々な憶測が交錯する中、俺達はただ茫然とするしかないのだった。

……まあ普通に電車で追いかければいいんだけどね。

第42話 番外編だよ！うん、番外編番外編。（番外編）

「天気いいね」

「そうだな」

俺とさくらは他愛もない話をしながら、電車の中で揺られている。

結局、俺達は公衆電話から克也（怒られなさそうだから）に電話して、新幹線に乗り換える前に合流する事となった。

合流する駅までは各駅止まりの電車で30分ほど。もう電車の中で急いだってしょうがないので、まったりと行くことにした。

人もまばらな電車の中、俺とさくらはのんびりと外を眺めていた。

「おまんじゅうおいしいねえ」

その声にふと前を見る。

藤色のしつとりとした着物。腰は歳から少し曲がり、短めの白髪と、シワの刻まれた顔はなんとも平和を感じる。

そしてこれまたシワの刻まれた手には……しっかりとおまんじゅうが握られていた。

「おっ、おま……」

そう、そのおばあちゃんを人はこう呼ぶ。

「おまんじゅうおばあちゃん（16話参照）！！」

と。

「え？」

外の風景に気を取られていたさくらは、俺の上げた声に前を向く。

「……政人、あのおばあちゃんとお知り合い？」

「えっ？ああ、いや、人違いだったわ」

「……？そう」

さくらはどもった俺を怪訝そうな表情で見つめながらも、それ以上は何も言ってこなかった。

俺の中で警告のサイレンが鳴り響く。

ダメだ。このおばあちゃんに関わってはいけない。

過去の出来事で俺に多大なトラウマを残したおばあちゃん。救急車で病院に突っ込み、爆弾で俺の原チャリを再起不能にまでした、おまんじゅう信者だ。

俺は関わらないよう必死で下を向く。が……。

気になる……。

あんだけ濃い〜おばあちゃんだ。今回も何かやらかすに違いない。

俺はバレないようにおばあちゃんの様子を伺うことにした。

「おまんじゅうおいしいねえ〜」

相変わらずおまんじゅうに舌鼓を打つおばあちゃん。

やがて、そのおまんじゅうも食べきる。

「ふう、さてと」

膝に抱えていた袋から何かを取り出す。

「そろそろおまんじゅうでも食べようかねえ」

そろそろじゃねえし！さっきずっとモグモグやってたじゃねえか！

……ってあれ？

……あれおまんじゅうじゃねえ！プリンだ！なんで間違えちゃった！？

その瞬間、隣にいた若いサラリーマンがそわそわし始める。どうやらおばあちゃんに突っ込みたいようだ。

「あ、あの。おばあちゃん？」

お！ついに話しかけた！

「それおまんじゅうじゃなくて、プリンだよ？」

「ん……？ああ、違うんだよ。これはねえ、プリン風おまんじゅうなの」

それはプリンって言うんだよおばあちゃん。

「間違えちゃダメですよ？ふふ、そんな子にはお仕置きです」

ぶるぶると手をサラリーマンに近付けるおばあちゃん。どうやら頭を叩きたいようだ。

サラリーマンも敢えて避ける気も突っ込む気もないらしく、おばあちゃんの手が届くまでそのままの体制でいる。

そして、おばあちゃんの手がサラリーマンの頭に当たるか当たらないかの時……。

「セイツー!!」

「じひゅ」

垂直に下ろされた手。あまりの威力にサラリーマンは電車の椅子に尻からめりこんで……って……。

おかしいよね？あのほとんどゼロ距離からあの威力おかしいよね？ていうかサラリーマンちよっと間違いを指摘しただけなのにめりこんじゃったよ？

この事態にさすがのさくらも気付いたのか、口をパクパクさせながらおばあちゃんを見ている。

「あ、あのおばあちゃん……プリンをおまんじゅうと間違えてる」

遅いよ！もうそこはツツコミ済みだよ！

さくらはすつと立ち上がり、おばあちゃんに向かっていく。

こ、こいつまさかおばあちゃんに言うつもりか！？

「おばあちゃん、それおまんじゅうじゃなくてプリンだよ？」

うわぁ……。言っちゃった……。いや、逝っちゃった。

「ん……？あらあら、ホントだ、気付かなかったよ」

ええー！？

「えー。それさっき僕も言ったのにー。めり込み損じゃないですかー」

サラリーマン起きてたの！？てかケツめりこみながら普通に喋ってる！

おばあちゃんはサラリーマンの方を向くと……。

「黙つとれ若造があっ！！セイツ」

「きゅ」

更にめりこんだ！！

「お、おばあちゃん！？暴力はダメだよっ！」

さくらのめり込みリーマンにようやく気付いたみたいだ。というかそのセリフはいつもの君に言いたい。

サラリーマンもおばあちゃんに口を開く。

「そうだよ。僕をめりこませるのはだめりこ。……あ、いまのはめり込みとだめりこをかけてみごふうっっ！」

うん今のはしょうがない。

ついにサラリーマンはめり込みすぎて首だけになってしまった。

もうこうなるとおばあちゃんよりサラリーマンのほうになるぞ……。

「おばあちゃん！やった！あともう少しだよっ！」

あれ！？さくらおまえさっきと言ってる事違うよ！？

「そうだねえ。ここまできたらもう……やっちまうしかないねえ！」

おばあちゃんノリノリだよ！

「セイツッ」

ズムッ

「ちよっ」

「ムンツッ」

ズムズムッ

「まっ」

「トリヤアアア!!」

テュルン

埋まったあああ!!でもちよっと待って最後の効果音おかしくない!?ものすこくなめらかにいったよね!?

「私のおまんじゅうを食べるからこうなるの」

一口も食ってなかったしね!

「あれ?おばあちゃん、それおまんじゅうじゃなくてプリンだよ?」

おまえまだ言ってるの!?

その時、俺の肩にポンツと何かが乗る。見ると、そこには人の手。そしてその人物は……。

「な、なんでここに!?!」

サラリーマンだった。

サラリーマンは白い歯を見せ、親指を立てて、口を開く。

「これが、僕の実力さ、わ・か・ぞ・う・くん。あ、おばあちゃん。それまんじゅうじゃないプリン。あとさくらくん、君ちよつとバカじゃない？」

「「「……………」」」

。

「お、いたいた。おーい！」

目的の駅に着いた俺達は、すぐに皆を見つけた。目立つ連中だな！

声をかけると、真っ先に友基が食って掛かる。

「おっせえんだよ政人！テメーちくわの中心になりてえのか！？」

それ無の存在じゃん！

そこへ一太郎が仲裁に入る。

「まあまあ、これで皆そろったんだし、よしとしましょうよ。……チッ」

あれ？おまえ今チツて言った？

「まあ今は新幹線乗り遅れちゃうから早く行くわよう！」

里奈が皆を促す。まあ今はって言うのが気になるな。

まあ、とりあえずそんなこんなで無事に皆と合流することが出来た。
え？サラリーマンはどうしたって？……まあ言っまでもないだろう。

あれ？てかバーベキューしてダメ？……番外編ってことでいいか！

第42話 番外編だよ！うん、番外編番外編。（番外編）（後書き）

どうも！MCエドモントです！違いますね、エドモントです違いますね、おもむろです。さて、今回はなんの話をしましょうか。いや、本編の話なんてしませんよ？めんどいもん。でも話す事無いなあ…。あつ、僕最近身長が175から176に伸びたっぽいんですよ！どうでもいいか。ああ、体重は65で変わらないんですけどね。どうでもいいか。そうだ、今後のこうこうせいは新たなギャ…どうでもいいか。新キャラの敵…どうでもいいか。友基が死に…どうでもいいか。

第43話 うひょう！やっぱバーベキューだぜ！……あれ？まだバス？

さて……ようやくみんなと合流して、今は新幹線の中。目的地の駅まであと一時間半ぐらいだ。

みんな思い思いに行動してる。え？情景描写？めんどい。

特に向かい合わせの席、俺の目の前に座ってるクール気取った根暗のいちやこいてる姿なんて絶対説明しない。ちなみに俺の隣はさくらだ。

そして通路を挟んで隣の席には、充、満、友基。その前に克也、里奈、一太郎、ハル。……あれ情景描写してね？俺ツンデレじゃね？

ハルは友基から逃げた。そのせいで友基はご機嫌がすこぶる悪い。その友基が海に話しかける。

「おいジジイのチン毛みてーな頭してるチンカスヤロウ。あんまりいちやくとむしってパイパンにすっぞコラ」

こいつスタートから全開フルスロットルだ！テレビだったらほとんどピーって入っちゃうからね！

対する海は機嫌がいいのか、鼻で笑っただけだ。友基はその行動が逆に頭にきたらしい。

「テメー！俺と勝負しやがれ！」

「あつ、いいですね！じゃあトランプしましょうよ！」

友基の売り言葉に乗ったのは、さつきから暇そうにしていたロリボ
ーイ充。

「よし！じゃあ俺様が勝ったら次の話は『パイパンジジイの出家物
語』ああチンカスが目にしみて』な！」

つまり坊主にするって事だろう。もう史上最低のタイトルだな。

友基が負けたらどうすんだろ。

「おまえ負けたらどうすんの？」

「俺が負けたらなんかモヤモヤツとした感じで終わる」

もう今の時点でモヤモヤしたよ！

と、ここで満がにつこりと人差し指を立てて口を挟んだ。

「じゃあ負けたら、友基先輩と一太郎先輩がキス、というのはどう
でしょう？」

ああやっぱりこの子もデンジャラスだったんだ！

その言葉に、さらに充が付け足す。

「そうだね！ほら、一野郎のルックスは残念な方ですし、十分罰ゲ
ームになるかと」

もうその発言が一太郎にとって罰ゲームだからね！ていうかいちや

ろうつてだれ!?

「ちょっと！何で僕が友基君とキスなんて！」

さすがにこれは一太郎が却下するだろう。

「キスなんてっ……！キス……なんて……」

なんで満更でも無さそうなの！？おい恥ずかしそうに目を伏せながら視線を泳がすのやめろ！所在なさげに両手を口元に持つてくんな！！

友基が絶句してるうちに、どうやらそれに決まったらしい。

「で、ゲームは何をやるんだ？」

そついう海はさらさら負ける気は無いらしい。

問われた充は、うーん、と唸りながら悩んでいた。そしてしばらく考えた後、口を開いた。

「大富豪にしましょう！というかそれしか知りません！」

じゃあ何をそんなに考えてたの!?

と、ここで、友基がこちらに潤んだ瞳を向けてきていることに気付いた。

「まさしく、さくらっ……俺大富豪よえーんだよう……」

結局巻き込まれたか……。

「しょうがねーな。俺も海にはそろそろイメチェンの時期かなって思ってたしな」

「政人！心のなんとかよう！」

そこ曖昧にしないで！？

「ええー……。でもそしたら、私たちも負けたら罰ゲームなんですよ？」

さくら？そこはモヤモヤツとしとこつぜ。

「じゃあ、政人さんが負けたらー……」

充がさくらに耳打ちする。

さくらの顔が、ボンツと爆発した。

そして充がみんなに次々耳打ちしていく。みんな、へえ、とか、ほう、とかいいながら、俺をニヤニヤ見つめてくる。なんだよ？俺の顔に面白いおっさんでもくつついてんのか？……取って取って！

「さくらちゃん……。がんばってね！私頑張って勝つかから！」

綾ちゃんは充に耳打ちされてからやけに張り切りだした。……マジで気になる。

ルールは3対3（俺、友基、さくら対海、充、綾ちゃん）のチーム

戦になった。三人合わせて3回大富豪になったチームの勝利。

で、それぞれひとりずつに手札が配られるが、仲間にも手札は見せてはいけない。審判（克也になった）もいるし、これはズルできないだろう。

ただ、順番は仲間が3人続きなので、そこがチームワークの見せ所だろう。

革命あり、ローカルルールなし、ワイルドカードなしのシンプルルールだ。

克也がカードを配る。ちなみにテーブルは窓の下辺りからテュルンとのびる式だ。3人で2人席に座ってるからかなり狭い。こらこらさくら、甘い香りで私を誘惑するのはやめなさい。

まわりから両チームの応援の声が入り混じる。

「充、お姉さんが教えた通りにやれば勝てるわ」

「キス……なんて……」

「政人しねー！」

「政人しねー！」

満以外応援じゃねえ！その女2人は特にな！

「しゃらくせえ！俺は早くバーベキューが食いたいんだよ！こんなもんさつさと終わらずぞ！」

カードを配る克也が俺を怪訝そうに見る。

「ん？しかし政人、駅までまだ1時間以上あるが……」

「え？　　。　　があんじゃん」

「身も蓋もないな……」

。

ほらね？簡単でしょ？

で、どうなったって？ストレート負けだよバカヤロウ。

目の前には、喜びを分かち合う3人。対して俺達は、いまだに顔が真っ赤なさくらを睨んでいた。

さくらはとてつもなくギャンブルが強い。そのためか、俺達は手札が半端なく強かった。にやりと笑う俺と友基。そして一番手のさくらが出した札。

フォーカード。革命。

2試合目。今度こそ俺達。さくら。革命。

3試合目。もしかして俺達。さくら。革命。

「テメーはどここの革命家！？おかげで俺がああメガネと革命だよくそつたれ！」

友基の憤りももつともだ。

と、海が友基の肩にポンと手を掛ける。友基と目が合うと、にっこりと一太郎を親指で指した。

一太郎が、里奈とハルに押されてこちらの席までやってきた。……もじもじしながら。

「ちょ、ちよつとまって海君！？うそだよな？海君はもうおにいさんだもんね！」

「ああ、一太郎。友基がべろちゅーだと」

「あれ？通じてないのかな？どうして俺の腕をがっちり後ろで掴んでるのかな？一太郎！テメーやめろ！舌チロチロしながらこっちな！やめろ！やめろおおおおお……んむ……！……！……！」

。

あー……、ちよつと見ちゃいけないもん見ちゃった。今回の件で一太郎と男性陣の間に大きな溝ができたな。あいつは危険すぎる。

今は目的の駅に着いて、その駅前で待機中だ。

「あつ、来た来た！うえーい！」

充が声を上げながら、こちらにやってくるマイクロバスに手を振る。

そのバスは俺等の眼前で止まり、出て来たのは体躯のいい中年のオッサンと、その隣に金髪碧眼超絶美女。

「ういつす、久しぶりオッサン」

そう、充、満の父親、そして俺の叔父にあたる人だ。

「おう！久しぶりだな！まったくでかくなりやがって！ところで誰ですか？」

「知ったかぶり！？政人だよ！」

「ああ、思い出した」

このオッサンのボケっぷりは相変わらずだな……。

俺は隣にいる金髪碧眼超絶美女に目を移す。この人がオッサンの奥さんか……。なるほど、この人ならあの双子の母親というのも頷ける。

奥さんは俺の視線を感じたのか、俺を見ると、金髪碧眼超絶笑顔を見ながら、握手を求めてきた。

「始めまして。私、岳夫^{たけお}の妻で、クレアです。よろしくね」

「あ、どうも。斎藤政人です」

そう言って握手を交わす。オッサンはかなりふざけた性格だけど、奥さんはしっかりしてるみたいだな。日本語ペラペラだし。

「ところで政人君は、この中の何人とヤツちやった？」

空気が、凍った気がした。ああ、爆弾小僧の生みの親ここにありだな。

みんなの視線が集まる中、俺は狂ったように首を横にシャウトし続けた。

……手も繋いじゃないよクソヤロウ！

「ふふっ、そういう話は後のお楽しみね。とりあえず乗って乗って！」

クレアさんはそう言っていると、手始めに俺をバスへと押しやる。そして次々と乱雑に放り込まれてゆくこうこうせい御一行。一太郎だけはなんか嬉しそうだ。変態だからな。

最後にクレアさんが乗り込むと、腰に手を当ててこちらを満足そうに見やった。

「楽しくなりそうねー。じゃあ岳夫、行くわよ！世界の果てへ！」

「世界の果てへ！レッツゴー世界の果てへ！」

誰もが不安を感じている（友基と一太郎はキャツキャ言ってるが）中、みんなを乗せたバスはゆっくりと走り出した。

第43話 うひょう！やっとバーベキューだぜ！……あれ？まだバス？（後書き）

あれ？今平成何年ですか？……いや、本当すいません。世の中には面白いことがありますすぎて気付いたらうつ……。スロ三昧でしいや、訂正します。一身上の都合により更新が滞っていましたが、作者はこの作品を完結させるつもりです。恐ろしく不定期ですが、最後まで付き合ってやってくれると嬉しいです。では！

第44話 お酒は二十歳になってから。俺たちや二十歳になってんだ

「ついたあああ！」

一番先に、飛ぶように降りたハルが、両手を高々と上げて開口一番ハルはバスとか電車とかが苦手らしい。

バスの中で聞いた理由が、なんでも「ちんたら走られるとイライラするんだよ！」だとか。その言葉に友基が「ちん！？ムラムラッ！？」と勘違いしていた。その言葉に今度は一太郎が反応していた。おまえら……。

とにかく今は大きな川が流れるそばの森林溢れるキャンプ場。駐車場から川べりまでしばらく歩いていくと、他にも客が大勢にぎわっていた。

「よし、ここだ！」

先頭を歩いていたオッサンが止まる。どうやらこの場所を陣取っていたらしい。各自、荷物を置いてとりあえず人心地つく。つかこの時点でハアハア言ってるメガネ共は何なの？

今回は外で一泊だけあって荷物が多い。とりあえず自分達の荷物とバーベキュー用品はなんとか持ってきたが、特に重たいキャンプ用品はまだバスの中だ。

俺はみんなに呼びかける。

「とりあえず男共は、荷物持ってくるか」

「ええー、オッサンもう歩けないよう。おんぶしてくれるなら行く」

「オッサンが荷物になってどうすんの!？」

「なあなあ政人、俺もう下に海パン履いてんだけど、これってもう泳いでいいってパンツの神様が言ってるのかもしれない」

「俺の話聞いてた!？ていうかパンツの神様ってなに!？」

「ムーニーマンのな」

「それ絶対おむつの神様だよね!？」

話が進まねえ。オッサンは俺と充、友基は海が強制的に引っ張っていくことにした。メガネ二人は……いいや、もう既に満身創痍だし。一太郎が暴走しないか心配だが、克也がいれば、まあ安心だろう。

……人称も克也にまかせよ。

。

はあ……ようやく呼吸が正常に戻ってきた。運動不足もここまできくと、自己嫌悪の類になってくるな……。

ん？あれ？

……あれえええええ!？俺の主観になってる!？えっうそっまじで

！まじで！？

「じゃあ克也、後は色々頼んだぜー」

政人がめんどくさそうにため息をつきながらバスへと向かってゆく。

政人達の姿が完全に見えなくなった後、赤木（一太郎）が眼鏡をきらりと光らせながら、にやりと悪どい笑みを浮かべた。

「ふふふ、政人さんがここに居なくなっただけ、かならず人称が変わるはず。僕に來い僕に來い僕にうえー！ーい！」

……すまない赤木。なぜか俺になってしまったようだ……。

狂ったように叫ぶ赤木は放っておいて。理由はわからんが俺の主観なのだ。きちんと描写しなくては。

「はいはいみんなー。とりあえず私たちはバーベキューの準備にかかりましょう」

クレアさんの意見に誰も異議はないようだ。

俺と里奈は、コンロを組み立てて着火までを頼まれた。

とりあえずコンロの足を立てて炭を入れ、後は火をつけるだけだ。

「ねえ克也、とりあえずウチから着火材持ってきたんだけど」

「何でパイナップル爆弾！？そんな物使ったら俺らまで着火されるぞ！」

「だよね？よかったー使う前に聞いて」

いや聞く前に気付いて！？誰でもわかる問題だぞ！？

「あ、着火材渡すの忘れてたわ。ほーい！」

と、クレアさんが着火材を俺に投げて渡す。

「ってこれもパイナップル爆弾だからねやっぱりね！」

今度は水島^{ハル}が着火材を投げて…… ってもうこれパイナップルそのものだろうが！

投げてきた水島は手のひらを上に向けてクイクイツと曲げている。
ツツコミが欲しいのか？絶対しない。

「あれっ？これって私もボケた方がいい雰囲気っ？あつ、パイナップルが無いよ！どうしよう、じゃあもうこのコンクリートブロックを全力で投げ付けるしか……」

「大丈夫ださくら君。その時点で十分ボケれてる。本当に大丈夫だからその凶器を放してうひょうつ！！」

その様子を見て、満君が本当に楽しそうに笑っている。本当に楽しそうに。

……満君、君が一番始末が悪い。

「あの、柏木君。これ」

苦笑いしながら、ゲル状の一般的な着火材を、バッグごと渡してくれる村上（綾）。ああ……氷室。君の彼女だけだ。この場で正常なのは。

ただ……。

「あの……村上？この量は……」

ゲル状の使いきりパックタイプ。それがざっと100個。ていうかバッグの中全部それ！？

「あ、もしかして足りない？ふふ、そんなこともあるとかと、もうひとバッグ」

バッグ単位！？

どうやらこの場で正常なのは俺だけらしい。ああ、だから俺なんだ……。

なにやら頭痛を覚えながら、とりあえず村上の着火材をひとつ取り出して、炭の下に入れ、それに火を着ける。炭に火が回るのはまだ先だが、一応これで役目は終えた。

「じゃあ俺はほかを手伝ってくるか」

「まじめだねー克也は。私は火見てるわ」

「じゃあ頼む。火が全体に回って、しばらくしたら黒い煙が消えて火力が弱まるから、そうしたらうちわで扇ぐんだぞ」

「わかった！とりあえずこのパイナップルボムを投入ね！」

「どうしてそうなった！？俺の話にパイナップル要素あった！？」

「うそうそ。早く手伝ってきなつて」

俺は不安感を拭えなかったが、まあ火番は里奈に任せておこう。

みんなの居るテーブルへ向かう。クレアさんと村上と満君は食材を切る役。さくら君と水島と赤木はそれを串に刺していく役らしい。

クレアさんは俺に気付くと、笑顔を向けてきた。

「火付けは終わった？じゃあこっちの切る役お願いね」

はい、と言おうとした口が半ばで止まる。そして別の言葉を搾り出した。

「あ……あの……これって……」

「ん？見ての通り、チキンよ？」

あの……僕たちが食する前のチキンなんですが……。

目の前には、羽と足が無い状態のニワトリ。しかしそれ以外は全て加工前。

村上はそれを手に掛けると……あわわわわ。

「まずは……頭。フフ」

ダンッ

「次に……おしり。フフッ」

ダンッ

「で……内臓を。クスクスッ」

「村上先輩すごいわ……。ああ、見惚れちゃう……」

満君、なぜそんな恍惚としているんだい？

「そうそう、うまいわねー。あ、克也君。4羽いるから1羽頼むわね」

え……俺？

「あ、柏木君も捌く？大丈夫。そんなに難しくないよ」

難易度の問題じゃないです。むしろ精神的な難易度はマックス近いです。

さくら君と水島と赤木を見ると、3人して目を逸らされた。その間に満君にあれよあれよとエプロンを着せられ包丁を持たされる。

里奈……ここはとんだアウェイだったよ……。政人……俺はもうだめみたいだ……。

。

……ん？

ああ、克也は死んだか。

いま俺たちはようやくバスに着いた所。なんだけど……。

俺たちのバスには人ばかり。正確には、海と充の周りだが。どうも人だかりは女子大生の団体らしい。海は迷惑そうな、充は困ったような表情だ。それぞれがひとつ動作を取るたびに、かわいいーっ、とか、かつこいいーっ、とか言われてる。言われてる。てか逝われる。

俺達3人は蚊帳の外でポツネン。

……なにこれ？ねえこれなんていうイジメ？

「何で俺は蚊帳の外？お姉さん気付いて！ここにダイヤの原石がいるんだよ！」

「はっ、ダイヤだあ？政人なんて尿路結石が関の山だろ。お姉さん俺はちがうよ！磨けば光るよ！」

「光るってなにが？金玉？」

「テメー！」

「コラコラ喧嘩しない！よーしわかった。オッサンがなんとかしてやる」

オッサンはそう言うのと突然脱ぎだした。ってオッサンも海パン着用済みかよ！しかもブーメラン！

人だかりへと駆け出すムキムキブーメランのオッサン。

「ねえねえお姉さん！オッサンと夢のアイランドで海をパンパンしようよ！ブーメランだから多い日も安心だね！はあードッコイドッコイ！」

悲鳴を上げながら、我先にと逃げ出す人々。人々というのは、人だかりを遠巻きに見ていた奴等も含まれる。

笑顔のままのオッサン。でも、肩は震えていて。それが、オッサンの心の中を痛いほどに表していた。

「オッサンは……頑張ったよね？オッサンはもう……泣いていいよね？」

俺は何か言おうとして、途中で止めた。

できなかったのだ。この場でオッサンに掛ける言葉が見つからなかった。それは俺だけじゃなかった。何も行動に移さなかった俺達が、すごいよオッサン、頑張ったねなんて、言えるわけが無いじゃないか。

オッサンの涙はだれにも拭われないまま、夏のアスファルトに落ちて、溶けていった。

。

「はあ……はあ……やっと着いた……」

キャンプ用品を担いだ俺達は、やっとこさみんなのところへ戻ってきた。

そこへクレアさんが声を掛けてきた。

「お疲れ様。こっちの準備は終わったから、ちょっと休憩したら今度はみんなでテントの準備を……ってあら？」

オッサンがクレアさんに抱きつく。

「……ずいぶん大胆ね、どうしたの岳夫？」

「心の休憩だよ。しばらくそうしてあげて、母さん」

声に出せないオッサンの気持ちを、息子が代弁した。

「そう？しょうがないわねえ」

クレアさんが、よしよしと背中を叩く。いい奥さんじゃあないか……。

「じゃあテントは俺達でやるか」

海が珍しく率先して行動を促している。先程の件に責任を感じているみたいだな。

設営するのは、大人数もなんのその、ロッジ型テントだ。名前の通り小屋のような形になる。

はずなんだ。

人数が人数だけに、テントは2つ作らなくてはいけない。俺達は適当に2グループに分かれて、それぞれひとつずつ作ることにした。

俺、里奈、友基、ハル、充、さくらが俺達のグループ。残りの克也、綾ちゃん、海、満、一太郎でひとつのグループ。グッパで決めたのに、あそこのカップルが一緒なのはなんか、逆に納得いかない。

で、俺達は今それぞれポールを持って、せーの、の掛け声と共に立ち上げたんだが……。

友基が首を傾げる。

「なんか真ん中へこんでね？なにこれ？こういうデザインなの？」

「ちがうよ、友基。これはきつと骨組みのポールが、ジョイントの役目になるブラケットにきちんと入っていなかったんだね。大丈夫、誰でも一度はやることさ。ドンマイ！」

「政人も骨組み担当じゃね？」

「……………」

「ばかだなあ、政人達。だからボクはちゃんと奥までって言ったのに」。でも失敗は誰でもあるって。ドンマイ次あるよ!」

「ハルも骨組み担当じゃね?」

「……………」

無言で微笑みあう俺達3人。

「ミツ、このパイナップルあそこに投げていいよ」

「ええっ!?!何でこんな物持ってるんですか!?!」

「うそっぞ。ていうかどうすんのよ?あっちはもう出来上がってるじゃん」

向こうを見ると、ちょうど立ち上げた所らしい。でも俺達のように中折れすることは無かった。と思ったら。

「あ、崩れた」

「崩れたな」

「崩れたね」

淡々と状況を口にする骨組み3人組。

綾ちゃんと満はにっこり。もう向こうを見るのは止めておこう。きつと18禁だ。

この惨状に、さくらはため息しか出ないみたいだ。

「ハハ、やっぱこうなったか」

と、ここへ救世主オッサン登場。

「オッサンどこいつてたんだよ。なんだ？クレアさんとシッポリか？」

「政人、息子の前でシッポリネタやめて！」

「でもホントはしたんでしょ？毎晩のようにしてるくせに。聞こえてるからね」

「息子よ、父さんは何か悪いことしたかな？土下座とかしたほうがいいかな？」

この調子なら、いつものオッサンに戻ったみたいだな。

「……まあいい。オッサンが組んであげるからとりあえずばらそう」

向こうではクレアさんが指示していた。助かったな男共。

オッサンは昔っからアウトドア派だもんな。クレアさんも手馴れたるし、この2人に任せておけば問題ないだろう。

俺達が一旦ばらすと、オッサンはそれをあれよあれよと組み立ててしまった。

「うーし、立てるぞー。せーの！」

「おおつ。すげえ！壊れねーぞ！」

「ハハハ、後はロープで固定して、ペグ打って完成だ」

「そっちはどう？」

と、声をかけてきたのはクレアさん。後ろには、満と綾ちゃんがいた。

「ん、大方完成だな」

「じゃあそろそろ焼き始めましょうか。女の子達は連れてくわね」

「おう。テントは任せとけ」

そして作業に戻るオッサン。その動きに淀みはない。

……今更だが、この2人を呼んでおいてホントによかった。俺達だけだったらどうなっていたことか……。

とりあえず海達はテントが崩壊したところでバッドエンドだろうな。

「あああぁっ！自分の手叩いちまったあああぁっ！」

「ははっバカだなー友基ってあああぁっ！自分の手叩いちまったあああぁっ！」

「ははっ馬鹿だなーお前らってあああぁっ！自分の手叩いちまった

「ああー!!」

「ホントバカだ、この人達……。僕はこんな大人にならなくてあああっ!自分の手叩いちまったあああ!!」

。

女性陣の方へいくと、コンロからなんとも香ばしい匂いが漂ってくる。時刻は2時ジャスト。そろそろ腹の悲鳴に耐えられない。

「できたぞー!」

「こつちもいい頃合よ。じゃあまずはカンパイってやつね。あ、でもお酒はだめよ?」

まあ今回は保護者として来てもらった2人の体裁もあるし、当然だろう。

と、クレアさんが取り出した物は……。こげ茶色のビンだった。それにでかでかと、麒麟さんが描かれている。プラでできたコップを人数分用意して、そこに並々と注いでいく。おお、泡とビールの対比が完璧だ。……。じゃなくて。

俺は当然の疑問をクレアさんに投げる。

「あの……。クレアさん?それはなんでしょうか?」

「ん?これはビールよ。へんなこと聞くのね」

「完璧お酒ですよね？それ」

「違うわ！仕事が終わって、ガタゴト電車に揺られて、ドロドロになりながら帰宅。とりあえず風呂に入ってさっぱりした後にあこの一杯！さつきまでのまとわり着くような疲労も吹っ飛んで、明日も頑張ろうって気持ちになれる……。これはね、そういう魔法のお酒なの」

「最後お酒っていったよね！？もうそれで今までの長い台詞台無しだからね！」

「もう、そんなの『この小説に登場するキャラクターは20歳以上です。このシーンは未成年の飲酒を勧めるものではありません』……とか言つときゃいいのよ」

「なにそのエロゲの決まり文句！？だから最後の一言で全部アウトになってんだよ！何で最後なげやりになっちゃうの！？」

「……Japanese is not understood for a moment. Are you an onion？」

「おい！英語は得意じゃないけど俺の事タマネギって言っただろ！なんで！？」

言い合いながらも、クレアさんは全員分注ぎ終わってしまった。

……まあいいか。俺も飲むことに文句はないし。早く食いたいし。

みんなにコップが回ると、自然に俺に視線が集まる。また俺か……。どうせ前回みたいになりそうだな。フェイントかけてみるか。

「……西武会館！」

……。

「……神宮球場！」

……。

……だいじょぶそうだな。

「こほん」

「……………かんぱーい！」……………

俺咳払いしただけじゃねーか！

みんな弾かれたように一気に騒ぎ出す。旨そうな肉にがつつく者。飯はそこそこに、楽しそうに談笑する者。いちやくカップル。ひたすら飲み続ける者……ってクレアさん良い飲みっぷりだなー。

いやー、何とか今回も無事に終われそうだな。

そう心の中でホッと人心地ついて、簡易設置された折りたたみ式のベンチに腰を下ろす。

ビール片手にみんなを眺めると、とん、と横に衝撃が。見ると、そこにはさくらがうつむき加減で座っていて、こんがり焼かれたチキンが盛られた皿を俺に向けていた。

サanky、と言ってからそれをひとつ手に取って口に運ぶ。

「おおっ、うめー！やっぱりできたてだな！」

「うん、いろんな意味でね……」

うん？と疑問を顔に出すが、さくらはなんでもないと首を横に振る。そして、黙りこくつてしまふさくら。……なんだろう、さくらが来た瞬間にみんながチラチラこっちを見てる気がする。

黙るさくら。チキンを黙々と食う俺。うめー。

黙るさくら。ビールをゴクゴクと飲む俺。ぐへー。

「おうさくら。ちゃんと飲んでんのか……って、顔近くね？どうした？」

突然立ち上がるさくら。

「ああっ、もうだめ！こうなったらクレアさん！飲み比べしましよっ！」

なにがこうなったらそうなっちゃった！？

遠くでは、ため息やら政人死ねやら聞こえる。なんでだい。

さくらの突然の挑戦に、クレアさんは不適に嗤う。

「ふっふっふ、この世界で、まだ私に楯突く輩がいたとはねえ……」

「上等！私には飲聖政人がいるんだから！」

「やめて！？俺勇者じゃないから！俺なんて王室の前に居る『なんだきさまは！ このさきはおさんぞ』とか言っつてスツと道塞いじやう兵士ぐらいのポジで大満足だから！」

「そうクレアさんを挑発しながら、政人は悠然とビール剣を敵に向けるのであった」

「ビール剣ってなに！？なんか1枚500円でギフトとかに重宝されそうだね！」

ああ、もう完全にクレアさんの標的が俺になった。

そして俺と魔王女の最終決戦が始まった。やっぱりクレアさんは半端無かった。1ケース20本入りを飲み干した後、誰もが惚れる様な満面の笑顔でまた1ケースを目の前に置かれた時、俺は意識とか常識とか、いろんな物を手放していった……。

そして後日、またしても二日酔いになったのは言うまでもない。

おしまい

『おまけ』

。

「おお政人よ、死んでしまうとは情けない」

……そんな、お決まりの台詞で目が覚めた。

「…………おまえのせいだろ」

俺の顔の目の前で、チョコンと座っている人物に文句をたれる。

ここは……さっきいたベンチのようだ。俺はここで潰れてたらしい。周りを見るとすっかり真っ暗で、バーベキュー用品は綺麗に片付いていた。それに入れ替わるように、焚火が静かに燃え上がっている。上体を起こす。と、さくらが水の入ったコップを渡してくれる。それを一気に飲み干してため息を吐くと、ドロドロした意識が少し晴れた気がした。

「クレアさーん。政人おきましたよー」

さくらが向こうに呼びかける。焚火のそばにはクレアさんとオッサンがいた。2人は立ち上がって俺の前まで来ると、クレアさんが気まずそうに頬を掻く。

「あー…………ごめんなさい。ちょっと大人気なかったわ。つい本気になっちゃった」

「あつ、謝らないください！勝負なんだから政人もおあいこです！」

お前が言っな。マジでお前が言っな。

「……………まあ、そういうことです」

「そう……………？ホントにごめんなさいね？お詫びというか、あそこの焚火で焼いた魚があるから食べてね。お腹空いたでしょう」

言われて気付いた。俺チキンしか食ってないじゃん。

「じゃあ邪魔者は消えるかのう」

オッサンがそういつて、2人はテントの方へと消えていく。最後にオッサンが親指をぐつと立てていた。なんか無性にイラつくんだが……………。

なんだかんだ、俺が起きるまで待っていてくれたのだろう。ちなみにさくらデメーは当然だ。

とりあえず焚火の側まで寄る。揺らめく炎の前に、串焼きの魚が何本か刺さっていた。

一本手にとつてがつつく。気付くと、さくらが隣に座っていた。……………少し気まずそうな雰囲気です。

……………こいつも強情な所があるからなあ。

「ありがとな」

だから、こっちから声を掛けてみる。

「俺が目え覚ますまで起きてたんだろ？」

視線は炎を見たまま。でも、雰囲気が和らいだのはなんとなくわかった。ふっ、乙女心のわかる俺、ぶらいすれす。

その時、頬に何か、柔らかい物が当たった。

「……え？」

隣を向くと、さくらは微笑みながら空を見ていた。

「あつ、見て！あれが冬の大六角形だよっ」

「あ、ああ」

俺はさくらの天然ボケ（多分本気で言っている）にも突っ込めないまま、空を見上げる。

都会ではそうそう見れない夜空を視界に納めながら。静かな虫の羽音を聞きながら。時折流れる夜のそよ風に身を委ねながら。

俺達は火が消えるまで、ずっと、そうしていた。

第45話 ウンコバーガー

今は夏休みだよね？

俺の計画では、初日から女の子ときゃっきゃうふふしたり、うふふきゃっきゃしたり、うきやつふふきゃしたりしてたはずだよな？

それなのに、今の状況はなんだろうね？

「午前中からこのくそ狭い教室にくそ暑い中閉じ込められ、くそ教師にイジメられてる俺はくそか？」

「自分の事わかってんじゃねーか、くそ政人くそ」

俺うんこに挟まれた！

声の主は隣に座る友基。そちらに視線を向けると、両手を頭の後ろで絡ませ、ペンを鼻と口の間で挟んでいた。やる気ねえな。というか補習は俺たちだけらしい。里奈は？海は？ねえどこに隠れてるの？

「うるせえクソチビ。テメーなんかくそ豆乳飲んでくそツイストかけてくそくそやってろ」

「テメー！俺の悪口は言ってもハルちゃんの悪口言うんじゃねえ！会話が噛み合わないだろ」

「会話が噛み合いません！ってあれ！？先読み……だと……！？」

「斉藤君、内田君。勉強に勤しむつもりが無いなら、二度と学校に

来てもらわなくても、先生は一向に構わんのだが」

「さて内田君、そろそろ勉強に励もうじゃないか」

「うん。はげもうはげもう先生はげろ」

「内田あ！」

「あつ、大丈夫だよ内田君。先生の毛髪はすでに死滅していらつしやるんだ。30台も半ばだというのに」

「なつつ！」

「ほう、あの頭に乗っているのは偽りの装飾。その中に真実が……。フハハ、おもしろい。実に面白いぞ！」

「……アノネ、センセイナンデモキイチャウヨー」

。

午後。教室を後にして階段を並んで降りる。ちなみに俺たちの教室は3階だ。

あの後、補習時間が短くなることは無かった。……まあ、補習日数は激減したが。フハハ。

「いやー終わった終わった。慣れないことずっと疲れんぜ」

友基が大きく伸びをしながら、あくびと一緒に言葉を吐き出す。

「まあとりあえず午後は空いたし、どつかふらつくか」

「おう。なーんか夏らしいことしたくね？」

「夏らしいこと、ねえ……」

ゲーセンで涼んだり、ファミレスで涼んだり、家で涼んだり……。涼しいなー、現代の夏。

ふいに、友基が両手をパチンと叩いた。蚊か。

「わかったぜ！夏らしいこと！」

「おお、蚊か」

「ちげーよ政くそ人」

俺の中に挟まないで！

友基はもったいぶって、誰も居ないというのにわざわざ耳打ちをしてくる。背伸びまでして。

「旧校舎によ、出るんだよ……」

「な、なんだって……？ウチの学校に旧校舎なんてあったのか!？」

「ああ……。話の都合上、たった今できたらしい……」

……………旧校舎なの??

旧校舎に出るっていうより旧校舎が出たって感じじゃね？

……俺はこの世界の理不尽さを無視して、話を進めることにした。
うん、あった。そういえば昔からあった気がしないでもない。けどない。

「で？夏で出るっていうんだからもちろん怪談話だよな」

「ああ……、実はな……」

どうやらその怪談は、最近広まった新鮮な話らしい。なんでも図書室のさらに奥、さまざまな理由で使われなくなった本の保管室（旧校舎なわけだから、図書室も現状は保管室なんだが）。そこに女生徒の霊が出る。彼女は生前は大変な勤勉家で、その努力もあってか成績はいつもトップ。それを妬む奴等も少なからずいた。
そして、嫌がらせにあう。

放課後、その日に持ってきていた教科書を、すべて捨てられてしまっていた。

彼女の家は恵まれた家庭ではなかった。彼女は教科書がなくなってしまったこと、そしてそれは嫌がらせなのかもしれないという事を、親には話せなかったのだろう。そして友人にも。

彼女は探した。家に帰らず、日が暮れても、探し続けた。まだあるかもしれない。私の教科書が、まだ……。

そして、見つけてしまった。

図書室の奥、夕日で真っ赤に染まった保管室に、カッターと一緒にズタズタになった自分の教科書が。

彼女は震える手でカッターを……そして……。

「実際に見た奴もいるらしいぜ。黒髪の女生徒が座ってなんか読ん

でるって。くつきりばつちりと」

「……マジモンじゃん。それ怪談っていうんだよ？」

「だから怪談だつつの。テメーはそれ以外の何を期待してんだ」

「いや、友基のことだからてつきり豆乳オチかと」

「テメー！豆乳おいしいよね！おわり！」

とか何とか言ってる内にも、俺達の足は旧校舎へと向かっていた。まあ暇だしな。

旧校舎は、グラウンド側が表とするなら裏にある。一昔前の、一般的な木造校舎。新校舎より幾分か小さいため、日があまり当たらない。少し、いや大分陰湿な場所だ。

雑草が所々生えた不整備の地面を歩くと、すぐに横長の建物に据えられた正面玄関の前に着いた。

怪談聞いたばっかだから、ちょっと怖気ついちゃうな……。

横を見ると、友基が不敵な笑みでガッツポーズを返してきた。おお、頼もしいな。

「後ろはまかせろ！」

頼もしいなあこの豆乳野郎。

一つ息を吐いてから、俺は横開きの戸に手をかけ、力を込めた。

……何のことはない。戸は簡単に動いた。中を見渡してみると、木造りの下駄箱が等間隔で置かれ、奥は少し広まった空間。掲示板などが壁につけられている。

とりあえずそこまで進んでみる。木張りの床は多少軋むが、そこまです痛んだ様子はない。

通路は左右に分かれていた。

「で、図書室ってのは？」

友基が右を指差す。廊下の中頃に『図書室』のプレートが掲げられた扉が見えた。自然と、固唾を呑む。

「行くか……」

「おう……」

なぜか二人して忍び足で歩む。図書室の扉の前まで着いて、俺達は互いを見て、頷き合った。

扉に手をかけ、ゆっくりと開いてゆく。

中は……プレートの通り図書室だった。等間隔に置かれた俺の身の丈以上の本棚に、ぎっしりと詰まった年季の入った書物達。

そして俺達が居る対面のちょうど直線状に、もう一つ扉があった。

いわずもがな、アレが例の保管室だろう。

いつまでもここに立っている訳にも行かない。そう思い、足を一步踏み入れた。……その時。

声がした。ううん、と、人間の唸るような声が、あの扉の奥で。

鼓動が爆発した。俺の頭の中で小さい妖精のおっさん（全裸）が逃げろ逃げろと叫ぶ。

でも、足が止まらない。あとおっさん両手広げて腰カクカクすんの止めて。

一步、また一步と扉に近づいてゆく。一瞬、死んだ女生徒の姿を想像する。悲しみにくれた虚ろな瞳で、自分の返り血で真っ赤に染まっ
て……。

扉に手を伸ばす。これは俺の好奇心なのか。それとも、もう既に女生徒にとり憑かれてしまったのか。

それも、扉に手を掛けた今ではどうでもいい。

俺は、ゆっくりと、扉を開けた。

「うーん」

書物が雑然と置かれた部屋の真ん中で、黒い髪の女生徒が唸りながら弁当を見ていた。

「あ」

そして、気配を感じ取ったのか、こちらを見上げる。

腰まで伸びた髪。前髪は真ん中で二つに分けられ、そこから見える表情に起伏はなく、それでいて実にやる気なさそうに見える。……いや人の事言えないけどね？

その少女はたつぷり数秒俺と見つめ合った後、ゆっくりと頭を垂れながら、のんびり口を開く。

「おはようございます」

がつくりと、俺は別の意味で頭を垂れた。

こいつが怪談の正体が……。ていうか、こいつこんなとこで何やってんだ……？

俺は彼女の前で脚を屈めて、いわゆるウンコ座りしてから、浮かんだ疑問を脱力感を隠そうともせずに尋ねた。

「おまえ、ここで何やってんの……？」

「んーと、お弁当食べようとしてた。でもない」

「なにが？」

なんで？はとりあえず後回しにした。彼女は弁当を持つ手をこちらに向ける。右手に弁当箱。左手にその蓋。そしてその蓋に……シューマイがぎっしりとくっついていた。

「しゅーまいがこの中にいっぱい入ってた。わたしが朝入れたから間違いない。でも開けたら空っぽ。これは誰かのしざ……仕業といわるざを……いざわるを……誰かのせいだと思う」

あーあ諦めちゃった！

「いや、おまえ蓋に付いてるよ？」

彼女は蓋を見ると口が少し開いた。恐らく驚いているのだろうか。そして少し嬉しそうに、蓋をこちらに向けてきた。

「あつた」

と言い切る前に、狙ったかの様に剥がれ落ちるシューマイ。

少女は蓋を見て、俺を見て、地面に転がった埃まみれのシューマイを見て、そして一つずつ拾い始めた。

「3秒ルール3秒ルール」

明らかにタイムオーバーだからね！

「はあ……保管室の幽霊の正体がこんな奴だとは……」

「幽霊？」

その単語に少女は拾う手を止め、こちらを見上げた。ずいぶん小さいな。友基と比べてもまだまだ差があるぞ。……あれ、そういえば友基は？

と、その時、遠くから悲鳴が。この声は……友基？

「そつだ。わたしここの幽霊を倒しにきた」

「は？幽霊を倒しに？」

少女はブレザーのポケットから、呪符のような長方形の紙を取り出し、こう言った。

「ミコミコ霊媒師、みかみみゆ……みみか……みかつ……くじけそう」

自分に負けないで！

「苗字は？」

「御神」

「名前は？」

「美子。参上っ」

「全部言ってみ？」

「みかみみみかみかみかみかみみみみみみみみかみか……」

なんか呪文唱え始めた！てか逆にスゲーよ！

こうして出会った謎の少女。俺はこいつと幽霊退治をすることになる……のか？

「みみみかみみみかかかみみみかみ……」

こわいよー。

第45話 ウンコバーガー（後書き）

最低なタイトルだと、自分でも思いますね。

第46話 シューマイの素晴らしさが分かっててもいいお話

……で。美子と一緒に、友基の悲鳴が聞こえた場所を探しているわけだが……。

「多分上の階から聞こえたよな」

廊下を歩きながら、横に並ぶ美子に問いかける。え？急いだほうが良いって？大丈夫。あいつ豆乳飲んでるから問題ない。そんな気がする。

美子は一旦立ち止まり、目を瞑った。しばらくそうしてから、ゆっくりと目を開いた。

「3階の、2のAの教室」

「へえ、今は幽霊の気配を探ってたのか」

「いや、目にゴミが」

「紛らわしいんだよ！なんか幽霊の気配とか言っちゃった俺恥ずかしい！」

とりあえず、3階の教室に向かうか……。

。

「……誰も居なくな？なんでここって言ったの？」

「当て勘」

「しねえええ！！」

ギヤアアアア。

今度は下から悲鳴が。どうやら2階のようだな。

教室を出て階段を下りる。2階に着くと悲鳴は消え、静寂が辺りを満たしていた。

教室の数は10くらい。手当たり次第……はめんどくせーな。別に急ぎじゃないし。

「どうだ美子。今度はわかるか？」

「うん。まかせて」

そういうと、再び目を閉じる美子。

……。

……。

……。

ギヤアアアア……

「あそこ」

「うんお前に頼んだ俺がバカだったね！」

悲鳴の聞こえた場所は、目の前の教室だった。

美子はもう無視して、教室の扉を開く。そこには……。

「ぎゃああああー!!」

教室の真ん中で、友基が宙に浮いていた。と思うと、すぐに地面に叩き付けられてる。今度は壁に、そして天井にと、何か見えない力に振り回されているようだった。

「あれ！？政人！グハッ！すごいよ！俺空を飛んでるよ！グフッ」

お前の頭も飛んでるよ。

「美子、どうなってんだこれ？」

美子は俺の手を握ると、教室の真ん中を指差す。すると、今まで見えなかったモノが、ぼんやりと姿を現わした。

黒い髪の毛、血に塗れた女生徒。

「こ、こいつって……」

「もともと保管室にいた幽霊。さっきわたしが逃がしちゃった」

段々はつきり見えてきた。すると、今度は声まで聞こえてくる。

「おほほほ！これが私の力なのかあああ！！」

こいつ絶対優等生じゃないよね！？

「……ぬん？誰だ貴様ら！」

あ、気付かれたみたいだ。

「貴様も……こうなれええええ！！」

女生徒はそう言うと、人差し指をこちらにビシッと向けてきた。

ってあれ？俺浮いてね……？

「って浮いてる浮いてる！！おい美子！助け……」

振り返ると、俺と同じように美子がふわふわ浮いていた。……ちょっぴり嬉しそうに。

「……わたし・いん・ざ・すかい。ふふ」

「もうぜってー霊媒師じゃねーよお前！お前の特技なんてシューマイ蓋につけるくらいじゃねーか！」

「政人はギョーザ嫌い？なんで？」

「いつギョーザの話になった！？シューマイでもねーのかよー！」

「シューマイは私たちには勿体無いくらい崇高な物なの蒸した皮の

中に詰まった溢れんばかりの肉汁にプリプリとした食感は何の食べ物例えばギョーザなどとは比較にならないいや比較する事さえおこがましいほど……」

「滑舌の悪いおまえはどこいった！？しかもドサクサに紛れてギョーザけなしてるよ!？」

「……というようにシューマイの美点を挙げればきりが無い。そんなシューマイを私は誰よりも愛している。そう、わたしはシューマイ大好きニコニコ霊媒師、みかみみゅっ」

「そこで噛んじやったよ！シューマイの話はペラペラなのに自分の名前はグダグダだよ！」

「みかつみみかゅっ……みみかみみみかみみかみみみかみみみかみみみかみ……」

クソッ。こうなったら自分で何とかするしかないのか……。

「おほほほ！叩きつけてくれるわああアア!!」

「まっまで！お前、こういうの探してなかったか!？」

「え！？それは……!」

手に取り出したのは、保管室で拝借しておいた、昔の教科書。女生徒が何年度かはわからなかったのだが、反応を見ると、どうやらドンピシャのようだ。

教科書に気をとられたのか、俺の足は地面に着いた。

その瞬間、一気に地面を蹴って、女生徒へと走り出す。

「うおおおお！」

「……え！？」

女生徒は猪突猛進する俺に気付いたがもう遅い！

その勢いのまま、俺は女生徒の腰めがけて、タックルをかました。

キリモミ状に一緒に転げまわる。そして、最終的に俺が馬乗りになった。

「じゃあああ！これで逃がさね……え？」

俺の下には、顔を真つ赤に染め（血じゃない）、恍惚の表情で横たわる女生徒。

「そんな……。お前を逃がさない、なんて……」

「ふえ？」

「政人って意外とクサイ」

「ふええ？」

と、隣に来ていた美子が、女生徒の額にさっきの呪符のような物を貼り付けた。すると、女生徒の体が光に包まれていく。

「幽霊は自分の望みが叶わないと、どう頑張っても成仏してくれない。この人はたぶん告白が望みだった」

えーと、つまり俺、告白しちゃった？

女生徒の体はもう肩から上しかない。その表情は、とても安らかだった。

そして、完全に光となって、消えた。

どこからか、声が響いてくる。

ありがとう。

ま、いいか。これで一件落着なら。

天国で、待ってます。

よくねええええええええ！！

「まって！もう一回お兄さんと話し合おう！？そうだ、ここに居るちっこい奴は！？こいつはすごいよ！長所を挙げたら多すぎて逆に何も思いつかないくらいすごいんだよ！」

「もういつちやっ
たみたい」

.....

さ、最悪だ……。

ふと地面を見ると、友基が逆立ちで頭をめり込ませながらピクピクしてた。はあ……まあいいか。こうして友基も無事(?)だったんだし。

「政人のおかげで早く終わった。ありがとう」

美子がそう呟いて、ぺこりとお辞儀をした。最初の挨拶といい、礼儀は正しいんだな……。

そう思いながら、苦笑しつつ言葉を返す。

「別に良いよ。お前の呪符が無かったら成仏しなかったわけだろ？
おあいこだよ。俺もありがとうな」

「お礼にさっきのシューマイを」

「俺のありがとを返して！ていうかまだ持ってたの！？」

美子がシューマイの入った弁当箱を差し出す。いや全ての力を開放してお断りします。

「大丈夫。なるべくきれいな物だけを厳選しました」

「なにその極限のおいしいとこ取り！？しかもばっちり真っ黒じゃねーか！いらねーよ！お前食えよ！」

「それも大丈夫。わたしには、ほら、新しいのが」

「そつちをよこせええええ！！」

と、そこへ今起きたらしい友基が来た。

「いってえ……。なんか俺夢でスーパーボールになってたわ。あれ？なにこれおはぎ？くつていいの？超うまそう！」

ああ、こいつの視力は無に等しいんだっただけ。

「ああ、友基。“よし”だ」

「うおおお！もぐもぐもぐ……ゲホッうめええっ！ゲホッこのおはぎ新しい味だね！」

「この人……すごい」

その後、友基は一晩中腹痛に悩まされたらしい。

第46話 シューマイの素晴らしさが分かってとてもいいお話（後書き）

そして結局うんこオチ。物語に統一感を求めた結果です。決してうんこネタが好きな訳ではありません。

うんこわーいわい！

第47話 ああたまらない！極太魚肉ソーセージの巻

「あー、すずし」

ただ今自宅のエアコンの前。これを作った人はホントにすごい。がりがりくん奢りたいぐらいすごい。じゃあそんなすごいね。

「政人ー！政人ー！」

この声はウチの亀、その名も亀吉さん。メス。最近普通に世間話とかしちゃう。

今は水槽の中で、その小さな体をいっぱい動かして、こちらに気を向けようと必死だ。

「何だよ亀吉さん。そんなに叫ばなくても俺はここにいるよ。ああ、ずっとここにいます」

「口説かんでいい。おぬしはただ暇を持て余しているだけじゃろう」

ああ、だからずっとここにいたんだね。

誰も居ない夏休み。ひとりぼっちの昼下がり。話し相手は人間でも無い……。

「ああっ！部屋の端に行くな！体育座りするな！」

「違うからね！これは古来より伝わる精神統一の技術だから！こうしてるとなぜだろう、物凄く型にハマった気がする」

「重症じゃな……。でな、政人」

うん？と顔を向けると、なにやら口ごもる亀吉さん。

「そのう……そろそろアレがなくなる頃合いではないか……？」

アレ？……ああ、そういえば亀吉さんの魚肉ソーセージ切らしてたっけ。

「そうだな。じゃあ暇つぶしがてら行ってくるか」

「そつ、そうか！行ってくれるか！政人、おまえって奴は最高のご主人じゃ！」

小躍りしそうな勢いではしゃぐ亀吉さん。ムカつくから意地悪しちゃおっかなっ！

「気にすんなつて。じゃあカルパス買いに行つて来るわ」

「ちよっ！カルパスじゃない！カルパスじゃないぞ政人！」

「え？なんだつたっけ？」

「う……あう……」

「ん？聞こえないな」

「……魚肉。魚肉ソーセージ」

「んん？で？それをどうして欲しいの？」

「……………っ！…ほしい……………欲しいの！ねえ入れて！私の水槽の中に入れてよおっ！」

。

で、今は商店街なわけだが。

さっきはちよつとアウトな気がしたけど、まあ何とかなるだろう。
ていうかアレは亀がエサねだったただだからね。全然そっいうんじゃないから。

もう極太魚肉ソーセージも買ったし、手持ち無沙汰だ。でもせつかく商店街まで来たんだから、とんぼ返りってーのもつまらんな。

そんなことを考えながら商店街を当ても無くフラフラしていると、ふと、見知った人影が居たような気がした。

……………っていうか居た。電信柱のそばで必死に縮こまり、まるでだれかに見つかからないようにしてるみたい。俺の知ってる彼女がそんな間抜けな事してるとは思えないが……………。

俺はその彼女の肩を、後ろからポンと叩いた。

「よっ綾ちゃ「ぎいやあああああああ！！」

「うわあああああああ！！」

うわあああああああ！！

「つてえ！？政人さんっ？」

「えっ、えっ？何これ逆ドッキリ！？トラップカード発動！？」

「あ、いや、すいません。いきなり後ろから声を掛けられたから……」

目の前には、胸を撫で下ろす綾ちゃんの姿が。今は黒縁の眼鏡をかけて、いつもは下ろしてる黒髪を、後ろだけ纏めて上げていた。

俺もようやく心臓が治まってくる。

「ふう……いや、大丈夫。で……」

……何言おうとしてたんだっけ？

と、綾ちゃんにいきなり肩をガシツと掴まれる。ふふ、いいにほーい。

「……見ました？」

神妙な顔で見詰めてくる。未だ状況が掴めてない俺。

「えーと、綾ちゃんが電信柱に隠れてるのは見た。てか写メった」

「消してくださいじゃないと政人さんを削除することになりますけど」

「ごめんなさいホントは撮ってないですごめんなさい」

冷たい無表情を崩し、深いため息をつく綾ちゃん。

……おしつこちびるかと思ったぜ！てか海はいつもこの重圧に耐えているのか……。って、向こうに歩いてんのは。

「おい！かまもごっ」

向こうに歩いていく海の後姿を呼び止めようとしたら、綾ちゃんの手がそれをすかさず防いだ。海は立ち止まってきよろきよろしている。

俺の後ろに回り込む綾ちゃん。かと思うと、いきなり胴体をがっちり掴んで離さない。

「かまぼこですか！？かまぼこですよね！？ああっちようどいいところに喫茶店が！ちよっここがかまぼこして行きましょう！」

みんな知ってるかい？今時、かまぼこは食べるんじゃないですか？

俺は綾ちゃんに引きずられる様に、そばにあった喫茶店へと入っていった。

「いらっしゃーい。お、マー君、女連れかい？」

そして、俺の今の引きずられてる状況をもう一度見て、もう一度口を開く。

「いらつしゃいマー君。女連れだね？」

違うでしょ！？明らかに連れ去られてきた感バツチリだよね！？

「2名で！アイステイー！」

「好きなお席に〜」

そんな俺の心情はお構いなしに、ズンズン進む綾ちゃんと、それを受けて流すマスター。

説明しよう！ここは俺がちよくちよく通っている店『どこにでもある普通の喫茶店』だ。本当に正式名称がどこにでもある普通の喫茶店だし、本当にどこにでもある普通の喫茶店だ。

もう自分で何言ってるのか分らなくなるので、俺は略してどこでもカフェって呼んでる。はい、俺天才。おわり。

ちなみにマスターは男。長髪を後ろに束ね、丸眼鏡がトレードマーク。いっつもヘラヘラしてる変なオッサンだ。

綾ちゃんが一番奥のテーブル席で、ようやく俺を解放して、木目調のイスに腰を下ろした。俺も習って、反対側のイスに座る。

「じゃあ、とりあえず俺とかまぼこしよっか」

「実は……」

この子のスルースキル半端無え！太刀打ちできねえ！

綾ちゃんはテーブルに両肘を立てて、顔の前に組んだ指で表情を隠しながら、ぼつりぼつりと話し出した。

「最近、海君の様子がおかしいんです」

「とうとう？」

「なんか落ち着かないっていつか……。上の空だなーって思うと、急にアワアワしたり」

「ああ、そりゃ浮気だね」

「この前も女の子しか行かないような雑貨屋をじっと見てたり」

「もう決まりだね」

「女の子しか見ないような雑誌をふと手に取ったり」

「あれ？これ俺シカトされてる？」

「どうしたの？って聞いても慌ててごまかすんです」

「ああされてるねこれ。多分『かまぼこしょっか』辺りからもう俺居ないことになってるね」

「これ、どう思います？マスター」

「ふむ、そうだねえ……」

と、いつの間にか、マスターがテーブルの前に立っていた。

俺、もう帰っていいかな？帰って亀の亀吉さんといっぱあいお話しするんだ

マスターは持っていたトレイから、アイスティーとコーヒーをテーブルに置いてから、人差し指を立てた。

「やっぱり、これは浮気の線が強いね！」

「ああ、どうしよう……。誰かに相談してみようかな……」

マスターもスルーされた！ていうかもう綾ちゃん1人の設定になっちゃったよ！それだと1人でブツブツ言ってるなんか痛い子になるからね！

……多分、浮気って単語を拒絶してるんだろう。綾ちゃんも結構混乱してるな……。

「……まあ、海に限って浮気は無いと思うけど。あいつ一途だし」

俺の言葉を聞いた瞬間、綾ちゃんは暗く俯いていた顔を上げ。ぱあっと見る見る明るくなった。

「でっ、ですよねー！まさか海君に限ってそんな！……でも……」

再び俯く綾ちゃん。なんかぶつぶつ言い始めた。

「もし……浮気……たら……耳……いらな……」

「ままますたー、たー。今日のおすすすなに?」

「きよ今日のおすすすはデミオムライスだよおいしいよ」

「……はがして……あしも……」

「はあーそつかそかー。てていうか毎日それお勧めじゃねへへえ?」

「だよねー。今日すごいいいお天気だよねーおいしいよ」

がしつとマスターの肩を掴んで、俺の激情を叫ぶ。

「おいしくねえようすんだよこれ!お願い助けて!俺を過去にタイムリープさせて!」(小声)」

マスターは冷や汗を掻きながらも、俺に負けじと声を張り上げる。

「無理だよ!無理無理!僕には良い葬儀屋さんを紹介することぐらいしかできないよ!」(ささやき)」

「それもう全部終わってんじゃねーか!完全にバットエンドじゃねーか!ていうかマスターも話聞いたからね!よろしくな、相棒!」(虫の声)」

「いや聞いてないね!基本お客さんの話はシャットダウンしてるから!私はね、心に一つの耳栓を持っているんだ」

「別にカッコ良くねーんだよ!耳栓一個じゃ片方ただ漏れじゃねーか!っーかシャットダウンしてねーだろ!完全に受け答えしてただ

ろっが！」

「私はね、心に耳栓50個はあるね」

「なんか自慢みたいになってるしストック多いなオイ！」

「政人さん？マスター？どうしたんですか？」

「「ひいっ」」

やべ……いつの間にかヒートアップしすぎた……。

「ああこれ以上お客様の邪魔をするのは良くないねじゃごめっくり」

マスターは一言にまくし立てて、さっさとカウンターの中へ逃げていった。残されたのは俺と綾ちゃん。

ちくしょう、もうなるようになりやがれ。

「とにかく、海が浮気してんのか、してないのか。それを確かめりゃ済むんだ、色々と。だろ？」

こくりとうなずく綾ちゃん。

「てことは、その浮気の現場を確かめるのが一番だな」

手を上げて質問の意を訴える綾ちゃん。俺はうなずいて促す。

「私もそう思って、さっきまで後を追ってました。でも中々うまくいかなくて……」

「そうだな。素人じゃあそう上手くはいかない。だから……」

。

「……こうして、プロの先生を呼んだ訳だ」

「なるほど……」

「ちょっと、だれがなんのプロだって？」

と、半眼で睨んでくるのは、盗聴、盗撮のプロフェッショナル、渡辺里奈。

数々の盗撮写真をザクザクと捌いてきた、その道では右に出るものは居ないとまで言われている。……様な気がする。雰囲気的に。

白いキャミソールにスカイブルーのデニムパンツ。それに明るい茶髪が良く映えて、実に若々しい。

でも、その手には若い女の子に不似合いな物がひとつ。

「で、海ツチを盗聴すれば良い訳ね？」

手に持つトランシーバーのような物をゆらゆらさせながら、平然とそんな事を口にした。

綾ちゃんは固唾を飲んでから、ゆっくりと口を開いた。

「そ、それで、どのくらいで、その……盗聴はできるの?」

盗聴という単語だけ小声になっている。綾ちゃんは盗聴することに多少抵抗があるようだ。まあそれが一般高校生として当然だろう。

「だいじょぶ!もう準備は整ってるわ!盗み聞きし放題よ!」

ウィンクして舌を出し、親指をグツジョブする里奈。おまえ軽すぎだろ。これがキャリアの差か。

「政人、あんた今失礼なこと考えてたでしょ?殴るよ?」

バキッ

「そっそんなことねーよってあれ?もう殴られてる俺?」

「とにかく、盗聴器は付けたから、後は私達が10メートル以内に近づけばいいんだけど」

里奈はここに来て初めて話を聞いたわけだから、今海に盗聴器がついてるのは時系列的におか……。

おれはかんがえるのをやめた。

「とりあえず点けてみよっか。ぼちっとな」

トランシーバーぱいのから、音が聞こえ始めた。中々雑音が少ない。

「あれ?近いね」

ああ、近いから雑音が少ないのか。

綾ちゃんが顎に手を添えながら呟く。

「ここの隣は……雑貨屋」

そしてはっと顔を上げて声を荒げた。

「お人形とかが多く売ってる女の子向けの雑貨屋ですっ！」

里奈はニヤリといやらしく口角を上げる。

「くつく……これは早速尻尾をつかめそうね」

里奈、お前今一番輝いてるよ。

俺達は、自然とトランシーバーに耳を傾けていた。

『……うーん』

「何か悩んでるみたい」

「発声練習でしょ。あんま喋らないし」

「クソしてんじゃね？」

三者三様の答え。

『……くう』

「もしかして女の子の店に居るのが嫌なのかな」

「クの発音練習じゃない？無口だし」

「踏ん張ってんだよ」

うお、二人に睨まれた……。ていうか里奈も何気にひどいぞ。

『す、すいません、これください』

「あ、何か買った！」

「あゝあ、せっかく発音練習したのにどもってんじゃない」

「気にする所そこ！？」

『こちらでよろしいですか？……はい……プレゼント用ですか……はい……』

トランシーバーの向こうでは、さくさく買い物が進んでゆく。

ていうか読めてきたぞ。いや、最初から薄々感づいてはいたけど。

俺は、未だ盗聴機の音に、真剣な表情で耳を傾ける綾ちゃんに声をかける。

「綾ちゃん、つかぬ事を聞くが、君の誕生日はいつだい？」

「……え？えっと、八月の八日です、けど……あれ？」

今、八月七日。

「じゃあこれ、普通に綾にじゃないの？」

きよとんとした綾ちゃんに、里奈は呆れ顔だ。

『……有難う御座いましたー……』

「え、え、でも、あれ？」

「はいはいごちそうさま。政人もごちそうさま」

「んまあ、一応確認のために海に会つとくか」

そういつて立ち上がる俺達。まだ状況に着いて来れてない綾ちゃんは、里奈が無理やり立たせる。

会計の時、マスターは心底安堵した表情だった。ってあれ？おい誰だデミオムライス頼んだ奴。

会計を済ませ店を出た矢先、すぐに海と出くわした。海の手にはとつてもファンシーな包み紙が。

「ん……？政人、奇遇だな。……渡辺。……綾？」

俺と里奈はニヤつきながら海に近づく。そして二人してわき腹を小突いた。俺は割と本気で。綾ちゃんはというと、さっきと同じように俯いていた。でも、今度は恥じらい的な意味合いで、だ。

「このこの。その手に持つてるもんなんだよ」

里奈は海を小突きながら、からかい口調で話しかける。俺はひたすら小突く！小突く！小突く！

「ぐはあっ！えっ？いついや！これは……」

「誕生日プレゼントなんだろう？綾ちゃんの」

「プレゼントで女の子物なんだからバレバレだって！」

綾ちゃんは無言で海を上目遣いに見つめている。恥じらいと、期待を込めた眼差しで。はいはいよかったねハッピーエンドだよこんちくしょう。

「いや……これは違う……」

……………え？

うん、え？

「まっ たまた〜！照れんなよ！」

「そ、そつだよ〜！もう隠さないで渡しちゃいなって！」

海は気まずそうに目を伏せる。

「いや、これは綾のじゃないんだ」

そして、今度こそはつきりと言った。

「……悪い」

その途端、綾ちゃんは堰を切ったように走り出す。

「あつ、綾！」

あまりの行動に、俺達は反応が一步遅れてしまう。思わず出したのであるう海の手は、綾ちゃんの走り去る方へ向けられたまま、行き場が無くなっていた。

「これは、まさかね……」

さすがの里奈も困惑顔だ。

「本当にまさかだな……」

途中まで順風満帆だったのに……。やっぱり海、テーマはコメディークラッシュャーだな。お前がちよろつと出てきただけですぐにこれですよ。

人込みに紛れ、完全に綾ちゃんの後姿が消えたとき、海の手は力無く下ろされた。

第48話 決別！夕暮れの浜辺で……。くポロリもあるよーく

商店街のど真ん中、いまだ立ち尽くす海。これでもかってくらい肩の落ち込んだその後姿は、いつもの海を知るものにとっては見るに堪えない。

その肩に、すがすがしい笑顔の里奈の手がポンと落とされる。

「よっ、この浮気者！」

ずーん、と効果音でも聞こえてきそうな勢いで、さらに落ちる肩。

「あっ、でももうフラれた訳だから浮気じゃないか。おめでとう！」

もうやめて！海の肩が180度になっちゃう！そしたらもう生理的に友達としていれないよ！

俺は海の肩を人間としてあるべき形に戻すため、慰めの言葉を口にした。

「お前綾ちゃん居なくなったらただの白髪のジジイじゃん！ざまあ！もう死んじやえよ！ははははは！」

「あああああああ！」

叫びながらどこか遠くへ走り去ってゆく海。いかんいかん、つい日頃の鬱憤が。

里奈はふう、とため息をひとつ吐いてから、腰に手を当てた。

「さて、綾の仇はこれで取ったとして。まずは綾を探さなきゃね」

そっいつて携帯を取り出す。何度かボタンを押して耳に当てたが、一向につながる気配はなかった。やがてまたため息をつきながら、里奈は二つ折りの携帯を閉じた。

「だめ。繋がらない」

「手当たり次第探すしかない、か……」

「そうね、そんなに遠くには行っていないと思うけど……」二手に分かれる？」

「そうだな。じゃあ何か分かったら連絡くれ」

「りょーかい」

そう言つて俺たちは、当てもつかない人探しの一步を、それぞれ踏み出した。

。

「綾ちゃんみーっけ」

膝を抱えて座りこんでいる少女の背中に向かって声を掛ける。振り向いた少女は陰鬱な表情をしていたけれど、俺の姿を見ると寂しげに、少しだけ微笑んでくれた。

「政人さん……」

潮風と共に聞こえる波の音。人もまばらな黄昏時の砂浜に、綾ちゃんも居た。

隣に腰掛ける。正面には、海の方こうに燃える夕陽。沈んでゆくそれをぼんやりと眺めていると、綾ちゃんがポツリと口を開いた。

「……さっきはすみません。それと……ありがとうございました」

謝罪はいきなり走り去ったことに。感謝は浮気調査を手伝ったことにだろう。

「気にすんなって。まあ、綾ちゃんがいきなり走り出したときはちょっと焦ったけどね。もうドラマかと」

おどける俺に、綾ちゃんはクスリと笑みをこぼす。少しだけ雰囲気も晴れてきた。

「でも、なんでここが分かったんですか？」

「ん、まあ……。前にね、海から聞いたんだ」

「あ……」

そう言つて再び暗くなる綾ちゃん。俯いてから、抱えていた膝を一層強く抱きしめる。

「私ね、政人さん」

「うん？」

「男の人と付き合ったのって、海君が初めてなんですよ」

顔を上げた綾ちゃんは、いつもの笑顔だった。昔を懐かしむように口を開く。

「あの頃の海君って誰にだって……私にも無愛想だったんですよ」

「ホントつまない奴だな」

「ふふ、ですね。その上学校にもあんまり来ないもんだから、女の子にも人気が無かったんです」

「マジで？ 黴り殺したいくらいにモテモテなあいつが？」

「はい。……でも、私はなんでか気になっちゃって……。今思えば、一目惚れだったのかな……」

ちよっと恥ずかしそうに瞳を泳がしている。

「それからはずっと付きまといつて。最初は物凄く嫌な顔してたなあ」

今度は苦笑い。あのクソジジイこんな可愛い子を……擦り殺したい……。

「結構粘りましたよ。……初めて笑ってくれた時は嬉しかったなあ……」

遠くを見つめ、感慨に耽る綾ちゃん。本当に苦労したのだろう。俺だってあいつを笑わせるなんていつたら途方にくれてしまっだろう。途方にくれた末に殺す。

そして、何かを思い出したのか、表情に影が落とされた。

「……海君のお兄さんが亡くなった時は……私、何もしてあげられなかった」

「それは違う」

ふと、綾ちゃんと視線が合う。瞳が理由を尋ねていた。

「綾ちゃんは海の事を本気で救おうとしてたはずだ。それを受け入れなかった海がガキっただけで、綾ちゃんがそうやって自分を責める事はないよ」

言い終えると、綾ちゃんは少しだけ救われたように笑顔になって。

「海君が転向して来た時、本当にびっくりしました。……本当に嬉しくて。……でも海君は変わってなくて……。救ってくれたのは、政人さんでしたね」

「いやあ、俺は背中をちょっと押したただだよ。実際綾ちゃんの必死な姿が堪えてたみたいだし」

俺はあの時の光景を思い出す。

「……俺は背中をちょっと押したというより、拳で顔面をめいっぱい押し切ってたけどね」

」

「ふふつ。でもその日からです。私達が付き合いだしたのは」

そう言つて、綾ちゃんは話を一旦区切った。それから、二人だけじゃなくて、俺達の思い出だから。

俺も昔に思いを馳せる。

「それからすぐゼファーがパクられたんだよな」

「はい。あの時は……その……恥ずかしかったです……」

顔が真っ赤になつてしまった。……あのピッチピチナース服が。アレはすこぶる良かったです。本当にありがとうございました。

「次は……ああ、廃病院に行つたな」

「私は行けませんでした……両親がうるさくて……」

申し訳なさそうに、しゅんと顔を落とす。俺は気にしないように手を振って否定した。

「大丈夫だよ。あん時は海の面白い一面も見れたしな」

「ふふ、お化けが苦手なんですよね」

苦手なんてもんじゃないけどな。

「その後は……アームレスリングか……」

綾ちゃんを白けた目で見る。目を向けられた本人は、気まずそうに目を逸らしていた。あははーと笑ってごまかしながら。

そしてキリツと表情を締める。

「で、今に至るわけですね」

無かったことにされた！まあ別にいいけど……。

その後も、友基と一悶着あるわけだが。まあそれはあいつらの知るところ。

「色々あつたな……」

「ですね……」

そう言い合つて、長い思い出話が終わった。

彼女はそれを話す間、ころころと表情が変わった。一言では言い表せない出来事が、そこにはあつたのだらう。

そして彼女は、また海の向こうを見つめる。……見つめ続ける。そうしていないと、何か壊れてしまうかのように、必死に。

「でも……色々あつたけど……」

そう言ってからこちらを向く。それは今までに無いくらい、とびっきりの笑顔だった。

「すごく楽しかったです！」

笑顔なのに……瞳から、涙が流れていた。

「……あれ、なんでだろ……」

瞳から雫が溢れて、止まらない。ぬぐっても、ぬぐっても。

まるでそこに、思い出の中の、全ての感情が詰まっているかのように。それがぼろぼろと彼女から落ちてゆくように。

「……ここは……思い出の場所です。私にとって、大切な……」

俯いてそう呟いた。表情は見えなくなった。

「いつまでも、大切な、場所だったんです」

でも、肩が震えていた。

……声が、震えていた。

昔、ちょうどこの季節。お互いが気持ちを確かめ合った場所。

それから本当に色々あって、ようやく海が素直になった。

「だけど……」

二人はいつも一緒だった。俺の前でもいちゃこいていちゃこいて…

…。いつしか二人でセットなのが当たり前になった。

「だけど……海、君は、もう」

これからもずっとセットなのだと、二人を見て漠然とそう感じていた。

けれど……あいつはもう……。

「もう……いないんだ……！」

俺は優しく、彼女の頭に手を乗せた。

「大丈夫だよ。今は俺しか居ないから」

そう言っただけで夕陽を見る。

隣から嗚咽が聞こえて、やがて、大きな泣き声に変わっていった。

子供のように泣きじゃくる少女を抱きしめてやれる奴は、もう何処にも居なかった。

……ポケットが震えた。その震源、携帯電話を取り出す。

着信は……里奈からだ。そういえば連絡してなかったな……。そう思いながら携帯を開き通話ボタンを押して、耳に押し当てた。

「もしもし、里奈？綾ちゃん見つかる。ロリ！ロリ！……はい？」

『ロリ！ロリ！！』

。

私こと渡辺里奈は、ただ今隣町まで移動中。あんまりにも見つからないから足取りも重くなってきた。

商店街はずいぶん回ったから、海ツチの家周辺に当たりをつけて探してみているものの……。

「……いないわねー」

思わず長いため息が漏れる。腰に手を当てて、どうしようかと次の行動を考えていると……。

ふと前を見たら、海ツチの家の前でうろろしてる女の子が。困り顔で途方にくれているようだ。あ、目があった。

「あ、あのー……」

そう窺うようにしながら、少女が近づいて来る。

暇は無いんだけど……まあしょうがないか。

私は腰に当てた手を下ろして、少女の次の言葉を待った。

「この辺で、銀髪でくるくるチリチリのかなりイケ面のお兄さん見なかったですか？」

それってどう考えても……。

え？じゃあこの子が……。

私は改めて少女をまじまじと見る。長い黒髪を後に束ねて、ポニーテールにしている。その頭の下には、艶やかな髪に負けないくらい端正な顔立ち。ポロシャツにジーンズというカジュアルな服装は、逆にそれらを引き立てていた。

そもそもっとも重要な外見。

「あなた……いくつ？」

質問を質問で返されて、少女は少し面食らっていたが、おどおどとそれに答えた。

「えと……十二です……」

「……中学生？」

「小学生です」

私の中で、少女の言葉が反芻される。

小学生です……。

小学生です………。

小学生です……………。

……………。

……………ろりーたこんぷれっくすです。

「……………ろり」

「は、はい？」

「ろり！ろり！」

。

俺たちの居る、太陽の沈みきった浜辺は、先程とは打って変わって暗闇に包まれている。

そこには、話を終え沈黙を守る里奈と、無理やり連れてこられた少女。綾ちゃんは今話を聞いて口を両手で押さえていた。

俺は、一番最初に浮かんだ感想を口にした。

「……………ろり」

「ろり」

里奈が同じ単語を、おおきく頷きながら返す。

「□リ！□リ！」

「□リ！□リ！」

やがて共鳴しあう俺達。少女を囲んで、連呼しながら回りだした。

「えっ！？ちよっ！？ろりってなんですかっ！？」

少女は状況に付いて行けずに、輪の中心で混乱している。そしてそんな俺達を見て、がつくりと膝をついた綾ちゃん。顔は天を仰ぎ、表情は愕然としていた。

「そんな……海君が……□……り……」

「□リ！□リ！」

「□リ！□リ！」

「どういうことですかっ！？どこかの民族の方なんですかっ！？」

混乱の極みに到達した俺達。

そこへ……。

「綾ああああアアア！！」

この混沌の中の、主要人物が現れた。

「か、海君……」

いきなり闇の向こうから走ってきた海に、綾ちゃんは動揺を隠せない。手を口に持ってきて、気まずげに視線を首ごと外した。

「ケツ！今更ノコノコ現れやがって。綾ちゃんは今更ニフツ」海君ッ
「！いたい！」

でもそれは最初だけで。

綾ちゃんは今俺を押しつけて海に駆け寄った。

抱きしめあう二人。

つまづいて四つん這いになる俺。

そのまま呆けた俺の肩に、誰かの手がポンと乗った。振り向くと、無表情で小首をかしげる里奈が。

「毛布？」

「いやあああああ！！やめてええええつ！！」

もんどりうつ俺。その間にも物語は進んでゆく。

「聞いてくれ綾。このプレゼントは従兄弟のモンなんだ」

「そうなの……？」

「お兄ちゃん！」

そういつて駆け寄るロリ少女。そうか、そういうプレイか。

「美咲^{みさき}！？何でここに……」

「このお姉さんに連れて来てもらったの。お兄ちゃんに会えるよって言われたから」

そう言つて里奈を指差す、美咲と呼ばれた少女。海から視線を受けた里奈は、それにニツコリ手を振って応えた。

「そうか……悪い、渡辺。……綾、紹介する。この子が従兄弟の美咲だ」

海が言い終えると、ペコリとお辞儀する少女。

「はじめまして！海お兄ちゃんのお父さんの弟の娘の、氷室美咲です！」

お父さんとお母さんと妹と息子とコウノトリの卵を食べたお婆ちゃんか。なるほど、分かん。

そして握手を求められた綾ちゃんは、「は、はあ」と呆けた声を出して握手を受けた。恐らく綾ちゃんも分かっていないんだろう。いやちげーか！

「美咲……これ」

と、海は問題のプレゼントを、少女美咲へと渡した。

「わあ！誕生日プレゼントだよねっ？ありがとうっ！」

くるくると回りだしそんな程喜ぶ少女。海はそれを笑顔で見やると、一呼吸置いて、綾ちゃんに向き直った。

「綾……それで……その……これ」

そう言ってポケットから取り出して、おずおずと差し出したのは……。

黒い小さなケースに入った、二つのシルバーリングだった。

「ホントは誕生日にあげたかったんだけどな」

苦笑いする海。綾ちゃんは指輪を見たまま、固まって動かない。

驚いた瞳には、やがて涙が溜まって。

それがポロリと落ちた頃には、すっかり泣き顔になっていた。

「あつ、綾!？」

入れ代わって驚く海に、綾ちゃんはもう一度抱きついた。

戸惑う海だったが、それに応え、両腕で綾ちゃんを覆った。お互い
がお互いに、もう離さないと言わんばかりに。

二人は、思い出の浜辺で、いつまでも。

「あゝあ。結局私らの早とちりだったんじゃない。あ、美咲ちゃん顔真っ赤」

腰に手を当て、骨折り損とでも言いたそうな雰囲気のリ奈。

「……クソッ。あいつばかり良い思いしやがって……これだからイケメンは嫌いなんだよ……」

俺はまだ四つん這いだった。

「……毛布ってなに？」

「らめえええっ！！そんな目で見ないでえええっ！！」

こうして、この事件はあっけなくマジクソつまらない形で幕を閉じたのであった。

ま、いいけどね……。

。

「ただいまあ……あー、疲れた」

「おおっ！御帰り、政人！遅かったなっ！待ちくたびれたぞっ！」

「んお？なんだ、俺が帰ってくんの待っててくれたんだ、亀吉さん」

ちよっと嬉しくなって、水槽まで近づいていく俺。

「何を言っているんだ。御主人の帰りを待つのは、ペット足る者、当然のことではないか。んふふ」

「なんだよう、可愛いじゃないかこいつう！このこの」

「ちよっ、やゝめゝてゝよゝもゝう！」

「ははは」

「ふふふ。……で、政人。アレは？」

「え？あれって？」

「アレと言ったらアレではないか。その……魚肉ソーセージ」

「え？」

「え？」

……。

「……あ

「あん？」

おわり

第49話 シューマイ占いの素晴らしさが分かってもいいお話

昼下がり、冷房20度強風の自宅。

俺は今、リビングのフローリングにひざまずいていた。

「な、無い……」

皆さん御機嫌よう。俺は斎藤政人。毎度のこと金の無いイケメン高校生だ。名は政人。姓は斎藤だ。

手に残っているのはユキツチが2枚。今月の支払い合計75000円。紙一重でアウトだ。いや六重か。

「無い物は仕方なからう……。うな垂れてないで、今何をすべきかを考えたらどうじゃ？」

リビングとキッチンを仕切るための、腰より高めのテーブルに置かれた水槽からもつともな正論が降って来る。

「た、たしかに」

こくり、こくり。

「……親元には頼れないのじゃろう？ならばその身で稼ぐしかない？」

「た、たしかに」

こくり、こくり。

「オイなんかむかつくなそれオイ！」

でもたしかに亀吉さんの言う通り、この身で稼ぐしかあるまい。しかしそれは何も正攻法でなくてもいいのだよ。

「じゃっ、亀吉さん。俺行つて来るよ！」

「……ちよつと待て政人？なんで働きに行くのにそのにまんえんを握り締めているんじゃない？その清しい笑顔はんじゃない？その右手に持つパチスロ攻略雑誌は何じゃ？左手に持つカントくんは何じゃ？」

なんか詳しいなこの亀！

俺はそんな声を背中に受けながら玄関の扉を開けて、後手にそれをゆっくり閉めた。

途端、灼熱の気温に晒される。体を撫でる熱気を感じて、まだまだ夏の中盤戦という事を再確認した。

そうだ。まだ夏はこれからだというのに、こんなところで燃料切れなんて真つ平ごめんだ。

そう心の中に決意を秘めながら。

俺は戦場へと、旅立った。

。

戦場に向かう途中には、必ず商店街を通らなくてはならない。しかし俺は、そこで思わぬ物を見てしまった。

見慣れない看板の先に見慣れない店が一軒。その、紫色の扉の上に据えられた看板の店舗名をまじまじと見る。

「ミコミコ占い師、御神美子のシューマイ占いの館……」

ひじょーに見覚えのある人名だ。

あのクソシューマイオタクいつの間にこんな物を……。物凄く気になる……。

と、思いながらも足は優先事項へと向かうわけでして。さてこんなクソどうでもいいクソシューマイのクソなんて放っておきましょうと前を向いた所、

目の前に美子が立っていた。

「……っ!」

この子……! いつの間に……!

美子は俺の事を分かっているのか分かっていないのか分からない表情でばけーっと思つめていたかと思うと、ピクリと動いて、ようやく俺を認識した気がした。この子はきつとスロウか何かそっち系の魔法をかけられてるに違いない。

ぺこりとお辞儀する美子。

「ごきげんうるわしゅう政人さん。奇遇ですわね」

「……ご機嫌麗しゅう美子さん。何でお嬢様口調ですの?」

美子は口到人差し指を当てて、ポツリと口にする。

「キャラ路線へんこう?」

全く大失敗だねお疲れ様!

「それよりも……」

美子の顔に向けていた視線を下げてゆく。

彼女はいかにもな、深い紫色のローブを着込んでいた。

「これ、お前がやってんの?」

親指で横の店を指す。美子は考え込むことも無く、すぐにコクリと頷いた。

そして何を思ったか、俺の服の胸倉を深くえぐるように握り締める。

「ちょっと寄ってみてほしい。きつとおもしろい」

行動と言動が微妙に食い違ってないかい?

俺はその状態のまま店に引き込まれていく。なんか物凄くデジャヴ。内装は意外と凝っていて、天井からは布が垂れ下がり、妖しげな間接照明に照らされて、雰囲気はバツチリだった。どこからか妖しいBGMも聞こえてきた。妖しすぎる。

まあ、ちょっと位ならいいか……。パチ屋は逃げないしな。

美子は背の高い板で仕切られた（元は四角い部屋だったのだろう）つづら折の通路を、もったりもったり進む。俺の胸倉を掴みながら。そして通路の最後には、黒い布が敷かれた四角いテーブルがあった。そのテーブルの真ん中には……シューマイの山。

そこで、ようやく俺を放してくれた美子は、テーブルの向こう側に腰掛けた。

ロープを深くかぶる。美子の無感情な口だけが見えた。

「かけて」

手のひらを俺に見せる。促されるままに、美子の対面にあるアンティークな背の高い椅子に腰掛けた。

「じゃあ占います」

美子はシューマイを一つ手に取ると、それをロープ越しから額の辺りにつけて、唸りだした。

「うつゝん」

完全に棒読みだな。

「はっ」

口に放り込んだ！結局食うのかよ！

もぐもぐしながら、再びうつんと唸る美子。そしてごくりと飲み込むと……。

「うまい！」

「シューマイの感想じゃねーんだよ！なにそのかつて無い満面の笑顔！？」

「え、おいしいよ。政人も一ついる？」

「占いだよねコレ！？え！？俺『三上美子とシューマイを美味しく頂く会』とか入っちゃった！？」

「冗談です。今すべてわかりました」

ホントかよ……。

「政人、ギャンブルに行こうとしてた」

「な、何でそれを……」

俺は動揺を隠し切れなかった。攻略本はさっきコンビニで捨ててき

たし、俺がギャンブルに行こうとしてたなんて美子には判断できないはずなのだ。

「さっきそういう本持ってた。コンビニで捨ててたけど」

ザ・ストーキングでした。

「そういうの言っちゃだめ！てかお前何やってんのマジで！こわいからやめて！」

「まあ細かいことは切り捨てて」

せめて置いてこう！？

「これからの政人の金運教える」

……お、ちょっと気になるかも。

「……今は、とことん落ち込んでる。でも、落ちきったら、後は上るのみ。恐れないで突っ込んで。金運はそれから上がってくる」

俺は、美子に掛ける言葉を見失っていた。あまりに占い然としてたから。

「……意外だ。結構しっかり占えるんだな」

ようやく思いついた言葉を掛けると、美子は口角を少しだけ上げた。

「コレがわたしのほんとの姿。そう、わたしはミコミコ占い師、みかゆくっ」

。

そして、みかゆくつを信じた結果が……。

「あのお客さん、メダルを入れないでボタンを押され続けても、何も得るものはありませんよ」

「だって入れるメダルが無いんだもの」

これだった。

そしてパチ屋を追い出される俺。日はもう沈みきっていて、店内の爆音の代わりに、夏の夜の浮ついた喧騒が聞こえる。

「……ふふ、滑稽よね私。笑って。ねえ笑ってよ」

それでも信じていたの。こんなの分かりきっていたのにね、こうこうせいの流れるに。でもいいわ。それが私。ふふっ……きつと悪い人に捕まっちゃうタチなのね。

私は心の中で吹っ切って、歩き出した。そう、私は、過去は振り返らないから……。

。

「テメー美子！テメーを信じたおかげで俺の財布がツタヤカード入れる皮のなにかになっちまったじゃねーか！」

店先にいた美子に食って掛かる。

「あつ、政人いいところに」

「聞いてください！」

「政人これから暇？」

「ああ暇だね！お前のせいでこれから歩む人生の道を見失ってしまったどうしようもないアウトローさ！」

「じゃあちよつと時間ちょうだい」

そう言つてまたしても俺の胸倉をえぐるように掴む美子。君は人を誘うときはそうしなさいってママに言われたのかい？

店に入つて、もったり通路を歩きながら、美子は口を開いた。

「こういう店つてね、夜のほうがお客がおおいの。でもわたしは夜は本業があるから」

ミコミコ霊媒師の方が。

やがて通路は突き当たる。そこにあるテーブルの前で止まった美子は、胸倉をはなして俺に向き直った。

そして、ローブを脱ぎだした。

な、なんだ！？俺はちびっこには興味ないぞ！

ローブの中は、白いくるぶしまであるワンピースに黒いカーディガンという、清楚なんだか暗いんだかよく分からん服装だった。

狼狽している俺に、美子はその手に持つローブを掛け直す。ふふ、いいにほーい。

「だから、政人代わって」

「……へ？」

「政人が代わりに占うの」

あまりの突拍子も無い発言に、頭が空っぽになる。でもすぐに反論の言葉が浮かぶ。

「で、できるわけねーだろ！大体なんで俺が代わんなきゃいけねーんだよっ！？絶対無理！」

「儲けは売り上げから経費を引いた半分。お客は終電間近まで絶えないと思う。占いは1回5分で終わらして1000円。この意味がわかる？」

「うん僕頑張る！」

。

ただ今午後8時を少し回ったところ。

あの後、美子は「終電の時間までにはかえる」と言い残して、さつさと本業に出かけてしまった。

そしてついに今、第一の客が、通路の向こうからやってきた。俺はローブのフードをかぶってる頭を、もう一度深くかぶりなおした。

客はテーブルの端に置いた四角い箱の、細長い穴に千円を入れると、椅子に腰掛けた。

「よろしくお願いします」

声からして、客は女性のようだ。というか占いなんて、男性客はめったに来ないだろう。というか聞いたことある声だな。

「今日はボクの走り屋運を見て欲しいんです」

ハルだった。そんな運無いです。

「じゃあ占います」

まあいいや。ハルなら適当で。

シューマイを一つとって、額に当てる。

「うつゝん……はっ」

「食べた！」

もぐもぐしながら、適当に結果を考える。あ、これホントにうまい。

「橋河峠がハッピースポットです。そこにいる走り屋をギタギタにしましょう。あと今あなたにくつついてる異性は一度シメるが吉です」

「そ、そんなことまで……ありがとうございました！」

そう言つて席を立つハル。え、こんなんで千円貰えんの？詐欺じゃね？いや詐欺か。

そして続々と来る客達。それを適当に捌いてる途中、またしても見知った顔に会つた。

「ほら海君、次私達の番だよっ」

「ん？ああ……」

我が校のアイドル、村上綾ちゃんとそのおじいちゃんだ。

背の高い椅子に綾ちゃん。その隣においてある簡易な回転式丸椅子に海が座ると、それぞれが500円ずつ、箱に入れた。

「お願いしますっ」

ニコニコ顔の綾ちゃん。その隣で、しょうがない奴だといわんばかりの呆れた笑顔を見せている海。あーこれむかつく。あーこれ悪いヤツでちゃうわ。

シューマイを持って唸る。

「うっ……はっ」

「あっ食べた」

「食ったな」

もぐもぐ。

「分かりました。……あー、こりやまずい。あー、こりやまずいわ、あー」

「えっ……なんですか？シューマイですか？」

「アレだ。その男の人、あなた最近疑われるようなことしたでしょ？」

ぎくり、と二人とも固まる。

「コレもつかいやっちゃうねー。あー、これ浮気的な男と女のいけない関係やっちゃうねー。あーだめだこれ」

「そ、そんな訳ありません！海君がそんな……」

「分かんないよー？恐らく靴紐ほどけてるのに気付かないで自分で踏んでつまづいちゃうくらいの確率でやるよー、このジジイ」

「……なんか聞いたことのある声だな」

「はいありがとうございます！。すいませんねー、次つつかえてるんでねー」

席を立つ、慚然とした表情の二人。うんうん、そんなのテンションの方が微笑ましいね。お幸せに。

そうしてまた、延々占い続ける。延々シューマイを食べ続ける。

そうしているうちに、今まで途絶えなかった客足も次第にまばらになってきた。携帯のディスプレイを見ると、そろそろ終電の時刻に差し掛かるうとしていた。

もう美子が来てもいいくらいか……。

と、通路の向こうから人影が。客かと思いきや、それは美子だった。美子が来たって事は、仕事が終わったという事。俺はさっさと暑苦しいローブを脱いだ。

「おつかれさま。混んだ？」

言いながら、俺に缶コーヒーを渡してくる。お、俺の好きなメーカーだ。

「サンキュ。ああ、軽く150人は超えたかな」

「……え、でも5分に1人」

「あれ」

……あ、ちょっと適当にやりすぎた。多分1人1分弱くらいしかやってねえ。

「……政人。いい加減はだめ」

俺をたしなめながら、美子はテーブルに置いた箱の蓋を開ける。

中には千円札がぎっしり詰まっていた。

「政人。グツジョブ！」

そうなりますよね！

早速二人で金勘定を始める。金を全部数えて、経費を抜いて、それを半分にして……。

「じゃあこれが政人の分」

そういつて美子に渡された金は、75000円ぴったりだった。ん……？この金額、何か見覚えがあるような……。まあいつか！

「いやーおいしいねーこの商売」

「またよろしくね、政人」

にんまりと握手を交わす俺達。

店を出て、美子が扉の鍵を閉める。外は太陽が沈みきっていても暑くて、生暖かい風が頬を撫でた。

「じゃあここで」

「いや、送ってくよ。さすがにこの時間だからな」

またしても読めない表情で俺を見つめたままの美子。

「でもわたし、幽霊にはつよい」

「ばっか、この世で一番怖いのは人間なんだよ」

俺がそう言つと、今度はクスリと笑つて。

「じゃあおねがいします」

と、ぺこりと一礼した。

。

「ただいまー、亀吉さん」

「おお。おかえり、政人」

「ほら、今日はちゃんと魚肉ソーセージ買って来たぜ？」

「おおっ！なんだ、ずいぶん太っ腹ではないか」

「まあね。結構儲かったんだよ」

「ほう、幾ら位じゃ？」

「へへー……じゃん！75000！」

「おおっ、支払いでぴったりじゃな！」

「それかあああああああ！！！」

おしまい

第49話 シューマイ占いの素晴らしさが分かってとてもいいお話（後書き）

美子かわいい。僕はロリじゃない。自分で書いててかわいい。違うロリじゃない。でも自分で書くとネタバレだから、誰かに書いて欲しい。誰か美子書いて！ロリ書いて！

第50話 人物紹介という名のネタ繋ぎ

斎藤政人ですはいどうも。

早速だが、今の状況について説明したいと思う。今俺は真っ白な部屋
の真ん中にいる。壁も床も天井も真っ白。

自分はなぜか制服姿で、下は濃紺のズボン、上は白い長袖シャツを
腕半ばまで折り込んで、裾はズボンの中という、いつものザ・俺だ。
なぜそんなところにいるのか？里奈に拉致られた？ざまあ死んだ！

答えは否だ。

俺は本編に登場する斎藤政人ではない。さらに神に近付いた存在、
斎藤・ネオ・政人だ。それだと長いからサイバーネオスティングー
マサトジェネリックって呼んでくれ！もしくはジェネリックでもいいぞ！

つまり今回は本編じゃないから、アウトどころかチェンジな事言っ
ても全然オッケー！誰も止まらないよ！って感じのコンセプト。

今話はメインの登場人物にそれぞれ会って、会話しながら紹介した
り、裏設定暴露したりと言った流れ。まあ大体おさらいみたいなも
ンだから、読み飛ばしてもらっても大丈夫だ。

いいかい？じゃあスタート！

と、いつの間にか足元に紙が。白いタイルに落ちているそれを拾い上げる。

ああ、まずは俺からか。なにになに……。

斎藤政人。

本編の主人公。高校二年生。身長177センチの、体重68キロ。目にかかる茶髪を適当に横にあしらった無造作ヘア。二重まぶたの瞳からは生気が感じられず、いつもヤル気なく垂れ下がっている。左耳にシルバーの2連ピアス。昔は3連だった。

顔立ちは端正だが、なぜかモテない。同級生の女生徒いわく『彼は遠目から眺めていたいタイプ』らしい。

性格は非常に物臭。いつも楽な方へと進んでゆくダメ人間。だがシリアスシーンでは熱い場面もしばしば。

万年遅刻魔で、起きないときは何をされても起きない。克也は毎日電話しているが、里奈はとくに諦めている。

さくらが好き。過去に告白しているが、返事はまだもらえていない。口癖は「まあいいや」

ははっ、誰だよこのウンコ野郎！俺か！そっか！

しかし、改めて文にされるとひどいな……。ホントに主人公なのコレ？

まあい……別によろしいんじゃない？次行こ……。

俺の目の前の壁から、白い扉が現れる。どうやら、もうここに用は

無いみたいだ。

その扉のノブを持とうとした時、

「政人っ！ ペットを忘れるなペットを！」

後ろから、今ではもう聞きなれた声が掛かった。

俺は振り返る。

そう、この小説中一番謎の生き物、カメの亀吉さんだ。

……なぜか、目線が俺と同じだった。

「って飛んでる！？」

白い天使のような羽をパタパタと動かしている。

「うむ、なんか念じたら生えた」

早速何でもありか……。

「というか、亀吉さんも付いて来ちゃっていいの？」

俺の頭の周りをパタパタ回り続ける亀吉さんに問いかける。つーかそれやめろっぜえ。

「今回は本編ではないからな。みんな私の存在も知っているし、言葉話をしても平気じゃ。今回は政人のサポート役らしいからな」

そういうことなら平気か。じゃあ一応亀吉さんの紹介もしておこう。

亀吉さん。

メス。体長タバコの箱くらい。体重小石くらい。

俺が幼い頃から居た亀だ。昔過ぎて、どういう経路で亀吉さんと出会ったのかは全く思い出せないが、俺の記憶する頃からこの大きさだった気がする。俺が世話していたから、実家を出たときに一緒に連れてきたのだが……。

どういうわけか最近喋りだした。最初に発した言葉は「へけっ」。

あの時は水槽と亀吉さんをくまなく調べたっけな……。

今では立派に会話をしている。声だけ聞いていると、妖艶な大人の女性だ。うつとりして目を開けるとカメ。このギャップがたまらない。がっかり感がたまらない。

「最後は褒められているんだかわからんな……」

「まあこんなもんだろう。そういえば一回亀吉さん視点の話があったよな」

「うむ。あの話で私の性格が知れたわけじゃが……あの話は今思い返しても最悪じゃ」

……なんだか、亀吉さんに睨まれている気が……。

「……いやあれは猫が「カタパルトスプラッシュ！」ぐはあっ!!」

こ、このカメ……みぞおちに突っ込んできやがった……。

「ふう……。まあ、機会があればまた私視点もいいかも知れんな」

「そ、そうですね……」

「さて、私の紹介も終わった事だし、そろそろ次の扉へ行こうではないか」

亀吉さんに促され、ドアへ近付いて、ノブを回した。

そこは、長い一本道の廊下だった。ここも全部真っ白。向こうには次の扉が小さく見えた。

「向こうまで歩くぞ」

少し前に行く亀吉さんを追いながら扉へと向かってゆく。

「ここは次に登場するキャラクターの名台詞が聞こえてくる廊下じゃ」

「別に俺等、名台詞なんてなくね？」

「……そこにツツコンでくれるな」

と、どこからか声が響いてきた。

政人？フツ、次の犠牲者は貴様か……。

はぁ。すっきりした。ん？政人、何かあったのか？

過去の人とボンクラ。いいじゃないか。共にいこう。

ヒーロー参上！……てか？。

ああ、空気マンか。思いながら、扉を開けた。

ドアの向こうには……克也が居た。さっきと代わり映えない部屋の真ん中には白い椅子が二つ。向かい合わせに置いてあって、片方は克也が座っている。ふと気付いたように、俯かせた視線をこちらに向けてきた。

「かつ、かつ……カメが飛んでる……っ！？」

って知らされてねえええ！

「オイこのヤロウ亀吉さん？彼、全然分かっていない様子ですけど？」

「そのようじゃな」

「……しゃべった」

克也はそう言っただけ、フリーズしてしまった。

……今のうちに克也の制服姿でも描写しとくか。

耳に掛からない程度の黒髪に、フレームの無い銀の眼鏡。その眼鏡の奥は少し切れ長の二重瞼。鋭いというよりは精悍。精悍というよりは聡明。……今はぽかんと口が開いていて、とても聡明とは言え

ないが。

夏用の、ズボンと同色のブレザーのボタンはきちんと閉められ、これまた襟元まできちんと閉められたシャツに、歪みない赤いチエツクのネクタイ。ズボンはもちろん正規のストレート。それに黒い皮ベルトを締めて。正に絵に描いたような模範生だな。

「……はっ」

と、ちょうど良く意識が戻ったようだ。

俺は空いている椅子に腰を下ろす。

「ああ、政人。俺は今、何か変な夢を見てしまった」

「夢ではない。現実を見るのじゃ。この見目麗しい甲羅をな！ババ
ーン！！」

頭を抱える克也。わかる、わかるよ。

「まあ、ここ自体夢みたいなもんだし。今は諦める」

「そうか……そうだな」

理解が早くて助かる。こんな駄キャラに時間割いてらんねーしな！

んじゃ人物紹介。

柏木克也。

身長173、体重63。

少し痩せ気味。

表情はいつも優しい。

性格は温厚で真面目な優等生。秀才なのに俺達と同じ高校。他キャラのぶっ飛びっぷりに全くついていけない。

読書が趣味で、隙あらば本を読んでいる。

俺とは小学校からの幼馴染で親友。里奈とは中学から。中学二年の時、一度引越すが、三年に戻ってくる。

……後は特になし。

「おいっ！？それはちょっと短すぎないか!？」

「特徴が無いことが特徴ってことだな。ていうか一太郎と被ってんだよ、メガネが」

「いいじゃないかメガネが二人居たって！二人ぐらいでちょうどいいじゃないか！え!？」

「あと俺がツツコミ役じゃん？いらなんだよねー、二人も」

「いいじゃないか二人で突っ込めば！二人で突っ込み合えばいいじゃないか！え!？」

おまえ必死だな！

「まあ、いらないキャラつても個性なんじゃない？」

俺の言葉に大きくうなずく亀吉さん。そしてガツクリうな垂れる克也。

「もう一思いに居なくなりたい……」

俺はそんな克也の鼻っ面に拳を叩き込んだ。

「ふがあっ!？」

目を白黒させて椅子から倒れる克也を叱責する。

「バツキヤロウ!お前を必要として居る読者だつて居るかも知れねー
じゃねーか!」

まあ居ないと思うけど!

「そんなお前を想ってくれてる読者を落胆させるつもりか!?努力
もしないでフェードアウトなんて許さねーぞ!」

まあ無駄だと思うけど!

「ま、政人……」

いつしか、克也の瞳にはやる気という名の炎が宿っていた。そんな
克也に手を差し伸べて、体を起こす。そのまま俺達はがっちり握手
し合った。俺は最後のキメ台詞を言う。

「克也の克はな、克也の克なんだよ!」

「……??……ああ、うん……」

よし!次行こう!

釈然としない様子の克也を置いて、俺は次の扉を開けた。

……また廊下だ。うわ、もしかこの繰り返し？

「めんどくさそうな顔をするな！ほれ、置いてくぞ」

再び先に行く亀吉さん。その尾を追いかける。

「政人、もう少し紹介を詳しくした方がいいんじゃないか？」

「え？でも克也のキャラは出し切ったと思うけど？」

「アレで全部……可愛いそうにの……」

カメに哀れまれる男、柏木克也。と、なんか聞こえてきた。

ゴチっすー！

やったー！綾。映画代は政人持ちだって！

ん、このパソコンもらうね。

何？いったらなんかくれんの？

あ、すみません、スペシャルパフェ一つ。政人、ゴチね。

はいはいごちそうさま。政人もごちそうさま。

……今思えば、こいつにいくら貢いだのだろう……。

扉を開ける。先程の克也と同じように、里奈が座っていた。

里奈は扉を開けた俺にすぐ気付いて、優しく微笑みながら、緩やかに手を振ってきた。

「政人さん、御機嫌よう」

キャラ作ってやがる！でもさっきの廊下でお前の本性バッチリ晒されてるからね！

俺は黙って椅子に座る。俺の沈黙にも微笑みを絶やさず、小首を傾げた里奈。俺は口を開いた。

「物欲女」

バキッ

「やっぱりね！」

里奈は穢れを知らない微笑みを崩して、半眼で俺を睨んだ。

「あんだねえ……せつかく人が高感度上げようと思ってんのに」

大丈夫！バッチバチ下がってるから安心して！

「ってあれ？里奈、お前この空飛ぶカメ見えてる？」

俺の隣でプカプカ浮かぶ亀吉さんに親指を向ける。

「見えてるし知ってるわよ。ねーカメックス」

「ねーって私カメックス!？」

じゃあ知らなかったのは克也だけか。

「ほら政人、そんなことより私の制服。説明するんでしょ？」

おっと、そうだったな。

紺色のスカートは太もも半ばまで上げられていて、膝下の紺色ソックスに、こげ茶色のローファー。上は薄いピンクの長袖シャツ。俺と同じように腕まくりして、裾はスカートの中。ワイシャツのボタンはいつも二個空いていて、そこに蝶ネクタイが緩くぶら下がっていた。

「ウチの制服可愛くないのよねー」

「まあその分校則が緩いから、改造し放題だけだな」

「海ツチなんて銀髪ツイストパーマだもんね」

あれはやりすぎだと思うが……。主に頭皮に対して。

よし、じゃあ次は人物紹介だな。

渡辺里奈。

慎重155。体重43。スリーサイズは……。

「……なによ」

……まあそれなりに。スレンダーな方だと言っておこう。

胸に掛かるくらいの茶髪をいつもヘアピンやらダッカルやらで上げている。前髪とサイドの髪だけは下げている。なんでも小顔効果があるとか。

顔はパツチリした猫目で中々整っているが、無表情だとなんだか怒っているみたいで、男子はあまり近寄らない。愛想がないんだな。性格は少しルーズで、価値観は俺と結構似ている。人に命令されるのが大嫌い。

物欲が何より強い。何か見返りが無いと腰が重いが、代わりに見返りがある又何でもこなす。橋河ライダースと戦った話ではピチピチナース服も着た。でも、そんな性格も女友達には例外のようなだ。

中学二年の時、俺とギャングの事で大喧嘩。克也が帰ってきて仲介するまで口も聞かなかった。

「ん、こんぐらいか」

「政人と喧嘩したときは大変だったわ、ホント……」

……主に俺がな。里奈の家に呼ばれて喧嘩したのだが、里奈がわんわん泣きながら家の物手当たり次第投げてくるわ、里奈の泣き声聞いて両親が血相変えて乗り込んでくるわ……。俺は血塗れになりながら帰ったっけな。

里奈を半眼で睨むと、いつもは飄々とするのに、珍しく気まずそうに目を逸らした。

「だって……政人が『俺にもう関わるな』とか言っただもん……」

う……。あの時はかなりヤバイ事ばっかやってたから、俺なりに里奈を心配したのだから……いや、言い訳はよそう。

「まあ、今は仲良しこよしって事だな！」

「いや私は嫌いだけどね」

これですよ！なにこれ！？ツンデツン属性！？いらねーよそんなぬか喜び！

「……綾ちゃんとは高一から友達だったそうな」

「うん、そう。なんか試験日の前日に街でナンパされてたのを助けたのよ。そしたら試験日に会ってさ。そこからの付き合いね」

なんかベタベタなラブコメの出会い方だな。

「あと、妹が一人居るよな」

「奈菜ね。今中学二年生よ。……ねえ、私自身に対する質問は無いの？」

無然としながら俺を睨んでくる。ここで「ねーよばーかわーい！」なんていったら確実に殴られるな。俺は学習したぜ！

「そつえば里奈って料理上手だよな、意外に」

バキッ

とまあ結局こうなるんですけどね！

「まあね。子供の頃からやってるし。弁当も自分で作ってるしね」

意外だろ？里奈はこういうのめんどくさがると思ってたのに。

「今度里奈の家でメシ食わしてもらおっかな。奈菜ちゃんともしばらく会ってないし……ん？」

里奈が微笑みながら、俺に手のひらを差し出している。

「食材費二万円」

「たかつ！何買うつもりだよ！？」

「最近デジカメが欲しくてさー」

せめて食材を買って！？完全に無機物だからね！

「政人、そろそろじゃな」

頭から声が降ってくる。ってあれ！？このカメいつの間に頭に居たの！？

まあい……別によろしくてよ！？

「じゃ、また本編でね」

最後は含みの無い笑顔で、里奈は次のドアへ向かう俺に手を振って来た。いつもそうしてりゃモテンのに……。

ドアを開ける。……あれ、廊下じゃない。

先程と同じような四角い部屋には誰も居なかった。その代わりに、部屋の真ん中には俺の腰ぐらいの四角い灰皿が置いてあった。

「今回はここまでじゃな」

「あ、そうなの？ 続いちゃうんだ……」

「うむ、これからは十話ごとにこの続きじゃ」

「ああ、記念話のネタが切れたってやつか」

「……番外編でも、言って良い事と悪い事がある」

知ったこっちゃねーや！

俺はポケットからマイルドセブンのソフトを出す。そこから一本取り出して、愛用の銀色のジッポで火を付けた。

「じゃが、全員登場するまでこうこうせいが続くかどうか……」

……咳き込んでしまった。テメーの方が言っちゃいけない事言うてるからね！

「まあとにかく、今回はこの辺で。亀吉さん、次は？」

「うむ、綾と一太郎と海じゃ」

うわ、俺の嫌いな奴が二人も居やがる。でも綾ちゃん居るからいいか！

じゃあ皆、再びこの俺ジェネリックに会えるのを楽しみにしててくれ！

「亀吉さん。俺トイレ行きたい」

「ない」

つづく

第50話 人物紹介という名のネタ繋ぎ（後書き）

べ、べつにネタが切れたわけじゃないんだからねっ！

というか、ホントに克也の紹介が少なすぎる……。まっいつか！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4969a/>

こうこうせい

2010年10月9日01時19分発行